

京都府遺跡調査概報

第 68 冊

1. 今林 2 号墳・今林遺跡
2. 北稲・柿添遺跡
3. 木津地区所在遺跡
 - (1) 梅谷瓦窯跡
 - (2) 市坂瓦窯跡
 - (3) 釜ヶ谷遺跡
 - (4) 上人ヶ平 3 号墳

1 9 9 6

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成6年度に実施した発掘調査のうち、建設省近畿地方建設局、京都府土木建築部、住宅・都市整備公団の依頼を受けて行った、今林2号墳・今林遺跡、北稲・柿添遺跡、木津地区所在遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・園部町教育委員会・精華町教育委員会・木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成8年2月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 今林2号墳・今林遺跡 2. 北稲・柿添遺跡 3. 木津地区所在遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 今林2号墳・今林遺跡	船井郡園部町内林今林	平6.9.7～ 平7.3.3	建設省近畿地 方建設局	野々口陽子
2. 北稲・柿添遺跡	相楽郡精華町北稲八間	平6.7.20～ 平7.2.27	京都府土木建 築部	伊賀 高弘
3. 木津地区所在遺跡			住宅・都市整 備公団	
(1)梅谷瓦窯跡	相楽郡木津町梅谷中ノ島	平6.4.11～ 平7.1.20		有井 広幸
(2)市坂瓦窯跡	相楽郡木津町市坂上人ヶ平	平6.4.11～ 11.17		森島 康雄
(3)釜ヶ谷遺跡	相楽郡木津町木津釜ヶ谷	平7.1.23～ 2.27		石井 清司
(4)上人ヶ平3号墳	相楽郡木津町市坂上人ヶ平	平6.6.3～ 7.14		橋本 稔

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1. 今林 2 号墳・今林遺跡発掘調査概要-----	1
2. 北稲・柿添遺跡発掘調査概要-----	55
3. 木津地区所在遺跡平成 6 年度発掘調査概要-----	81
(1) 梅谷瓦窯跡-----	83
(2) 市坂瓦窯跡-----	101
(3) 釜ヶ谷遺跡-----	115
(4) 上人ヶ平 3 号墳-----	121

插图目次

1. 今林2号墳・今林遺跡

第1図	調査地位置図	2
第2図	調査地周辺地形図	4
第3図	地形測量図	5
第4図	今林2号墳・今林遺跡遺構平面図	6
第5図	今林2号墳墳丘土層断面図	7
第6図	今林2号墳主体部平面実測図	9
第7図	第1主体部・第3主体部平面実測図	10
第8図	S H01平面実測図	12
第9図	S H02・S H03平面実測図	13
第10図	S H07・S H35平面実測図	14
第11図	S H08・S H09平面実測図	15
第12図	S H11・S H18平面実測図	17
第13図	S D14~17・S X20平面実測図	18
第14図	土坑平面実測図	19
第15図	今林2号墳出土須恵器実測図(1)	21
第16図	今林2号墳出土須恵器実測図(2)	23
第17図	今林2号墳第1主体部出土馬具実測図	26
第18図	今林2号墳出土鉄刀実測図	28
第19図	今林2号墳出土鉄鏃実測図(1)	29
第20図	今林2号墳出土鉄鏃実測図(2)	30
第21図	今林2号墳出土鉄器実測図	32
第22図	今林2号墳出土玉類実測図	33
第23図	今林遺跡出土遺物実測図(1)	35
第24図	今林遺跡出土遺物実測図(2)	36
第25図	今林遺跡出土遺物実測図(3)	38
第26図	今林遺跡出土遺物実測図(4)	39
第27図	今林遺跡出土遺物実測図(5)	40
第28図	今林遺跡出土遺物実測図(6)	41
第29図	今林遺跡出土石製品実測図	43

2. 北稲・柿添遺跡

第30図	調査地位置図	56
第31図	トレンチ配置図	57
第32図	4～7トレンチ遺構配置図	58
第33図	4トレンチ平面図	59
第34図	5トレンチ平面図	61
第35図	6トレンチ平面図	66
第36図	7-Bトレンチ平面図	68
第37図	10トレンチ平面図	70
第38図	出土遺物実測図(1)	72
第39図	出土遺物実測図(2)	74
第40図	S E 9530井戸側使用の曲物実測図	76

3. 木津地区所在遺跡

第41図	調査地位置図	82
------	--------	----

(1) 梅谷瓦窯跡

第42図	トレンチ配置図	83
第43図	遺構配置図	84
第44図	窯跡群配置図	85
第45図	1号窯実測図	87
第46図	2号窯実測図	88
第47図	3号窯実測図	90
第48図	4号窯実測図	92
第49図	7号窯実測図	94
第50図	出土遺物実測図(1)	96
第51図	出土遺物実測図(2)	97
第52図	出土遺物実測図(3)	98
第53図	出土遺物実測図(4)	99

(2) 市坂瓦窯跡

第54図	地形測量図及びトレンチ配置図	102
第55図	市坂瓦窯跡平面図	103
第56図	2号窯実測図	105
第57図	8号窯実測図	107
第58図	出土遺物実測図(1) 軒丸瓦	111
第59図	出土遺物実測図(2) 軒平瓦	112
第60図	出土遺物実測図(3) 塼	113

第61図	出土遺物実測図(4) 埴輪	113
第62図	出土遺物実測図(5) 石器	114
(3)釜ヶ谷遺跡		
第63図	調査トレンチ配置図	116
第64図	釜ヶ谷遺跡6番地遺構図	117
第65図	釜ヶ谷遺跡出土遺物実測図	117
第66図	土層断面図	118
(4)上人ヶ平3号墳		
第67図	調査地位置図	121
第68図	地形測量図及びトレンチ配置図	122
第69図	土層断面図	123

付 表 目 次

1. 今林2号墳・今林遺跡

付表1	鉄鏃観察表	31
付表2	出土弥生土器観察表	44

図版目次

1. 今林2号墳・今林遺跡

- 図版第1 今林2号墳・今林遺跡調査地全景(東から)
- 図版第2 (1)今林2号墳・今林遺跡調査地遠景(西から)
(2)今林遺跡調査地全景(北東から)
- 図版第3 (1)今林2号墳調査前全景(北から)
(2)今林2号墳土層断面図(北東から)
(3)第1主体部上面遺物出土状況(東から)
(4)第1主体部上面須恵器出土状況(北から)
- 図版第4 (1)第1主体部全景(東から)
(2)第1主体部遺物出土状況(東から)
(3)第1主体部鉄器出土状況(東から)
(4)第1主体部鉄刀出土状況
- 図版第5 (1)第1主体部鉄鏃・漆製品出土状況(真上から)
(2)第2主体部全景
(3)第3主体部全景(東から)
(4)第3主体部遺物出土状況(真上から)
- 図版第6 (1)第3主体部西側小口粘土(北から)
(2)第3主体部東側小口粘土(南から)
(3)第4主体部全景(東から)
(4)第4主体部遺物出土状況(南から)
- 図版第7 (1)第4主体部鉄鏃出土状況(真上から)
(2)第4主体部玉類出土状況(真上から)
(3)墳丘南側土層断面(東から)
(4)墳丘東側土層断面(南東から)
- 図版第8 (1)SH01検出状況(南東から) (2)SH01全景(北から)
(3)SH01周壁溝遺物出土状況(西から)
(4)SH02・SH03・SH08全景(南から)
- 図版第9 (1)SH08全景(南から) (2)SH18全景(南東から)
(3)SH09全景(南西から)
(4)SH09ピット内遺物出土状況(東から)

- 図版第10 (1) S H07全景(西から)
 (2) S H07集石検出状況(南から)
 (3) S H07竈検出状況(西から)
 (4) S H07竈完掘状況(西から)
- 図版第11 (1) S H11全景(北東から) (2) S H11遺物出土状況(東から)
 (3) S X22検出状況(西から) (4) S K23検出状況(北から)
- 図版第12 (1) S D14~17全景(南東から) (2) S D16土層断面図(南から)
 (3) S X20検出状況(東から) (4) S K29完掘状況(東から)
- 図版第13 今林2号墳出土遺物(1)
- 図版第14 今林2号墳出土遺物(2)
- 図版第15 今林2号墳出土遺物(3)
- 図版第16 (1)今林2号墳出土玉類 (2)今林2号墳出土鉄器(1)
- 図版第17 今林2号墳出土鉄器(2)
- 図版第18 今林2号墳出土鉄器(3)
- 図版第19 今林2号墳出土鉄器(4)
- 図版第20 今林遺跡出土遺物(1)
- 図版第21 今林遺跡出土遺物(2)
- 図版第22 今林遺跡出土遺物(3)

2. 北稲・柿添遺跡

- 図版第23 (1)調査区全景(3トレンチ東横から北方を望む)
 (2)4トレンチ全景(下層検出面、北から)
 (3)4トレンチS H9506・S D9507・S D9508(東から)
 (4)4トレンチS K9501・S B9503・S B9504(上層検出面、北から)
- 図版第24 (1)5トレンチ全景(北北東から)
 (2)5トレンチS D9519・S H9524・S B9525(東から)
 (3)5トレンチS K9521・S H9522・S B9523(東から)
- 図版第25 (1)5トレンチS B9515・S H9516・S A9517・S H9518(東から)
 (2)5トレンチS B9515(東から)
 (3)5トレンチS D9510・S B9512・S D9514(東から)
 (4)5トレンチS D9519・S H9524・S B9525(北から)
- 図版第26 (1)5トレンチS D9514全景(南南東から)
 (2)5トレンチS D9510横断面(北東から)
 (3)6トレンチ全景(上層検出面、北から)
 (4)6トレンチ南半部全景(下層検出面、北から)
- 図版第27 (1)6トレンチS E9530全景(西から)

- (2) 6 トレンチ S E 9530 井戸側(曲物)積み重ね状況(西から)
- (3) 7-A トレンチ S K 9546 遺物出土状況(東から)
- (4) 7-A トレンチ S K 9546 完掘状況(東から)
- 図版第28 (1) 7-B トレンチ S D 9549・S D 9550(試掘段階、北から)
- (2) 7-B トレンチ S D 9549 遺物出土状況(近景、南東から)
- (3) 7-B トレンチ S D 9549 遺物出土状況(全景、北北東から)
- (4) 10 トレンチ 全景(南から)
- 図版第29 出土遺物(土師器)
- 図版第30 出土遺物(須恵器・瓦器・木器)

3. 木津地区所在遺跡

(1) 梅谷瓦窯跡

- 図版第31 (1) 調査地遠景(北東から) (2) 調査地全景(垂直、下が北方面)
- 図版第32 (2) 瓦窯跡群・灰原全景(北から) (2) 2号窯完掘状況(北から)
- 図版第33 (1) 3号窯第1床面検出状況(北から)
- (2) 3号窯第2床面検出状況(北から)
- (3) 3号窯障壁部分(北から)
- 図版第34 (1) 4号窯全景(北から) (2) 4号窯燃焼部西壁断面状況(北から)
- 図版第35 4号窯床面状況(北から)
- 図版第36 (1) 5号窯前庭部断面状況(北から)
- (2) 1～5号窯灰原検出状況(北西から)
- 図版第37 出土遺物(1)
- 図版第38 出土遺物(2)

(2) 市坂瓦窯跡

- 図版第39 (1) 上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡(上が北) (2) 1～3号窯全景(南西から)
- 図版第40 (1) 2号窯全景(南西から) (2) 8号窯全景(北東から)
- 図版第41 (1) 2号窯焼成室(南西から) (2) 2号窯焼成室・火床・側壁(南西から)
- 図版第42 (1) 2号窯分焰柱・分焰口(南西から) (2) 2号窯燃焼室・焚き口(北東から)
- 図版第43 (1) 2号窯前庭部(南西から) (2) 2号窯前庭部(上が北東)
- 図版第44 (1) 8号窯焼成室・奥壁(北東から) (2) 8号窯焼成室・隔壁(南西から)
- 図版第45 (1) 8号窯燃焼室(北東から) (2) 8号窯分焰口
- 図版第46 (1) 8号窯焚き口(北東から) (2) 8号窯排水溝(南西から)
- 図版第47 出土遺物(1)
- 図版第48 出土遺物(2)
- 図版第49 出土遺物(3)
- 図版第50 出土遺物(4)

図版第51 出土遺物(5)

図版第52 出土遺物(6)

(3)釜ヶ谷遺跡

図版第53 (1)調査前全景(西から) (2)6番地トレンチ完掘状態(西から)

図版第54 (1)S D01遺物出土状態(北から)

(2)S D01遺物出土状態(西から)

図版第55 (1)26番地トレンチ完掘状態(南から)

(2)26番地トレンチ完掘状態(東から)

図版第56 出土遺物

(4)上人ヶ平3号墳

図版第57 (1)調査前風景(西から) (2)調査地遠景(北から)

図版第58 (1)完掘状況(西から) (2)A-A'土層断面(西から)

1. 今林2号墳・今林遺跡発掘調査概要

1. はじめに

国道478号バイパス(京都縦貫自動車道)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和50年に京都府教育委員会によって着手されて以来、継続的に調査が実施されてきた。今回報告する平成6年度の調査は、約20年にわたる国道478号線バイパス関連調査業務の最終年度のものである。

平成5年度に調査を実施した今林1号墳は、古墳時代初頭頃の墳墓であることが判明した。平成6年度の調査は、当初、平成5年度に新たに確認された園部インターチェンジ予定地内の2号墳を対象として開始し、古墳時代後期前半の木棺直葬墳であることを確認した。この調査の過程で、2号墳周辺の丘陵全体が弥生時代後期後半を中心とした集落跡となっていることが判明し、当初の予定範囲を拡張して調査した結果、弥生時代後期～終末及び古墳時代中期の竪穴式住居跡12棟を検出した。調査面積は約1,500㎡で、調査期間は平成6年9月7日～平成7年3月3日までである。

平成6年度の調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員野島 永、野々口陽子である。本概要は、各分担執筆者について文責を明記し、野島永の協力のもと、野々口陽子が編集した。

発掘調査は、建設省近畿地方建設局の以来を受けて実施した。調査経費は全額同省の負担による。調査の実施にあたり、京都府教育委員会、園部町教育委員会、園部町建設課、地元自治会などの関係諸機関の協力を得た。また、地元有志の方々及び学生諸氏には現地調査及び整理報告業務に参加協力していただいた^(注1)。感謝の意を表したい。

(野々口陽子)

2. 位置と環境

京都府を流れる諸河川は、府の中央部に広がる丹波高原を分水嶺として、二つの水系を形成する。すなわち、北流して日本海に注ぐ由良川水系と、南流して瀬戸内海に注ぐ大堰川水系である。

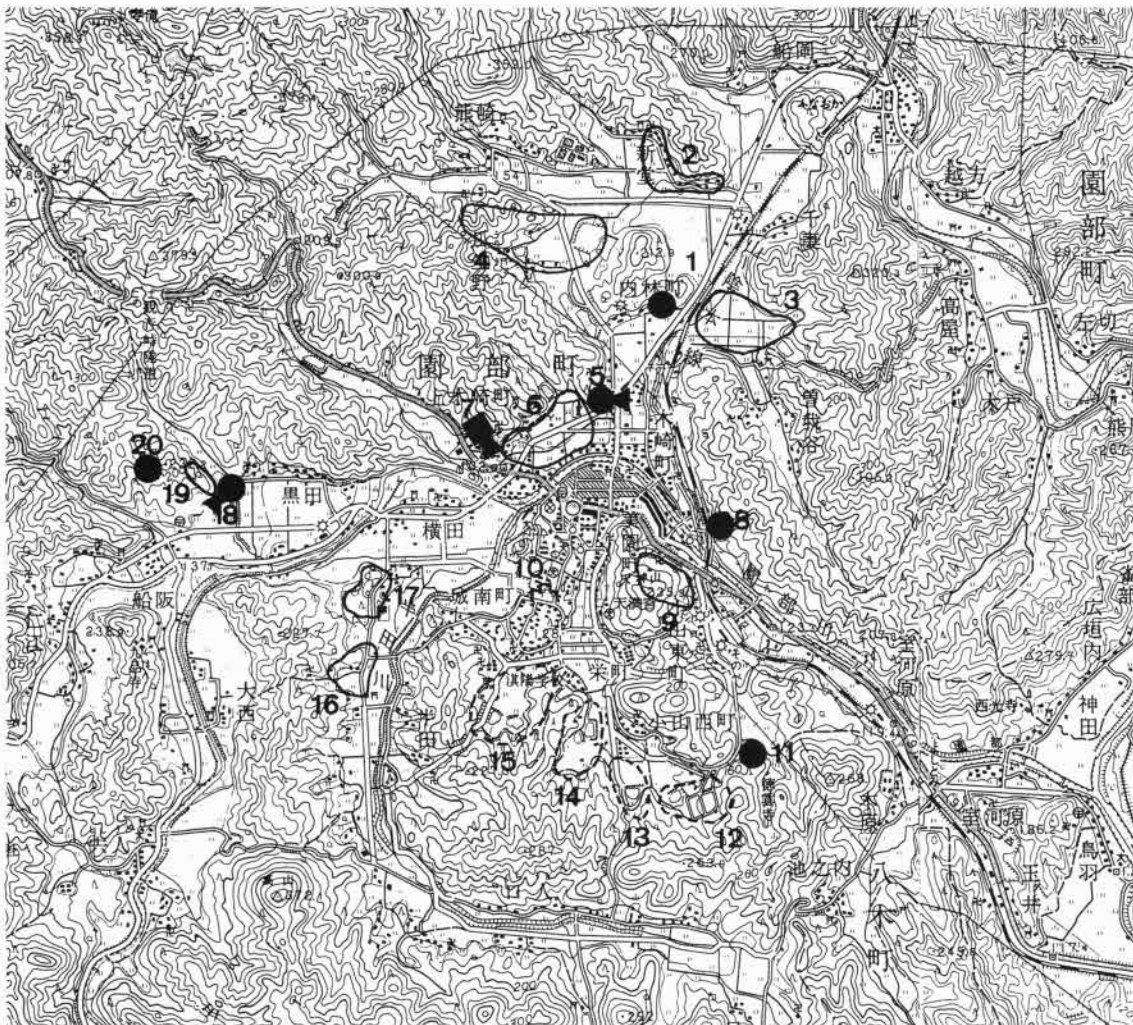
園部町は、大堰川水系の最北端に位置し、背後の丹波高原から流れ出た園部川・半田川その他の小河川によって形成された小盆地(園部盆地)に存在する。同町は、丹波地方への出入口として、俗に「口丹波」と称される地域の北端部にあって、盆地を流れる河川は、淀川を経て最終的に大阪湾に至る。

さて、遺跡周辺の歴史的環境であるが、園部町において確認できる人間の生活の営みの最古の痕跡は縄文時代からである。垣内古墳の下層から縄文土器片が出土したり^(注2)、曾我谷遺跡から縄文時代の尖頭器、石鏃が発見されている^(注3)。しかし、いずれも生活遺構を伴うものではなく、その詳

細は不明である。

弥生時代の遺跡としては、各地の遺跡で土器片が採集されているのをはじめ、後期～庄内式併行期の竪穴式住居跡や溝跡などが、この今林遺跡のほか、半田遺跡、曾我谷遺跡で確認されている^(注4)。また、出現期の前方後円墳と考えられる園部黒田古墳では、全長51mの規模を持ち、双頭龍文鏡などの豊富な副葬品が出土している。その主体部は、長さ約10mを測る長大な墓壇に礎床状の埋葬施設を構築している。

園部黒田古墳に続く古墳として、園部町には、古墳時代前期後半～中期初頭に位置付けられる中畷古墳・垣内古墳がある。中畷古墳は、全長64mの前方後方墳で直刀・筒形銅器が出土したと伝えられている^(注5)。垣内古墳は、自然丘陵を利用して構築された古墳で、豊富な副葬品が出土したことで知られる全長84mの前方後円墳^(注6)である。主体部は、粘土槨であり、コウヤマキ製の割竹形木棺を使用していた。また、出土遺物には、三角縁神獸鏡、三角縁仏獸鏡、盤龍鏡などの鏡6面



第1図 調査地位位置図(1/50,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|------------|------------|
| 1. 今林古墳 | 2. 岡田遺跡 | 3. 曾我谷遺跡 | 4. 瓜生野古墳群 | 5. 園部垣内古墳 |
| 6. 宮ノ口遺跡 | 7. 中畷古墳 | 8. 川向古墳 | 9. 天神山古墳群 | 10. 園部城跡 |
| 11. 徳雲寺北古墳 | 12. 大向窯跡群 | 13. 高杭窯跡群 | 14. 桑ノ内窯跡群 | 15. 壺ノ内窯跡群 |
| 16. 半田遺跡 | 17. 温井古墳群 | 18. 園部黒田古墳 | 19. 黒田北古墳群 | 20. 町田古墳 |

のほかに、車輪石、石釧、方形板革綴短甲などの多量の鉄器がある。園部盆地のみならず、丹波地域全体を代表する前期古墳である。

園部町における中期以降の古墳には、今のところ、目立った規模のものはない。これは、勢力の中枢がこの地域から篠山盆地・亀岡盆地へと移動したためと考えられており、大形前方後円墳の系譜がそれを示している。この時期の当地域では、徳雲寺北古墳などの一辺20mの方墳が一部調査されているにすぎず、不明な点が多い。

古墳時代後期になると、全国的に数基から十数基の古墳が密集する群集墳が築かれるようになり、園部町でも、町田東、黒田北、瓜生野、温井などの木棺直葬の小円墳によって構成される古墳群の存在が顕著になる。特に、黒田北古墳群、温井古墳は、今回報告する今林2号墳と時期的に並行関係にある。黒田北古墳群は、小規模な前方後円墳を含む5基からなる古墳群で、埴輪が出土している。横穴式石室を内部主体としているものには、天神山、穴武士、新堂などの古墳群が存在する。天神山1号墳は、6世紀中頃の丹波地域でも古い段階の横穴式石室を持っており、多くの馬具が出土している。

また、この時期の園部盆地を代表する遺跡として、須恵器の大窯跡群がある。これらは園部窯跡群と総称され、盆地南側の山麓の小山から城南地区にかけて、壺ノ内、桑ノ内、高杭、大向の四支群に分かれて分布する。主に、須恵器窯を中心に5世紀末から12世紀頃までの長期にわたって操業が続けられたと考えられ、京都府内でも最も早くから須恵器生産を開始した窯跡群として注目される。

奈良・平安時代の園部地域は、丹波国船井郡に属することとなった。現在のところ、この時期の集落跡などの調査例はなく、主な遺跡も宮ノ口遺跡や平安～室町時代の寺院跡とされる善願寺跡などが認められるにすぎない。しかし、古代山陰道が園部盆地の西端を通過し、現園部町と亀岡市の境付近に相当する園部町埴生の地に「野口駅」の存在が比定され、交通上の要地と考えられている。

中世の遺跡としては、前述の善願寺跡のほかに数多くの山城があげられる。園部町内には山城跡が約23か所確認されており、今回の調査地付近でも山城に伴うものと見られる土壇状の遺構が確認されている。これらの多くは未調査であるため、今後の調査に期待がかかる。

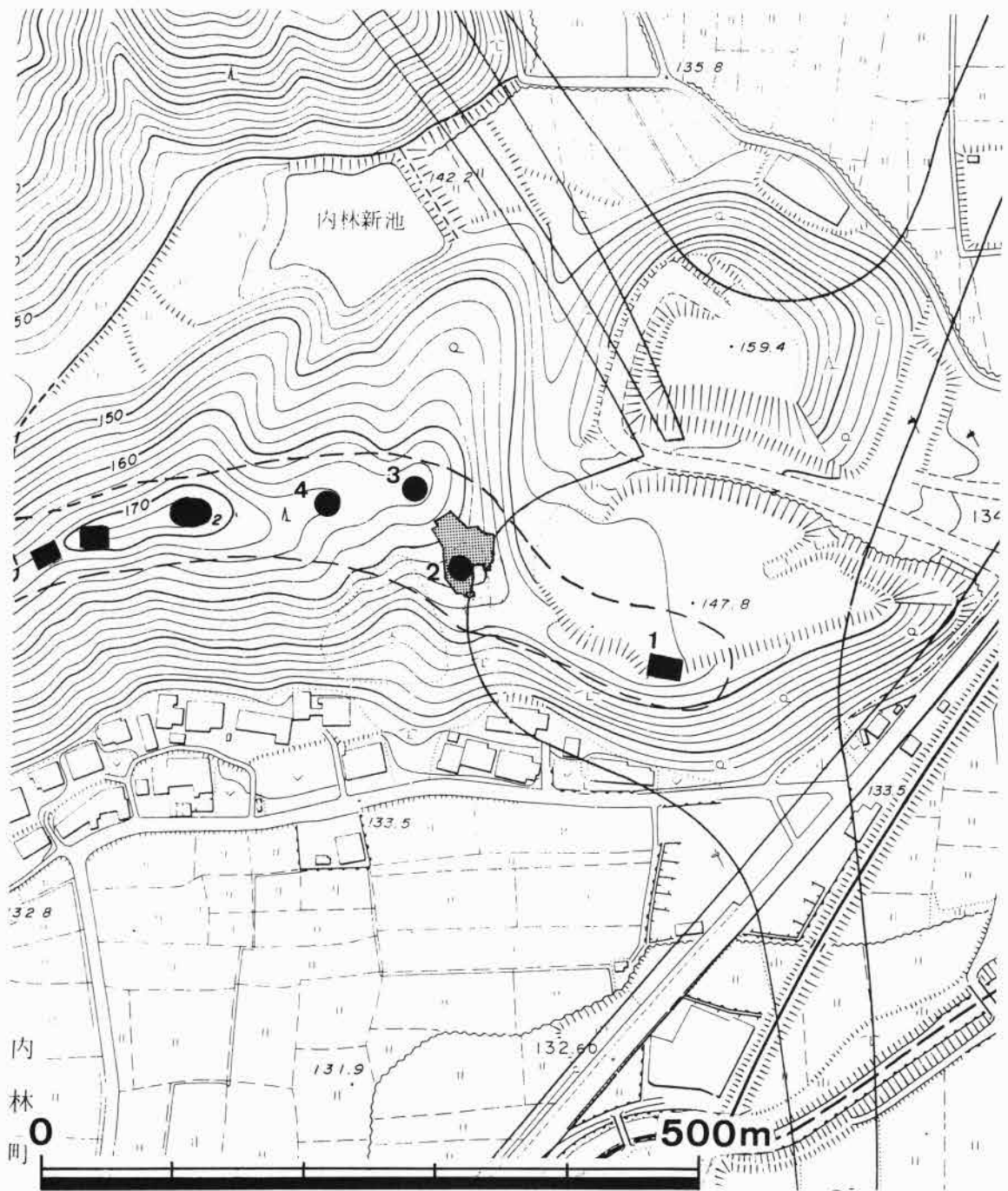
江戸時代の園部は、小出氏の治下、園部藩2万9千石の象徴である園部城の城下町として、また、地域一帯の中心として発展をとげた。現在、園部城跡は京都府立園部高等学校の敷地となっている。

(野尻和真)

3. 調査概要

調査地は、古墳時代前期の大形前方後円墳として知られる園部垣内古墳の北東約1kmの丘陵上に位置する。平地面との比高差は約20mを測り、園部盆地を一望する高台に立地する。今林2号墳・今林遺跡の立地する丘陵は、園部盆地北端の東西に長い低丘陵で、その東端部に平成5年度

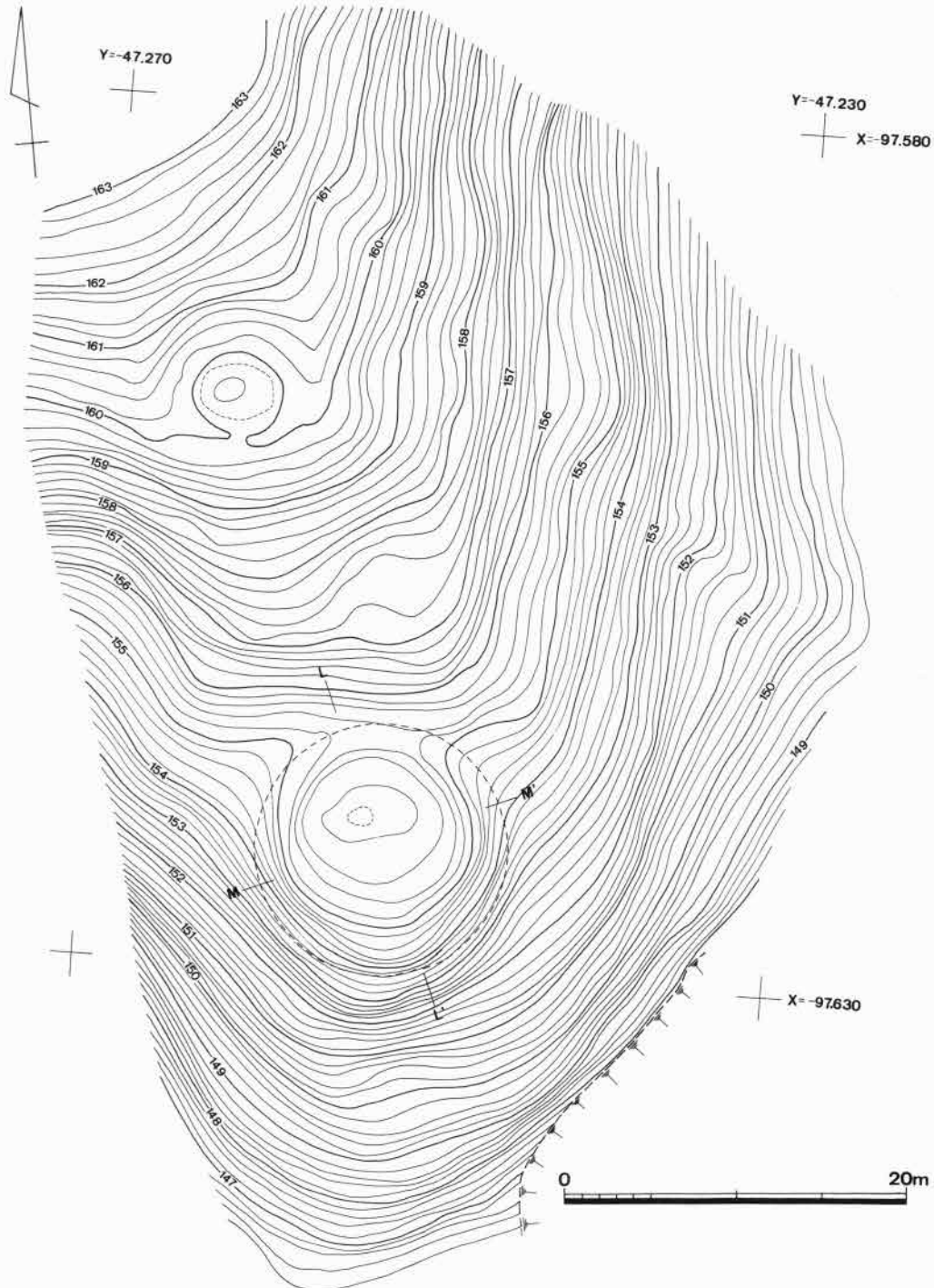
に調査された今林1号墳が位置し、約150m離れた丘陵南斜面に同2号墳が築造されている。さらに、2号墳の北側丘陵には、径約20mの円墳2基が分布しており、他に同丘陵上に分布する長方形の古墳状隆起などを含めて、今林古墳群と総称することにする(第2図)。築造期間にはかなりの幅があることが予想されるが、このうち2号墳のほかには後期古墳の可能性が高いものは、3・4号墳の2基の円墳があげられる。したがって、2号墳は単独墳ではなく、3基の円墳からなる小古墳群と捉えるべきであろう。



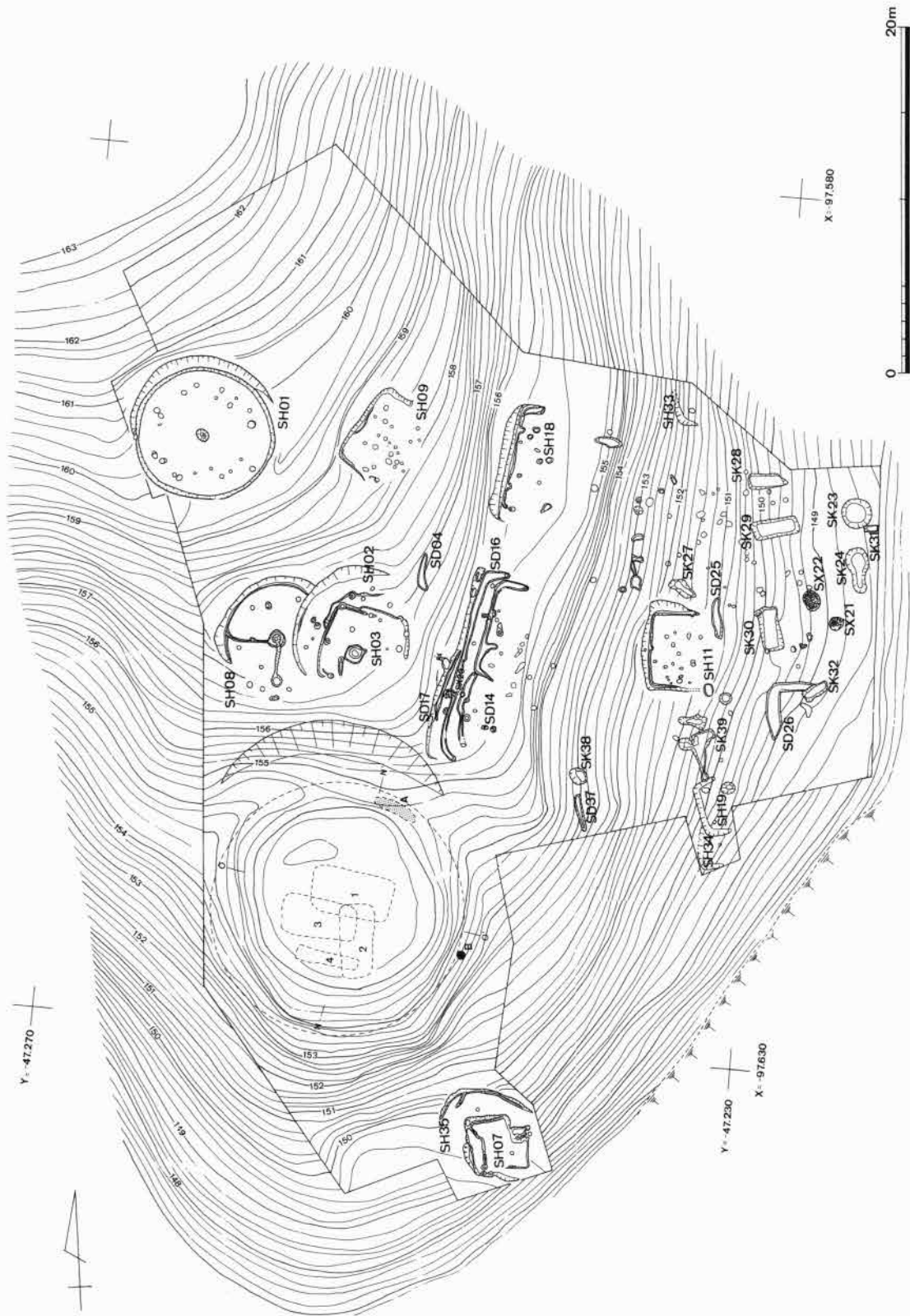
第2図 調査地周辺地形図(1/5,000)

(1)今林2号墳

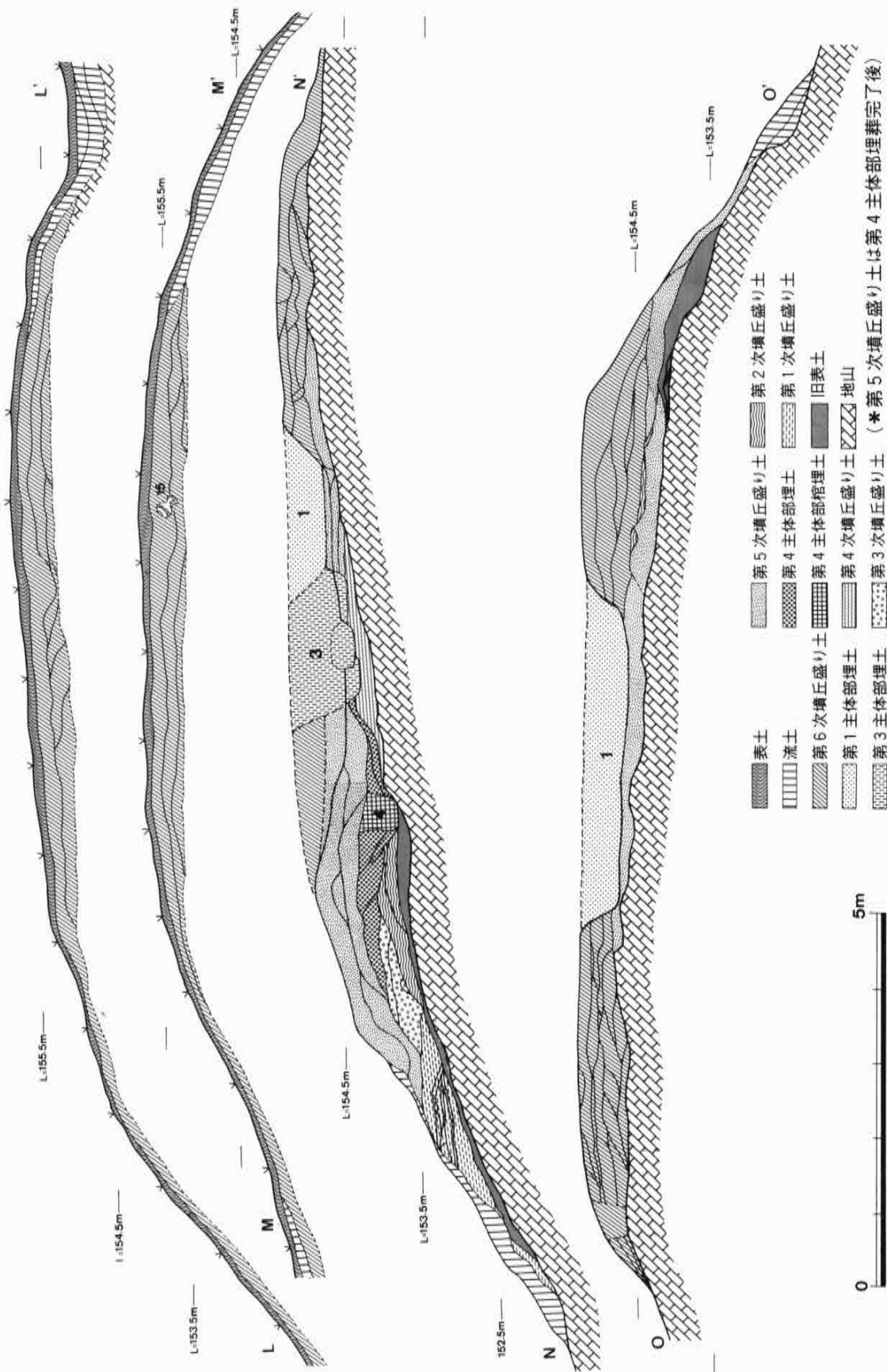
墳丘 丘陵尾根先端部に位置する径約15m・高さ約2.5～3.0mの円墳である。旧地形の地山を削り出し、約2mの盛り土を行っている。盛り土中から、弥生土器の細片が多く出土しており、築造の際、弥生時代の遺構面を削って墳丘が造られたと推定される。墳丘北側は、尾根を幅約3m・長さ約10mにわたり切断して、掘り切られ、墳丘との境界は明瞭である。墳丘周辺は、急な傾斜の斜面となり、平野部から見た場合の墳丘の視覚的な高さは、実際の高さ以上のものである。



第3図 地形測量図



第4図 今林2号墳・今林遺跡遺構平面図



第5図 今林2号墳丘土層断面図 (*第5次墳丘盛り土は第4主体部埋葬完了後)

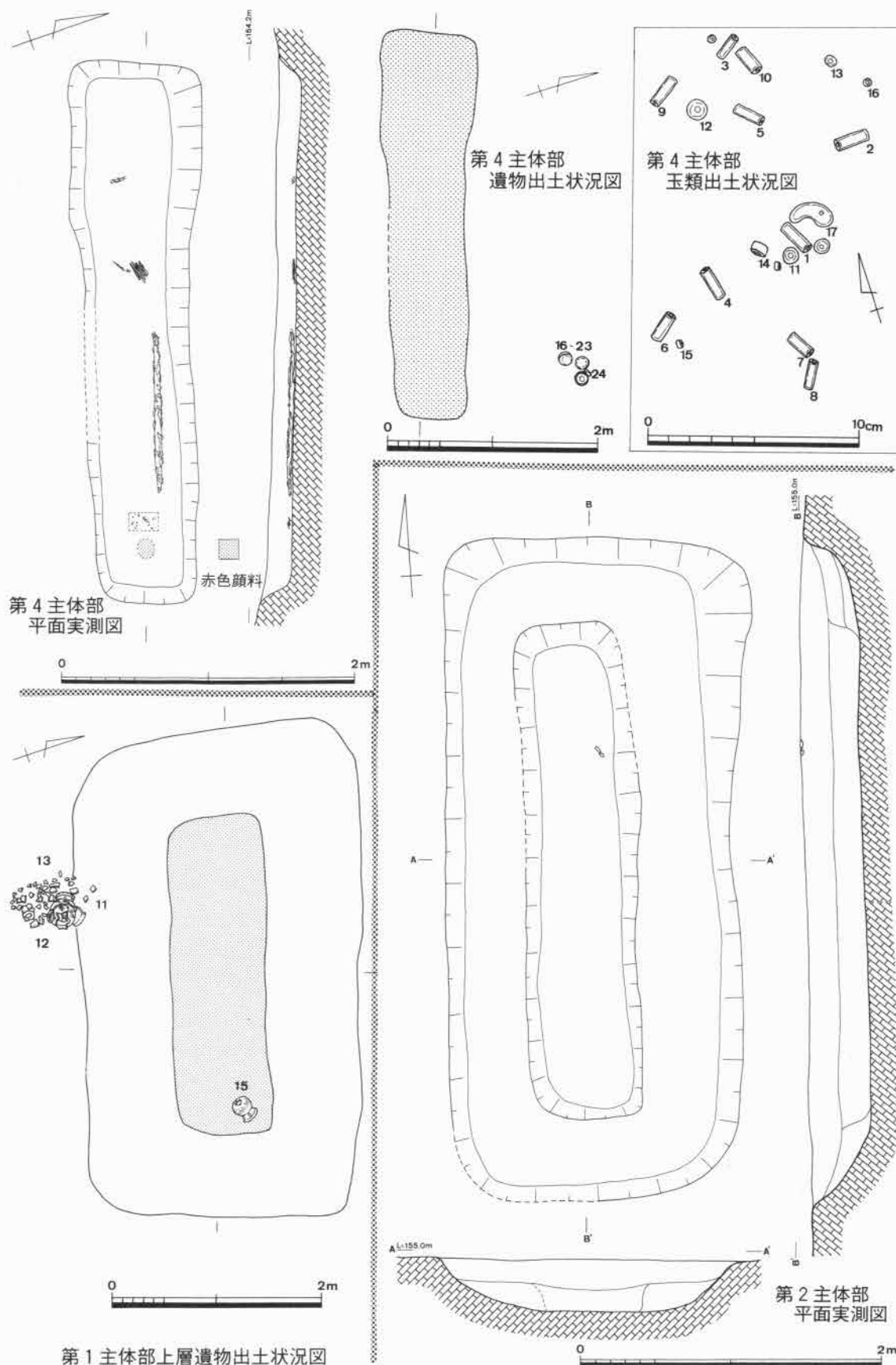
墳頂部からは、4基の主体部を検出した。築造当初の主体部は、第4主体部であり、墳丘の最も南側に位置する。第4主体部の棺底レベルは、第1主体部の棺底レベルよりも約1m低く、最終的な墳丘の断ち割り調査で検出した。墳丘断面図を見ると(第5図)、まず丘陵の南側の傾斜に沿って地山を削り出した後、低い部分へ大きく三段階に分けて盛り土を施し、平坦面を形成して木棺を安置している。後に追葬される複数の主体部があることを想定して、墳丘中央部を避けて築造されたものとみられる。土層断面図で見ると、盛り土に木棺規模の墓壙を掘り込み、棺の設置後、ほぼ棺の高さまで盛り土をした後に、さらに墳丘全体に盛り土するという作業工程が復原できる。第4主体部の構築後、一次的墳丘を形成した後、さらに約2mの盛り土がなされ、続いて第3主体部、第1主体部、第2主体部の順に墓壙が掘削されている。第3主体部は墳丘の中央よりかなり西寄りに構築されており、第4主体部と同様、意図的に中央部を避けて構築されている。各主体部の中で中心的位置を占めるのは、第1主体部であり、墳丘平坦面の中央付近のやや北寄りに築かれている。第1主体部東側上面の盛り土中から、有蓋台付短頸壺が出土し、同じく南側の墓壙ラインのほぼ直上から、須恵器大形器台、広口壺、大形短頸壺が出土した。須恵器の大形器種の供献や、馬具を含む豊富な鉄製品の副葬からみて、第1主体部が2号墳における中心的主体部といえる。この古墳における最終的な追葬は、第2主体部であり、各主体部の中心部を避け、主軸を北に向けて構築されている。

なお、墳丘裾部では、東裾から、須恵器大形器台、各種壺が出土した(第4図A地点)。A地点の出土遺物は、須恵器大形器台や広口壺が主体であり、形式的にみて第1主体部の供献土器と考えてよからう。また、墳丘北東裾からは、須恵器杯身と壺破片が出土している(第4図B地点)。

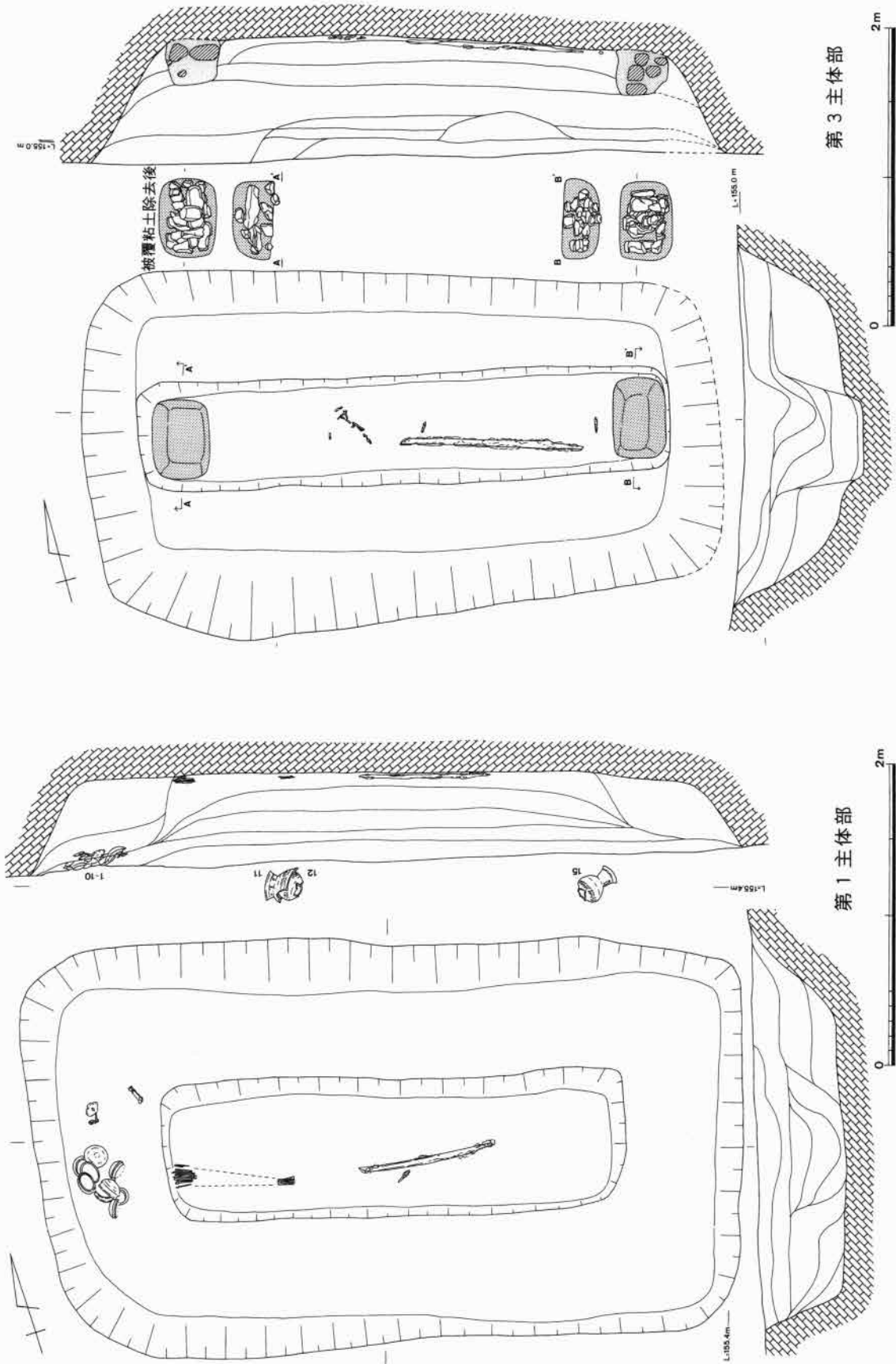
以下、築造の順序にしたがって説明する。

第4主体部 最初に築造された第4主体部の木棺規模は、長さ3.7m・幅0.8mを測る。墳丘断ち割り断面から墓壙幅は最大3.0mになる、いわゆる「構築墓壙」の形態をとる。棺上に盛り土をする過程で、木棺のやや北側の棺底上約50cmのレベルに、須恵器杯身6点、杯蓋6点、土師器把手付鉢1点の供献が行われている。第4主体部埋葬完了時の一次的墳丘のレベルは、ほぼ第3主体部の棺底レベル付近にあったとみられる。主体部の主軸は、N-69°-Wを測り、棺内からは、硬玉製勾玉1点、碧玉製管玉10点、ガラス玉10点、鉄刀1振り、刀子1点、鉄鏃10本が出土している。また、玉類の東側では赤色顔料が検出されている。遺物の出土状態などから、頭位は東向きであり、玉類は装着された状態で埋葬され、被葬者の頭部あるいは顔面には、赤色顔料が塗布されていたことが推定される。出土した須恵器は、陶邑I型式5段階、TK47型式に併行する。

第3主体部 墳丘の中央のやや西寄りに構築された第3主体部は、墓壙の長さ約4.2m・幅約2.3mを測る。その中央部で小口を粘土塊で固めた長さ約2.7m・幅約0.7mの木棺痕跡を検出した。木棺小口部分は、直方体状の石材を利用して、その長側面を「コ」の字状に配し、やや小さな石材で内部を充填させた上に回りを白色粘土でおおい、小口閉塞施設を造り上げている。この地域の6世紀前半頃に特徴的な埋葬形態を採用している。主体部の主軸は、N-78°-Wを測り、棺内から鉄刀1振り、刀子1点、鉄鏃9本が出土した。第1主体部との棺底レベルの差は、約



第6図 今林2号墳主体部平面実測図(番号は実測図番号)



第7図 第1主体部・第3主体部平面実測図

1.2mを測る。遺物の出土状態から、頭位はほぼ東と推定される。

第1主体部 墳丘の中央やや北寄りで検出した最も規模の大きい主体部である。墓壙の長さ約4.7m・幅約2.6mを測り、そのほぼ中央部で長さ約3.2m・幅約0.8mの木棺痕跡を検出した。検出面での墓壙の深さは、約0.8mを測る。第3主体部を切って築造されている。主体部上面では、須恵器有蓋台付短頸壺、器台、広口壺、甕が出土した。これらは、第1主体部埋葬完了後に一括して供献されたとみられる。一方、主体部西側小口上面で、楕円形鏡板付轡1点、鉄鎌1点、須恵器杯身5点、杯蓋5点が出土している。いずれも、前述した須恵器群の検出レベルよりも約15～20cm低く、墓壙内への埋土の搬入がある程度終了した段階で、小口上部に配置されたと推定される。馬具の出土状況としては、棺内に埋納されることが通例であることからすれば、特異な例といえよう。棺内からは、鉄刀1振り、刀子1点、鉄鏃約41本以上、带状漆皮膜が出土した。漆皮膜は、出土状況から判断すると、矢柄の先端に取り付けられた矢羽根の部分に塗布されていたものである。主体部の主軸は、N-72°-Wを測る。頭位は、東側がやや高くなっていることや、鉄刀の切先が西向きであることなどから、東向きであったと推定される。こうしたことから、主体部上面で検出された須恵器有蓋台付短頸壺は、被葬者のほぼ頭上付近に位置するように、意図的に配置されたものと考えられる。小口上で出土した須恵器は、陶邑Ⅱ型式1～2段階、MT15～TK10型式に併行する。

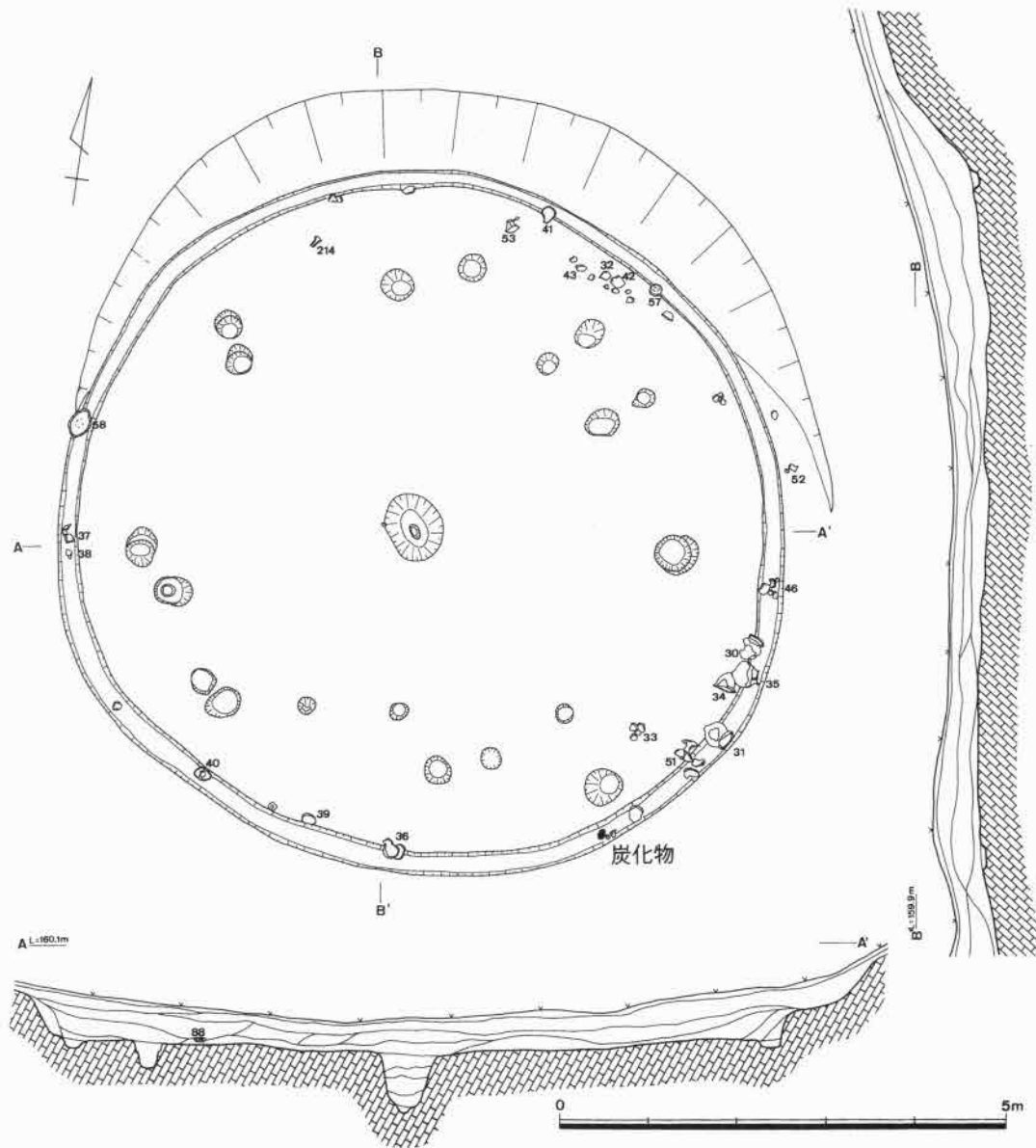
第2主体部 第3主体部、第4主体部を切る形で検出された。墓壙の長さ約4.5m・幅約2.0mを測り、長さ約3.2m・幅約0.7mの木棺痕跡を検出した。検出面での墓壙の深さは、約0.5mを測り、棺底のレベルの最も浅い主体部である。墓壙上面で、刀子1点が出土した。須恵器などの出土は認められないが、切り合い関係からみて第1主体部埋葬後に構築された主体部であり、2号墳における最終追葬と判断される。主体部の主軸は、N-8°-Eを測る。

(2)今林遺跡

今林遺跡は、園部盆地を見渡す丘陵上にあり、弥生時代後期～終末期を中心とする集落遺跡である。調査範囲内から、古墳北側の丘陵尾根上で竪穴式住居跡5棟、丘陵東斜面中腹部で竪穴式住居跡1棟と溝状遺構、丘陵東斜面で竪穴式住居跡4棟と土坑及びピット群、2号墳の墳丘南側下で竪穴式住居跡2棟を検出し、少なくとも竪穴式住居跡は計12棟を数える。調査範囲外でも、竪穴式住居状の微地形が認められるので、集落は丘陵南斜面を中心にさらに広がるとみられる。

本概報にあげた遺構の表記は、SHを竪穴式住居跡、SDを溝状遺構、SKを土坑、SXを集石遺構とし、以下、順を追って説明する。

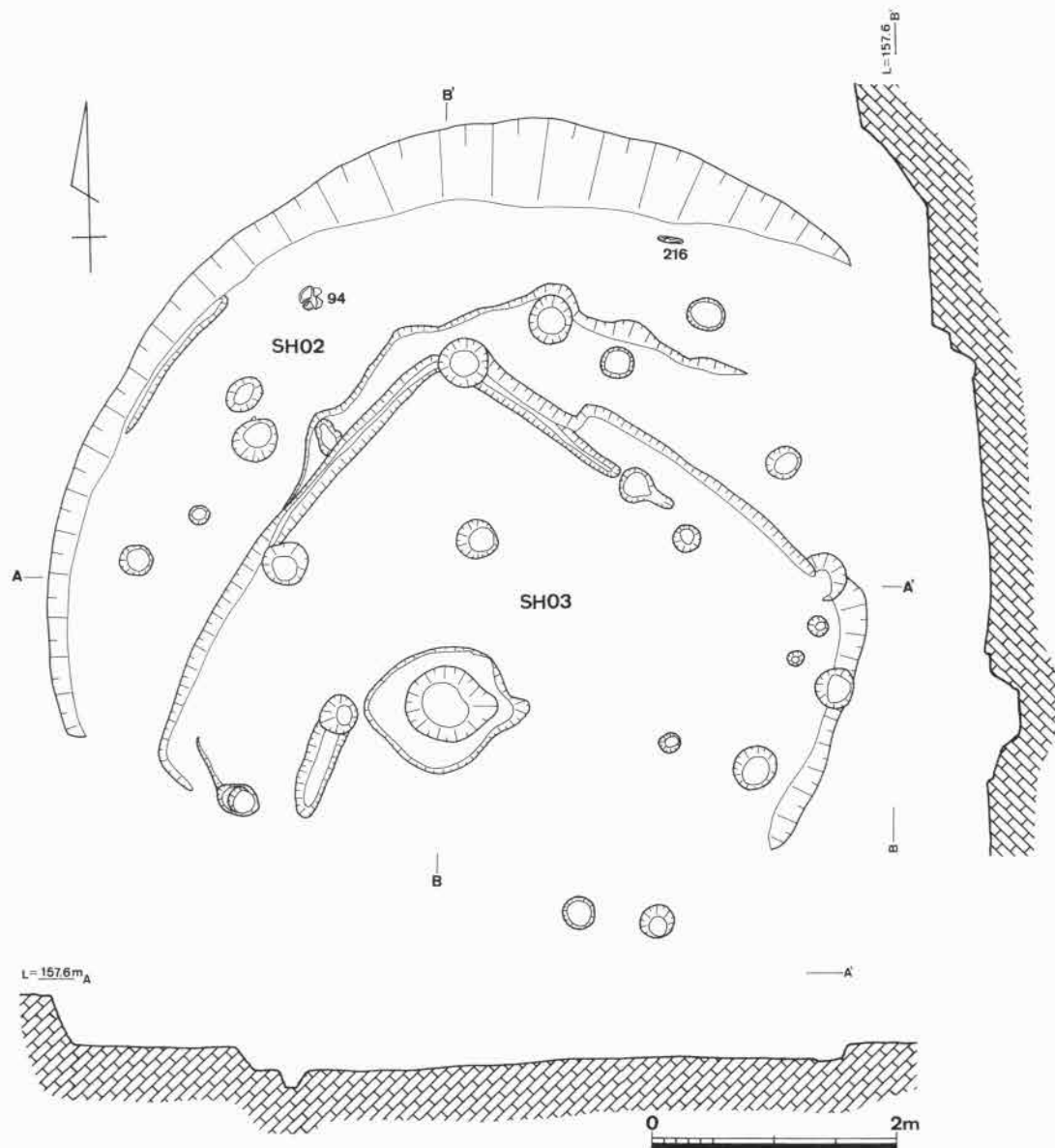
SH01(第8図) 北西から派生する丘陵頂部をやや降りた南斜面に位置しており、調査範囲内の中では、最も高い地点の竪穴式住居跡である。平面形態は、長軸約8.0m×短軸約7.8mの楕円形を呈する。調査当初から、周辺よりも陥没した地形が認められた。尾根を「L」字形にカットして平坦部を造り出し、構築している。住居跡には、壁面に沿って、幅15cm・深さ10cmの周壁溝が設けられている。床面には径約15cm前後と、深さ約40cmの主柱穴とみられるピットが円形に並んでいる。主柱穴付近には、それより小規模な柱穴が付随するように検出されたため、添え柱が



第8図 SH01平面実測図(番号は実測図番号)

構築された可能性がある。床面の中央には、径約60cm・深さ約70cmの中央土坑が設けられ、その中から若干の木炭片と弥生土器片が出土した。住居跡の南側は、急な傾斜の斜面となっており、作業場には住居跡東側の平坦な空間が使われた可能性が高い。埋土及び周壁溝からは、弥生土器をはじめ、木炭片や砥石が出土している。土器の多くは、周壁溝に落ち込むような形で出土した。

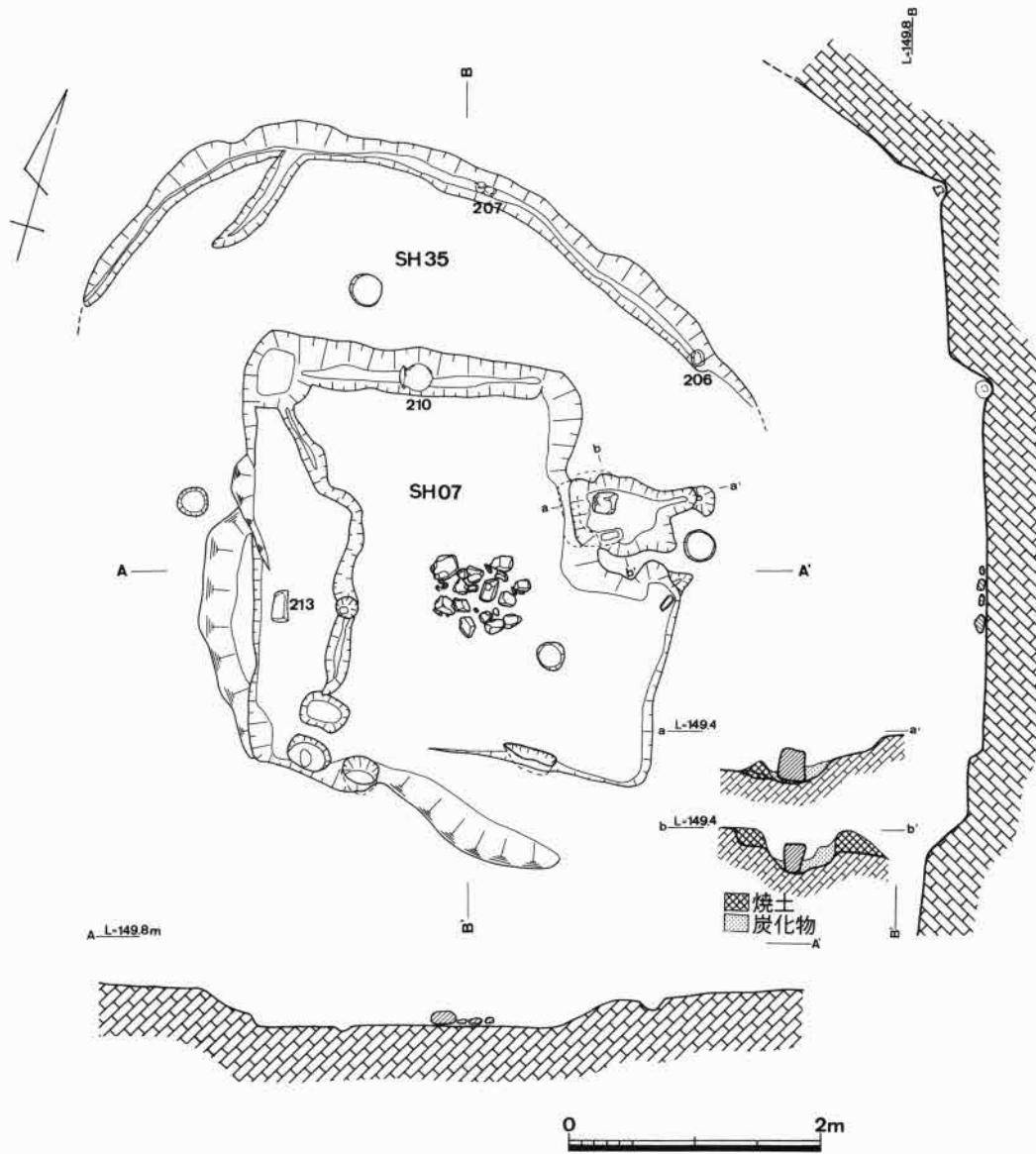
SH02(第9図) 斜面を削り出して造られた推定復原径約7.5mの円形竪穴式住居跡である。床面は、竪穴式住居跡SH08の東側を大きく削平して造り出され、さらに竪穴式住居跡SH03の構築時に削平を受けている。床面の高さは、SH08より約50cm低い。部分的に残った床面で、弧状にめぐる支柱穴とみられるピット群を検出した。ピットの中で深いものは、幅約30cm・深さ約40cmを測る。一部に浅い周壁溝が認められる。埋土からは、弥生土器、石製品が出土しており、弥生時代後期後半頃の住居跡と推定される。



第9図 SH02・SH03平面実測図

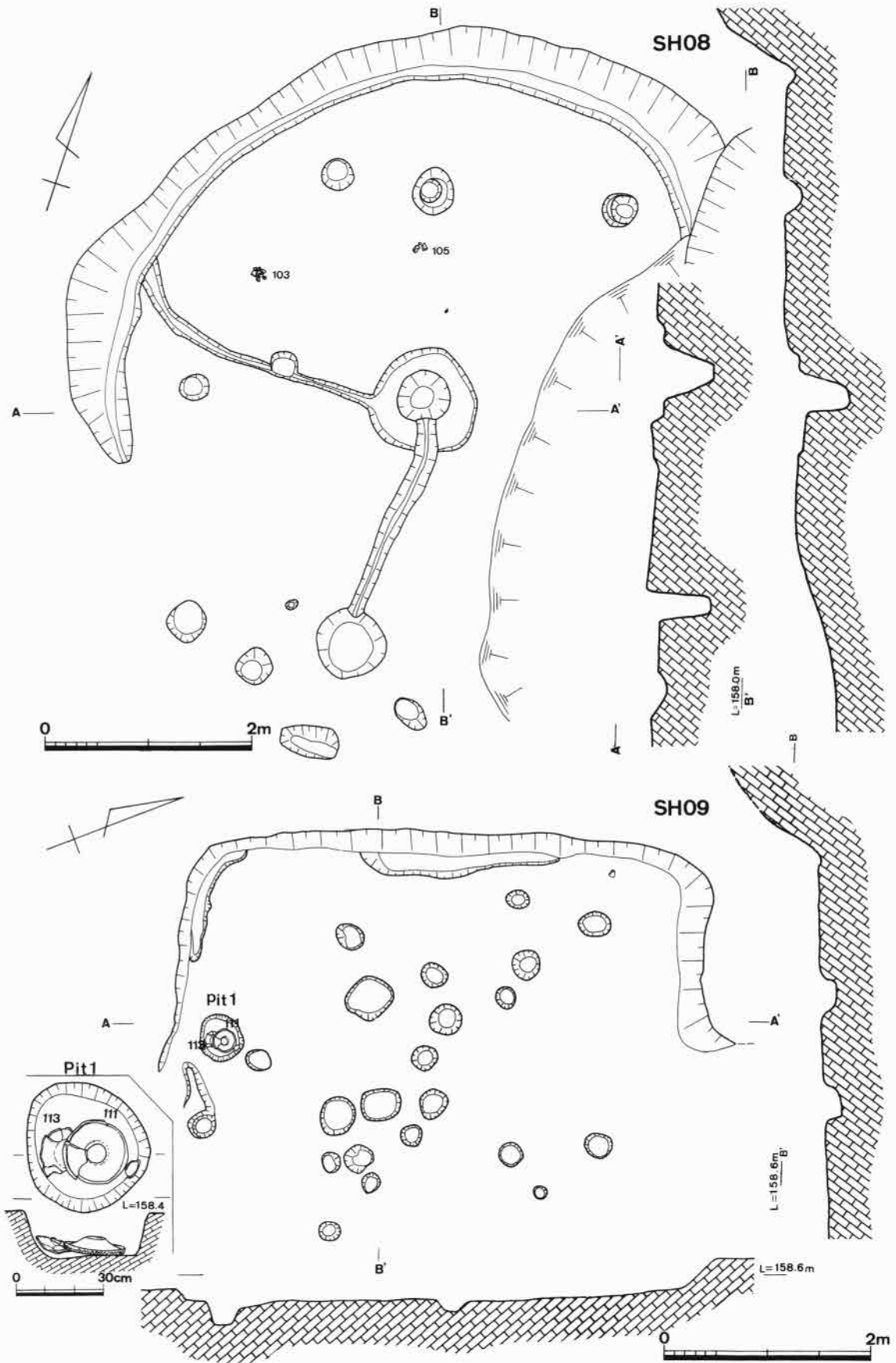
SH03(第9図) 一辺約5.0mの方形竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH02の床面を切り込んで、構築されており、床面の高さは、SH02よりも約30cm低い。住居跡の各辺に沿って、幅約15cm・深さ約10cmの周壁溝がめぐる。支柱穴は、すでに南側の一部を流出しているが、南東部を除いた各コーナー付近で深さ約30cmのピットを検出した。本来は、方形に配されていたものであろう。ピットは、他にも認められるが、比較的浅い。床面中央部で、二段の掘形を持つ径約1m・深さ約40cmの中央土坑を検出した。埋土から弥生土器片が出土している。

SH07(第10図) 2号墳の南側の急斜面を、大きく削り出して造られた方形竪穴式住居跡である。方形住居の一隅を掘り残し、そこに竈を設ける。いわゆる「青野型住居」^(注7)である。東西長約3.3m・南北長約3.4mのほぼ正方形に近いプランをなす。壁面は、岩盤を掘り込んでいるため、四周ともに高さ約30cmとよく残っている。壁面の北辺に沿って、幅約30cm・深さ約10cmの壁溝を



第10図 SH07・SH35平面実測図

検出した。溝の一部は、床面を通り、南にのびている。床面の北東隅は、岩盤の一部が掘り残され、ここに造り付けの竈が設けられている。竈は、岩盤を断面「U」字形に帯状に掘り窪め、その最下部に一辺約10cmの小石材を置き、支脚として使用している。竈は、幅約60cm・長さ約70cmで、煙道は岩盤に約40cmの溝状で検出した。支脚の小石材の上には、土師器の小片が残存していたが、これはおそらく甕の一部とみられる。支脚周辺の岩盤は、暗赤褐色に焼けており、周辺の埋土には微細な木炭片を多く含んでいた。また、住居跡床面の中央部には、小石材が集石していたが、その性格は不明である。床面には、東側と西側に幅約20cm・深さ約10cmの浅いピットが2か所認められるだけで、これらが主柱穴としての機能を果たしていたかは問題がある。周辺の岩盤は、堅固で安定しているの、柱穴を掘り込まず、床面に直接柱根を設置することも可能であろう。遺物としては、北辺の壁溝に落ち込んだ状態で、完形の土師器甕1点(第28図210)が出土し、床面で石製品1点(第29図215)が出土した。住居跡に伴う土器は、この一点のみであり、上



第11図 SH08・SH09平面実測図

面の表土中から出土した須恵器ミニチュア無蓋高杯は、2号墳に伴う可能性が高い。土師器甕は、比較する資料に乏しいが、5世紀後半前後と推定される。2号墳の初葬は、出土須恵器の型式から5世紀末葉頃とみられるため、この住居の構築は、古墳の築造と何かの関係がある可能性が高い。

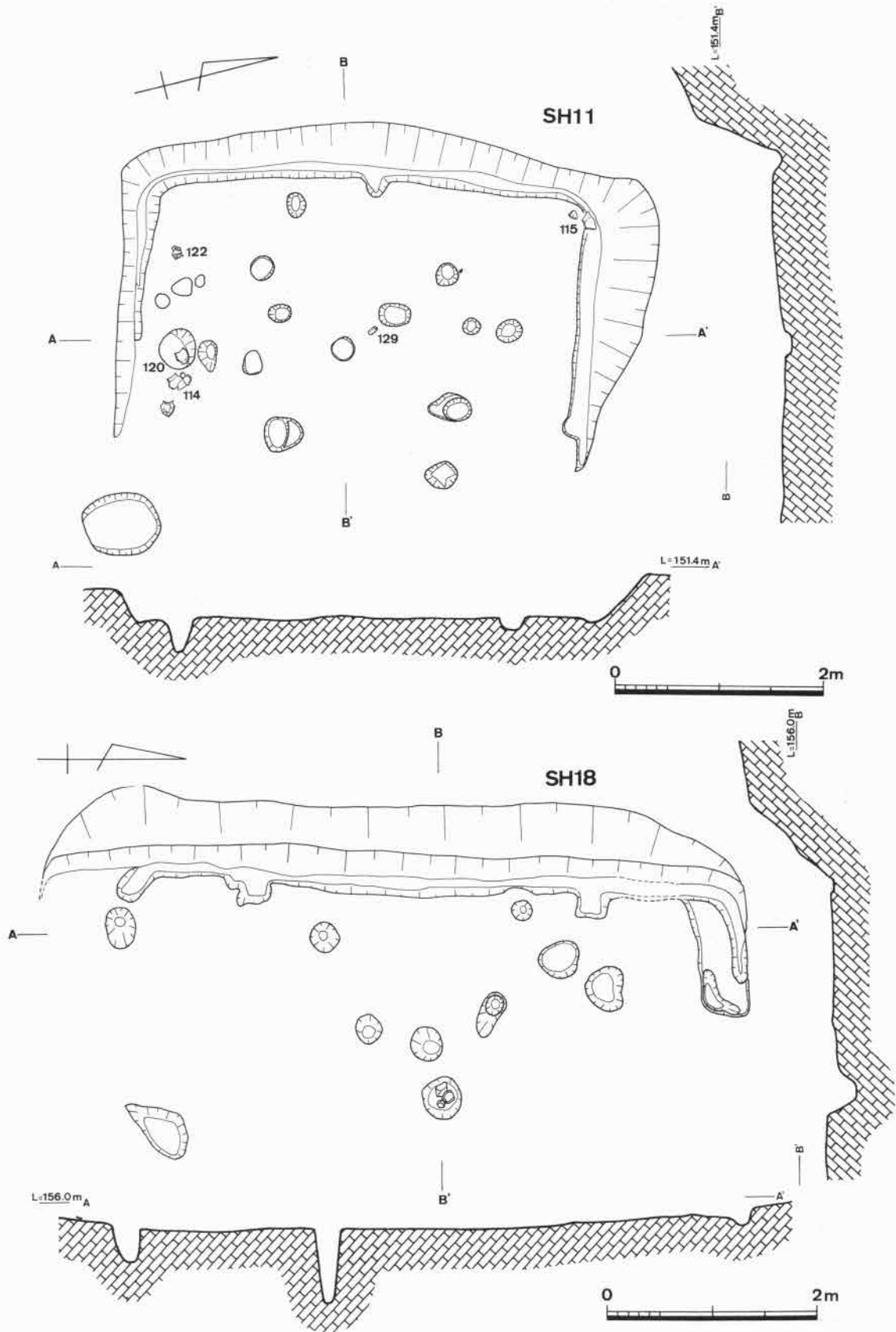
S H35(第10図) 2号墳墳丘下のS H07の調査中で検出している。当初、墳丘からの流土の堆積が著しく、S H07に伴うテラス状遺構として認識していた。丘陵基部は、岩盤を弧状に約1m削り込んで、急な傾斜で立ち上がる壁面を形成している。その最下部から壁面に沿う幅約15cm・深さ約10cmの周壁溝を検出した。床面は、S H07よりも約25cm高く、2か所にピットがみとめられる。周壁溝の埋土から、弥生土器片や弥生時代の手捏ね土器が出土した。

S H08(第11図) S H01の南側で検出した円形竪穴式住居跡である。調査当初から、この周辺は丘陵斜面途中でテラスが形成されていたため、遺構の存在が予想された。S H08は、急斜面を半月形に削って平坦面を造り出しており、推定復原径約7.0mを測る。壁面に沿って幅約15cm・深さ約10cmの周壁溝がめぐり、床面の南側は流出しており、東側はS H02の構築時に削平されている。支柱穴となるのは、幅約20cm・深さ約20cmのピットとみられるが、S H01と同様、二つのピットが組になり、点在している。床面の中央には、断面形が二段掘形となる円形の土坑が掘られていた。ここから西側の周壁溝や南側の大型のピットに向けて、幅約10cm・深さ約10cmの排水溝が設けられている。中央土坑内からは、土器や炭化物などは特に出土していないが、竪穴式住居跡埋土中から、弥生土器が出土している。弥生時代後期後半頃の住居跡と推定される。

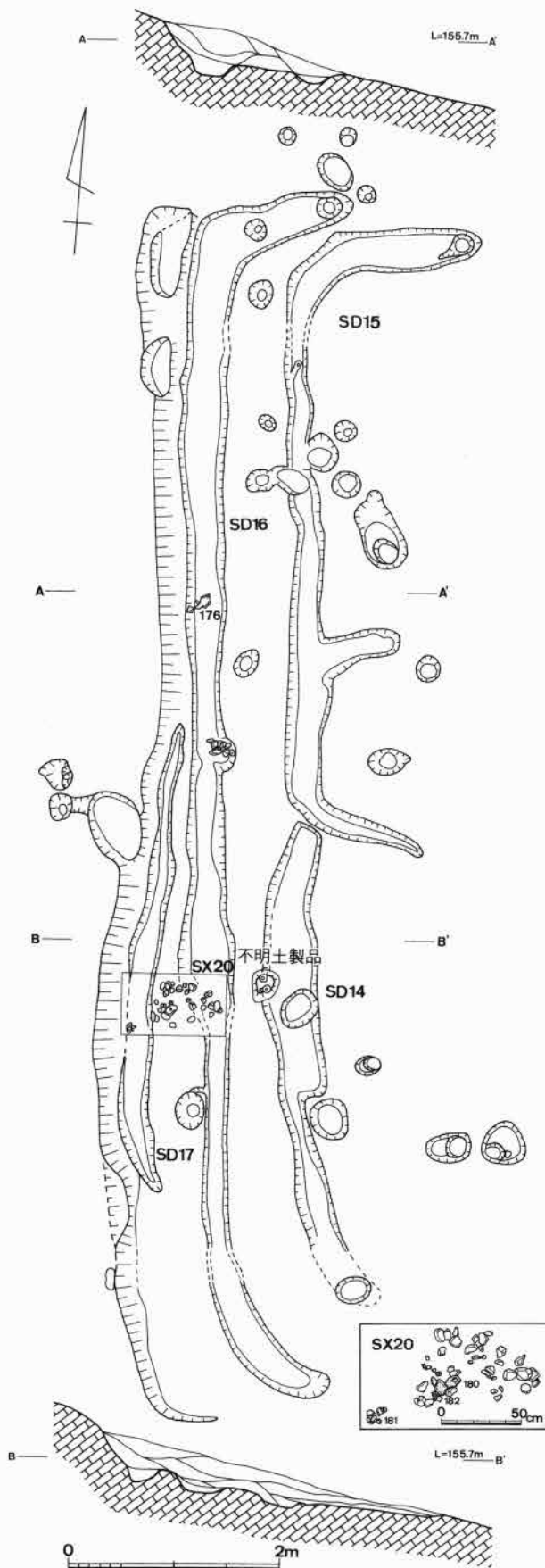
S H09(第11図) トレンチ北側の南東斜面で検出した方形竪穴式住居跡である。斜面を断面「L」字形に削り、壁面を垂直に削り出したもので、長辺約5.1m・短辺約4.3mを測る。壁面の基部における高さは約40cmとよく残存しており、その最下部に周壁溝の一部を検出した。床面には大小のピットが散在している。床面の南東隅に、径約1.2m・深さ約0.4mのピット(Pit 1)があり、中から甕あるいは壺形土器の底部と高杯の受け部が出土した。高杯は、外容器の蓋として転用されたものであろう。丘陵下部のS H11でも、床面南隅のピット内から甕形土器が出土していることからみて、何らかの信仰に関わる埋納行為の可能性もある。住居跡の埋土からは、弥生土器が出土しており、弥生時代後期後半から庄内式併行期の住居跡と推定される。

S H11(第12図) トレンチ東端の斜面を垂直に削り、平坦面を造り出した方形竪穴式住居跡である。東壁の基部における高さは約1mあり、残存状況は極めて良好である。調査前の原地形の段階で、すでに陥没した状況が明瞭に認められた。東西長約4.0m・南北長約5.6mを測る。壁面に沿って、方形にめぐり幅約15cm・深さ約10cmの周壁溝を検出した。床面には方形に位置する支柱穴となる4つのピットのほかに、不規則にピットが散在する。床面南側のピットには甕形土器(第26図120)が埋納されていた。また、住居跡前庭部の南東には、幅約70cm・深さ約20cmの比較的大きなピットが検出されている。住居跡の床面及び埋土からは、多くの弥生土器が出土し、弥生時代後期後半から庄内式併行期の住居跡と推定される。

S H19・S H34(第4図) 丘陵東斜面で検出した竪穴式住居跡である。S H11の南側に位置しており、周壁溝の一部を検出した。S H19は、S H34が建て替えられたものとみられ、床面は一



第12図 S H11・S H18平面実測図



第13図 SD14～17・SX20平面実測図

部重複している。SH19は、東西長約2.8m・南北長約3.4mを測り、二つの支柱穴を検出した。床面及び埋土から弥生土器が出土した。ともに、弥生時代後期後半頃に住居跡と推定される。

SH33(第4図) トレンチ北側の下部丘陵で検出した方形竪穴式住居跡である。丘陵斜面を垂直に削り、平坦部を造り出し、床面としている。周壁溝を部分的に検出したが、調査範囲外へと拡張するため、一部床面を検出するに留まった。埋土から弥生土器片が出土しており、弥生時代後期後半から庄内式併行期の住居跡と推定される。

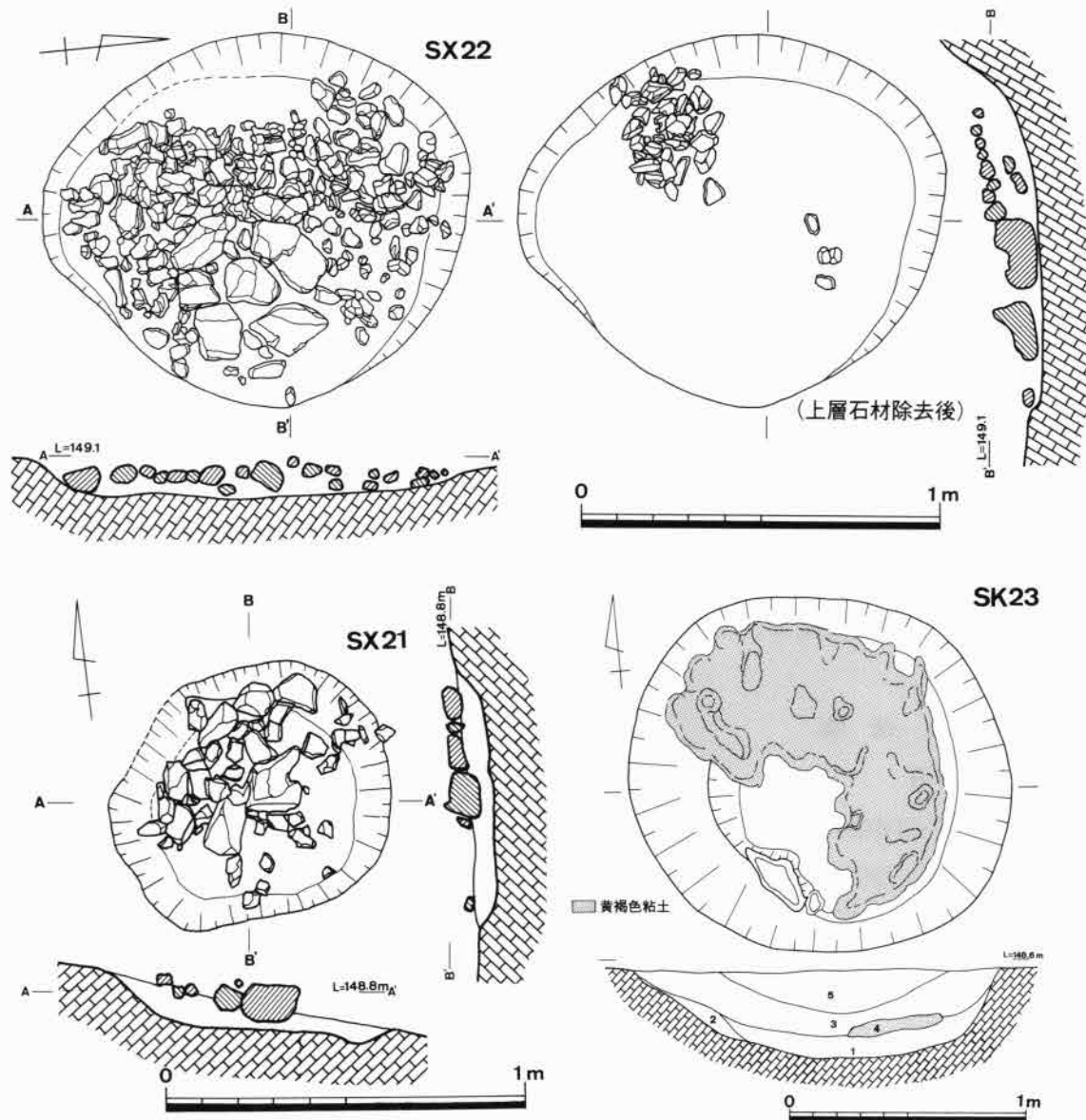
SH18(第12図) トレンチ中腹の急斜面を、大きく削り出し、平坦部を造り出した方形竪穴式住居跡である。標高155m付近は、斜面を約2m掘削し、幅約4m・長さ約20mにわたって平坦面が造られている。SH18は、その北側に位置し、丘陵基部側で幅約20cm・深さ約10cmの壁溝を検出した。床面には径約15cmのピットが散在するが、特に規則性は見出せない。周壁溝埋土から弥生土器片が出土した。

SD14～SD17(第13図) トレンチ下層東側中腹部で、大きく削り出されたテラス上で検出した溝状遺構である。上層の調査の段階では、幅約1.5mの1本の溝と捉えていたが、下層の調査で複数の溝状遺構であることが判明した。SD14・15・17は、各溝が独立していることから、それぞれが一住居跡の周壁溝となる可能性がある。一方、これらの溝に挟まれるように位置するSD16は、幅20～30cm・長さ約13mを測り、複数の住居状

施設に共有される溝の可能性はある。周辺には幅約20cm・深さ約20cm程度のピットが散在している。また、SX20の北西に煙道状のピットが認められた。溝の上層及び埋土から弥生土器、砥石などが出土している。出土土器からみて、弥生時代後期中葉頃の住居跡と推定される。

SX20(第13図) SD14~17に伴う集石遺構である。SD16の南側に、長さ約1m・幅約70cmの範囲で、楕円状の広がりをもって集石している。石材は比較的まばらで、約10cm程度の大きさのものが多く使われている。集石の上面で弥生土器や炭化物などが出土した。また、集石の東側約50cmのところと断面円筒状の土製品が認められた。当初、鞆の羽口状のものかとみられたが、その性格は不明である。土製品は、遺構内に固定されたような状況で出土している。こうしたことから、SD14~17及びSX20は、工房的性格をもつ住居状施設であった可能性が高い。

SX21(第14図) 丘陵下部のトレンチ東端で検出した集石遺構である。径約0.7m・深さ15~20cmの円形の土坑に、10~20cmの小石材が詰められている。石材は、淡赤褐色を呈し、明らかに



第14図 土坑平面実測図

熱変化を受けており、炉としての機能をもった集石遺構とみられる。土坑内の埋土は、炭化物を多く含んでいる。埋土中には、土器片などを全く含まなかったため、年代を測定するために、埋土中の炭化物を放射性炭素年代測定法によって分析した。その結果、C14分析ではB.C.8000年頃、縄文時代早期の実年代が得られた(付載54頁参照)。

S X 22(第14図) S X 21の北隣りで検出した集石遺構である。長軸約1.2m・短軸約1.1m・深さ約20cmの楕円形の土坑に、小石材が詰められている。石材は熱変化を受け、淡赤褐色を呈しており、土坑内の埋土から多くの炭化物を検出した。S X 22は、S X 21と同様、炉の下部構造としての機能をもった集石遺構であろう。集石東側の石材の一部に、20~30cmのやや大きな石材を意識的に配置した部分があり、炉の中心部分とみられる。厚さ10~15cmの均一に広がりを見せる石材の層を全体に除去すると、集石西側の下層でさらに部分的に石材の集石が認められた。埋土中の炭化物について、放射性炭素年代測定法によって分析を行い、B.C.7500年頃、縄文時代早期の実年代が得られた(付載参照)。S X 21・S X 22は遺構の形態が近似し、また両者が隣接することからみて、相次いで築かれたのであろう。

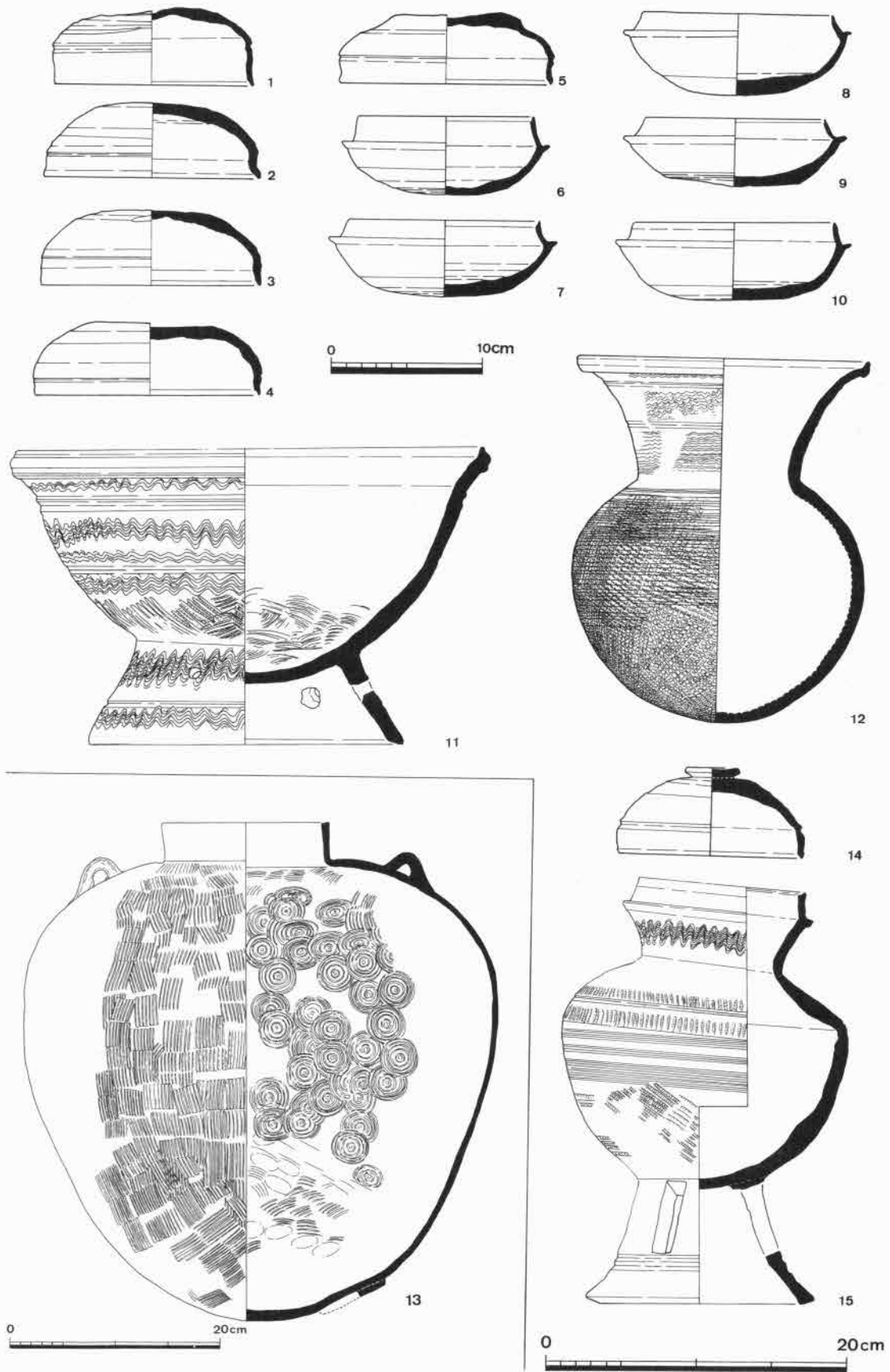
S K 23(第14図) トレンチ東端で検出した円形土坑である。径約1.4m・深さ約40cmの規模を測る。やや揺り鉢状の断面で、中央部が最も深くなる。検出時には黒色土の広がりが見られたため炭窯を予想したが、土坑最下部で明黄褐色土層の広がりを見出した。この土層は、埋土の黒色土に比べ、堅く締まり、やや乾燥した塊状を呈していたため、若干の熱変化を受けている可能性がある。埋土中には、微細な黒色粒が多量に含まれるが、木炭状の炭化物と判断できるものは出土していない。遺物が出土しなかったため、放射性炭素年代測定法によって黒色土を分析した結果、B.C.6400年頃、縄文時代早期の実年代を得た。黒色土はいわゆる丹波黒墨層とみられる。

S K 28~31(第4図) トレンチ東斜面で検出した方形土坑群である。規模は長さ約2m・幅約1m・深さ40~50cm程度を測る。S K 30上層の流土から、弥生土器片が出土しているほかは、遺物の出土は認められなかった。埋土は、いずれも黒褐色土であり、若干の炭化物が出土した。主軸は、東西か南北のどちらかに分かれており、規則性がみられるので、ほぼ同時期に形成されたものであろう。遺構の時期及び性格については不明である。(野々口陽子)

4. 出土遺物

(1) 今林2号墳

今林2号墳の副葬品には、須恵器、土師器、鉄製品、装身具などがある。遺物は、第1主体部から須恵器14点、楕円形鏡板付轡1組、鉄刀1振り、鉄鏃41本以上及び漆塗り製品(矢羽根)、刀子1点が出土した。第2主体部から刀子1点、第3主体部から鉄刀1振り、鉄鏃13本以上、刀子1点が出土した。第4主体部から須恵器8点(杯身4、杯蓋4)、土師器把手付椀1点、鉄刀1振り、鉄鏃12本以上、刀子1点、勾玉1点、管玉10点、ガラス玉6点が出土した。また、墳丘裾部A地点で須恵器5点(器台1、広口壺3、短頸壺1)、同B地点で須恵器2点(杯身2)が出土した。A地点の出土遺物は、大形器種の供献を特徴とし、第1主体部の埋葬時に供献された可能性が高い。



第15図 今林2号墳出土須恵器実測図(1)

a. 土器

①第1主体部

須恵器 杯蓋5点、杯身5点、器台1点、広口壺1点、有蓋台付短頸壺1点、甕1点が出土した。

杯蓋(第15図1～5) 1～5は、墓壙東側上面で出土した一括資料である。全体に口縁部と天井部との境に稜が認められるが、形骸化しつつある時期のものである。そのなかでも、1は稜が明瞭でヘラケズリの単位が細かく、口縁部の立ち上がりが高く古い要素を残すタイプである。口径13.3cm・器高5.2cmを測る。2～5は、稜が形骸化しつつあり、口縁部の立ち上がりは短くなり、全体にやや丸みを帯びる。口縁部径は14～15cmと大きい、ヘラケズリは天井部の3分の2～4分の3とていねいに施されている。いずれも、口縁部内面端部には沈線状の段がみられる。2は口径14.55cm・器高5.05cm、3はそれぞれ14.7cm・4.95cm、4は15.2cm・4.95cm、5は14.2cm・4.5cmである。

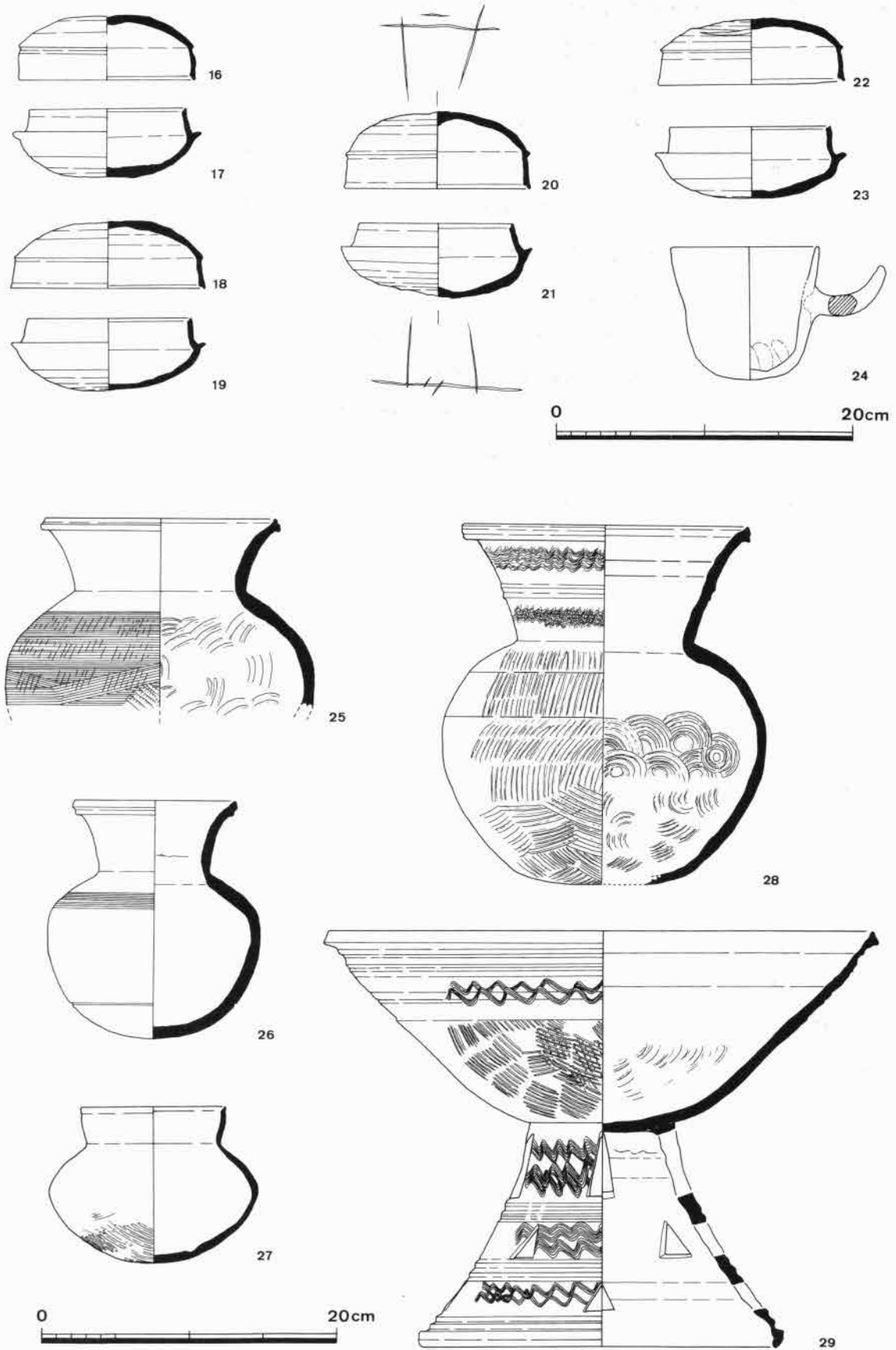
杯身(第15図6～10) 6～10についても一括資料であるが、2タイプ認められる。6・7は、口縁端部の内面に沈線状の段があり、ヘラケズリも範囲が広く、ていねいである。そのなかでも、口縁部の立ち上がりの高いもの(6)と、短いもの(7)に分かれる。6は口径17.8cm・器高5.4cm、7は13.7cm・5.1cmを測る。8～10は、口縁端部を丸くおさめ、ヘラケズリの範囲も小さく、口縁部の立ち上がりも短い。8は口径12.8cm・器高5.4cm、9は12.0cm・4.8cm、10は13.3cm・5.4cmを測る。

器台(第15図11) 口径32.2cm・器高19.7cmの短脚の器台である。第25図12の広口壺とセット関係にある。杯体部は、深さ15.5cmを測り、外面には4条の櫛描き波状文が施され、その間に2条の凹線が入る。下部の器表面には、成形段階の平行タタキが残る。杯体部の内面下部には、同心円文タタキの成形痕が残る。口縁端部は外上方に開き、端部外面に鈍い稜をなす。外反する短脚の脚部は、外面に2条の波状文とその間に1条の凹線を施す。脚部高は約6.5cmを測る。スカシ穴は径約0.9cmで、計6か所に施されている。脚部と杯体部は別々に成形した後、最終的に接合したもので、検出時に接合部はすでに剥離していた。灰白色を呈する。

広口壺(第15図12) 球形の体部に、ゆるやかに外反する口頸部をもつ。体部は、螺旋状の平行タタキで成形した後、上半にカキメが施される。口径部には精緻な波状文の間に、2条の凹線が施される。口縁端部は、内面に強い横方向のナデを施し、上方に引き出す。体部底面には、若干の繊維質の付着した輪状の粘土焼台痕が残る。口径19.8cm・器高25.0cm、暗青灰色を呈する。

甕(第15図13) 短く直立する口縁を有する甕である。体部は、張りのある球形を呈し、器面全体を細かい平行タタキで成形している。口縁端部内面は段をなし、肩部に4か所の把手を有する。底部外面には、焼成の際に焼台として用いられた粘土板が残る。体部内面には、全体に同心円文タタキを施す。口径16.0cm・器高45.85cmで、色調は黒灰褐色を呈する。

有蓋台付短頸壺(第15図14・15) 15は、体部外面を平行タタキによって成形している。大きく張り出した肩部には、凹線をめぐらせた後、2段にわたり櫛描き列点文を加え、その下部にカキメを施す。口頸部には12条一単位の精緻な波状文をめぐらせ、口縁端部内面には沈線状の段をな



第16図 今林2号墳出土須恵器実測図(2)

す。また、受け部には、セットをなす蓋との重ね焼きの痕跡が残っている。脚部は3か所の方形のスカシ穴を穿ち、外方に開く裾部には2状の凹線をめぐらせる。口径11.3cm・高さ28.3cmを測る。14は、中窪みのつまみをもつ蓋である。天井部はていねいにヘラケズリし、口縁部との境をなす稜線は明瞭に引き出されている。口縁端部内面は段をなす。口径12.3cm・器高5.9cmを測る。14・15は、ともに全体に暗緑色の自然釉がかかっており、暗灰色を呈する。

②第4主体部

須恵器 須恵器は、杯身4点、杯蓋4点が出土した。16～23は一括資料である。

杯蓋(第16図16・18・20・22) 出土状況から杯身とのセット関係が明確で、セットごとに図示している。杯蓋は、全体に口径が13cm前後と小さく、天井部が高く、やや丸みを持つ。口縁部と天井部を界する稜線は明瞭である。いずれも、口縁端部内面に段を有するが、端部の形態には3つのタイプがある。まず、20・22は、端部外面が外反しており、20は口径13.7cm・器高4.7cm、22は口径12.6cm・器高4.5cmを測る。18は、口縁部がほぼ垂直に下がり、口径13.2cm・器高4.7cmを測る。16は、やや内湾気味に入り、口径12.0cm・器高4.5cmを測る。口縁端部外面が外反するタイプの20・22は、ヘラケズリの単位が細かく、天井部のほぼ全面に施されており、古い要素を残している。また、20は、出土状況でセット関係をなしていた21と同じヘラ記号が刻まれている点が注目される。ヘラ記号については、さまざまな見解があるが、ここではセット関係を示すためのものであったとみられる。陶邑I型式5段階、TK47型式に併行するものであろう。

杯身(第16図17・19・21・23) 口縁部の立ち上がりが直線的にのびるもの(17・21)と、受け部がやや内傾気味に立ち上がるものがある(19・23)。17・19・23は、受け部外面に強いナデが施され、受け部の張り出しは明瞭である。17は口径10.6cm・器高4.7cm、19は口径11.0cm・器高5.0cm、23は口径10.7cm・器高4.9cmを測る。21は、焼き歪みが大きい、ヘラケズリは単位が細かくていねいである。口径は10.5cm・器高は5.6cmを測る。

土師器 土師器は、須恵器16～23と共伴して、把手付鉢1点が出土した。

把手付鉢(第16図24) 口径9.95cm・器高9.2cmを測る。体部外面は横方向のナデを施し、内面はナデ及び底部に指頭圧痕を施す。把手部の断面は径1.3cmの楕円形を呈し、指頭圧痕が明瞭に残る。色調は、明橙褐色を呈する。胎土は密であり、焼成は軟質である。

③墳丘裾部A地点

須恵器

壺(第16図25・26・28) 25は、短く外反する口頸部を有し、口縁端部外面に凹線がめぐる。器表面は平行タタキで成形した後、肩部以下、体部上半をカキメで調整する。体部内面は同心円文タタキを部分的にナデ消している。口径は15.6cm、色調は暗灰色を呈する。26は、やや肩の張る球形の体部に、肩部にカキメを施し、体部下半に1条の沈線がめぐる。口頸部は外上方にゆるやかに開き、口縁端部に断面三角形の突帯がめぐる。口径は10.8cm、器高は16.2cmを測り、色調は明灰褐色を呈する。28は、張りのある体部にやや扁平な底部を有する広口壺である。器台29とセット関係にあると推定される。口頸部は、精緻な波状文の間に中位に断面三角形の突帯が2本め

ぐる。器表面は、体部上半部に縦方向の平行タタキ、下半部に横方向の平行タタキを施し、体部内面を同心円文タタキで成形する。口径19.2cm・器高24.4cmを測り、色調は淡茶灰色を呈する。

埴(第16図27) 直立気味に短く立ち上がる口頸部に、肩の張る扁球形の体部を呈する。口縁端部は、外面に強いナデを施し、内面に段をなす。底部には、成形時の平行タタキが部分的に残る。口径9.8cm・器高10.6cmを測り、暗青灰色を呈する。

器台(第16図29) 口縁部は、3条の突帯がめぐり、その下部に2条の沈線を施した後、一単位6本の波状文が2条めぐり、杯体部の外面下半は平行タタキで成形し、内面は同心円文タタキをナデ消している。大きく外反する脚部は、断面三角形の鈍い突帯によって、区分され、各間に波状文が施される。脚部には三角形のスカシが、各段に基本的には4か所に交互に穿たれている。脚端部は、外面に強く横方向のナデを施し、シャープな稜を引き出している。口径17.2cm・器高28.3cm・底径24.3cmを測り、色調は明灰色を呈する。(野々口陽子)

b. 鉄器

鉄器は、今林2号墳主体部から出土した。副葬品として、刀、鉄鏃、鎌、刀子、馬具などがある。

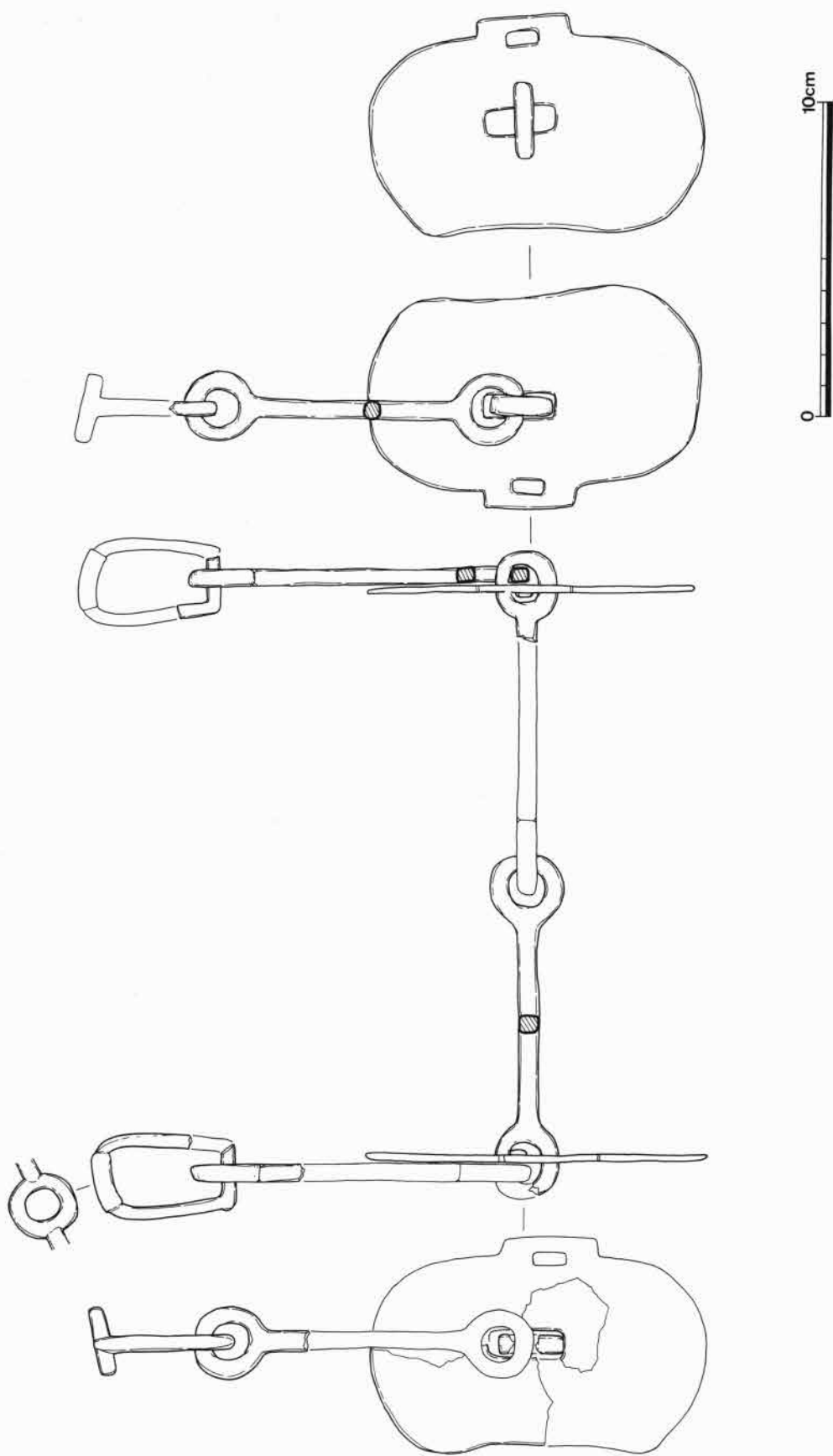
馬具

今林2号墳第1主体の馬具は、鉄製楕円形鏡板付轡で、5つの破片に分かれる。引手と銜を連結し、引手壺を持つ型式である。遺存が良好なものでは、引手長10.7cm、鏡板の長軸長10.5cm、短軸長6.7cm、厚さ0.3cmである。鏡板は無装飾で、下縁の突出が小さい。銜止め棒は、2.4cmで銜止孔に鍛接される。引手は単線で長4.5cmの引手壺が付く。銜は一方のみが遺存し、20.4cmを測る。

京都府内で、鉄製楕円形鏡板付轡は、峰山町大耳尾2号墳第1主体、田辺町トツカ(十塚古墳)と、この例の3点が知られている。また、綾部市荒神塚古墳の鉄製心葉形杏葉、木津町上人ヶ平遺跡灰原出土の馬形埴輪もこの型式の轡の関連資料である。これは、5世紀後半～6世紀中葉の古墳の副葬品としてみられ、「f」字形鏡板付轡や剣菱形杏葉などの馬具とともに、乗馬の風習の普及の初期に、一定度の役割を果たしたことがわかってきた。ただし、初期の馬具を受容した階層的規制の問題や、伽耶地域でみられるこの轡の系譜問題など、これから検討すべき課題も多い。ここでは、この例を年代的に位置づけてみたい。

この例は、鏡板が小形で下縁の削り込みが小さく、銜止め棒が内側にあり、銜・引手連結である点が異例といえる。まず、鏡板は、6世紀のこの型式の轡では、削り込みが大きく下縁の両端が尖るものが多いが、この例は5世紀の形態に近い。また、銜止め棒が内側にある点は特殊であるが、これは補修の結果であろうか。また、銜・引手連結は、他の鏡板付轡が銜・引手連結に移行するのと軌を一にしたものと理解できる。したがって、この例は6世紀中葉をさかのぼらないと考えるが、鏡板の形態に古相が指摘できる。なお、引手壺は、遺存する形態からみると、瓢形の湾曲が小さい。この点も、6世紀の引手壺と見なせよう。

以上の検討から、この鉄製楕円形鏡板付轡の製作時期の1点は6世紀中葉で、この型式の轡では最新に属するものと思われる。補修した可能性があり、実際に使用されている。なお、この馬具に伴う馬装は辻金具2点であり、杏葉などはなかったであろう。標識となる古墳に、滋賀県鴨稻



第17図 今林2号墳第1主体部出土馬具実測図(1/2)

荷山古墳、兵庫県園田大塚山古墳、福岡県寿命王塚古墳などが挙げられる。

南丹地域で初期の馬具を副葬する古墳には、亀岡市鹿谷古墳群、八木町小谷16号墳、園部天神山古墳群などがある。やや煩雑になるが、資料記載を行いたい。

亀岡市鹿谷古墳群の馬具は、明治期にウイリアム＝ゴランドが調査したNo.105古墳出土のもので、これは石柵・石障を持つ古墳である。現資料は、大英博物館所蔵のために実見していないが、ゴランドの写真から、(1)「f」字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・辻金具・鞍金具(磯金具・覆輪)、(2)車輪形の鏡板付轡・台形の杏葉・辻金具の2セットが復原できる。この他に壺鐙の鉸具と兵庫鎖らしい破片もあり、いずれかに属するものであろう。「f」字形鏡板付轡は鏡板の内側で、銜の端環に遊環を介して「く」の字引手を結合する。この点から(1)のセットは6世紀中葉の製作であろう。(2)のセットは内側で連結する鏡板の外側で、銜の端環をキャップで覆う点で、(1)のセットよりも後出し、6世紀後半の追葬によるものであろう。

八木町小谷16号墳の馬具は、鏡板に引手と銜を別個に結合する素環鏡板付轡で、兵庫鎖を介した釣金具で垂下する。この製作年代は、6世紀前半になる。引手や釣金具の形態が左右で異なり、破損品を補修した可能性が高い。辻金具3点が伴う。

園部町天神山古墳群では、1・2・3号墳から馬具が出土している。1号墳の馬具は鉸具のみで、2・3号墳に轡・雲珠・辻金具・鞍金具(鞍)などの馬装一式が伴う。轡は2・3号墳とも銜の端環に「く」の字引手を結合した素環鏡板付轡である。3号墳の轡は、鏡板の形態が若干異なっており、補修された可能性がある。雲珠は2号墳から出土した、鉄地金銅張りの円形雲珠である。6世紀後半の製作によるものであろう。

南丹地域の馬具を概観すると、型式の多様性と小型古墳への副葬を地域的な特性と見ることができる。かつて、この地域の横穴式石室を検討し、6世紀前半にこの地域では在地首長による階層的な支配が浸透しないことを背景に、新来の文化要素の受容が一様でないことを指摘したことがある。また、最近では継体擁立期の政治的動乱に伴って、軍事氏族の存在を想定する見解もある。ただ、馬具は中期古墳の甲冑同様、乗馬の風習の広がりや背景に威信材分配という視点からも考察されねばならないだろう。逆に言えば、馬具を副葬した古墳を地域別に整理、類型化した上で、政治的な評価を与える作業を必要とする。

近年、鉄製甲冑の研究から、古墳時代の軍事組織に関する論争が行われている。それは、藤田和尊氏が提示するような甲冑保有形態の諸類型が軍事組織を反映するかで議論が分かれるが、これは馬具研究にも継承されるべき視点であろう。具体的には、以下の手続きとなる。まず、馬具の型式組列の多様性を踏まえた上で、伝世・補修された馬具と最新の馬具の組み合わせを類型化する。次に、その組み合わせを副葬古墳の内容と地域でのあり方を整理し、歴史的な理解を導く。ここでは詳論できないが、日本では5世紀後半、6世紀中葉、7世紀前半に馬具のセットと副葬形態に画期がある。言うまでもなく、鉄製楕円形鏡板付轡の普及はその最初の画期であり、その歴史的背景には伽耶地域からの文化的な影響が大きいことを示しているであろう。

(河野一隆)

鉄鏃(第19・20図)

鉄鏃は、総数69本出土した。第1主体部からは、39本以上の長頸片刃鏃と2本の広根腸扶三角形鏃(第19・20図1~41)が主体部西寄りで束になって出土した。片刃鏃は、長いもので20cmを越える。刃部身長は、4.1~2.8cmほどで、深く抉り込むような腸扶は見られない。実測図には、刃部切先から箆被までの長短で配列したが、長いもので19.0cm、短いもので10.6cmと、かなりの隔

りがある。すべて台形箆被で統一され、茎は断面方形に近く、直径2~3mmの細いものである。一部には、木質と桜皮の遺存が認められる。中期後半以降、長頸化する片刃鏃の良好な資料である。

第3主体部からは13本以上の鉄鏃が出土した(第20図42~57)。主に、鏃身は、小形の長頸腸扶三角形のものである。刃部身長は2.3~2.6cmほどである。

第4主体部でも同様の小形の長頸腸扶三角形鏃12本以上が出土した(第20図58~69)。全長14cm前後に復原できる。刃部身長は2.2~2.6cmほどで、台形箆被をもつ。第3主体部のそれと形態的な差異を見いだせないことから、両主体部への副葬にそれほどの時間差があったとは思えない。

鉄刀(第18図1~3)

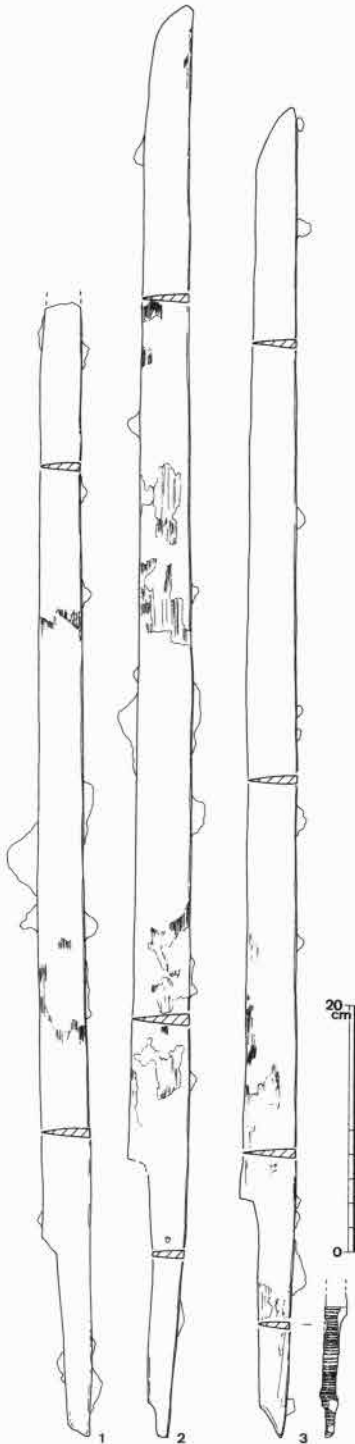
第1主体部出土刀(第18図1) 全長91.2cm・刃部幅4.05cm・棟幅0.95cm・茎長14.6cmを測る。鋒が欠損する。刀身に木質が遺存する。刃関は斜角に造られる。茎胴部は茎尻に向かってやや細くなり、隅切尻でおわる。

第3主体部出土刀(第18図2) 全長115.4cm・刃部幅4.9cm・棟幅1.05cm・茎長22.1cmを測る。完形である。刀身に木質が遺存する。刃関は撫角に近い。茎胴部は先細りし、刃部側に向かってやや反りがある。隅扶尻でおわる。

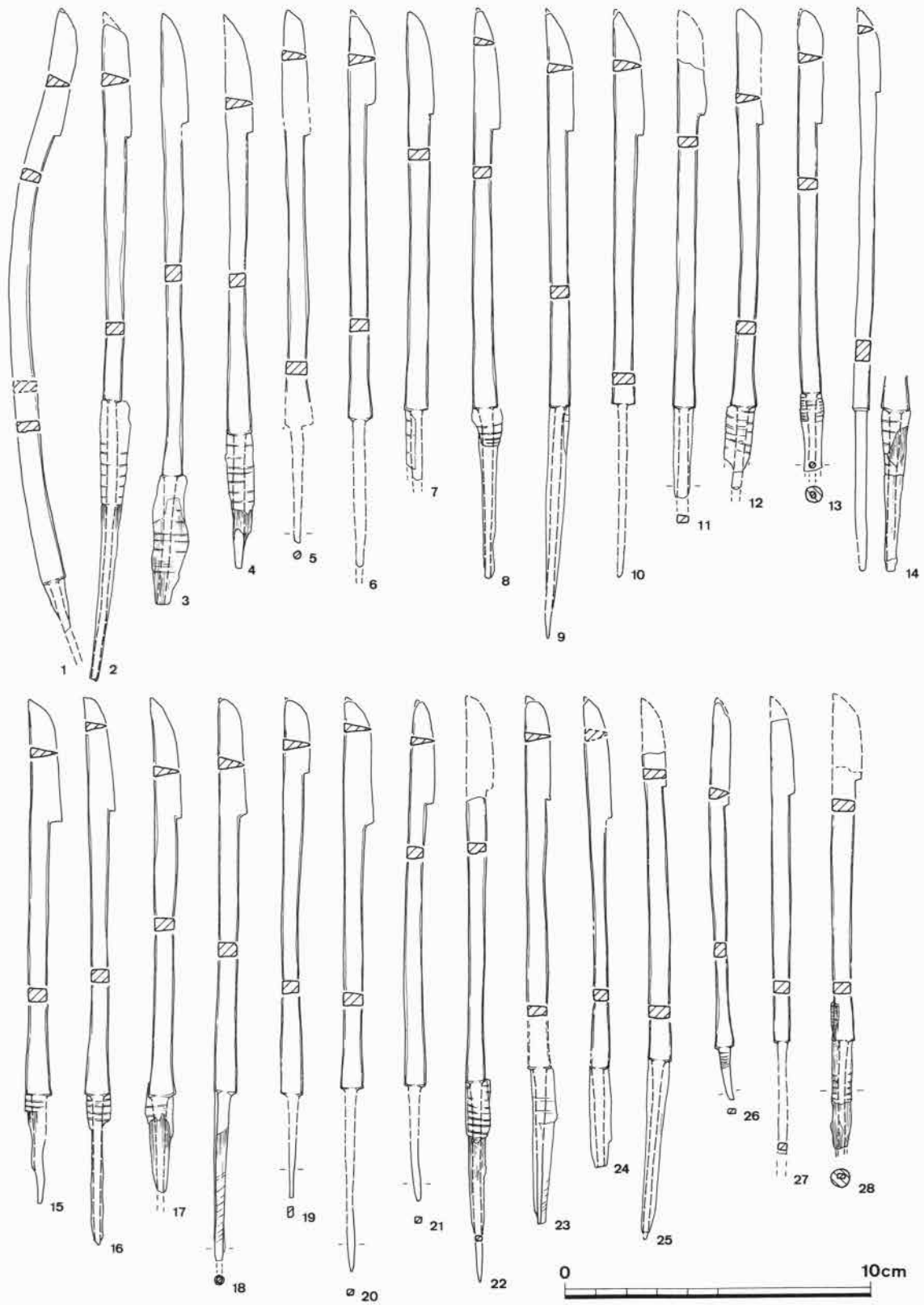
第4主体部出土刀(第18図3) 全長152.4cm・刃部幅4.7cm・棟幅0.85cm・茎長18.9cmを測る。上述の二振りよりも刀身が長くやや細身になる。平造りで、直角に近い刃関をもっており、茎胴部は、茎尻に向かってやや細くなり、隅切尻に近い。

鉄刀子(第21図4~8)

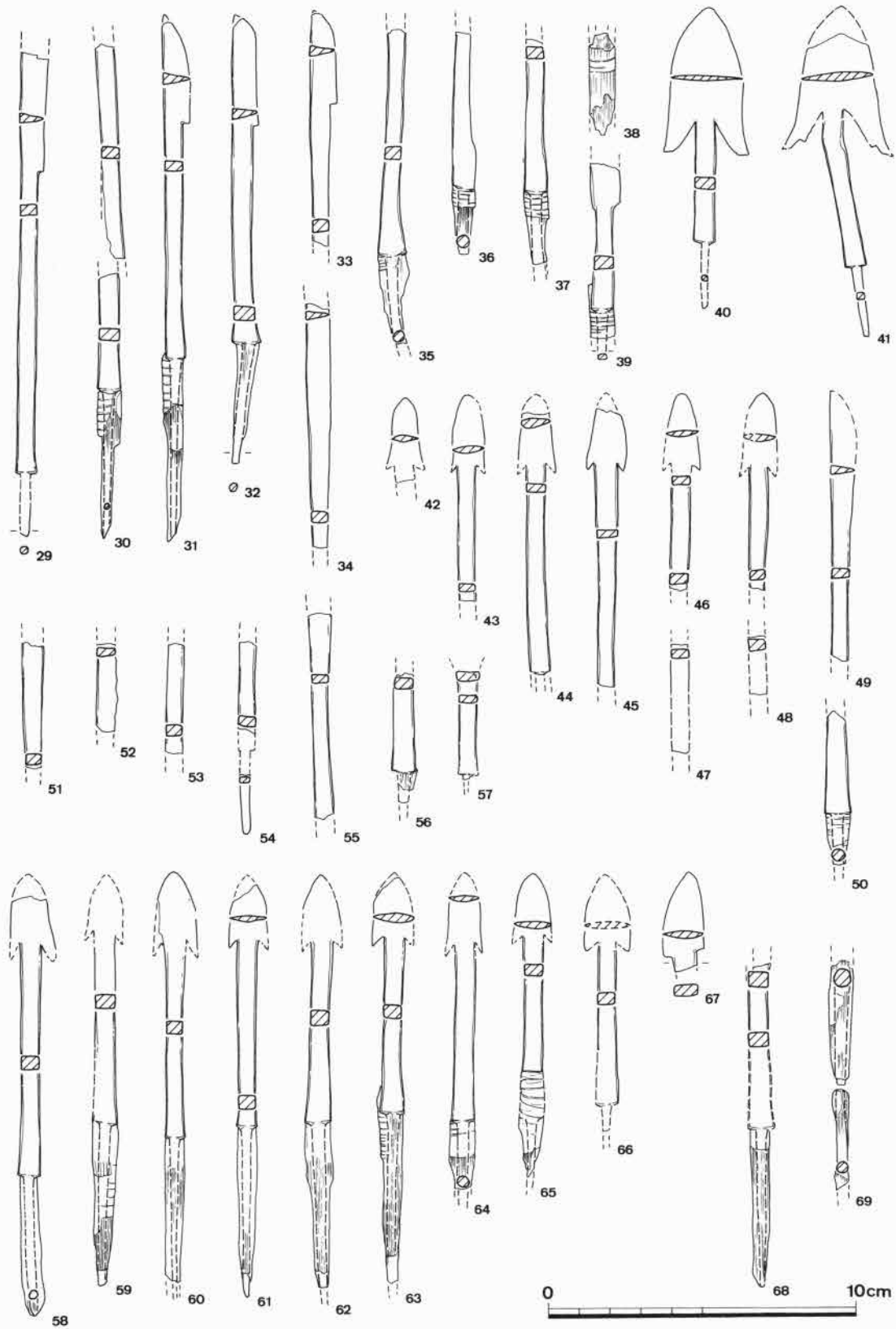
第1主体部(第21図4) 残存長11.85cmで、刃部は研ぎ込まれ、内反りする。棟関をもつ6世紀の形態で、茎は鹿角装である。



第18図 今林2号墳出土鉄刀実測図



第19図 今林2号墳出土鉄鏃実測図(1)



第20図 今林2号墳出土鉄鏃実測図(2)

付表1 鉄鏃計測表

番号	鏃種	全長	刃部～筥被	刃部	出土地点	記録番号	備考
1	片刃鏃	19.8	19.0	4.1	第1主体部	—	
2	片刃鏃	21.3	12.4	3.7	第1主体部	—	ほぼ完形
3	片刃鏃	19.2	15.3	4.1	第1主体部	—	
4	片刃鏃	18.1	13.7	3.9	第1主体部	—	
5	片刃鏃	17.3	13.6	4.1	第1主体部	—	
6	片刃鏃	17.0	13.4	2.9	第1主体部	—	
7	片刃鏃	15.3	13.1	3.4	第1主体部	—	
8	片刃鏃	18.5	13.1	4.1	第1主体部	—	
9	片刃鏃	20.3	13.0	3.8	第1主体部	—	完形
10	片刃鏃	18.4	13.0	4.0	第1主体部	—	完形
11	片刃鏃	14.2	13.0	1.9	第1主体部	—	
12	片刃鏃	15.6	13.0	3.8	第1主体部	—	
13	片刃鏃	15.1	13.0	3.7	第1主体部	—	
14	片刃鏃	18.2	13.0	2.6	第1主体部	—	完形
15	片刃鏃	16.3	12.9	4.0	第1主体部	—	
16	片刃鏃	17.7	12.9	3.7	第1主体部	—	
17	片刃鏃	16.0	12.9	4.0	第1主体部	—	
18	片刃鏃	18.2	12.7	3.8	第1主体部	—	
19	片刃鏃	16.1	12.7	2.4	第1主体部	—	
20	片刃鏃	18.5	12.6	3.9	第1主体部	—	ほぼ完形
21	片刃鏃	16.3	12.5	3.3	第1主体部	—	
22	片刃鏃	15.9	12.5	—	第1主体部	—	茎完形
23	片刃鏃	17.0	12.1	3.2	第1主体部	—	
24	片刃鏃	15.1	12.0	3.8	第1主体部	—	
25	片刃鏃	15.8	11.8	1.1	第1主体部	—	茎完形
26	片刃鏃	12.8	11.5	3.3	第1主体部	—	
27	片刃鏃	13.5	11.3	2.4	第1主体部	—	
28	片刃鏃	12.4	11.3	0.4	第1主体部	—	
29	片刃鏃	15.6	—	3.9	第1主体部	—	
30	片刃鏃	15.7	—	—	第1主体部	—	
31	片刃鏃	16.8	11.1	3.3	第1主体部	—	
32	片刃鏃	14.4	10.6	3.4	第1主体部	—	
33	片刃鏃	7.5	—	2.8	第1主体部	—	
34	片刃鏃	7.9	—	—	第1主体部	—	
35	—	10.2	—	—	第1主体部	—	
36	—	7.2	—	—	第1主体部	—	
37	—	7.3	—	—	第1主体部	—	
38	—	3.3	—	—	第1主体部	—	
39	—	5.6	—	—	第1主体部	—	
40	腸挟三角	9.8	—	4.8	第1主体部	—	完形
41	腸挟三角	9.6	—	4.2	第1主体部	—	二重腸挟
42	腸挟柳葉	2.7	—	2.3	第3主体部	3-2	
43	腸挟柳葉	6.6	—	2.4	第3主体部	3-4	
44	腸挟柳葉	8.5	—	2.1	第3主体部	3-1	
45	腸挟柳葉	9.0	—	2.0	第3主体部	3-3	
46	腸挟柳葉	6.4	—	2.5	第3主体部	3-2	
47	腸挟柳葉	3.5	—	2.6	第3主体部	3-2	

48	腸扶柳葉	8.1	—	—	第3主体部	3-5	
49	—	8.6	—	—	第3主体部	—	
50	—	4.9	—	—	第3主体部	—	
51	—	4.1	—	—	第3主体部	3-6	
52	—	2.8	—	—	第3主体部	3-10	
53	—	3.5	—	—	第3主体部	3-10	
54	—	2.7/1.9	—	—	第3主体部	3-11	
55	—	6.9	—	—	第3主体部	3-7	
56	—	4.1	—	—	第3主体部	3-8	
57	—	3.5	—	—	第3主体部	3-9	
58	腸扶柳葉	13.5	9.1	1.8	第4主体部	4-3	
59	腸扶柳葉	13.3	8.1	2.2	第4主体部	4-9	
60	腸扶柳葉	13.3	8.6	2.7	第4主体部	4-2	
61	腸扶柳葉	13.4	7.8	2.1	第4主体部	4-7	ほぼ完形
62	腸扶柳葉	13.4	8.1	2.3	第4主体部	4-6	
63	腸扶柳葉	13.4	7.6	2.1	第4主体部	4-10	
64	腸扶柳葉	9.6	7.4	2.1	第4主体部	4-1	
65	腸扶柳葉	9.7	7.9	2.2	第4主体部	4-5	
66	腸扶柳葉	7.8	5.8	2.0	第4主体部	4-4	
67	腸扶柳葉	3.3	—	2.6	第4主体部	4-4	
68	—	10.4	—	—	第4主体部	4-8	
69	—	7.4	—	—	第4主体部	4-11	

第2主体部棺上(第21図5) 残存長12.8cmで、刃部を欠損する。斜角の刃関をもつ。

第3主体部(第21図6・7) 6は刃部、7は関部から基部かけての破片であるが、両方とも非常に遺存度が悪い。同一個体の可能性もあるが、刃部幅がわずかに食い違う。

第4主体部(第21図8) 4同様、小刀の一部である。残存長12.9cmを測る。刃部を欠損する。棟関と刃関をもち、茎は目釘穴を一つ穿ち、栗尻でおわる。

鉄鎌(第21図9)

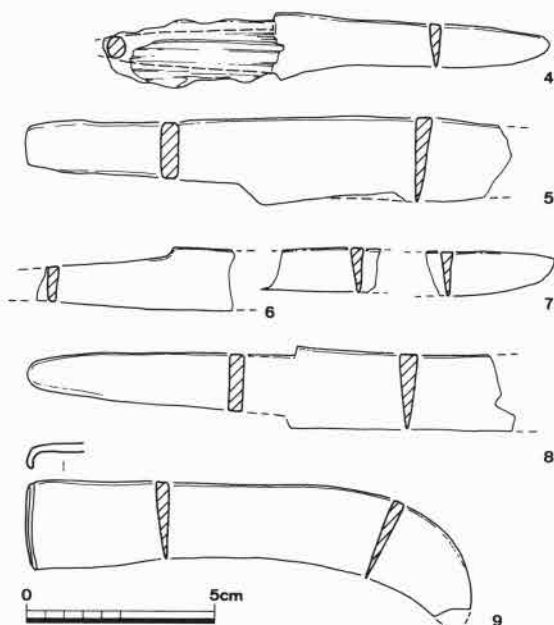
第1主体部で出土した。残存長11.7cm、刃部幅約2.0cm内外の曲刃鎌である。刃部を下にして基部を左手にみた場合、柄を取付けるための折り返しが観察者側にむく乙類である。

(野島 永)

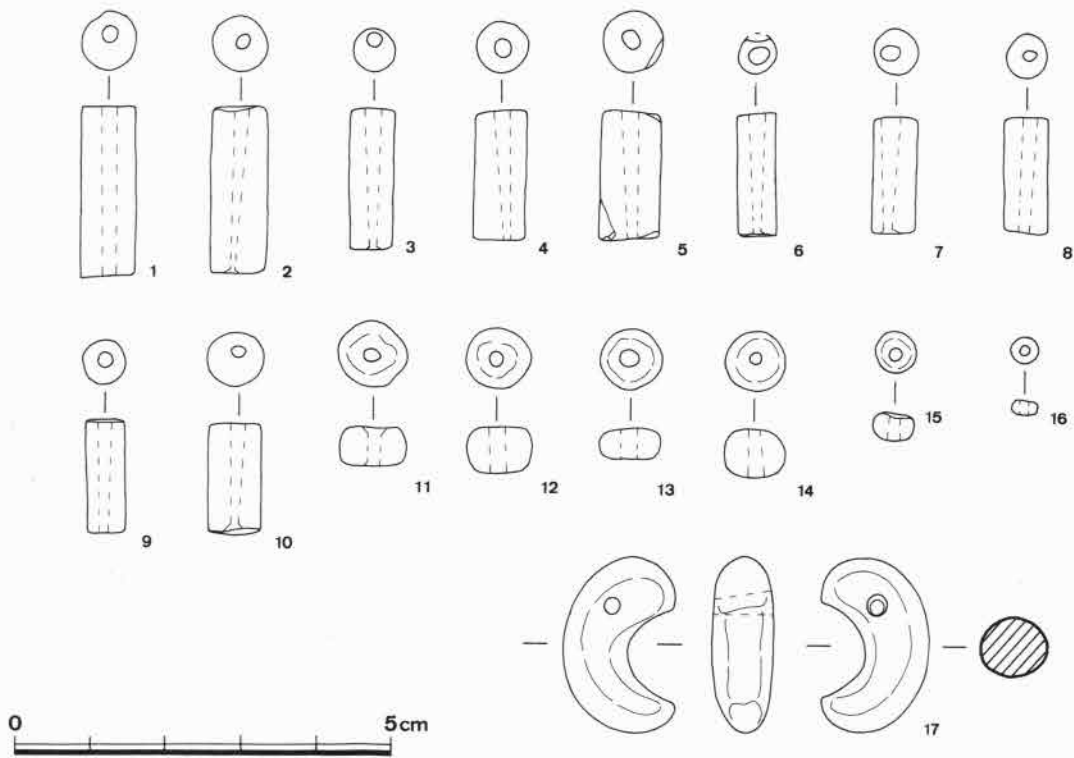
c. 玉類

玉類は、管玉10点、ガラス玉6点、勾玉1点が出土した。これらは、すべて第4主体部から出土したものである。

1~10は、碧玉製管玉である。



第21図 今林2号墳出土鉄器実測図



第22図 今林2号墳出土土玉類実測図

色調は濃緑色である。穿孔は、現状を観察した結果からみて、1が両面穿孔、他は片面穿孔と思われる。2・3・6・7・10は、孔が狭くなる側の端面に、直径0.2～0.28cm・深さ0.04～0.09cmほどの浅い窪みをもつ。孔径は、0.06～0.26cmを測る。長さ1.46～2.30cm・直径0.56～0.86cmにおさまる。

11～16は、ガラス玉である。法量と形態から3種に分けられる。11～14は、大形のガラス玉である。色調は、透明度の低い濃紺色である。14のみ風化のためか、表面がわずかに白色化している。孔径は、0.15～0.35cmを測る。法量は、長さ0.41～0.63cm・直径0.79～0.91cmにおさまる。形態は、扁平な台形を呈しており、小口に平坦面をなしている。15は、中形のガラス玉である。色調は、透明度の高い青緑色である。孔径0.14～0.17cm・長さ0.34cm・直径0.55cmを測る。形態は、扁平な台形を呈し、小口にわずかな平坦面をなしている。16は、小形のガラス玉である。色調は透明度の高い淡青色である。孔径0.12cm・長さ0.19cm・直径0.38cmを測る。形態は扁平な台形である。

17は、硬玉(翡翠)製勾玉である。色調は淡緑白色で、穿孔は、右側面からの片面穿孔である。孔径0.21～0.30cm・厚さ0.81cmを測る。形態は、尾部、頭部ともに端部がやや尖った形状を呈し、腹部と側面との境にはゆるやかな稜角をなし、全体的に丸みをおびる。

(高橋あかね)

(2) 今林遺跡

a. 弥生土器

S H01(第23図、第24図、第25図82~92) 周壁溝、床面、中央土坑及び埋土から弥生土器、石器が出土した。

30は、口縁部・肩部に櫛描き列点文及び直線文を施し、口縁端部に強いナデによる端面を作り出す。胎土は、在地のものとみられる。31は、「く」の字状の単口縁で、内外面ともハケ調整による。32は、直線的に立ち上がる口縁に粘土の接合痕を残し、体部はタタキ後ハケ調整される。33は、短く外反する口縁部に体部内外面ともハケ調整される在地色の強い甕であるが、輪台技法による小さな底部を特徴とする。34は、「く」の字に外反する小形の甕であるが、体部内外面ともヘラナデを施す。ヘラナデ調整は、通常ハケ状原体をヘラ状原体に替えており、この遺跡の土器群に散見される在地的な調整技法の一つである。

36~41は、口縁部の直口する壺である。37の外表面は細かいハケにより、36・37の内面はともにハケ後ナデによって調整されている。38は、直口壺の底部であり、丸底化しつつあるが、若干の窪みを残す。39は、体部中位に最大径を持つ壺で、内面をヘラナデする。40・41は、中位で大きく屈曲する体部を持つ壺で、内面下半を粗いハケ調整する。

42・43は、口縁端部に強いナデを施し、30にみる口縁端部の処理が形骸化している。こうした口縁端部の調整は、第V様式後半以降、顕著になる在地的な調整手法である。44は、「く」の字状の口縁部をなす甕口縁で、端部に面をもつ。45は、ゆるやかに外反する口縁をなす壺の口縁である。

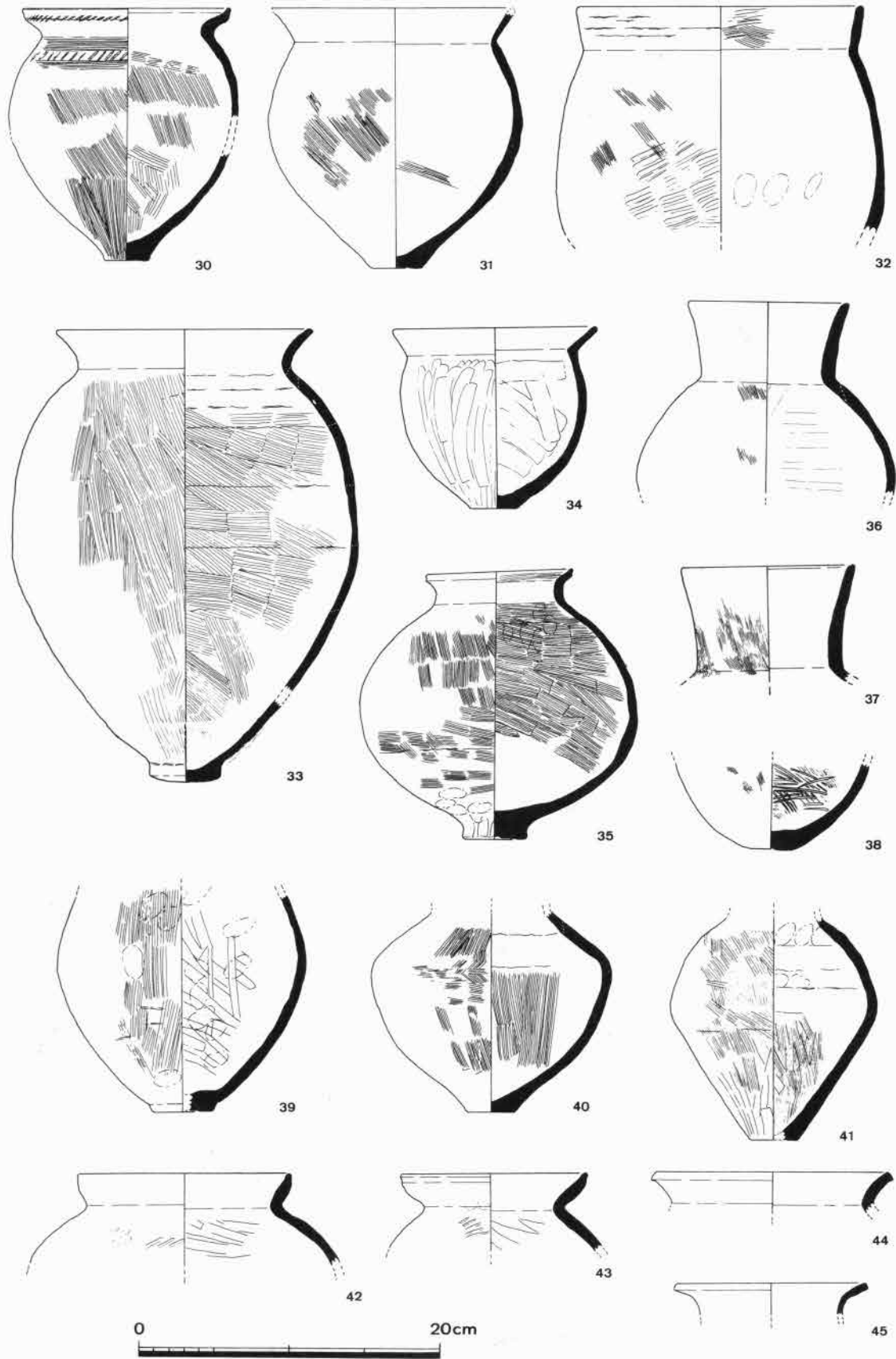
46は、近江系の鉢である。口縁端部は尖り気味で、体部上半に櫛描き直線文、列点文を施し、体部下半に螺旋状のタタキを施す。底部は、輪状の粘土帯を付け、上げ底にしており、体部内面は細かいハケ調整する。胎土・色調は、特に在地系のものとは変わらない。47・49は、小形の鉢である。48は、垂下する器台の口縁である。櫛描き波状文は細かく、垂下口縁の外表面及び受け部内面にも施されている。

51~56は、高杯の脚部である。筒状の脚に裾部が屈曲して開く52・54、スカート状に開く53がある。

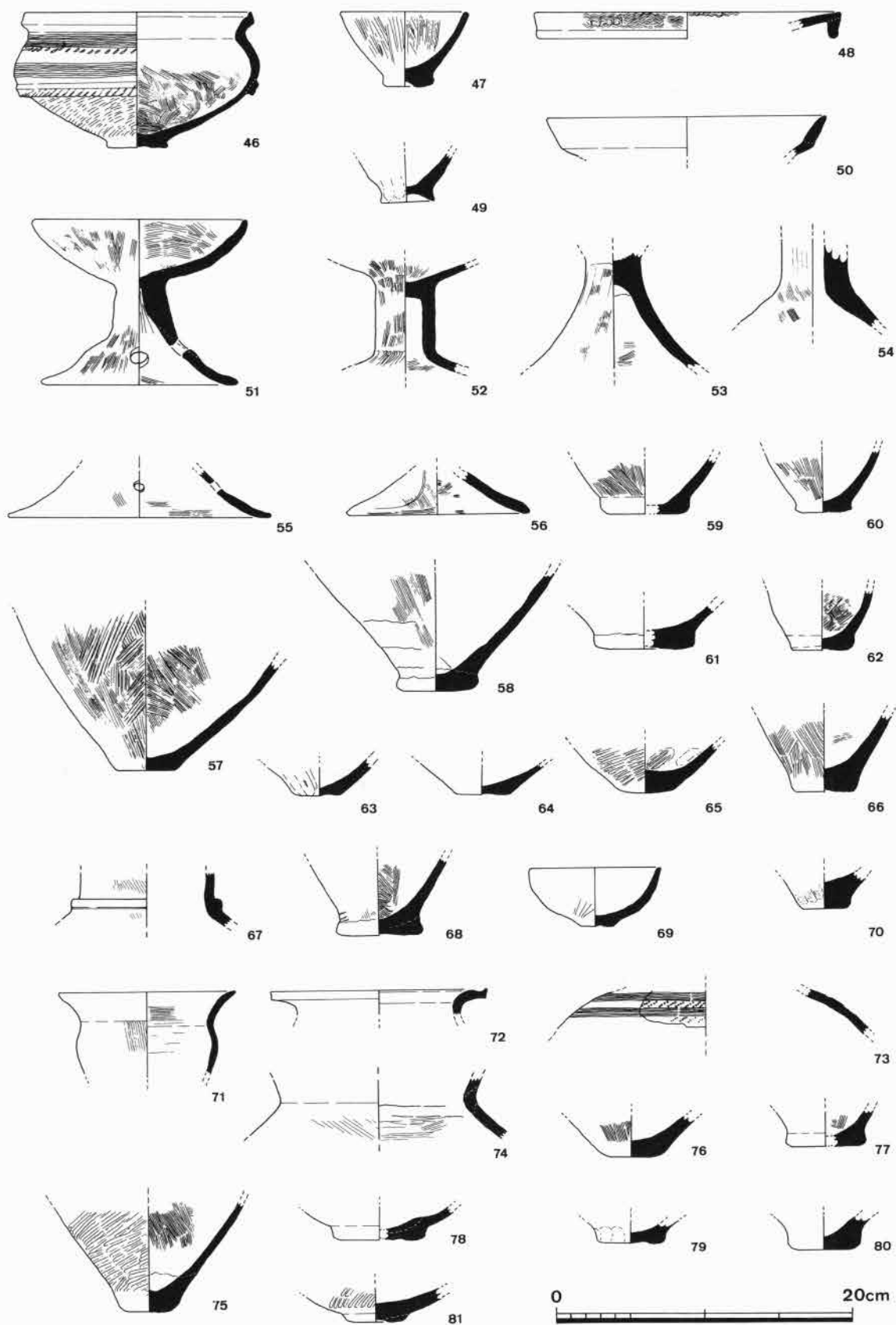
57~66は、底部である。57・59は、扁平な大きな平底をなし、63・64には小さな輪状の粘土帯を貼り付けて成形している。タタキを残す65は、底部が丸みを帯びつつある。67は、頸部に突帯を付し、直立気味の頸部を特徴とする。二重口縁壺の可能性もある。64は、やや丸みを帯びる体部に、小さな輪状の粘土痕を貼り付けた底部をなす小形の鉢である。

72は、端部内面に強いナデを施し、跳ね上げ口縁を特徴とする。73は、体部に櫛描き直線文・列点文を施す。底部には、輪状の粘土帯を貼り付ける79・81や、厚みのある平底の75・80などがある。

82~86は、高杯の口縁部とみられる。82・84・86はやや外反し、83・85は直線的に立ち上がる。84は、二次口縁の接合部に断面三角形の粘土帯を貼り付け、垂下するものである。87・88は、器



第23図 今林遺跡出土遺物実測図(1)



第24図 今林遺跡出土遺物実測図(2)

台の垂下口縁であり、擬凹線を施した後、円形浮文を付す。88は、胎土に角閃石を多量に含んでおり、生駒西麓産の搬入品であろう。

89～91は、高杯の脚部である。89は中実であり、90は柱状の脚に、内面に竹管状の圧痕を残す。91は、スカート状に大きく開く脚に櫛描き直線文を施す。92は、台付き鉢の脚部である。

S H02(第25図93～100) 93は、台付き甕の体部である。内外面ともにハケ調整を行う。94は、外反する深い杯部に、ゆるやかに開く脚部をなす高杯である。脚部はよく絞り込み、脚柱上端は中実化の傾向をみせる。95は、「く」の字状に短く外反する口縁をなし、端部を肥厚させる。96は、外面を粗いハケ、内面をヘラナデする在地色の強いものである。97～100の底部は、平底の97・98や、粘土帯の接合によってやや上げ底になる100がある。

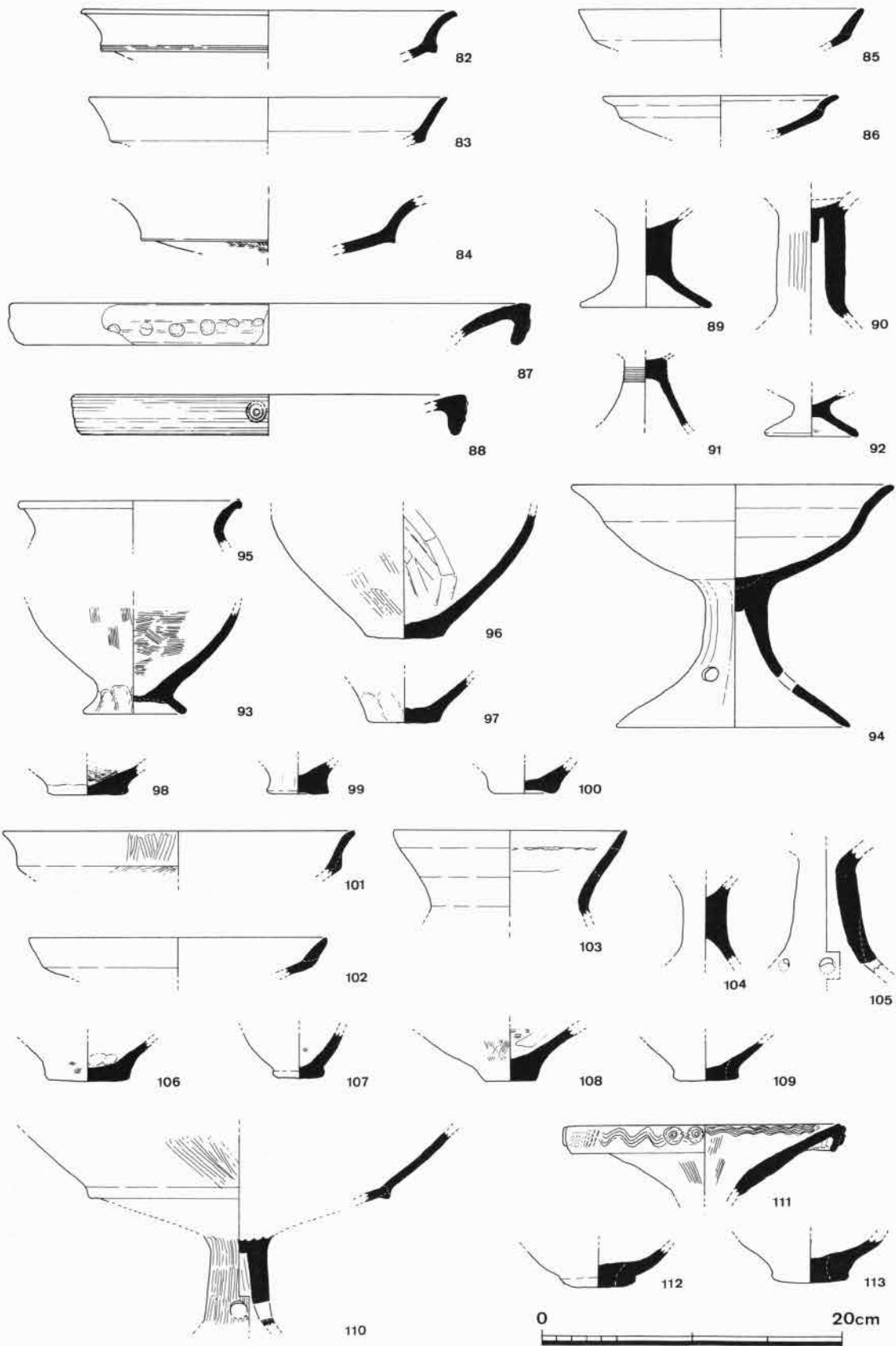
S H08(第25図101～109) 103は、粘土の輪積み痕を残す直口する壺の口縁である。101は外反する高杯の口縁、104は屈曲して開く脚部の中実の高杯と、105のようにゆるやかに大きく開く脚がある。底部には扁平な平底の106や、小さく突き出した108がある。

S H09(第25図110～113) 110は、杯部が深く大きく開く高杯である。脚部とは焼成、胎土などから、同一個体とみられる。口縁は皿部との接合部に断面三角形の垂下帯をめぐらせる。脚部はよく絞り込まれた後、ミガキを施し、透かし穴を穿つ。111は垂下する口縁に櫛描き波状文、列点文を施し、2個一単位の貼り付け円形浮文を有する高杯の杯部である。口縁部内面にも櫛描き波状文が施される。脚部は意図的に打ち欠かれ、欠損している。

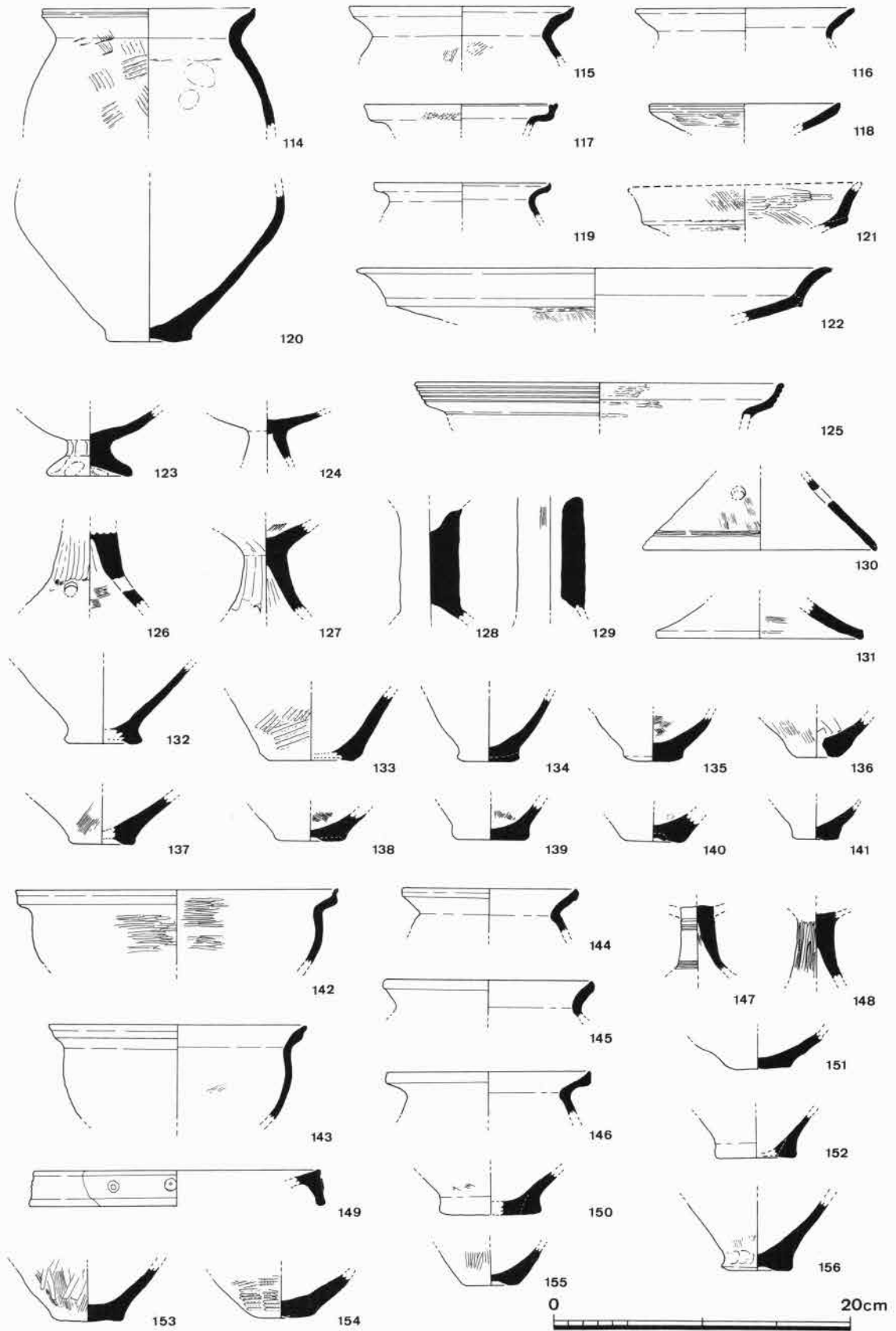
S H11(第26図114～141) 114・115・119は、口縁端部を強くヨコナデし、つまみ上げたもので、114は端面に凹線をなす。117は、受け口状口縁の甕で、口縁部に列点文を施す。118は、器台の口縁部とみられる。外面は細かいミガキ、内面にていねいなナデ、口縁端部には強いヨコナデを施す。121・122・124～131は高杯で、口縁部との接合部に刻み目を施す121、外反し接合部に断面三角形の粘土帯をめぐらせ垂下させる122がある。125は、細片ではあるが、擬凹線を施し、口縁部内面にミガキを施す丹後及び但馬系高杯の口縁部である。明橙褐色の色調をなす精製品であり、搬入品とみられる。高杯脚部には、ゆるやかに大きく広がる126・127、中実で裾部に屈曲点をもつ柱状128、同じく中空の筒状をなす129がある。130は、破片ではあるが、スカート状に大きく開く高杯の脚部である。裾部に櫛描き直線文がめぐり、器表面にハケ調整を施す粗製品である。端部はやや内湾気味である。132～141の底部は、輪状の粘土帯を貼り付け成形した137・138・140・141や、小さく張り出す134・135がある。136は、焼成前に底部を穿孔している。

S H19(第26図142～156) 142は、口縁端部をつまみ上げる鉢である。142は杯部が深く、器表面の内外面にミガキを施す。143は、口縁端部外面に強いナデがめぐり、端面をつくる。この手法は144・145・146の甕にも用いられる。147は、よく絞り込まれた脚柱部に2条の櫛描き直線文がめぐる。148は、脚柱上端が中実化しつつあり、体部外面をていねいにヘラミガキする。149は、垂下する器台の口縁に円形浮文を貼り付ける。底部としては、扁平な平底の150・153や、輪状の粘土帯を貼り付ける154、底部内面がやや窪み、外面を押圧する156などがある。

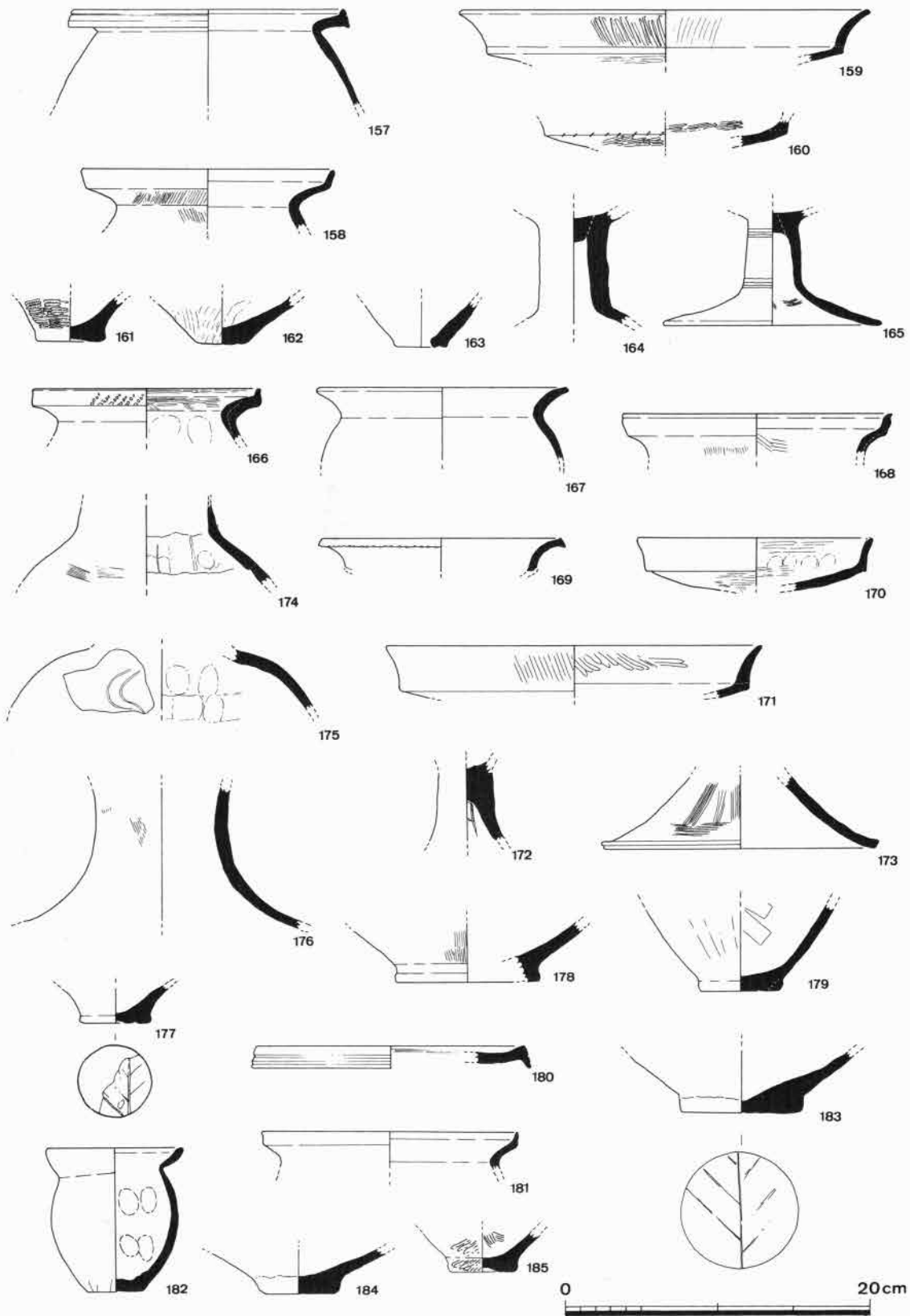
S D16上層(第27図157～165) 157は、口縁部が鋭く屈曲し、口縁端部を上下に拡張して、端



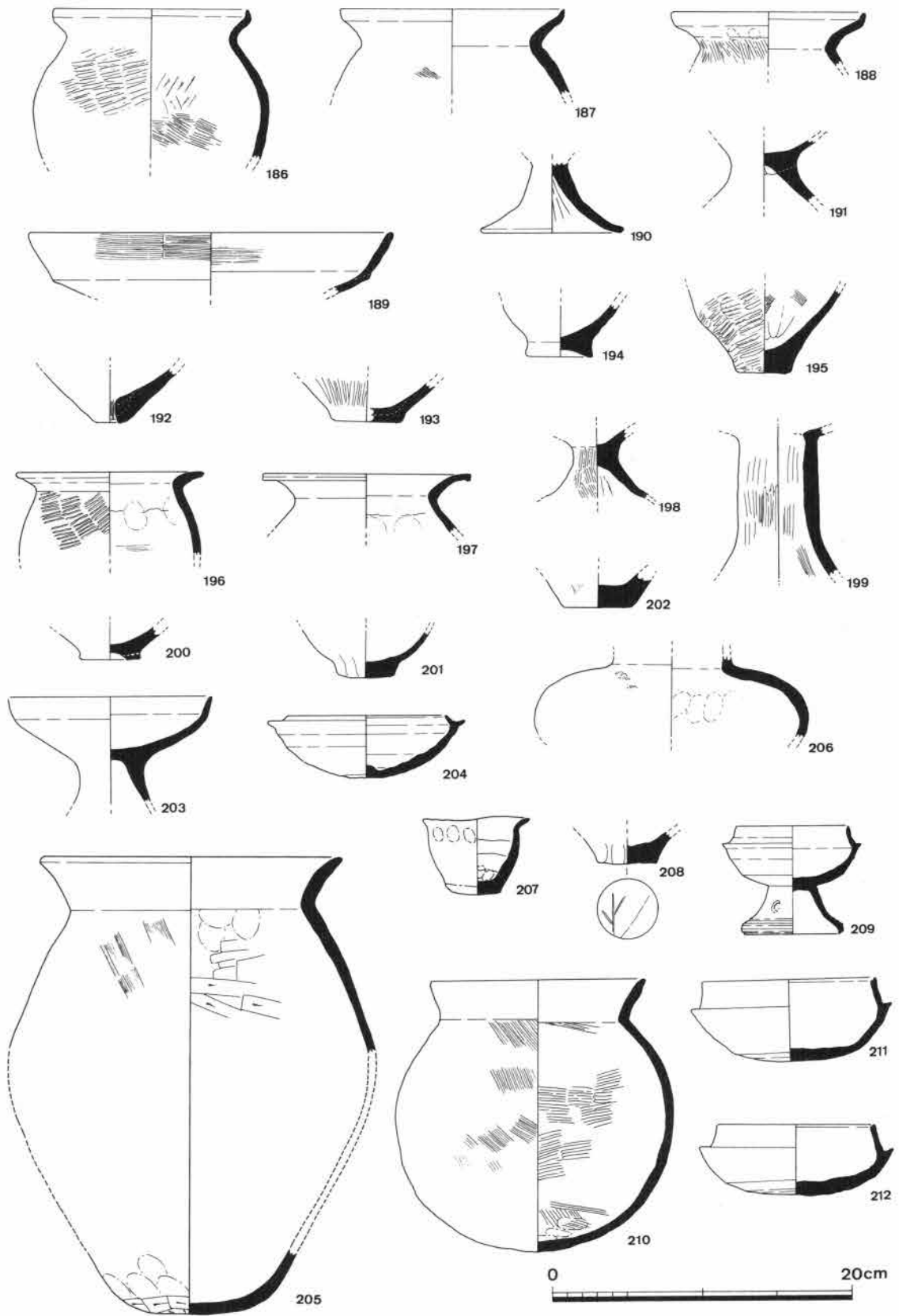
第25図 今林遺跡出土遺物実測図(3)



第26図 今林遺跡出土遺物実測図(4)



第27図 今林遺跡出土遺物実測図(5)



第28図 今林遺跡出土遺物実測図(6)

部内面を跳ね上げている。端部外面には擬凹線を施す。158は、受け口状口縁をなす甕の口縁である。159は、外反する口縁をもつ高杯の口縁である。160は、内外面ともていねいにヘラミガキし、口縁の接合部に刻み目を施す。

S D17(第27図161~165) 高杯には、中空の筒状の脚部に裾部で屈折する164や、よく絞り込まれた脚柱部に「ハ」の字状に大きく広がる裾部をなす165がある。165は、脚部に2条の櫛描き直線文をめぐらす。

S D16(第27図166~179) 166・168は、受け口状の口縁の甕である。166は、口縁端部をつまみ上げ、端部外面に櫛描き列点文を施している。167は、「く」の字状に短く外反する。169は、外反度の大きい高杯あるいは器台の口縁で、口縁部に端面をなし、刻み目を施す。171は、内外面にミガキを施す高杯の口縁である。172は、中実化の傾向の強い高杯であり、173は直線的に広がる脚部の端部に沈線を施す高杯である。176は、ヘラ状工具による葉脈を線刻する底部で、杓圧痕が認められる。179は、扁平な平底をなす甕あるいは壺の底部で、内面はヘラナデを施す。

S X20(第27図180~182) 180は、垂下する口縁をなす器台で、端部外面に擬凹線を施す。181は、端部をつまみ上げ、端部外面に面をなす甕の口縁である。182は、やや内湾する口縁をなす小形の甕である。器表面はヨコナデし、内面は指頭圧痕を顕著に残す。

S D04(第27図183~185) 底部は、平底でヘラ状工具により葉脈を線刻した183や、小さくやや突出する184、輪状の粘土帯を接合して成形する185がある。

S H33(第28図186~195) 186~188は、口縁端部をつまみ上げ、ヨコナデし、端部に鈍い面をなす甕である。186は、外面をやや粗いタタキ調整し、内面上半をヘラケズリする。188は、やや受け口状に近い形態をなす。189は、直線的に立ち上がる高杯受け部であり、190は、よく絞り込まれ、裾部で屈折して広がる高杯脚部である。192~195の底部としては、焼成前に穿孔する192、扁平な平底の193、中央部の窪む194、小さく厚みのある195がある。

S H34(第28図196~202) 甕には、口縁部の鋭く外方に屈曲する196・197がある。196は、外面をタタキ調整する。高杯としては、裾部の大きく開く198、柱状の脚柱部をなす199がある。底部には、輪状の粘土帯を貼り付ける200、小さく突出する201、扁平な平底の202がある。

S H35(第28図206~208) 肩部が大きく張り出し、内面に指頭圧痕を施す壺206、ミニチュアの手捏ね土器207や、底部にヘラ状工具で葉脈を線刻する208がある。

b. 土師器(第28図210)

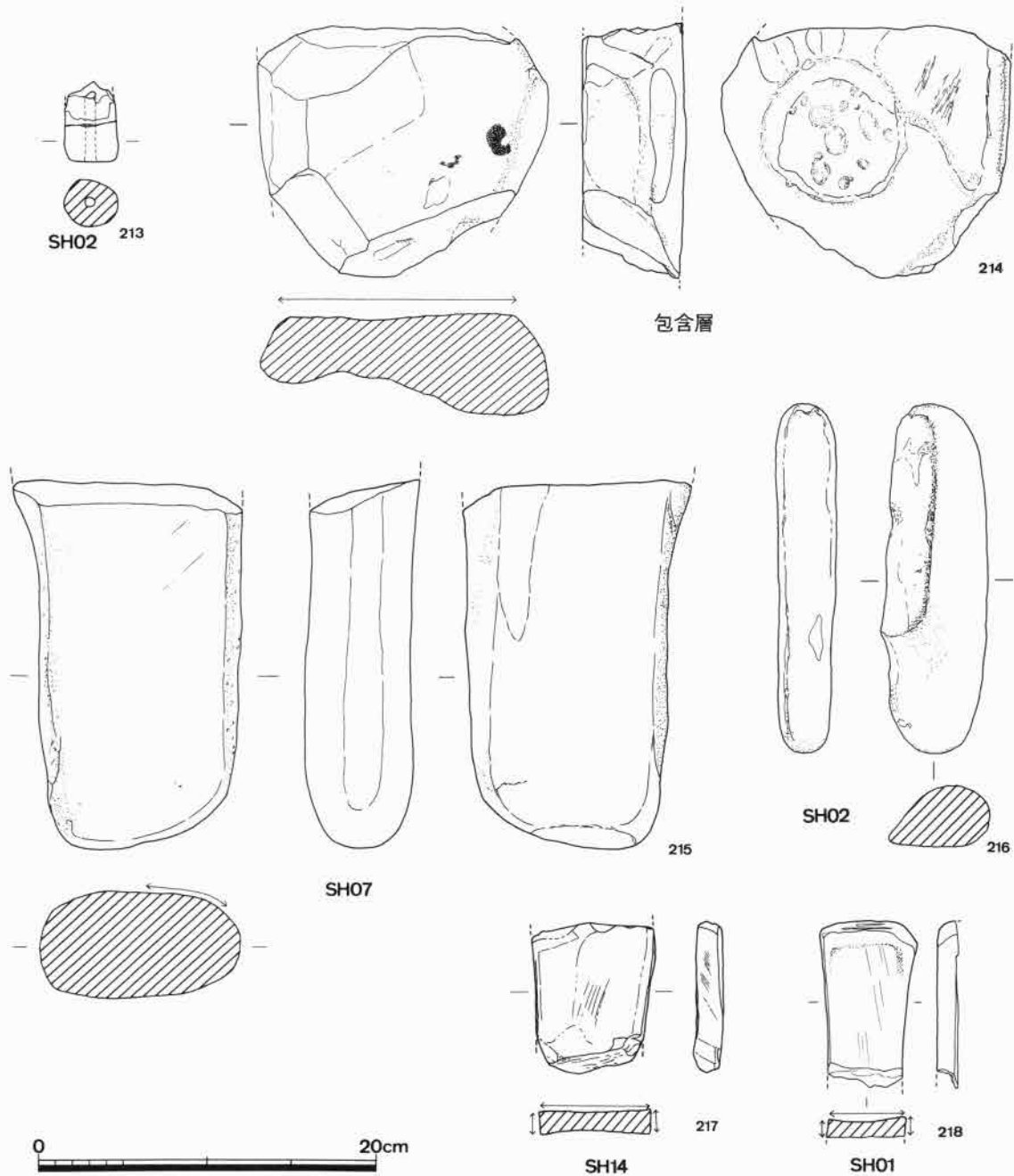
S H07 210は、「く」の字状に口縁部の短く外反する甕である。球形の体部をなし、体部内外面をハケ調整し、底部に指頭圧痕を施す。

c. 土製品(第29図213)

S H02 213は、径3.1cm・長さ推定約6cmの土錘である。中央に幅0.3cm・深さ0.2cmの沈線を施す。暗茶褐色を呈する。

D. 石器(第29図214~218)

214は、平面片側に金床石状の円形の窪みがあり、平坦面の一部に使用による線条痕がある。



第29図 今林遺跡出土石製品実測図

台石として使用されたものであろうか。重量は、1.84kgを量る。215は、出土状況からみて、床面に据え置いて使用したことが推定される台石である。平面の一部に使用による研磨痕がある。214～216は、いずれも砂岩製である。216は、一部剥離しており、明瞭な敲打痕はみられないが、石器として使用する目的で住居跡内に搬入されたとみられる。重量は、215が約3.34kg、216が約0.95kgを量る。217・218の砥石は、上面・両側面の三方向を使用し、特に上面は大きく窪んでいる。218の一方の小口には横方向の線條痕が残る。ともに粘板岩とみられる。217は155g、218は105gを量る。

付表2 出土弥生土器観察表

番号	出土遺構	器種	法量	胎度色調	形態及び文様	技法・調整	備考
30	S H01周壁溝内及び床直	甕	口径13.9 器高17.0 底径3.1	軟 淡茶褐色	端部をつまみ上げ、外面に面をもつ口縁。肩部に櫛描列点文、直線文、口縁に列点文。	体部内外面ハケ。口頸部内外面ナデ。	外面スス付着。内面底部付近黒斑あり。近江系との融合。
31		甕	首径13.6 残高17.1 底径3.6	やや軟 茶色	「く」字状に外反する口縁。	体部外面ハケ。内面部分的にハケが残る。	外面胴部炭化物付着。磨滅著しい。
32		甕	口径19.8 残高15.2	良好 淡褐色	直線的に立ち上がる口縁。	頸部内外面ナデ。体部外面に半ハケ。下半タタキ後ハケ。下半に指頭圧痕あり。	外面胴部炭化物付着。
33		甕	口径17.0 残高29.0	やや軟 明茶褐色	「く」字状に外反する口縁。	外面縦ハケ。内面横ハケ。粘土積み上げ痕あり。	外面スス付着。内面底部付近黒斑あり。
34		甕	口径13.5 器高13.0 底径3.2	軟 淡茶褐色	「く」字状に外反する口縁。	内外面ヘラナデ。	外面スス付着。
35		壺	口径9.7 器高18.1 底径4.4	良好 淡茶褐色	短く外反し、端部をつまみ上げる口縁。	体部内外面ハケ。口縁部外面ナデ。内面ハケ後ナデ。指頭圧痕残る。底部付近絞り目。	
36		直口壺	口径10.6 残高12.8	良好 淡赤褐色	直口する口縁。	体部外面ハケ。内面ハケ後ナデ。頸部内外面ナデ。	
37		直口壺	口径11.4 残高7.8	良好 淡赤褐色	直口する口縁。	外面下半ハケ。内面、外面上半ナデ。	38と一体か。
38		直口壺底部	残高6.0 底径2.5	良好 赤茶色		外面一部ハケ残る。内面ハケ。	
39		壺	残高14.5 底径3.9	良好 淡茶褐色	上から1/3ほどのところに最大腹径を有する。	外面ハケ。内面ヘラナデ。指頭圧痕残る。	
40		壺	残高13.5 底径3.6	良 淡褐色	最大腹で大きく屈曲する体部。	内外面ハケ。外面部分的にナデ。	
41		壺	残高14.9 底径3.0	やや軟 淡茶褐色	頸部から内湾して最大腹まで下りた後、屈曲して直線的に底部にいたる体部。	内外面ハケ。外面、底部付近ヘラケズリ。部分的にナデ。内面上半指頭圧痕あり。	
42		甕	口径13.9 残高6.2	良好 淡赤茶色	やや内湾ぎみに立ち上がる口縁。	体部外面タタキ後ナデ。内面ヘラナデか。口縁部内外面ナデ。	
43		甕	口径12.8 残高5.2	軟 淡茶褐色	やや内湾ぎみに立ち上がり、外面を強くナデる口縁部。	体部外面タタキ後ナデ。内面ヘラナデか口縁部内外面ナデ。	
44		甕口縁	口径15.4 残高2.1	やや軟 淡茶褐色	「く」字状に外反する口縁。端部にわずかに面をもつ。	内外面ナデ。	
45		壺口縁	口径12.6 残高2.2	軟 淡茶褐色	大きく開く口縁部。端部にわずかに面をもつ。	器壁荒れ調整不明。	外面スス付着。
46		鉢	口径15.2 器高9.1	良好 灰褐色	体部上半に櫛描き直線文+波状文。腹部下に粘土紐付加。	外面、口縁端部ケズリ、体部下半タタキ後ナデ。内面体部下半ハケ。	近江系。

47	S H01周 壁溝内及 び床直	鉢	口径8.5 器高5.0 底径3.5	良好 淡褐色	肩部に櫛描き直線 文、列点文。	内面ヘラナデ、外面 ハケ。	外面底部付近ス ス付着。
48		器台口縁	口径20.6 残高1.8	良好 褐色	垂下する口縁。口縁 内外面に波状文。	器壁荒れ調整不明。	
49		底部	残高3.0 底径3.4	やや軟 黄褐色		外面底部に指頭圧痕 残る。	
50		高杯	口径18.8 残高2.6	良好 淡褐色	屈曲して斜め上方に のびる口縁。	内外面ナデ。	
51		高杯	口径14.3 器高11.2 底径13.4	良好 明褐色	屈曲して大きく開 き、端部が横にのび る脚部。円形透かし あり。	外面縦ハケ、内面横 ハケ残る。	粗製品。
52		高杯脚	残高7.2	良好 淡褐色	柱状脚。大きく屈曲 して開く脚部。	器壁荒れ調整不明。 内外面にハケ残る。	
53		高杯脚	残高7.6	やや軟 淡赤褐色	大きく開く脚部。	外面ハケ後ナデ。内 面ハケ残る。	
54		高杯脚	残高6.0	良好 淡褐色	柱状脚。下半部は大 きく屈曲して開く。	外面ハケ残る。内面 ナデ。脚柱部に板オ サエ。	
55		高杯脚	残高3.2 底径17.4	良好 黄褐色	大きく開き、端部が 横にのびる脚部。円 形透かしあり。	外面ハケ残る。内面 下半ハケ、上半ハケ 後ナデ。	
56		高杯脚	残高2.9 底径12	良好 灰褐色	大きく開く脚部。	内外面ハケ後ナデ。 外面に工具痕あり。	黒斑あり。線刻 あり。
57		底部	残高10.7 底径3.9	良好 淡褐色	扁平な底部。	内外面ハケ。内面底 部未調整。	内外面スス付 着。
58		底部	残高8.0 底径5.0	良好 淡褐色	やや突出する底部。	外面ハケ。内面ナ デ。	
59		底部	残高3.8 底径5.0	良好 赤茶色	扁平な底部。	外面底部ナデ、体部 ハケ。内面ヘラナ デ。	
60		底部	残高4.3 底径4.0	良好 淡褐色		外面ハケ。内面ヘラ ナデ。	
61		底部	残高2.9 底径6.9	良好 淡褐色	扁平な底部。	底部外面未調整。内 面に工具痕。	
62		底部	残高4.0 底径4.0	良好 淡褐色	やや窪み底。	底部付近外面ナデ。 内面ハケ。	
63		底部	残高1.9 底径2.8	良好 淡褐色		外面板オサエ、ヘラ ケズリ。内面ナデ。	
64		底部	残高2.0 底径3.4	良好 淡茶色	やや窪み底。	器壁荒れ調整不明。	
65		底部	残高3.4 底径3.7	軟 淡褐色		外面タタキ後ナデ。 内面ハケ後ナデ。	
66		底部	残高5.2 底径3.6	良好 灰褐色	窪み底。	外面体部ハケ、底部 未調整。内面ハケ後 ナデ。	
67	S H01中 央土坑	壺頸部 (二重口 縁壺か)	頸径9.1 残高3.6	良 淡黄茶褐 色	肩部に粘土紐貼り付 け。	外面ハケ後ナデ。内 面ナデ。	
68		底部	残高5.1 底径5.0	良好 淡褐色	扁平で厚みのある底 部。	内外面ハケ後ナデ。	
69		鉢	口径8.8 器高4.0 底径2.0	良好 淡褐色	小さく突出する窪み 底。	内外面ハケ後ナデ。	
70		底部	残高2.4 底径3.0	良好 淡茶色	扁平な底部。	外面ハケ。底部押 圧。ヘラケズリ。	

71	S H01埋 土上層	甕	口径10.0 残高5.5	やや軟 淡褐色	外反して体部より大 きく開く口縁。	内外面ハケ。	
72		甕口縁	口径14.7 残高1.7	軟 淡茶色	外反して端部をつま み上げる口縁。	器壁荒れ調整不明。	
73		肩部	残高2.2	やや軟 淡褐色	肩部に櫛描き直線文 +列点文。	内面ナデか。	近江的要素。
74		頸部	頸径13.2 残高4.7	良 淡黄褐色		内外面ハケ後ナデ。 内面に接合痕。	
75		底部	残高7.3 底径2.7	良好 褐色	小さく厚みのある底 部。	外面タタキ。内面ハ ケ後ナデ。底部付近 に接合痕。	
76		底部	残高2.7 底径3.0	良好 赤茶色		器壁荒れ調整不明。 外面ハケ残る。	
77		底部	残高2.4 底径5.4	良好 淡褐色	扁平な底部。	内面ハケ残る。	
78		底部	残高2.3 底径6.2	良好 褐色	扁平な底部。	器壁荒れ調整不明。	
79		底部	残高1.5 底径4.0	良好 淡褐色	輪状粘土痕付着。	器壁荒れ調整不明。 底部押圧(指頭圧 痕)。	
80		底部	残高2.2 底径4.9	良好 褐色	扁平な底部。	器壁荒れ調整不明。	
81		底部	残高2.1 底径4.0	良好 褐色	輪状輪積痕。	器壁荒れ調整不明。 外面にタタキ残る。	
82		高杯	口径24.6 残高3.3	良 淡黄褐色	屈曲して外反し、端 部にわずかに面をも つ口縁。凸帯に凹線 文1条。	屈曲部に粘土紐貼り 付け。	
83		高杯	口径23.8 残高3.1	軟 淡茶褐色	屈曲してゆるやかに 外反する口縁。	器壁荒れ調整不明。	
84		高杯	口縁受け 部径17.0 残高3.8	良 濃黒褐色	屈曲して大きく外反 する口縁。	外面ハケ残る。屈曲 部に粘土紐貼り付 け。	
85		高杯	口径18.8 残高2.6	良好 淡褐色	屈曲して斜め上方に のびる口縁。	器壁荒れ調整不明。	
86		高杯	口径15.4 残高2.7	軟 淡茶褐色	屈曲して大きく外反 する口縁。	器壁荒れ調整不明。	
87		器台口縁	口径35.0 残高2.8	やや軟 明赤茶色	垂下する口縁、外面 に貼り付け円形浮 文。	器壁荒れ調整不明。	
88		器台口縁	口径26.0 残高2.7	良 黄茶褐色	垂下する口縁。貼り 付け円形浮文。	生駒西麓産か。角閃 石か。	
89		高杯脚	残高6.2 底径8.5	やや軟 赤茶色	中実の脚。	器壁荒れ調整不明。	
90		高杯脚	脚径4.6 残高8.0	良好 淡赤褐色	柱状の脚。	器壁荒れ調整不明。 外面にハケ残る。	脚部内面に竹管 状圧痕。
91	高杯脚	脚径2.9 残高4.6	やや軟 淡赤黄褐 色	スカート状に開く 脚。	器壁荒れ調整不明。	東海的要素。	
92	高杯か鉢 の脚	残高2.7 底径6.0	良好 淡赤褐色		器壁荒れ調整不明。 内面にハケ残る。		
94	S H02床 直	高杯	口径21.4 器高16.2 底径15.3	軟 淡茶色	斜め上方に外反する 口縁部。大きく開く 脚部。脚部に円形の 透かしあり。	脚部外面面とり。内 面ナデ。杯部内面に 円板充填。	
93	S H02埋 土	台付甕か	残高7.0 底径6.6	やや軟 淡茶色	高台部端面を丸くお さめる。	体部内外面ハケ。高 台部外面指オサエ、 内面ナデ。	

95		甕	口径15.6 残高2.4	軟 淡茶褐色	「く」字状に短く外 反する口縁。	内面ナデ。	
96		底部	残高8.2 底径5.2	良 淡褐色		外面ヘラ磨き。内面 ヘラナデ。	
97		底部	残高3.1 底径4.8	軟 淡茶褐色	扁平な底部。	外面指オサエ。内面 ナデ。内底部工具痕 あり。	
98		底部	残高2.1 底径5.3	軟 淡褐色	扁平な底部。	外面ナデ。内面ハ ケ。外面に接合痕あ り。	
99		底部	残高1.8 底径4.1	やや軟 明茶色	厚みのある平底。	調整不明。	
100		底部	残高2.0 底径4.7	軟 淡明褐色	やや窪む底部。	調整不明。	
103	S H08床 直	壺	口径15.4 残高5.5	良好 淡褐色	斜め上方に開く口 縁。	内外面ナデ。内面接 合痕あり。	
105		器台脚部	脚径3.8 ~4.4 残高8.3	淡褐色	柱状脚。円形の透か しあり。	内面ナデ。外面調整 不明。内外面接合痕 あり。	
101	S H08埋 土	高杯	口径23.5 残高2.9	良好 淡褐色	屈曲してゆるやかに 外反する口縁部。	外面ヘラ磨き。内面 ナデ。	
102		高杯?	口径19.7 残高2.6	良好 淡褐色	屈曲して斜め上方に のびる口縁部。	内外面ナデ。	
104		高杯脚部	脚径2.8 ~4.0 残高5.1	良好 褐色	中実の脚。脚部は外 方へ開く。	磨減著しく、調整不 明。	
106		底部	残高2.7 底径6.0	良好 褐色	扁平な底部。	内底部指圧痕あり。 外面調整不明。	外面スス附着。
107		底部	残高3.0 底径3.5	良好 褐色	小さく突出する底 部。	外面調整不明。内面 ハケか。	外面スス附着。
108		底部	残高3.6 底径3.2	良好 暗褐色	厚みがあり突出する 底部。	内外面ハケ。	外面スス附着。
109		底部	残高2.6 底径4.4	良好 褐色	扁平な底部。	調整不明。	
111	S H09中 央土坑	器台?	口径18.3 残高4.9	やや軟 黄褐色	垂下する口縁、口縁 外面に2個1対の円 形浮文+波状文+列 点文。口縁内面に波 状文。	内外面ハケ。	粗製品。
113		底部	残高2.9 底径4.4	良好 淡灰褐色	厚みのある平底。	調整不明。	外面スス附着。
110	S H09埋 土	高杯	口径28.0 残高4.5	やや軟 明茶色	脚部に円形透かし2 孔あり。口縁接合部 に粘土帯。	外面ヘラ磨き。内面 調整不明。	
112		底部	残高2.8 底径5.0	良好 褐色		内面ナデ。外面調整 不明。	
114	S H11床 直	甕	口径14.4 残高8.0	軟 淡茶褐色	口縁端部をつまみ上 げ、面をなす。凹線 がめぐる。	外面タタキ。内面ナ デ、接合痕指圧痕あ り。	外面スス附着。
115		甕	口径15.2 残高3.5	軟 淡茶褐色	口縁端部をつまみ上 げ、面をなす。	内外面ハケ。	
120		甕か	残高10.3 底径6.0	良好 橙褐色	やや窪む底部。張り のある体部。	調整不明。	
122		高杯	口径31.2 残高3.6	良好 淡茶褐色	外反する口縁。杯部 屈曲部に粘土帯。	外面口縁部に強いナ デ、体部ハケ。内面 ナデ。	
129		高杯脚部	脚径4.0 残高7.7	良好 淡橙褐色	柱状脚。	外面部分的にハケ残 る。	

116	S H11埋土	甕	口径11.8 残高2.3	軟 茶色	外反する口縁。	器壁荒れ調整不明。		
117		甕	口径12.8 残高1.8	軟 淡褐色	受け口状口縁。	内外面ナデ。		
118		器台?	口径12.8 残高1.9	良好 淡茶褐色	口縁端部外面に強いナデ。	外面ミガキ。内面ナデ。		
119		甕	口径11.8 残高2.3	軟 茶色	外反し、端部をはね上げる口縁。	内外面ハケか。		
121		高杯	推定口径 約16.0 残高2.7	やや軟 淡茶色	外反する口縁。	内外面ヘラ磨き。	精製品。	
123		高杯か鉢 の底部	残高4.3 底径5.6	軟 淡茶褐色	低脚。	杯部内外面ナデ。脚部外面絞り痕、内外面指頭圧痕あり。		
124		高杯	脚径2.55 残高3.0	軟 淡茶色	外方へ開く脚。	内外面調整不明。円板充填。		
125		高杯	口径24.8 残高2.3	軟 明茶色	口縁部に擬凹線。	内面ヘラ磨き。外面器壁荒れ調整不明。	丹後・但馬系高杯。	
126		高杯脚部	脚径4.3 残高5.4	良好 淡茶褐色	スカート状に開く脚。	外面ハケ後ミガキ。内面ハケ後ナデ。脚柱部内面に絞り目。		
127		高杯	脚径2.9 残高5.8	良好 淡茶褐色	透かしあり。外方へ開く脚。	杯部内面ミガキ。脚柱部外面とり、内面絞り目。		
128		高杯脚部	脚径約4 残高7.7	良好 淡橙褐色	中実の柱状脚部。	器壁荒れ調整不明。		
130		高杯脚部	残高4.8 底径15.6	軟 淡茶褐色	透かしあり。やや内湾気味の脚。下部に直線文。	外面上半斜め方向ハケ、下半横ハケ。内面器壁荒れ調整不明。		
131		S H11埋土	高杯?脚部	残高2.5 底径13.8	軟 淡茶色	スカート状に開く脚。	外面ナデ。内面ハケ後ナデ。	
132			底部	残高5.2 底径5.3	良好 淡黄褐色	やや窪む底部。	内外面ハケか。	外面スス付着。
133	底部		残高4.5 底径7.0	良好 灰褐色	やや窪む底部。	外面タタキ。内面ハケか。		
134	底部		残高4.4 底径4.2	良好 橙褐色	小さく突出する底部。	外面ナデ。内面ハケか。		
135	底部		残高3.0	良好 褐色	小さく突出する底部。	内面ハケ。		
136	甌底部		残高2.6 底径2.9	良好 橙褐色	穿孔あり。	外面ハケ。内面ハケか。		
137	底部		残高3.4 底径4.5	良好 淡褐色	粘土帯をめぐらせる底部。	外面ハケ。内面調整不明。		
138	底部		残高約2 底径約5	良好 暗褐色	粘土帯をめぐらせる底部。	内面ハケ。外面ナデか。		
139	底部		残高2.5 底径5.2	良好 暗褐色	扁平な平底。	内面ハケ。外面調整不明。		
140	底部		残高1.9 底径約4	良好 橙褐色	やや窪む底部。	内面ハケか。外面調整不明。	黒斑あり。	
141	底部		残高2.3 底径3.2	良好 淡黄褐色	小さく突出する底部。	内外面ハケか。	黒斑あり。	
142	S H19埋土	鉢	口径21.8 残高5.0	良好 暗橙褐色	つまみ上げる口縁部。	外面口縁部ナデ。体部内外面ミガキ。		
143		鉢	口径17.2 残高6.4	良好 淡橙褐色	端面を持つ口縁部。	内面部分的にハケ残る。外面調整不明。		

144	S H19埋土	甕	口径11.7 残高2.7	良好 淡橙褐色	端部を強くナデ、面をなす口縁。	内面ハケ。	
145		甕	口径13.8 残高2.4	良好 黄褐色	端部を強くナデ、面をなす口縁。	内面ハケか。	
146		甕	口径13.6 残高3.0	良好 橙褐色	つまみ上げ、面をなす口縁。	調整不明。	
147		高杯脚部	口径2.2 ~2.8 残高4.3	良好 暗橙褐色	脚部に2条の直線文。	内面に絞り目。	東海的要素。
148		高杯脚部	脚径4.4 残高4.3	良好 淡褐色	中実化傾向の脚。	脚柱部外面ミガキ。	
149		器台	口径19.0 残高2.3	やや軟 淡褐色	貼り付け円形浮文。垂下口縁。		
150		底部	残高2.8 底径7.0	良好 淡褐色	扁平な平底。	外面部分的にハケ残る。内面ハケか。	
151		底部	残高2.0 底径4.5	良好 黄褐色	やや扁平な平底。	器壁荒れ調整不明。	
152		底部	残高2.9 底径5.2	良好 淡褐色	扁平な平底。	外面ハケか。	
153		底部	残高3.7 底径約5	良好 明淡褐色	扁平な平底。	外面ハケ後ヘラナデ。内面ナデ。	
154		底部	残高3.0 底径4.8	良好 黒灰色	やや窪む底部。	外面タタキ。	
155		底部	残高3.0 底径4.6	良好 暗褐色	窪む底部。	内面ハケ後ナデ。外面ハケ。	
156		底部	残高4.8 底径4.8	良好 白褐色	窪む底部。	外面板オサエ、部分的にハケ残る。内面ハケ後ナデ。	
157		S D16上層	甕	口径約18 残高6.3	良好 淡褐色	口縁部に擬凹線。	内外面ハケか。
158	甕		口径16.6 残高4.0	良好 淡褐色	受け口状口縁。	内外面ハケ。	
159	高杯		口径26.8 残高3.45	良好 暗褐色	外反する口縁。	外面ヘラ磨き。内面ヘラ磨きか。	
160	高杯		口縁受け部径16.0 残高1.6	良好 暗橙褐色	受け部外面に列点文。	内外面ヘラ磨き。	
161	S D17埋土	底部	残高2.9 底径4.8	良好 黒色	やや窪む底部。	底外面不定方向のヘラナデ。外面体部タタキ。	
162		底部	残高3.0 底径約4	良好 淡橙褐色	小さく扁平な平底。	外面タタキ。内面ナデ。	黒斑あり。
163		甕底部	残高3.1 底径3.4	良好 暗橙褐色	穿孔あり。	内面ハケか。	
164		高杯脚部	脚径4.4 残高7.5	良好 橙褐色	柱状部。	器壁荒れ調整不明。	竹管芯。
165		高杯脚部	残高7.4 底径14.3	良好 明黄褐色	裾部で大きく開く脚、2条の櫛描き直線文。	外面ナデ。内面上半ナデ、下半ハケ後ナデ。	東海系か。
166	S D16埋土	壺	口径14.8 残高3.3	やや軟	受け口状口縁、櫛描き刺突文。	外面横ナデ。内面口縁部ハケ、体部指頭圧痕あり。	近江的要素。
167		甕	口径16.3 残高4.8	軟 橙褐色	外反する口縁。	体部内面ハケか。	
168		甕	口径17.8 残高2.8	軟 淡橙褐色	受け口状口縁。	口縁部内外面ナデ。体部内外面ハケ。	外面スス附着。
169		高杯	口径15.8 残高1.5	良好 暗褐色	外反する口縁。	内外面ナデ。	

170	S D16埋土	高杯か	口径15.4 残高3.5	やや軟 淡橙褐色	水平方向に広がる受け部に直立気味の口縁。	内外面ハケ後ナデ。内面指頭圧痕あり。	
171		高杯	口径14.8 残高3.5	良好 淡褐色	外反する口縁。	内外面ヘラ磨き。	精製品。
172		高杯脚部	脚径3.5 ~4.0 残高5.2	良好 淡褐色	中実化しつつある脚。	内面に工具による削り出し痕。外面ナデか。	
173		高杯脚部	残高4.7 底径17.8	やや軟 明橙褐色	スカート条に開く脚、端部に凹線。	外面上半縦ハケ、下半横ハケ。内面ハケ後ナデ。	
174		壺	頸部径9.8 残高5.3	軟 明橙褐色	ゆるやかに下がる肩部。	外面部分的にハケ残る。内面指頭圧痕、絞り痕接合痕あり。	
175		壺	残高4.1	やや軟 淡灰褐色	肩部の張る体部。	外面ナデ。内面ハケ後指オサエ。	線刻あり。
176		器台	柱状部径9.0 残高9.2	軟 淡赤褐色	幅の広い中空の体部。	内外面ナデか。	
177		底部	残高2.6 底径2.8	軟 淡褐色	小さく扁平な平底。	外面ハケか。	ヘラによる葉脈痕+モミ痕あり。
178		底部	残高3.9 底径9.25	軟 淡橙褐色	扁平な平底。	外面ハケ。内面ナデ。	
179		底部	残高5.7 底径5.0	良好 明褐色	扁平な平底。	外面板オサエ。内面ヘラナデか。	
180		器台	口径17.2 残高1.5	良好 褐色	垂下口縁。	内面ハケ。	
181		甕	口径16.8 残高2.5	やや軟 暗褐色	つまみ上げる口縁。	器壁荒れ調整不明。	
182		甕	口径8.8 器高9.7	良好 淡褐色	内湾気味の口縁部。扁平な平底。	体部内面指頭圧痕あり。底部外面ヘラナデか。	小形品。
183		底部	残高4.1 底径8.2	良好 明褐色	扁平な底部。	外面上半縦ナデ、下半横ナデ。内面ナデ。外面接合痕あり。	底部外面にヘラ状工具による葉脈あり。
184	底部	残高3.0 底径約5.5	良好 褐色	突出する底部。	内面ナデ。外面ナデ。底部外面ヘラケズリ。	底部円形板接合。	
185	底部	残高2.8 底径約5.0	良好 赤褐色	やや窪む底部。	外面タタキ。内面ハケ。		
186	S H33埋土	甕	口径13.0 残高10.0	良好 淡灰褐色	ゆるやかに内湾して立ち上がる口縁。	内面一部ケズリ、下半ハケ。	
187		甕	口径14.8 残高5.5	良好 灰褐色	「く」字状に外反し、端部をつまみ上げる口縁。	口縁部内外面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ後ナデ。	
188		甕	口径12.8 残高3.6	良好 灰褐色	外反した後、屈曲してわずかに上方にのびる口縁。	口縁部内外面横ハケ。体部外面ハケ。口縁部外面に指頭圧痕あり。	
189		高杯	口径14.4 残高4.3	淡茶褐色	屈曲して斜上方にのびる口縁。	杯部外面上半ハケ、下半ナデ、内面ナデ。	
190		高杯脚	底径9.0 残高4.8	茶色	ゆるやかに屈曲して大きく開く脚部。	外面ヘラ磨き。内面ナデ、柱状部に絞り目。	

191		器台	首径4.4 残高4.3	良好 褐色	スカート状に開く 脚。	外面ナデ。内面調整 不明。粘土接合痕あ り。	
192		甕	口径14.8 残高5.5	良好 灰褐色	穿孔された細くすば まる底部。	口縁内外面ナデ。体 部外面ハケ、内面ケ ズリ後ナデ。	
193		甕底部	底径5.0 残高2.5	良好 暗褐色	扁平な平底。	外面ハケ後ナデ。内 面調整不明。	外面スス付着。
194		鉢底部	底径4.5 残高3.5	良好 淡赤褐色	窪む底部。	調整不明。	
195		甕底部	底径4.0 残高5.6	良好 淡褐灰色	厚みがあり、細くす ばまる扁平な底部。	外面タタキ。内面ハ ケ後ナデ、底部ナデ アゲ痕。	
196	S H34埋 土	甕	口径12.4 残高5.7	軟 淡茶褐色	大きく外反する口 縁。	口縁外面ナデ、体部 タタキ。内面指オサ エ、ナデ、接合痕あ り。	
197		甕	口径13.9 残高4.0	やや軟 淡黄褐色	外反し、端部に面を なす口縁。	内外面ナデ。接合 痕、指頭圧痕あり。	
198		高杯	柱径3.0 残高4.8	軟 淡茶褐色	スカート状に広がる 脚。	内外面ハケ。	
199		高杯脚	柱径5.4 残高10.0	軟 淡茶色	幅の広い柱状脚。	外面器壁荒れ調整不 明。内面絞り目後横 ナデ。縦状工具痕あ り。	黒斑あり。
200		底部	底径4.0 残高2.2	やや軟 淡茶色	輪状の粘土帯を付す 底部。	内外面調整不明。	黒斑あり。
201		壺底部	底径3.8 残高3.2	軟 明茶色	小さく突出する底 部。	内外面ナデ。指圧痕 あり。	黒斑あり。
202		底部	底径4.5 残高24	良 淡茶褐色	扁平な平底。	外面ナデ、部分的に ハケ残る。内面未調 整。	
203	S H03周 辺上層土	高杯	口径13.4 残高7.2	軟 淡茶色	浅い杯部にやや広が る脚部。	内外面ナデか？	
205	坑	甕	口径19.9 残高13.0	良 淡褐色	外反する口縁に下が り気味の肩部、丸み のある平底。	口縁内外面横ナデ。 体部外面上半ハケ後 ナデ、内面上半ケズ リ後ナデ、指オサ エ、下半ケズリ。底 部外面ケズリ後指オ サエ、内面ナデ。	
206	S H35床 直	壺	頸部径 8.0 残高5.3	軟 淡橙褐色	肩の張る体部。	外面ハケ、内面ナデ 後指オサエか？	
207		甕	口径7.0 器高5.5	良好 褐灰色	扁平な平底。	外面ナデ、口縁部指 圧痕あり。内面粘土 紐積痕あり、底部指 圧痕。	ミニチュア手捏 ね土器。
208		底部	底径4.0 残高2.1	やや軟 暗褐色	扁平な平底。	外面ナデ。内面未調 整。	ヘラ状工具によ る葉脈痕。
210	S H07床 直	甕	口径14.2 器高18.3	軟 淡茶色	「く」の字状に外反 する口縁、球形の体 部。	口縁内外面横ナデ。 体部内外面ハケ。底 部内面指オサエ後ナ デ。	外面口縁体部炭 化物付着。

5. ま と め

今林遺跡は、大きく3時期の遺構群からなる。弥生時代後期中葉の溝状遺構とピット群、後期後半～庄内式併行期の竪穴式住居跡群、古墳時代後期初頭の竪穴式住居跡である。

弥生時代後期中葉の溝状遺構とピット群からは、順に甕形土器、壺形土器の破片、砥石などが出土している。また、ピット群の周辺からは、同時期の土器を伴う集石遺構が検出されており、この周辺に何らかの工房的性格をもつ仮設住居状の施設が営まれていたものとみられる。

弥生時代後期後半の遺構としては、10棟の竪穴式住居跡を検出した。円形住居跡は、主として丘陵の尾根線上の好立地を占めており、丘陵腹部に方形住居が営まれている。出土土器には明確な時期差を認められないが、円形住居跡を切り込んで方形住居が造営されている地点があるので、円形住居から順次方形住居に移り変わっていったことが推定される。古墳時代後期の今林2号墳の盛り土からも、この時期の土器片が多数出土しており、古墳造営時に竪穴式住居跡が削平されたものとみられる。当初は、丘陵の全面にわたって弥生時代後期後半～庄内式併行期の集落が展開していたとみられる。

出土した土器には、生駒西麓産の搬入品や丹後系、中部瀬戸内系、東海系などの要素がわずかながら認められるが、近江系の影響が最も強く、近江系の土器群は在地の土器様式との融合形態さえ生みだしている。こうしたあり方は、丹波地域の第V様式後半の土器様相の特色ともなっており、北桑田郡京北町上中遺跡や亀岡市北金岐遺跡、同千代川遺跡、宮川遺跡などでも同様の傾向がみられる。

以上のように、今回の調査で今林遺跡は、丘陵に立地する弥生時代後期後半を主体とする集落遺跡であることが判明した。今林遺跡周辺の低地に立地する遺跡では、庄内式古段階に併行する曾我谷遺跡がよく知られている。おそらく、後期後半から庄内式併行期にかけて、集落の中心は低地に広がっているとみられる。園部盆地では、庄内式併行期に出現期の前方後円墳である園部黒田古墳が出現しており、その母体としての大規模な集落遺跡の存在が予想される。しかし、曾我谷遺跡では溝状遺構が検出されたにとどまり、この時期の拠点集落の存在はまだ知られていない。今林遺跡のような、丘陵上の集落遺跡が古墳出現前夜にみられることは、その後の社会的関係を考える上で注目されよう。

古墳時代の遺構としては、木棺直葬墓1基と方形竪穴式住居跡1棟を検出した。竪穴式住居跡は、丘陵の南端に位置しており、一辺約3.3mの住居跡の四隅のうちの一隅を掘り残し、そこに竈を敷設するタイプである。こうした形態は、綾部市域の7世紀から8世紀前半の住居跡に特徴的であり、「青野型住居」と呼称されている。今林遺跡で検出した住居跡は、周壁溝内出土の土師器甕によって5世紀後半前後と推定できる。従来、「青野型住居」の出現は6世紀末とされてきたため、今回の今林遺跡S H07は最古の例となる。住居跡の存続期間は、今林2号墳の築造及び追葬期間と相前後しており、両者が密接な関係にあることは明らかである。

今林2号墳には、鉄製楕円形鏡板付轡や多くの鉄器類とともに、須恵器台付短頸壺や器台と広口壺のセットなどの特色ある須恵器がみられる。特に、短脚の器台は、「ハ」の字状に開く短い

脚部に小さな円形の透かし穴を穿っており、他の地域では類例を見ない。小円形の透かし穴は、園部盆地内の古窯で出土する須恵器の脚部の特徴であり、地域内で生産されたとみてよいだろう。^(注9)園部古窯址群の操業は、踏査の成果でI型式5段階、陶邑TK47型式の須恵器が採集されており、^(注10)ほぼ5世紀末葉頃にさかのぼることが知られている。これは、今林2号墳の初葬の時期にあたる。同古墳には器台や広口壺などの多種の須恵器が供献されていることから、被葬者と須恵器生産の関わりについて、今後検討していく必要がある。今林2号墳と比較すべき資料として、園部盆地内で併行する時期に築造されている黒田北古墳群をあげることができる。^(注11)この古墳群には円筒埴輪を樹立し、小規模な前方後円墳を含むが、須恵器の器種は杯身、杯蓋等の小形品に留まり、鉄器の保有量も少なく、副葬品の質及び量には大きな格差がある。この格差は、すなわち、旧来の伝統的墓制を維持する在地系の集団と、渡来系の新しい技術や知識を摂取した集団との社会的格差を示すのかもしれない。また、近年、「青野型住居」に類する資料は、渡来系集団との関わりが深いことで知られる紀ノ川流域の和歌山市田屋遺跡などで、古墳時代後期の例が検出されており、2号墳の被葬者集団及び「青野型住居」の性格を考えて行く上で、今後、比較検討する必要がある。

(野々口陽子)

注1 調査参加者(順不同、敬称略)

野尻和真、鎌田真喜子、日下部賢司、柏尾依子、西村一紀、澤田圭子、細山田章子、小坂至道、稲田望子、斎藤欣延、徳野裕昭、小橋健司、長谷川洋、松下道子、関口睦美、岡本美和子、小滝初代、山中道代、森川敦子、小島嘉晴、明田安男、浅井義久、人羅義雄、香川友子、俣野朋代、片山八重子、木村恵子、斉藤澄代、竹上美代子、栃下富江、人羅幸子、中西セツ、掘源一、中川真理子、中川君代、栃下緑、大島紀子、井上聡、金城龍成、莊林ハツエ、井上洋子

なお、調査中、綾部市教育委員会近澤豊明氏、(財)滋賀県文化財協会大道和人氏にご教示を得た。記して感謝いたします。

注2 森 浩一編『園部垣内古墳』 同志社大学考古学研究室 1990

注3 平良泰久ほか「曾我谷遺跡発掘調査概報」(『園部町埋蔵文化財調査報告』第2集 園部町教育委員会) 1977

注4 注3に同じ。

注5 注2に同じ。

注6 注2に同じ。

注7 「青野型住居」は、京都府綾部市青野・綾中遺跡群で検出されているもので、方形竪穴式住居の一隅を掘り残し、そこに造り付け竈を設けるものである。その位置は住居の南東隅であることが多いが、この遺跡の場合、北東隅となっている。

注8 「古墳時代の竈を考える」(第32回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会) 1992.9

注9 山田邦和「丹波の須恵器生産覚書」(『考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会) 1987

注10 同志社大学考古学実習室『園部盆地における考古学的調査』 1981

注11 森下 衛・辻健二郎・高野陽子ほか『船坂・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』 園部町教育委員会 1991

付 載

今林遺跡の放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定は、今林遺跡から採取された4試料について行った。測定用試料はすべて炭化材を用いた。以下の表1に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は、 ^{14}C の半減期5570年(LIBBYの半減期)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yrs.B.P.)として示している。付記された年代誤差は、 β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。

各試料の時期は不明であることから、測定結果の妥当性については検討できない。測定結果は、1試料を除いては縄文時代草創期ないし早期の年代値が得られている。一方、他の1試料は 2510 ± 100 yrs.B.P.と年代値的には縄文時代晩期頃を示す。

表1 今林遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺構名	測定試料	コード番号	測定値 (yrs.B.P.)
サンプルA	S X21	炭化材	GaK-18893	9,950 \pm 430 (8,000B.C.)
サンプルB	S X22	炭化材	GaK-18894	9,460 \pm 150 (7,510B.C.)
サンプルC	S H01	炭化材	GaK-18895	2,510 \pm 100 (560B.C.)
サンプルD	S X23	炭化材	GaK-18896	8,370 \pm 120 (6,420B.C.)

2. 北稲・柿添遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、主要地方道枚方―山城線(通称山手幹線)の道路建設に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。同事業に係る埋蔵文化財の調査は、平成5年度から開始しており、精華町南稲八妻所在の北尻遺跡が調査の対象となった。^(注1) つづく平成6年度は、府道精華―山城線を南限として、南北方向に約650mの区間が道路敷設対象地域となった。この地区内には、北稲遺跡・柿添遺跡の2遺跡が周知の遺跡として『京都府遺跡地図』に登録されており、同工区に係る部分の埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。

北稲・柿添遺跡は、相楽郡精華町北稲八間地内に所在する。両遺跡は、北稲遺跡を南に、南北に隣接して分布しており、土師器・須恵器・瓦器が出土する散布地とされている。しかし、いずれも過去に発掘調査例がなく、遺跡の広がりや実態は不明な点が多い。今回の調査対象地は、標高29～32mで東方約1.5kmを流れる木津川の河川敷と約5～8mの比高差のある平地である。遺跡付近の平地部には整美な方格地割が残されており、遺存地名(残存坪名)や文献史料などをもとに比較的早くから条里の復原が検討されている。^(注2) ちなみに、調査地は、相楽郡条里の三条・稲捌間里に相当し、道路計画線は、同里内の坪界線にほぼ一致している。

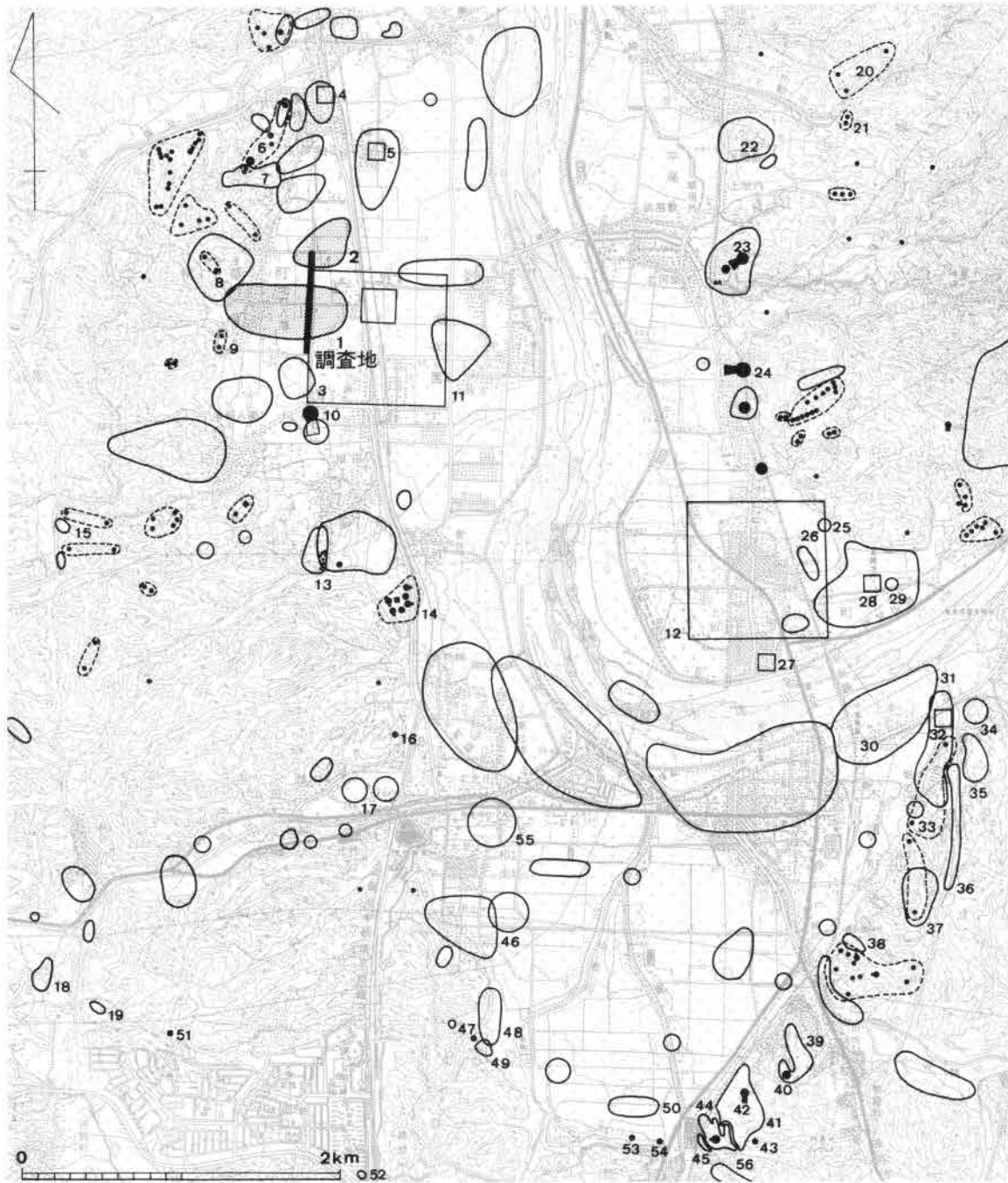
現地調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり、同センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同調査員伊賀高弘が担当した。調査期間は、平成6年7月20日から平成7年2月27日までで、調査に係る経費は全額、京都府土木建築部が負担した。なお、京都府土木建築部、精華町教育委員会、京都府立山城郷土資料館などの関係諸機関からご協力・ご教示をいただいた。また、現地作業には作業員・整理員・学生諸氏のご協力があった。^(注3) 感謝の意を表したい。

2. 調査の概要

調査は、まず、対象地内に幅3～5mの試掘トレンチを11か所設定して遺構・遺物の有無の確認から始めた。その結果、対象区のほぼ中央を横断する一般地方道枚方―精華線を挟む調査区(4～7トレンチ)と、柿添遺跡に含まれる北端の10トレンチで、遺構・遺物が存在することが明らかとなった。このため、この部分の本調査が必要と判断されたので、関係機関と協議の上、本年度は4～7トレンチ部分を可能な限り拡張を行い本調査に移行した。以下、調査の概要をトレンチごとに記述する。

〔1トレンチ〕

基本層序は、上位から1)暗灰色土=耕土、2)褐灰色粘質土(茶色粘質土混じり)=床土、3)褐灰色粘質砂土(包含層)、4)明黄茶色硬質砂土、5)淡灰褐色粘砂土の層準を示す。4)層以下が地山で、



第30図 調査地位置図

- | | | | | |
|------------------------|-------------------|------------------|------------------------------|----------------|
| 1. 北稻遺跡 | 2. 柿添遺跡 | 3. 北尻遺跡 | 4. 下粕廃寺 | 5. 里廃寺 |
| 6. 鞍岡山古墳群 | 7. 大福寺遺跡 | 8. 城山古墳群 | 9. 国名平古墳群 | 10. 丸山古墳 |
| 11. 山城国府推定地(奥田裕之案) | 12. 山城国府推定地(木下良案) | 13. 畑ノ前遺跡・畑ノ前古墳群 | 14. 吐師七ツ塚古墳群 | 15. 煤谷川窯跡 |
| 16. 白山古墳 | 17. 樋ノ口遺跡 | 18. 乾谷瓦窯跡群 | 19. 押熊瓦窯跡 | 20. 不動古墳群 |
| 21. 笛吹古墳群 | 22. 涌出宮遺跡 | 23. 平尾城山古墳 | 24. 椿井大塚山古墳 | 25. 高井手窯跡 |
| 26. 野田芝遺跡 | 27. 泉橋寺 | 28. 高麗寺跡 | 29. 高麗寺瓦窯跡 | 30. 上津遺跡 |
| 31. 燈籠寺遺跡 | 32. 燈籠寺廃寺 | 33. 内田山古墳群 | 34. 白口遺跡 | 35. 赤ヶ平遺跡 |
| 36. 釜ヶ谷遺跡 | 37. 木津城跡 | 38. 大谷窯跡 | 39. 西山遺跡 | 40. 西山塚古墳・西山古墓 |
| 41. 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群・瓦谷埴輪窯跡群 | 42. 瓦谷1号墳 | 43. 幣羅坂古墳 | 44. 上人ヶ平遺跡・上人ヶ平古墳群・上人ヶ平埴輪窯跡群 | 45. 市坂瓦窯跡群 |
| 46. 曾根山遺跡 | 47. 音乗谷古墳 | 48. 大畠遺跡 | 49. 音如ヶ谷瓦窯跡群・歌姫西窯跡群 | 50. 弓田遺跡 |
| 51. カザハヒ古墳 | 52. 奈良山53号窯 | 53. 奈良山13号地点古墳 | 54. 奈良山15号地点古墳 | 55. 相楽遺跡 |
| | | | | 56. 瀬後谷窯跡群 |

その上面はGL-30cmを測る。地山面で遺構検出を試みた結果、近世以降の耕作溝と混在する形で、浅い落ち込みの片側の斜面や小規模な溝・ピットを確認した。浅い落ち込みは、トレンチの中軸ラインをほぼ上縁線として北側に傾斜している。

[2 トレンチ]

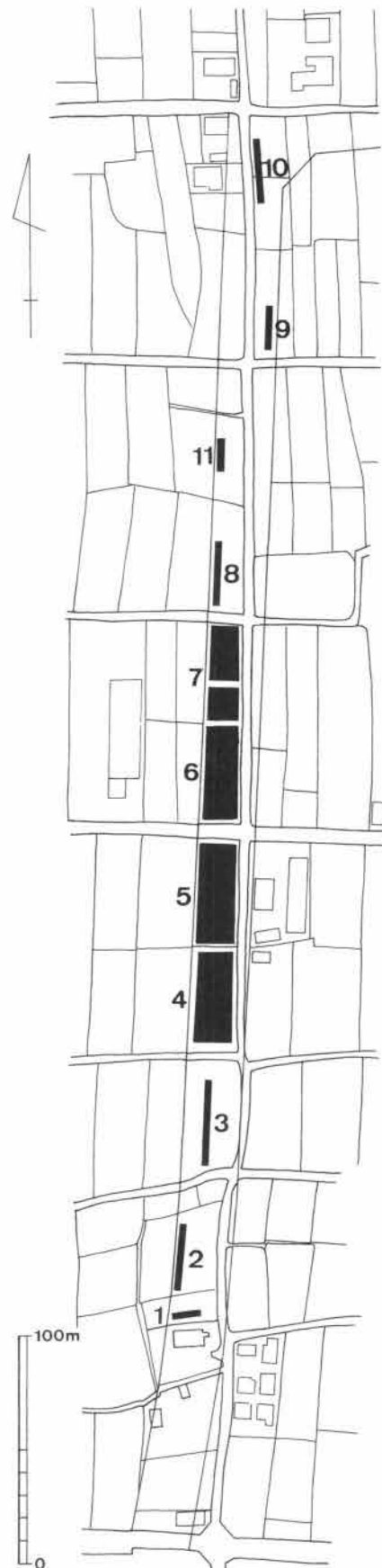
調査区の基本層序は、上位から1)淡褐灰色粘質土=床土、2)褐灰色系土、3)淡褐灰色系(砂質)土、4)茶褐灰色粘質土、5)青灰色のシルトまたは砂礫となり、各層は北に向かってゆるやかに傾斜して層が厚くなっている。3)・4)層は、包含層で奈良時代(7世紀)から中世に至る遺物が若干出土する。5)層は、無遺物層でグライ系の流れ堆積層である。4)層の中位で遺構検出を行ったが、中世の瓦器・土師器小片を包含する東西・南北方向の耕作溝を数条検出したにとどまる。中世に耕地として利用される以前は、全面に河川堆積が広がっていたようである。

[3 トレンチ]

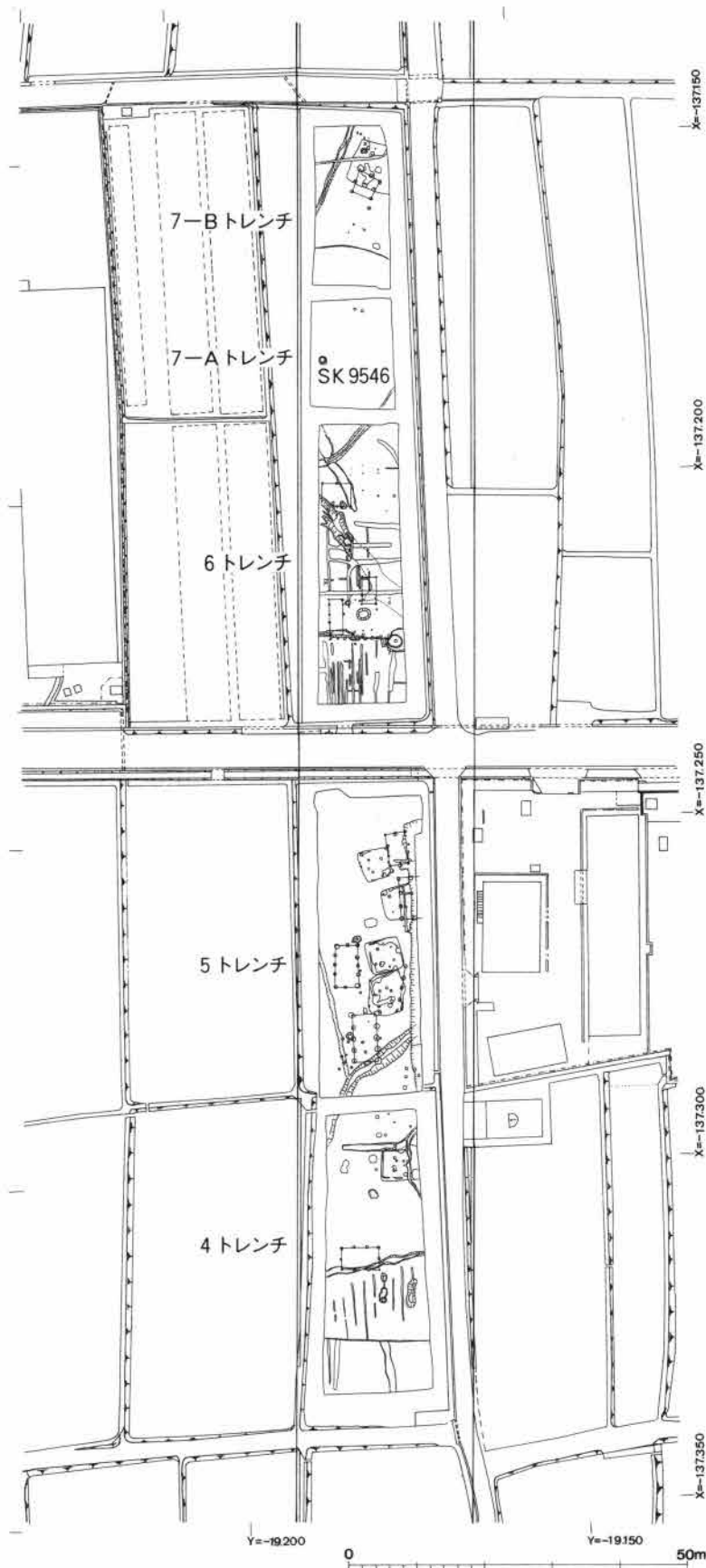
層序は、上位から1)暗灰色土=耕土、2)褐灰色粘質土、3)暗褐灰色粘質砂土、4)淡褐灰色粘砂土～淡黄褐灰色粘土、5)青灰色シルト質粘土の順で堆積し、3)層は中世の純粋な包含層である。3)層と4)層の上面で遺構検出を試みたが、上層検出面の南端で須恵器甕片を包含する灰色シルト質砂が堆積する落ち込みがみられた以外、顕著な遺構は存在しなかった。この地点付近は、中世以前は池沼状の堆積が広がり、土地利用の痕跡はみあたらない。

[4 トレンチ]

層序は、上位から1)黄褐灰色土=床土、2)暗褐灰色粘質土、3)黄褐灰色粘質土、4)暗茶灰色粘砂質土(遺物包含層)5)淡黄灰褐色土、6)淡黄灰色粘質砂の層順を基本として堆積し、下位の5)層以下は無遺物層で、軟質のゆるやかな河川堆積層である。奈良時代の遺物を主に包含する4)層の上面は、南側に向かうにつれてだんだんと傾斜し、トレンチ南半では上位に暗灰色粘質砂土(7世紀の遺物を中心に包含する)が間層として薄く入る。遺構検出は、4)層上面と5)層上面の2面で実施した。上層の検出面では、トレンチ



第31図 トレンチ配置図



第32図 4～7トレンチ遺構配置図

に平行あるいは直交する大小の耕作溝をほぼ全面で検出し、これに切られる形で掘立柱建物跡1棟、土坑、溝などを検出した。耕作溝は、埋土の違いや出土遺物から、中世に掘られたことがわかった。

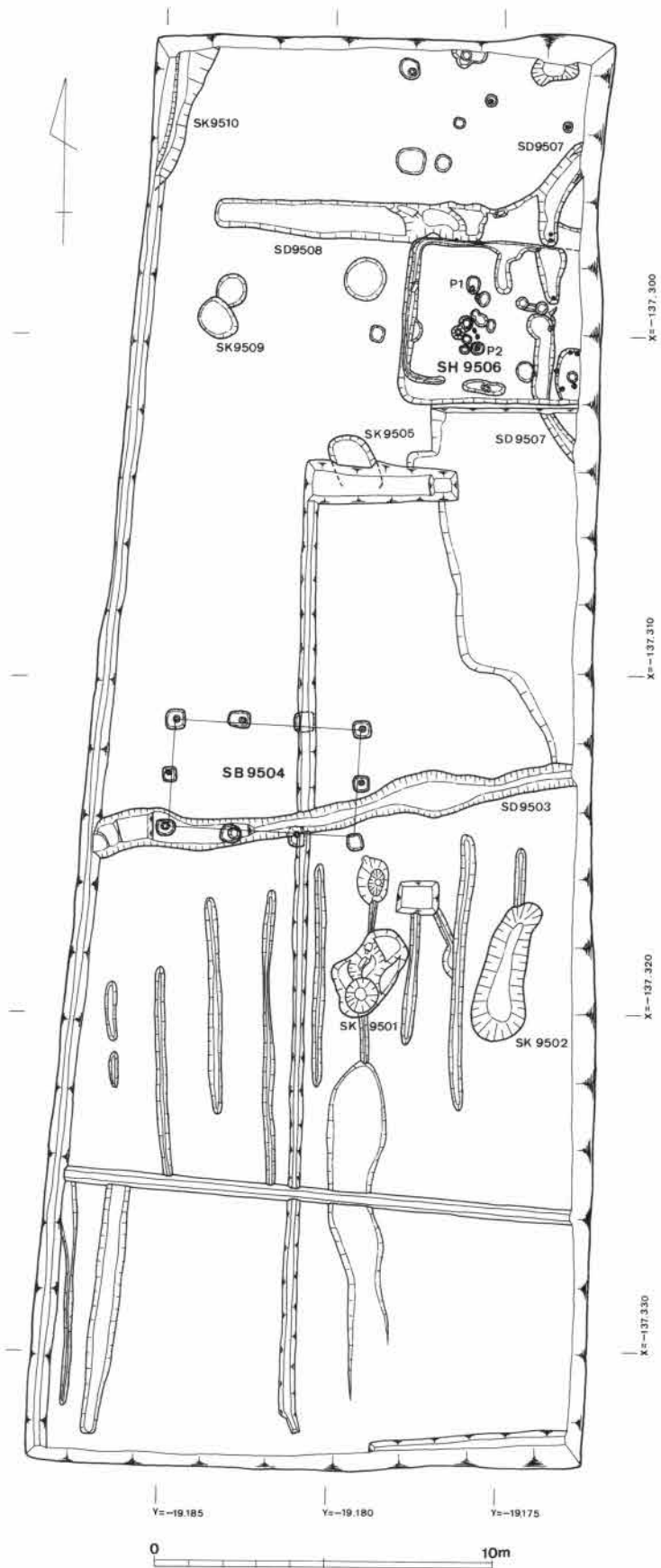
掘立柱建物跡 S B 9504 調査区の中央寄りで検出した。3間(5.5m)×2間(3.2m)の東西棟である。柱間寸法は間隔が不等で、桁行は西端間を2.1mと広くとる他は、約1.8m間隔。梁間は、北1間は東西妻とも1.55mとそろえるが、南端間は西側が1.6m、東妻側が1.75mと不均等に割り付け、全体としてはわずかに東広がり矩形平面を呈する。掘形は、円形あるいは円形に近い隅丸方形で、一辺(直径)0.4～0.5m、検出面からの深さ0.08～0.35mを測る。柱当りは、径15～20cmを測るが、柱痕を残すものはない。南側柱が東西溝 S D 9503と重複するが、柱穴はこの溝が埋没してから掘り込まれており、より新しい。掘形内からの出土遺物は少なく、わずかに北東隅柱穴から須恵器甕小片が出土したにとどまる。

S K 9501 主軸を南北にとる長円形プランの土坑(長軸2.4m・短軸約1.0m、検出面からの深さ0.8m)である。土坑の南寄りが円形に1段深く掘り込まれている。埋土は暗茶灰褐色土で、内部から布留式併行期の遺物が少量出土した。

S D 9503 トレンチに直交する方向に直線的に流れる溝である。溝の外縁線はやや蛇行しており、このため溝の上縁幅も0.6~1.4mと一定しない。横断面面形は「U」字形を基本とするが、部分的には変形して壁面がオーバーハングしたようすを呈するか所もある。内部には淡灰色系の粗砂あるいは砂礫が堆積しており、自然流路とみられる遺物は少なく、若干の布留式土器の細片が出土したにとどまる。

主として調査区の北半に堆積していた包含層(4層)を除去すると、5層をベースとする竪穴式住居跡1基と溝・土坑(下層遺構)を検出した。

竪穴式住居跡 S H 9506 調査区の北半東寄りで検出された住居跡である。東壁が調査区外にはずれるが、主軸がほぼ南北方向で、東西方向にやや長い長方形プランを持つ。検出面での規模は、南北4.9m・東西5.3m以上・床面までの深さ0.2mを測る。床面は、特に東寄りが断続



第33図 4 トレンチ平面図

する南北溝(S D9507)によって乱れるが、中央部にピット状土坑が多数みられる。これらのうち、P 1とP 2は、他と比較して深く掘り込まれており、主柱穴の西辺を構成するとみられる。主柱穴の平面形はほぼ円形で、径約0.4m・深さ約0.1mを測り、それぞれ径約15cmの柱当たりを打つ。柱間隔は、P 1～2間で1.7mを測る。周壁溝は、北・西・南の三辺にみられるが、東辺は後世の遺構に切られ不明である。幅0.13～0.3m、床面からの深さ約0.05mを測る。この住居跡は、北・西辺をそのまま東方と南方に拡張されているようで、南周壁溝が壁体部から0.5m北側に位置するのは、拡張の規模を示すとみたい。

S D9508 S H9506の北壁に接して、その中位から西方にのびる溝状遺構である。東西両端は隅丸形状プランを呈し、長さは8.0mを測る。幅は全体を通じてほぼ一定で(上縁幅約1.0m)、検出面からの深さも、住居跡と接する部分がやや深く掘り込まれる以外は、0.2m前後である。溝の横断面形は、平坦な底部をもつ逆台形で、埋土は暗茶灰色土・淡灰色砂・黄茶灰色粘質砂が互層をなして堆積する。重複関係から、S H9506に後出するが、伴出遺物が乏しく、具体的な時期は不明である。

S D9507 S H9506の東寄り部で検出した溝である。住居跡と重複する部分では、住居跡の覆土上面から掘り込まれており、より新しい。溝の底部は、一部住居跡床面にまで達し、断続的に床面を浅く掘り込む。北端部で溝の西壁が1段浅くなって西方に曲がり、そのままS D9508の北東と繋がる。埋土もS D9508と近似することから、両者は一連の溝が分かれたものとみられる。出土遺物はわずかで、布留式土器を含むが、これは住居からの混入品とみられる。

S K9505 S H9506の南西1.7mのところ検出した土坑である。南半部を試掘時の断ち割り切られ失われるが、断ち割り以南まではのびない。遺存部は、隅丸長方形プランで(最大幅1.2m・残存長軸1.0m)、底部が平坦に近い「U」字形断面を呈する(検出面からの深さ0.2m)。埋土は黒灰色土の単一層で、布留式土器片が少量出土した。

S K9509 S H9506の西方4.6mのところ検出した土坑である。遺構の掘り込み面は、住居跡の検出面から約0.2m高く、底部はこの検出面まで達する(深さ約0.3m)。南北に主軸をもつ長方形プランを呈し(長軸2.0m・短軸1.1m)、下半の住居跡検出面下では円形土坑が南北に連なる形状を示す。埋土は、茶灰色土と暗茶褐色土の互層で、坑底から約5cm浮いたところで須恵器(壺・甕)が出土した。特に、甕は、器壁が剥離して非常に薄くなった状態で面的に広がっていた。

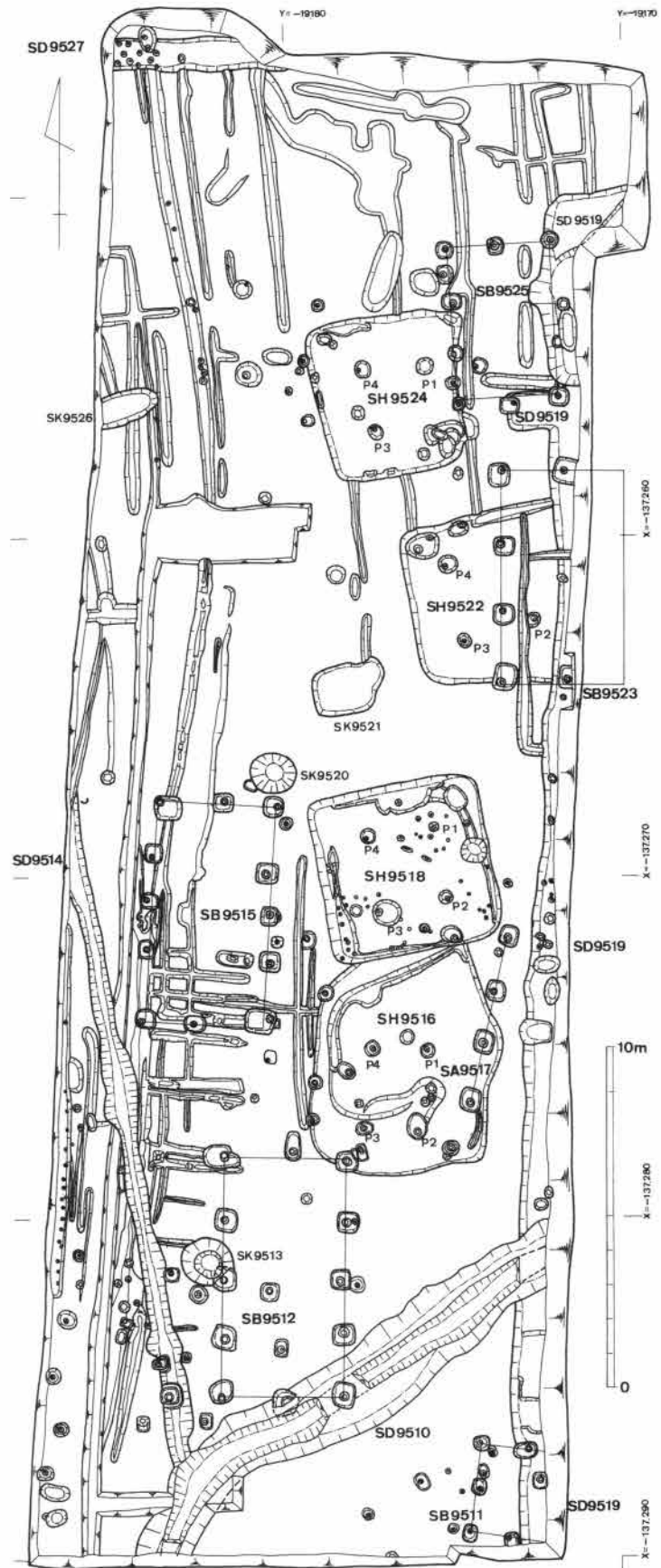
[5 トレンチ]

調査区内の基本層序は、1)黄褐灰色土=床土、2)暗茶灰色粘砂土=遺物包含層、3)淡黄褐灰色粘質土、4)暗(青)灰色粘土となる。4 トレンチと基本的には同じ層順を示すが、2)層は調査区の南側1/3にしかみられず、それ以北は床土直下が3)層となる。3)層以下は無遺物層で、検出遺構の大半は、時期に関係なく、3)層をベースに掘り込まれている。

検出した遺構は、竪穴式住居跡4基・掘立柱建物跡6棟・溝・土坑などである。なお、トレンチ西半と北端部は、3)層の標高が高いため、近世以降の耕作溝が南北主軸のものを中心に3)層に穿たれており、新旧の遺構が重なり合って複雑な状況を呈している。

S D 9510 調査区の南端に位置するやや規模の大きな溝である。溝の平面形は、南側1/4付近でわずかに「く」字形に屈曲するが、ほぼその主軸線は、南西から北東方向に直線的にのびる(北側3/4部分の中軸線はおよそN58°Eを示す)。溝の横断面形は、全体を通じて2段掘り構造を呈している。すなわち、上段部分は側壁がゆるやかに外上方に開く「U」字形を示す(上縁幅1.5~2.4m・検出面からの深さ約0.5m)。しかし、下段は側壁が急な角度で、底部が狭く平坦な逆台形を呈する(上縁幅0.6~1.3m、上段溝底からの深さ約0.7m)。埋土は、上段が茶灰色系の粘質土と砂質土のレンズ状堆積であるが、下段部分は灰色砂と暗灰色腐植系シルトの互層である。遺物は、上下段両方から布留式土器が他の時期の遺物を混じえずに出土したが、全体に下段部分の方が遺存状態の良好なものが多い。

S B 9511 トレンチ南東隅で検出した掘立柱建物跡で、東側が調査区外にはずれる。この付近は、包含層の2)層が堆積しており、これを除去することで確認できた。南北2間(2.8m)×東西1間以上(1.4m以上)の規模を有する。柱間寸法は、平妻いずれも1.4m等間である。



第34図 5 トレンチ平面図

掘形は、円形に近い隅丸方形(一辺0.4m前後)で、径15~20cmの柱痕跡をとどめる。主軸方位はN(座標北、以下同じ)6°Eを示す。

S B 9512 S D 9510とその南端が重複する。今回の調査では、最大規模の掘立柱建物跡である。建物形式は、4間(7.0m)×2間(3.6m)の南北棟である。柱間構成は、平妻側は等間で、桁行1.75m等間・梁間1.8m等間で設計されている。柱の掘形は、隅丸正方形プラン(一辺0.6~0.8m・検出面からの深さ0.2~0.6m)を基本とするが、北妻柱列の中柱のように隅丸長方形を呈するものもある。柱痕跡は、径15~20cmの円形で、中にはその底部が掘形底より深いものがある。掘形内の埋土は、暗茶灰色粘砂土に黄灰色粘質土がブロック状に混入しているが、版築状の縞状堆積は示さない。棟通りの主軸はN1°Eを測る。なお、南妻側柱列の2基の柱はS D 9510に重複するが、S D 9510が完全に埋没した後に掘り込まれており、建物跡の方が新しい。

S K 9513 S B 9512の西入側柱筋に重複する土坑である。直接切り合う北第3柱の掘形はこの土坑に切られており、S K 9513の方が新しい。ほぼ正円形プラン(直径南北1.3m・東西1.5m・検出面からの深さ0.8m)を呈し、断面は2段落(下段が急傾斜)となる。埋土は、褐灰色砂質土で、近在する耕作溝のそれと近い。近世以降の野井戸の掘形とみられる。

S D 9514 S D 9510の屈曲部から分岐して、北北西方向に直線的にのびる素掘り溝である(溝の軸線はN10°Wを示す)。溝の北側は、調査区外にのびており、少なくとも調査区内での検出長は19.0mを測る。上縁幅は、部分的に壁面の崩落によって広がっているところがあるが、約0.5m前後を保っている。横断面形は、両側の壁面・底面ともに直線的な逆台形を呈し、深さは検出面から約0.5mと、幅に対して深い形状を示す。埋土は、大きく3層に分層でき、上位から茶褐色系土→淡褐灰色砂質土→暗茶灰色腐植系シルトの層順で堆積する。主として、上位2層から布留式併行期の土器が出土している。

S B 9515 S B 9512の北4.0mに位置する掘立柱建物跡である。建物形式は4間(6.5m)×2間(3.5m)の南北棟である。柱間は、不等間隔で、入側筋は中脇構成柱間を採る。但し、向かいあう柱列の柱筋は建物跡側とは平行に通っていない。これは向かいあう柱列の柱間構成が左右逆の配置を採っていることに起因する。すなわち、西入側柱列の柱間寸法は、北から1.8→1.3→1.3→2.0mを測るのに対し、東入側筋は南から計測して同じ値を示す。同様に北妻側柱列の柱間は西から2.0→1.5mを測るのに対し、南妻側柱列は東から2.0→1.5mとなる。このため、棟通りの示す方位(N8°E)と側柱筋の示す方位(N3°E)との間には約5°の角度のずれが生じる。柱の掘形は、隅丸正方形プランを基本とするが、中にはやや長方形を呈するものもある。規模は一辺0.5~0.6mを基本とするが、北西隅と南東隅の掘形は、長辺0.9mと規模が大きい。深さは0.12~0.5mを測り、埋土は暗茶灰色土の単一層である。柱当りは径6~20cmの円形で、一部掘形より深く達するものもある。

S H 9516 S B 9512に接して北側に展開する竪穴式住居跡である。平面形は、いびつで南北方向にやや長い隅丸方形を呈する。検出面での規模は、北壁が別の住居跡に切られて大半を失うが、南北6.4m以上・東西約5.5mを測る。検出面から床面までの深さは5~15cmを測る。周壁溝は、

それぞれ北壁から約0.8m、西壁から約0.4m、南壁から約1.5m中央寄りにあって、東辺部分にはみられない(幅0.2~0.6m、床面からの深さ約0.04mを測る)。主柱穴は、住居跡の南側にかたよって4か所あり、その平面プランは南北に長い長方形である。柱間隔は、P1から右回りで2.4m・1.6m・2.4m・1.6mを測り、向かいあう柱間は等しい。柱穴の掘形は円形プラン(直径約0.4m)を呈し、径10~20cmの円形の柱当たりを有する。柱穴の深さはいずれも浅く、床面から0.11~0.2mを測るにすぎない。覆土中から布留式土器片が少量出土した。

S A9517 S H9516と重複して、より新しい柱列である。同軸線上に4基の柱穴が並ぶが、両端から直角に折れる柱穴は調査区内では見い出せず、短い(総長4.8m)柵列と認識できる。柱間寸法は、南から1.8m・1.5m・1.5mを測り、南1間がやや長い。柱掘形は、隅丸方形プラン(一辺約0.6m)を呈し、径15~20cmの柱痕跡をとどめる。掘形埋土は、他の掘立柱建物跡と同様に暗茶灰色土の単一層で、複数の掘形内から7世紀前半の須恵器(身・蓋)が出土した。

S H9518 S H9516の北に接し、南壁がわずかにS H9516を切ってより後出する竪穴式住居跡である。平面形は、隅丸正方形を呈し、主軸方向はN10°Wを示す。検出面での規模は、東西・南北ともに5.0mで、床面までの深さは0.05~0.14mを測る(床面はほぼ一定レベルを保つが、検出面が東方へゆるやかに傾く)。周壁溝は、北西と南東の隅角部が1m前後の長さにわたって途切れるが、それ以外は、ほぼ壁体の下に接してめぐっている(幅0.1~0.5m、床面からの深さ約0.08mを測る)。主柱穴は4か所あり、柱筋を各壁体の辺と平行させるほぼ正方形プランを呈する(柱間隔は、P1から右回りで2.1m→2.05m→2.2m→1.95m)。主柱穴の平面形は円形で、規模は径約0.4mを測る(南西隅柱の掘形のみ大きく、径0.8mを測る)。掘形内に残る柱当たりは、径10~20cmの円柱痕跡で、掘形の深さは17~25cmで全体に浅い。北壁中央に1か所(長径1.5m・幅0.7m・深さ0.2mの不整長円形)、東壁の下の中央と北寄りに2か所(長径0.7m・深さ約0.25mの円形)で、貯蔵穴(壁下土坑)と思われる土坑が周壁溝を切るかたちで穿たれている。床面上あるいは覆土中から布留式土器が出土しているが、いずれも破片資料で完形品を含まない。

S D9519 調査区の東壁際で検出された、東側に向かって傾斜する遺構である。西側の上縁線は、やや蛇行するものの直線的で、ほぼトレンチの東壁ラインと平行しており、その軸線はほぼ正南北を示す。東側の状況が調査区外のため不明であるが、南北方向の素掘り溝の可能性はある(検出幅は0.25~1.8m)。北側は、東側にほぼ直角に折れまがっており、この屈曲部から南北に5.5mの範囲は、一段深く掘り込まれている(検出面からの深さ約0.6m)。南端は、調査区外にのびるが、隣接する4トレンチでは確認できず、調査区を出るとすぐに途切れるようである(溝の検出長は40m)。埋土は、暗茶灰色土(褐灰色土混じり)が堆積するが、北端の深掘り部には、下層に暗灰色土(淡黄灰色粘砂土混じり)が入る。重複関係から、掘立柱建物跡より新しく掘られたものである。

S K9520 S B9515の北東隅柱の北に接し、円形プランを呈する土坑である(直径1.2m・深さ0.5m)。断面は楕円状を呈し、内部には耕作溝内埋土に近い淡褐灰色土が堆積していた。S K9513と同様、近世以降の野井戸の掘形とみられる。

S K 9521 S H 9518の北約2mで検出された土坑である。平面形は、隅丸長方形(長辺約2.0m・短辺約1.5m)を呈し、各辺の示す方位はS H 9518や後述のS H 9522と等しい。断面は、平坦な底部をもつ逆台形で、深さは等しく0.1mを測る。埋土は、竪穴式住居跡と近似し、内部から布留式土器片が出土した。

S H 9522 S H 9518の北北東2.5mに位置する竪穴式住居跡である。東壁部分が後出するS D 9519に切れ消失するが、隅丸方形プランを基本とする(但し、西壁線に対する北・南壁線は直角に折れずやや鈍角に交わるため、南北長は東に向かうにつれて長くなる)。検出面での規模は、西辺長4.7m・東西最大検出長4.5m、床面までの深さ0.2mを測る。また、西壁辺の示す方位は、N10°WでS H 9518の軸線と等しい。周壁溝は、北辺の東半部の壁下に存在する(幅0.25m・床面からの深さ0.05m)以外はみられない。支柱穴は、4支柱構造で、その平面形はややいびつな正方形プランを呈する。柱間隔はP 1(この住居跡覆土上面から掘り込まれたS D 9519から派生する南北溝の下にかくれて図示していない)から右回りで2.2m→2.1m→2.3m→2.4mとなる。柱穴の平面形は円形(直径0.35~0.5m)で、径10~15cmの柱当たりをとどめる。掘形の深さは、床面から12~13cmと浅い。北辺の西半部の壁下に接して大小の土坑が並列している。大型の方は、長軸1.0m・短軸0.7mの卵形プランを呈し、「U」字形断面(床面からの深さ0.13m)に掘り込まれるのに対し、小型の方は小ピット状を呈し、支柱の掘形とみられる。覆土中から微量の布留式土器が出土した。

S B 9523 建物跡の大半がS H 9522と重複する掘立柱建物跡である。建物形式は、東側が調査区からはずれるため断言できないが、他の建物跡と同様4間×2間の南北棟の建物跡とみられる。建物跡の規模は、西入側柱筋が等間隔柱間(2.1m等間)をとっていることから、妻柱筋の柱間(西1間は南北とも1.8m)も等間隔に割りつけられていると仮定すれば、桁行総長6.3m・梁間総長3.6mに復原できる。側柱筋の示す方位は正南北を示す。柱の掘形は、隅丸方形プラン(一辺0.6~0.7m)を呈し、検出面からの深さ0.3~0.6mを測る。柱痕跡は径17~20cmの円柱である。重複する遺構との新旧関係は、S H 9522より新しく、S D 9519に先行する。

S H 9524 S H 9522の北北西1.5mに位置する竪穴式住居跡である。平面形は、北・東・南の3辺が座標軸にほぼ平行するのに対し、西辺のみがN13°30'W(他の竪穴式住居跡と近似する)の方位をとるため、正方形を指向するものの若干矩形プランとなる。規模は、軸線間で計測すると南北4.6m・東西4.3mを測る。床面は水平面をなさず、ゆるやかな起伏をとるため、検出面から床面までの深さは一定せず、0.08~0.18mを測る。周壁溝は、各辺とも壁下に断片的にしか存在しない(幅0.15~0.3m・床面からの深さ0.1m前後)。支柱穴は4支柱構造と考えられるが、南東隅柱は複数のピット状土坑が複雑に重複し合い特定できない。柱間隔はP 1-P 4間が約2.0m、P 3-P 4間が1.75mを測り、各辺の柱筋は各壁体の示す方向とほぼ平行するようである。掘形の平面形はほぼ円形(径0.35~0.5m)で、径10cm前後の柱当たりを残す。柱穴の床面からの深さは0.08~0.18mと、非常に浅い。弓なり状に内湾する東壁の南寄りで壁体が幅0.8mにわたって、東へ0.4m膨らむところがあり、これに接する住居跡内にピット状土坑が複数掘り込まれている。

S B 9525 S H 9524の西壁ラインと西入側柱筋がほぼ一致して、その東側に展開する掘立柱建物跡である。4間(4.5m)×2間(3.0m)の南北棟の建物跡で、主軸はN 3°Wを示す。柱間寸法は、桁行・梁間とも1.5m等間である。但し、西入側柱筋には南北両端間間にこの柱筋にのる柱穴があり、補助柱として機能したとみられる。柱の掘形は、隅丸方形あるいは円形に近い方形プランをとり、一辺0.35～0.6mを測る。柱痕跡は径15～20cmである。東側柱のいくらかはS D 9519と重複するが、この内中柱2基はS D 9519の下層埋土上面から掘り込まれており、建物跡の方がS D 9519の掘られた時期より新しい。

S K 9526 S H 9524の西方4.5mに位置し、東西方向に長軸をもつ土坑である。西側が調査区外となるが、長楕円形プランとみられる(最大幅1m・長軸1.8m以上)。断面は、平坦な底部をもつ舟底形で(検出面からの深さ0.24m)、内部に炭・焼土を少量混じえた暗茶灰色粘砂土が堆積する。布留式土器の小片が少量出土した。

S D 9527 調査区の北端の拡張部で検出した東西に主軸をもつ溝状遺構である(検出長5.1m・幅1.0m、検出面からの深さ約0.2m)。横断面は、幅のある平坦な底部から側壁が直線的に外上方に立ち上がる逆台形を示す。内部には上から暗茶褐色土・暗灰色粘質土・暗灰色土がレンズ状に堆積する。検出部分の西半の溝底には、径15cm前後の円孔が多数乱雑な配置で穿たれる。7世紀とみられる土師器高杯片が1点出土している。

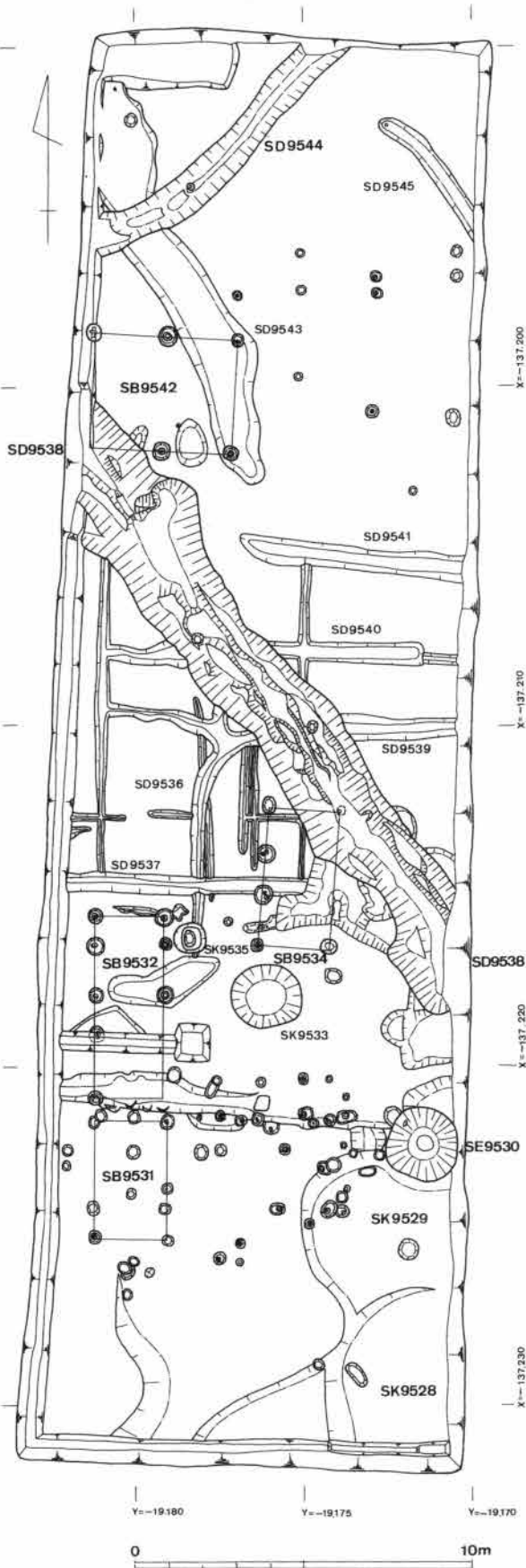
このほか、住居跡S H 9524の北側の攪乱土(黄褐灰色土)中から中世の銭貨(「元祐通宝」ほか)が採取されている。

[6 トレンチ]

トレンチ内の基本層序は、上位から1)黄灰色粘質土=床土、2)(暗)褐灰色粘砂質土(遺物包含層)、3)黄褐灰色粘質土、4)暗灰色粘砂土または同色粘土、5)淡灰褐色または(暗)青灰色砂質土の順で堆積する。このうち2)層は、トレンチの南半部にのみにみられ、代わって北半は同層位に(淡)灰褐色砂質土が入る。遺構検出は、2)層上面で実施したが、調査区北半では2)層相当層をさらに下げて4)層上面を検出面とした。検出した遺構は、掘立柱柱穴多数と井戸2基、自然河道1条、溝、土坑などである。掘立柱群は複雑な配列を示すが、4棟を建物跡として復原した。

S K 9528・9529 調査区の南東隅で検出した浅い土坑である。両者は、径約5～6mの円形プランを基本としているようで、南のS K 9528が北に隣接するS K 9529を切って後出する。埋土はともに暗茶褐色粘質土で、内部から布留式土器がややまとまって出土した。側面(壁)がゆるやかに傾斜する点を除けば、底部が平坦であることや、平面規模などから竪穴式住居跡の可能性もある。

S E 9530 S K 9529の北に接してこれを切る井戸である。掘形は、四隅がやや角張る円形プラン(径2.0m)で、断面は平坦な底部(径1.0m)から側壁が直線的に外上方にのびる逆台形を呈する(検出面からの最大深さ1.34m)。掘形のほぼ中央に、井戸側が検出面付近まで遺存していた。その構造は、底板を抜いた既成の曲物を4段積み上げて井戸側としたもの(曲物積み上げ井戸)である。曲物は、上段ほど径が大きく(直径38～45cm)、すべて底部側を天にして用いている。最上段の曲物は、他と比べ極端に遺存状態が悪いが、よく観察すると編籠のような組織が認められ、材



第35図 6トレンチ平面図

質や結束方法も他とは明らかに異なる。掘形埋め戻し土、及び井戸側内堆積土から瓦器などの中世の遺物が若干出土した。特に、井戸側内最下位の井戸底付近で完形の瓦器椀が1点出土した。

S B 9531 S K 9530の西側6.5mのところに位置する南北棟の掘立柱建物跡である。規模は、桁行総長3.5m・梁間総長2.2mを測る。建物形式は、柱穴に欠落するものがあり、不詳ながら、桁行3間×梁間1間に復原するのが妥当とみられる。桁行の柱間寸法は、南端間を約0.9mと狭くつくる以外は不明である。柱掘形は円形プラン(径0.3~0.4m)で、内部に径15cm程度の柱痕跡あるいは同規模の扁平な石による礎板を残すものがある。

S B 9532 S B 9531と棟筋(入側筋)をそろえて北側に0.7mの間隔で縦位に並ぶ掘立柱建物跡である。建物形式は、桁行4間(5.3m)×梁間1間(2.0m)の南北棟の建物跡である(建物跡の主軸はS B 9531と同じくほぼ座標北を示す)。入側柱筋の柱間隔は不等間隔で、北から0.85m→1.5m→1.15m→1.8mを測る。掘形の平面形は円形を基本とし(直径0.3~0.5m)、内部に径15~20cmの柱痕跡や扁平な河原石による礎板をとどめるものがある。

S K 9533 S B 9532の東2mにある素掘りの円形土坑(直径約2.0m)である。断面は逆碗形を呈する(検出面からの深さ0.8m)。形状から井戸の掘形とみられるが、井戸側は撤去されていた。

S B 9534 S B 9532の東約2.7mにあって、S B 9532の北第2柱筋を東に延長したライン上に南妻側柱筋がくる掘立柱建物跡

である。桁行3間(4.1m)×梁間1間(2.1m)の南北棟の建物跡である(建物跡主軸はN4°30'E)。西入側柱列の柱間寸法は、北2間は1.3m等間であるのに対し、南端間のみ1.5mとやや広くとる。掘形の平面形態は円形を基本とし(直径0.35~0.5m)、径15cmの柱当たり、あるいは扁平な石材による礎板を残す柱穴がある。なお、東入側柱筋の柱穴の大部分が自然河道S D9538と重複するが、この部分の柱は河道が埋没して後、その埋土上面から掘り込まれている。

S K9535 S B9532の東側に接する円形プランの土坑である(直径0.9m)。断面形は3段落ちとなり、上2段の側壁は上外方に傾斜するのに対し、下段は垂直に近く掘り込まれる(検出面からの最大深0.3m)。坑内埋土は、炭・焼土を多く含む暗茶褐色土である。瓦器片が出土した。

S D9536・9539 S B9532北半の東約1.0mから始まり、座標北方向に約6m直進した後、ゆるやかに90°の方向に曲折して東へと伸びる素掘り溝である。埋土は黒褐色土で、特にS D9536部分では焼土を多く含む。重複する遺構は、自然河道S D9538を除きすべてこの溝よりも新しい。

S D9537・9540・9541 調査区の中程を、ほぼ平行に東西に走る素掘り溝群である。埋土は暗褐灰色土で、近世以降の耕作溝とは明らかに異なる。各々の溝の心々の間隔は、北からおよそ3m・7mを測る。出土遺物は皆無で、時期は不明である。

S D9538 トレンチの中程を北西から南東方向に直線的に流れる大規模な溝である。溝の主軸(中軸)線はほぼN36°Wを示す。溝の上縁幅はほぼ一定しており、2.0~3.0mを測る。溝の横断面形は、基本的には深い「U」字形を呈するが(検出面からの深さは約1.0mを測る)、激しい流れによって側面から底面にかけての変形が著しく、複雑な形状を呈する。溝内埋土は、堆積と再開析を繰り返し、地点によってかなり変化するが、トレンチ西壁際で観察すると、大きく3層に分離できる。上からⅠ褐灰色系の粘質土、Ⅱ灰色系の砂、Ⅲ暗灰色系の粘質土となり、下半のⅡ・Ⅲ層から布留式土器がややまとまって出土した。この溝の性格は、一定の幅を保って直線的に流れることからみると、人為的な構築物ともとれる。しかし、激しい流れを示す埋土の状況を見ると、自然に開析された河道とみる方がふさわしい。

S B9542 トレンチの北半西寄りで検出した掘立柱建物跡である。建物形式は、西側が調査区外にのびる可能性も残すが、トレンチ内で検出した分で復原すると、2間(4.2m)×1間(3.4m)の東西棟の建物跡である。柱間構成は等間隔柱間を採り、桁行2.1m(7尺)等間・梁間3.4m(11尺)を測る。柱掘形は円形を呈し(直径0.3~0.5m)、大半の柱穴中には径10~20cmの柱痕あるいは柱当たりをとどめる。また、北西隅柱の掘形底には、木板を十字に組んだ礎板が遺存していた。

S D9543 調査区の北西端で検出された浅い素掘りの溝である。S B9542の南東隅柱付近から始まり、主軸をおよそN25°Wの方位にとって直線的に北西にのびるが、北側は調査区外にのびる(検出長12.5m)。横断面形は、幅の広い平坦な底部とゆるやかに内湾ぎみに立ち上がる側壁からなる(検出面からの深さは約0.1~0.2m)。埋土は、暗褐灰色粗砂礫土が単一で堆積し、内部からの出土遺物はなかった。重複遺構との新旧関係は、S B9542よりも新しく、S D9544に先行する。

S D9544 S D9543と直交する方向に流れる素掘り溝である。両端ともに調査区外にのびるが、北東側は隣接する7-Aトレンチに続く(検出総長約15.0m)。調査区内の流路プランは、北西側

に中心をもつゆるやかな円弧状にカーブする。溝の横断面形は、側壁が外上方に立ち上がる「U」字形を呈し(検出面での幅はほぼ一定で1.0mを測る)、溝底は南西に向かうにつれて段状に浅くなる(検出面からの深さは0.05~0.45mを測り、北東側ほど深くなる)。内部には淡褐灰色砂が堆積し、埋土中から遺物は出土していない。

S D 9545 調査区の北東隅で検出した小規模な溝である。北端は途切れるが、南側は調査区外にのびる(検出長4.5m)。横断面は、側壁が外上方に大きく開く「U」字形を呈する(検出面での幅は約0.5m、深さ0.05mを測る)。埋土は、黒灰色土で炭が混じるが、出土遺物はない。

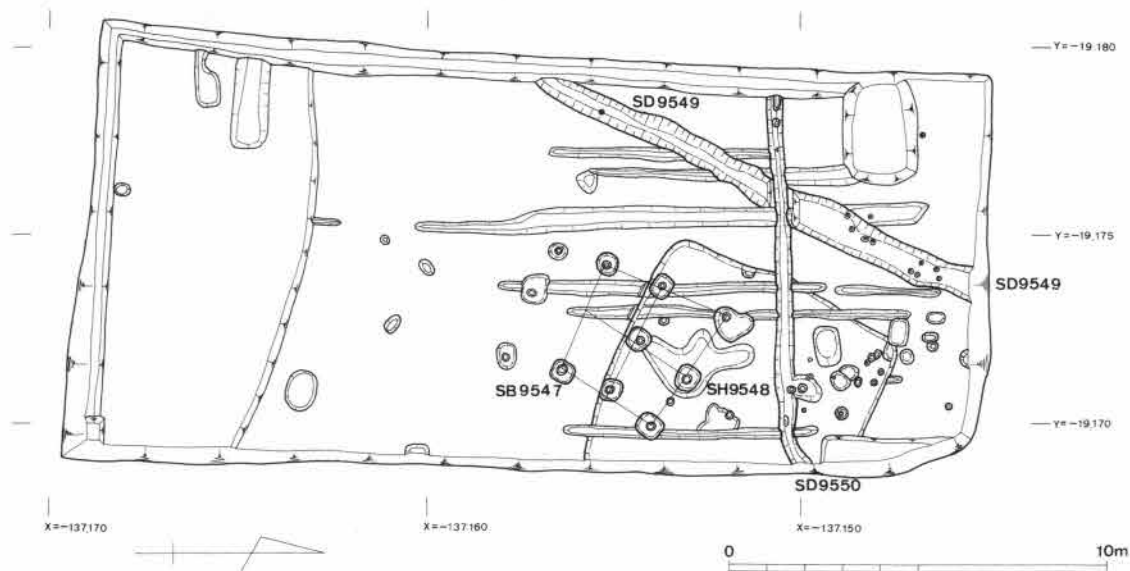
[7-A トレンチ]

調査区内の層序は、基本的に6トレンチ北半と同じで、1)床土、2)暗灰褐色粘砂質土(包含層)、3)黄褐灰色粘質土、4)黄褐灰色砂礫土となる。遺構検出は、2)層上面(標高約33.9m)で実施した後、2)層を除去して再査した。その結果、上層で土坑1基と、6トレンチからのびるS D 9544の延長部を検出した以外、下層も含め顕著な遺構・遺物は希薄であった。

S K 9546 トレンチの中間西寄りで検出した土坑である。平面形は、円形に近い隅丸方形(長軸1.0m・短軸0.9m)を呈し、四辺の示す方位は、ほぼ正方位を指す。断面形は2段構造となり、上段部はゆるく内湾しながら外上方に立ち上がる「U」字形を呈する(検出面からの深さ0.15m)。しかし、下段部分は側壁が急角度で落ち込み、やや凹凸のある底部に至る(上段土坑底からの深さ0.2m)。埋土は、上下段で明瞭に異なり、上段が暗褐色系の粘質土であるのに対し、下段は暗灰色系の砂質土である。上段部分に限って土器資料がややまとまって出土した(土師器甕・直口壺、須恵器杯蓋、不明鉄製品などでいずれも破片である)。

[7-B トレンチ]

調査地の土層堆積は、上位から1)黄褐灰色土(床土)、2)褐灰色土、3)暗褐灰色土、4)灰色粘質砂土の順であるが、全体に2)層以下は、北側ほど傾いている。遺構検出は、2)層上面(標高33.9m)相当位で行ったが、調査区南半は3)層中位まで掘り下げて遺構検出にあたった。その結果、



第36図 7-B トレンチ平面図

調査区北半の上層検出面で、近世以降の耕作溝に混じり掘立柱柱穴・竪穴式住居跡様土坑・溝を検出した。

S B 9547 調査区中央やや北寄りの地区で、一辺0.6m規模の柱穴の群在がみられる。これらは正方眼に通る柱筋を見出しにくい配置をとるが、一応図のような建物跡案に復原した。それによると、建物形式は、2間×2間の側の中央に東柱の掘形をもつ総柱構造をとる(但し、南側柱筋の中柱は欠損する)。各側柱筋の交角(内角)は、南西隅のみが90°であるのに対し、北西隅78°、北東隅93°、南東隅100°を測り、矩形プランとなる。柱間寸法も不同で、北西隅柱を基点に右回りで示すと、1.9m→1.6m(北側柱総長3.5m)、1.4m→1.4m(東側柱総長2.8m)、1.75m→1.2m(南側柱総長3.0m)、1.65m→1.85m(西側柱総長3.5m)を各々計測する。柱の掘形は、側・東ともにほぼ同規模・同形態で、方0.45~0.7mの円形に近い隅丸方形プランを呈する。柱痕は残らないが、大半の柱穴内に径15~20cmの円形の柱当たりをとどめる。出土遺物はなかった。

S H 9548 S B 9547の北半と重複し、北側に展開する方形プランの浅い落ち込みである。平面プランや底面が平坦で側が垂直に立ち上がることなどから、竪穴式住居跡の可能性はある。平面形態は、東辺部が調査区からはずれるが、向かいあう一辺が平行する正方形を呈する。規模は、主軸長で南北7.0m・東西6.5m以上、検出面からの深さは非常に浅く約0.05mを測るにすぎない。床面には、大小のピットや不整形の浅い土坑がみられるが、周壁溝はなく、支柱穴も抽出しがたい。覆土は、褐灰色土混じりの暗茶灰色土が単層で堆積するが、埋土中の遺物はなかった。

S D 9549 S H 9548の西1.5mにあつて、その西壁の示す方位とほぼ平行する主軸(N26°E)をもつ直線的な素掘り溝である。両端は調査区外にのびるが、検出長13.0m分を確認した。溝の形状は、調査区内ではほぼ一定の幅を保ち(検出面での上縁幅0.6~1.1m)、横断面は、側壁が外上方に立ち上がる「U」字形を呈する(検出面からの深さ約0.3m)。埋土は2層に大別でき、上層は灰色粘砂、下層は暗茶灰色系土なる。下層埋土中から多量の布留式土器が出土したが、それらは比較的細片資料が多く、溝底から若干浮いたところに集中していた。

S D 9550 S D 9549の中程でこれと斜交する直線的な素掘り溝である。両端は、調査区外にのびるが、トレンチをほぼ横断する方向(東西)に流れ、東端はわずかに北側に折れまがる(検出長10.0m)。幅はほぼ一定を保ち、約0.5mを測る。横断面形は「U」字形を呈し、検出面からの深さは約0.2mと、幅に対してやや深い。S D 9549・S H 9548が埋没した後、その埋土面から掘り込まれており、より後出する。内部には暗茶褐灰色土が堆積していた。

[8 トレンチ]

7 トレンチの農道を挟んだ北側にあたり、基本層序は、1)暗灰色土(耕土)、2)淡灰褐色砂質土、3)暗灰褐色硬質粘質土、4)青灰色シルト質砂土の順である。流れ堆積(洪水砂)である2)層まで除去し、安定した3)層上面で遺構検出を試みたが、遺構・遺物ともにみられなかった。

[9 トレンチ]

調査対象地は、東西道である枚方-精華線を境に、これから北方は、南北道の東西で水田耕作面の標高差が大きくなり、東側が約0.5m低くなる地勢を示す。こうした1段低い南北道東側に

9 トレンチを設定した。基本層序は、上位から1)淡褐灰色粘質砂土、2)褐灰色粘質土(中世の包含層)、3)暗褐灰色硬質砂土、4)淡褐灰色砂質土、5)淡青灰色砂質土となる。遺構検出は、安定した3)層上面(標高約32.1m)で行った。その結果、平行する南北主軸の鋤溝(素掘り溝)数条と、小ピットを2か所検出した。遺構の帰属時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

[10トレンチ]

9 トレンチの北方50mで、今回の調査対象地の北端に設定した試掘トレンチである。層序は、上位から1)淡褐灰色土、2)暗褐灰色土(中世の包含層)、3)暗黄茶色粘砂質土、4)黄茶灰色粘砂質土、の順となる。調査は、包含層の2)層を除去して、3)層上面で遺構検出を行った。その結果、大小の溝状遺構を3条検出した。

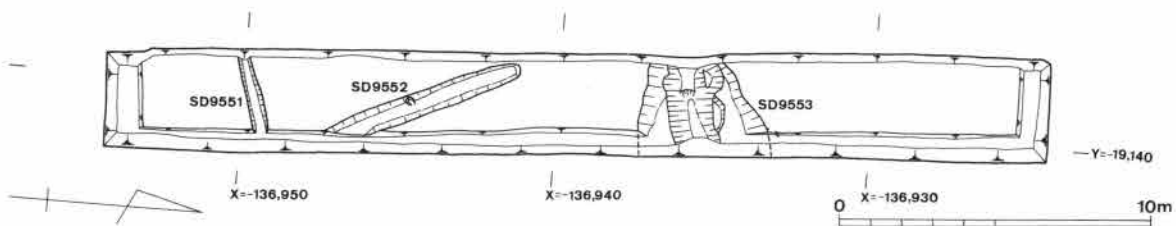
S D9551 調査区の南寄りで検出した東西主軸(N72° E)の直線溝である。上縁幅は0.35~0.5mで、深さは検出面から0.3mを測る。横断面形は、やや平坦ぎみの底部から側壁が垂直に近く立ち上がる形状を示す。埋土は2層に分かれ、上層は炭の混じる暗灰色粘質土、下層は暗黄灰色粘質土で、上層から布留式土器片(細片が多い)が多量に出土した。

S D9552 S D9551の北側でトレンチの主軸に対して斜行する軸線(N25° W)をもつ直線的な溝状遺構である。トレンチ内では主軸長6.5mにわたって検出したが、北端は途切れる。上縁幅0.5~0.7m・深さ0.15mを測り、横断面は側壁が大きく外上方に開く「U」字形を呈する。溝中の埋土は暗褐灰色粘質土で、内部から中世の遺物(瓦器羽釜など)と布留式土器が少量出土した。

S D9553 トレンチの中央やや北寄りで、調査区を横断するやや規模の大きな東西溝である(検出面での幅は2.3~4.1mを測る)。横断面形は2段構造を呈し、上段の側壁が緩傾斜であるのに対し、下段はより急斜面となる。側面や底面には凹凸が多く、自然の流れによる開析の跡が顕著である。埋土は、上段が暗褐灰色粘砂質土、下段が黄茶灰色砂となり、下段埋土中から布留式土器片が少量出土した。

[11トレンチ]

8 トレンチの北方約30mで、9 トレンチとの間に、後で追加した試掘トレンチである。基本層序は、上位から1)淡褐灰色土(南半は黄褐灰色粘質土で瓦器を含む)、2)暗褐灰色硬質粘質土、3)黄茶色粘質土(南側は茶色シルト質粘砂土に漸移)、4)黄灰色粘質土、5)青灰色粘土の順に堆積する。遺構検出は、3)層上面で行った。その結果、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。



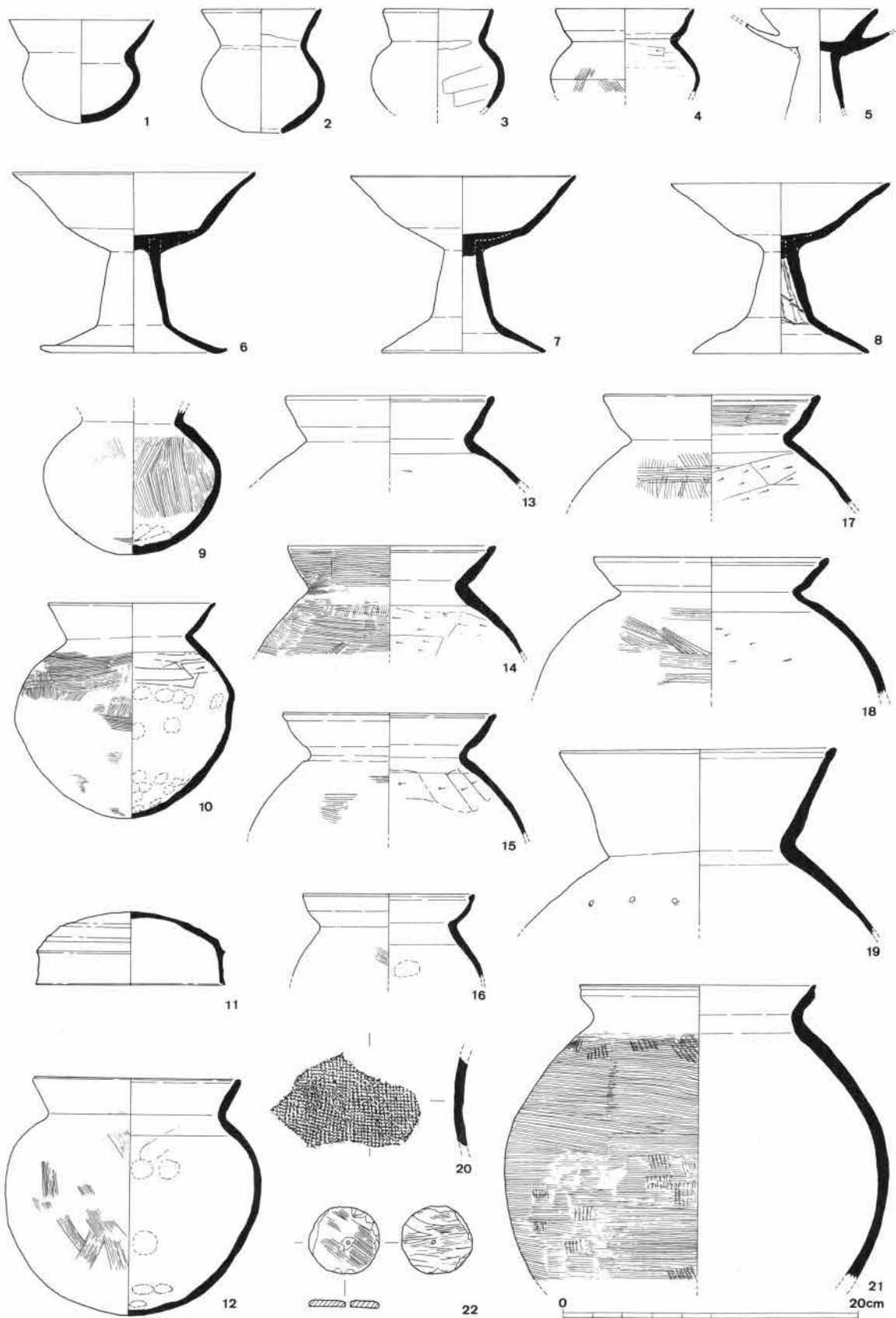
第37図 10トレンチ平面図

3. 出土遺物

1～4は、小型丸底土器である。やや扁平なものから、腰高のものまで多様な形態を示す。体部調整は、外面をナデで平滑に仕上げるもの(1)、先行するハケメの段階で終了するもの(4)がある。内面はヘラ削り痕を残すもの(3・4)と、これにナデを加えて器面をならすもの(1)に区別できる。形態や調整手法から、1が他に比べ古い要素をもつ。5は、二重高杯である。遺存・残存率が低い。杯部の内側に外上方に外反する小さな受け皿状の口縁を付加する特異な形状を示す。器面調整は不明である。6～8は、通常の高杯である。いずれも体部と口縁部の境界がゆるやかに屈曲するが、その接合稜線は不明瞭である。脚部は、柱状部と裾部の境界が屈折する。いずれも磨耗の度合いが強く、詳細な製作手法はわからないが、杯体部の内外に放射状のハケメがわずかに認められるもの(6・7)がある。柱状部内面は、しぼり目を残すもの(8)と、これにスリナデ技法を加え平滑化するもの(6・7)の区別がある。9は、口縁部を欠くが、体部はほぼ完存しており、法量から小型の直口壺とみられる。体部外面は、全面をハケで調整した後、上半部にヨコナデを加えた痕跡が観察できる。内面は図示する範囲にいていねいな縦基調のハケメを施し、底部は指頭によって粘土を最下点に向かって押し下げる。甕(10・12～18)は、すべて直口口縁で二重口縁のものは極めて少ない。法量の違いから小型・中型品であるが、大型のものはみられない。完存する小型の10・12の形態をみると、最大腹径を体部中半(10)、または上半(12)に位置させる球形に近い体部をもつ。口縁部は、内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は内傾させて肥厚する布留式土器の典型的なもの、内湾せずに直線的に外上方に開き、口唇部がわずかに内外に肥厚させるもの(12)があり、前者が圧倒的に多い。体部の調整技法は、外面は全面に縦基調のハケメを施した後、肩部内外に横位のハケを加える。内面は、口縁くびれ部の屈曲点から数cm下位以下を横位にヘラケズリし、下半から底部にかけて指頭によるていねいな押圧を加える手法をとる。ただし、16は、外面肩部のヨコハケを省略しており、12は全体形状も特異ながら、調整手法も上記とは異なり、体部外面は一部口縁部にまで及ぶ縦基調のていねいなハケメを施し、肩部にヨコハケは全く加えない。内面は、体部全体を指頭押圧で調整し、削り調整を施さない。19は、円形の体部から口頸部が長く外上方に直線的にのびる直口壺である。口縁部接合線に強いヨコナデが施され、その屈曲はあいまいである。口唇部は内側に肥厚し、内傾するやや長めの面をなす。体部上半(肩部)外面に円形刺突が横位にほぼ等間隔に並ぶ。調整は磨耗のため不明である。

20は、韓式系土器の体部の小片資料である。焼成は赤褐色軟質で、外面に細かい格子叩き目が施される。

11は、須恵器杯蓋である。天井部は丸味を帯び、垂下する口縁部との境界の稜はやや鋭い。口唇部には内傾する段を有する。調整は、天井部外面の3/4まで回転ヘラケズリ、以下内面にかけて回転ユビナデ、天井部内面はその1/2の範囲にさらに一定方向のユビナデを加えて仕上げる。21・47・48・49は、須恵器甕である。ともに底部を欠き、全体形状は不詳ながら、21はやや扁球ぎみの球形、48はやや肩の張った長胴ぎみの球形の体部を呈すると思われる。体部と口縁部の境界はゆるやかに屈曲し、稜をなさない。口縁部は、ともに外反し、とくに21は短い。口唇部の形



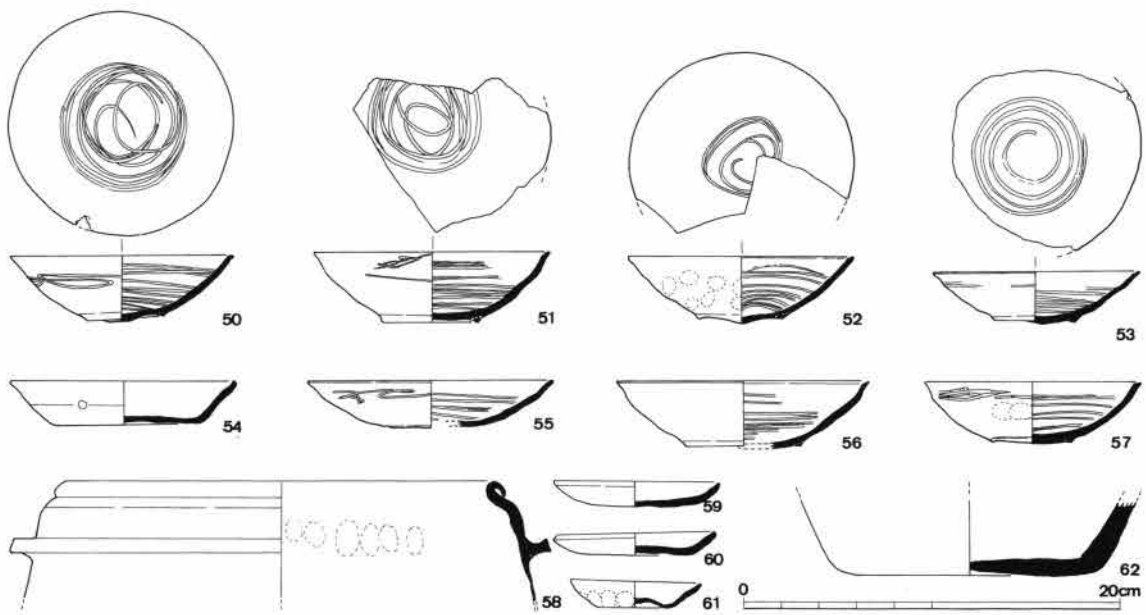
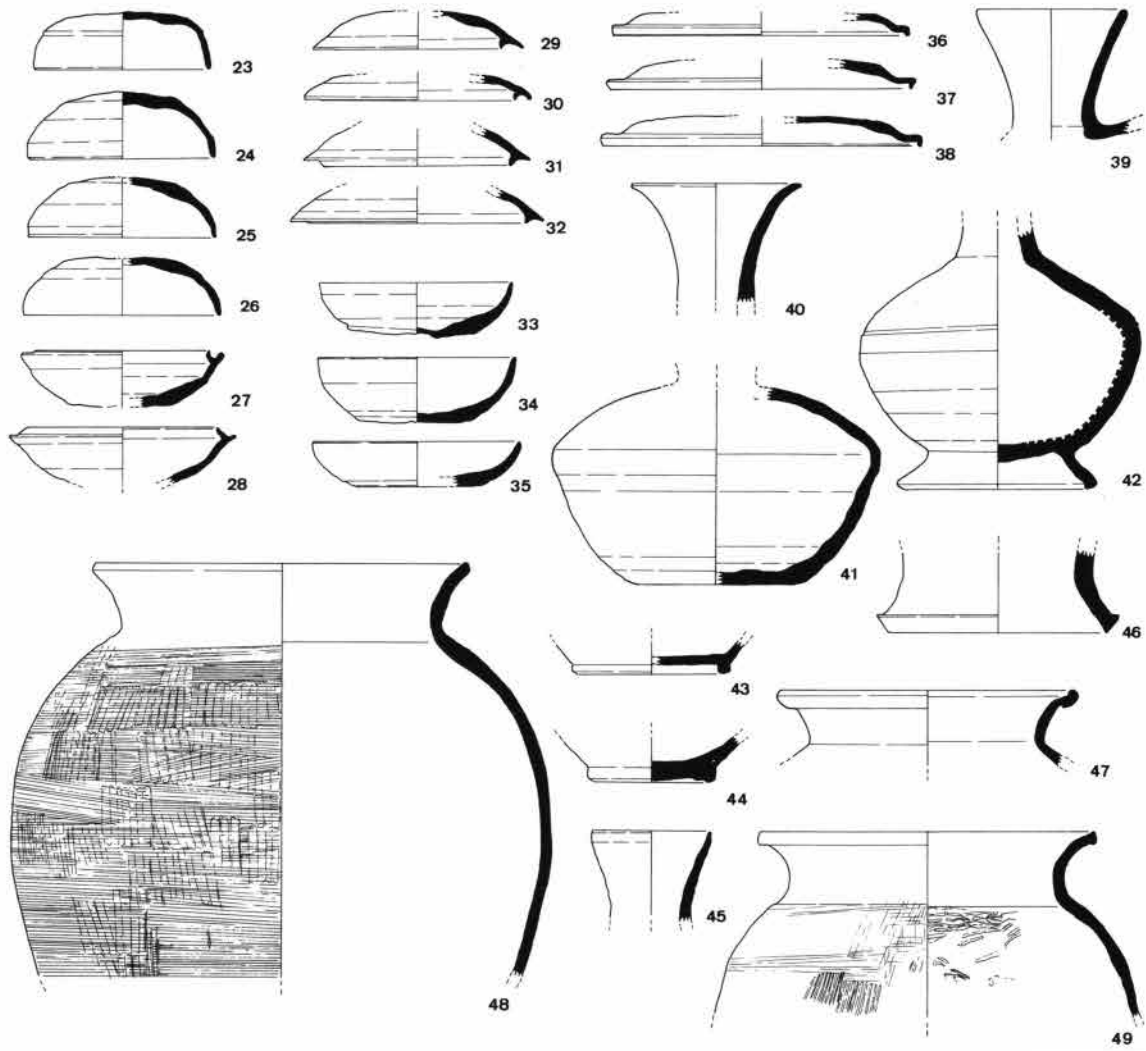
第38図 出土遺物実測図(1)

1. S K9528 2~4・13・14・16・17・20. S D9510 6・10・11・15. S D9549 7・18. S H9506
 8・19. S H9524 9・11・12. S K9546 15. S D9549 5・21・22. 4トレンチ包含層

状は、21では内端部を細かくつまみ出すのに対し、48は肥厚せず方頭状におわる。49は、上下に肥厚し側方に面をもつ。47は、体部上半から口縁端部にかけて2度屈曲し「コ」字形の形状を呈する。口唇部は、内外に丸く肥厚し、玉縁状につくる。調整手法は三者とも共通しており、体部外面は上位ほど左傾する縦基調のタタキメを施した後、ヨコ方向のナデを加え、タタキメを不完全ながらならした後、残存部のほぼ全面にわたってカキメ調整を加えて仕上げる。内面は、同心円叩き痕をユピナデで消すが、49では完全に消しきれていない。

有孔円盤(22)は、滑石製の石製模造品で、外縁に欠損部がみられるが、直径2.4cmのほぼ正円形の平面形を呈する。穿孔は径1mm前後の円形を呈し、中央に1か所である。図の左面の孔の周囲は、穿孔時に浅い挿鉢状に割れている。表裏面に一定方向に施された擦痕が観察できる。

須恵器蓋杯類は、杯H(23~28)、杯G(29~35)、杯B(36~38)に分類できる。但し、HとGの区別はむずかしく、身と蓋を逆転して示した可能性はある。23は、口径10cm前後と小型であるが、他の杯H蓋と異なり、天井部と口縁部の境界の屈曲が目立ち、この部位に1条の浅い沈線がめぐる。これに対し、24~26は天井部と口縁部の区別が不明瞭で、丸くなだらかなカーブを描く。調整は、回転ロクロナデで内外面を仕上げるのを基本とするが、天井部外面にわずかにヘラ切り痕を残すものが多い。また、23の場合、天井部内外面に一定方向のナデを加えている。杯H身は、いく分丸味を帯びた体部にやや外反する口縁部を備えたもので、立ち上がりは短く、受け口状にカーブを描くもの(27)と、内上方に直線的にのびるもの(28)がある。器面はロクロナデで仕上げるが、底部外面にヘラ切り痕をとどめるものもある(27)。杯G蓋は、いずれも小片資料の図上復原で、口径や形状に若干の問題を残すが、丸味を帯びた天井部を有し、口縁部内面に比較的長いかえりを有する。調整は、ロクロナデで仕上げるのを通例とするが、天井部を残す29では、天井部外面に回転ヘラケズリが残る。また、図示していないが、この杯G蓋にともなうとみられる、断面が菱形の宝珠つまみがある。杯G身は、杯H身と近似するプロポーションをもつが、底部が平坦である点から区別した。器面調整はロクロナデを基本とするが、底部外面はヘラ切り後軽くナデ付けるが、凹凸を残す。また、33の底部内面は一定方向のナデを加えてていねいに調整する。杯B蓋(36~38)は、口縁部が「Z」字状に屈曲するもので、天井部はやや丸味を残して高い。37・38の口唇端の垂下部は短く内傾し、その側面は直線的な面をなす。調整は、口縁部内外が回転ロクロナデ、天井部は内外とも不明瞭ながら一定方向のナデを加える。39・40は、外上方に直線的あるいは外反して立ち上がる細身の口縁部片で、39は平瓶、40は長頸壺(壺KないしはL)の口縁部である。口唇部はいずれも丸くおさめ、内外ともロクロナデ調整で仕上げる。一部残存する39の体部は、内外とも一定方向のナデで平滑に仕上げる。41・42は、細い口頸部と肩が張って弱い稜角を呈する体部からなる壺(長頸壺または細頸壺)である。41は無高台で、平坦な底部から外上方に内湾ぎみに立ち上がり、肩部で屈曲して体部上半も内湾ぎみにおさめる。調整は、外面が底部を除いて回転ヘラケズリ後、体部下端を除きていねいなロクロナデを加える。底部外面は、軽い不整方向のナデでヘラ切り痕を平滑にならす。内面は、底部を除きロクロナデで仕上げる。42は、比較的高い高台をもち、体部が肩部でゆるく内方に屈曲し、その屈曲点に1条の沈線をめ



第39図 出土遺物実測図(2)

23. S D9508 27. S A9517 30・34・45. S D9519 31. S H9518 42. S K9509 50・54・55. S E9530
 51・56. S K9533 62. S D9539 24・29・32・33・37~41・46・47・49. 4トレンチ包含層
 25・26・28・35・36・43・44・61. 5トレンチ包含層 52・57~60. 6トレンチ包含層

ぐらせる。体部上半は、直線的に内上方にのび、口縁部は残存部で依然として内上方に傾いてのびている。高台は、やや「S」字状に屈曲し、その内端面で地上に接する。外面調整は、体部下半を回転ケズリ、屈曲点の下数cm以上はロクロナデ、底部は不整方向のナデを加える。43は、底部の外縁付近に低い高台が付き、杯B身とみられる。内外面ともロクロナデを施した後、底部内面の中心部寄りに不整方向のナデを加えて平滑に仕上げる。45は、外反ぎみに立ち上がり、口縁端部がやや内湾する細身の器高の低い口縁部片で、平瓶の可能性はある。

44は、いわゆる蛇の目高台をもつ灰釉陶器である。施釉は内面のみで、内底面の縁部に1条の沈線がめぐる。高台は、削り出しによって作り出すが、凹凸が激しく整美ではない。椀あるいは瓶類の底部とみられる。

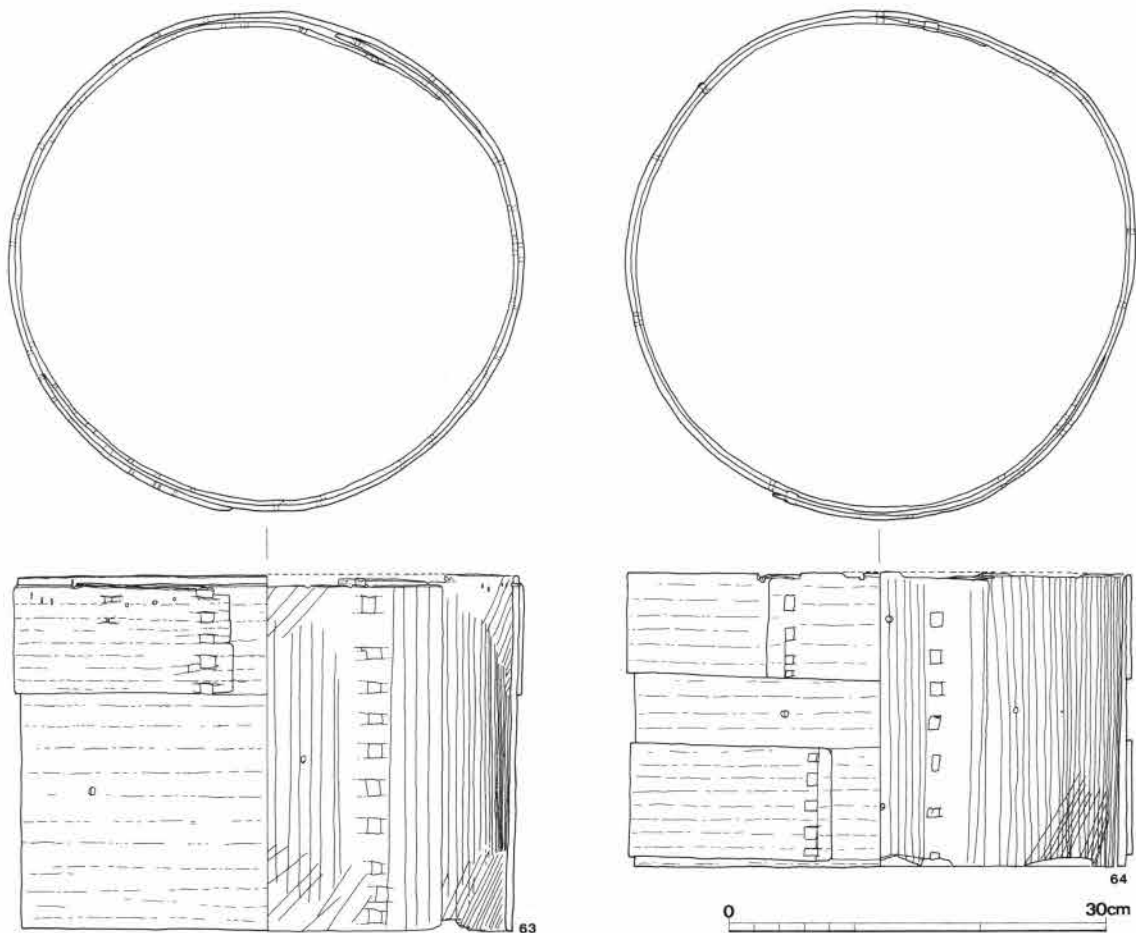
瓦器椀(50～53・55～57)は、大半が口径の割に器高が比較的浅く、やや扁平な形態を呈する。口唇部の形状は、内端部に明瞭な沈線をめぐらせるもの(50・53・56)と、内傾する段を有するもの(51・52・55・57)がある。高台は、スリツケ状の低い三角形のものが大半で、その作りは概して雑である。器面の調整は、口縁部付近の内外を回転ナデする以外、内面を一定方向のユビナデ、外面をていねいなユビオサエで製作する。ミガキは、外面では口縁部下1～2cmの範囲にのみ横方向に螺旋状に粗雑に施す。内面のミガキは、見込み部のミガキ(同心円状暗文)と連続してほぼ全面に施す。

土師器皿(54・59～61)は、法量の違いから中型品(54)と小型品(59～61)がある。54は、平坦な底部と、外上方にのびる体部との境界がやや鋭く屈曲し、体部中位はさらに折れて「S」字状に外反する。口唇部は方頭状におさめ、その端部は外傾する面をなすところがある。体部外面中位から体部内面にかけてヨコナデ、体部外面中位以下底部にかけて不規則なナデを加えて先行するオサエ痕を平滑にならす。赤褐色を呈する。59・60は、底部と体部の境はゆるやかなカーブをもって移行し、体部は内湾ぎみ(59)、あるいは直線的に立ち上がる。59は、体部内外面をヨコナデ、底部内面を一定方向のナデ、底部外面をオサエの後軽い一定方向のナデを加えて仕上げる。60は、体部外面から底部内面にかけてていねいなナデ調整を施し、底部外面にはユビオサエ痕が顕著に残る。61は、底部が押し上げられて上方に丸く突出するいわゆる「ヘソ皿」である。器壁は薄く、口縁外面から体部内面にかけてヨコナデで仕上げるが、口縁部以下の外面にはオサエ痕が残る。小型品はすべて淡黄灰色を呈する。土師器羽釜(58)は、直線状に内傾した体部上端がゆるく内折し、口唇部は外側に折り返して玉縁状に丸く肥厚させる。鐔部は、上・下面が丸くしほむ埴輪のタガ状を呈し、その突出は弱い。やや器面が磨耗しているが、内外ともオサエの後横基調のナデを加えて仕上げる。器面の色調は淡黄灰色で、一部に焼成時の黒斑がみられる。

石鍋(62)は、底部付近の断片資料である。ほぼ平坦な底部から体部が外上方にのびるが、その屈曲部は、外面は鈍く折れて丸味を帯びるが、内面の屈曲点は鋭い。外面全体に使用時の煤が付着し凹凸が激しいが、内面は極めてていねいに削って平滑にしている。石材は、滑石である。

曲物(63・64)は、6トレンチの井戸(S E 9530)の井戸側に転用されたものの内、比較的保存状態の良好な個体である。いずれも、井戸側に使用する際、底板を抜き取って井筒として用いたも

のである。なお、転用の際、63・64ともに天地を逆転していた関係上、実測図や写真も上下を逆にして示している。63には、口径(直径)40.0cmの正円筒形の側板(高さ28.5cm)の下端に幅8.5cmの帯(箍)を巻きつけている。側板は、厚さ5mm程度の檜の薄板材を用い、内面に垂直と斜め方向(上下端付近)にケビキを入れている。側板両端の接合のための重ね合わせ(打ち合わせ)の幅は8.0cmで、打ち合わせの方向は右前である。打ち合わせの綴じは、山桜の樹皮(樺)による1列の内綴じで、底側から外面返し縫いで綴じ始めて、口縁端で内面返し留めの手法で固定する。帯の側板への固着は、樺による2列の綴じ目が認められ、上端を固定する本綴じは1列の外綴じで、底側から外面返し縫いで始めて、口縁側で内面返し留めで固定する。下端の小綴じは、幅の狭い樺を4か所の挿し穴に内綴じ技法で綴じ合わせている。実測図の上縁の円周に沿って底板固定用の木釘穴が接続して残る。また、これとは別に、側板の中位にも一回り大きな円孔が長い間隔で同一円周上にみられる。64は、井戸側として63の上位に積まれていた円形曲物である(帯を含めた直径40.5cm・器高23.5cm)。2段の帯を側板の上下端に巻く。帯の幅は、上下ともほぼ同寸で8.0~9.0cmを測る。側板には檜の板目材の薄板(厚6mm)を用い、その内面には縦平行線と斜め平行線のケビキを入れる。側板の打ち合わせの幅は8.7cmで、打ち合わせの方向は右前である。打ち合わせの結合は、側板・帯ともに1列の樺皮縫いで、樺が上下縁外側を越えずに内側で納まる内綴じの技法による。なお、帯の樺皮縫いの上端側に挿し穴の割裂を防ぐ目的で1条の縦位のケビキ



第40図 S E 9530井戸側使用の曲物実測図

(外面ケビキ)を入れている。樺皮縫いの開始部と縫い終わりの処理技法については十分観察できていないが、綴じの終点部分は、挿し穴で樺を切断して仕上げているようである。木釘穴は、底板固定用のもの(実測図の上縁部分)以外に、側板のほぼ中位と、上下各帯の中位に広い間隔をおいて残されている。

4. 小 結

今回の調査成果を以下に列挙してまとめとする。

(1) 今回の調査は、路線の計画線が南北に細長いため、南北主軸の試掘トレンチを対象区の全域にほぼ均等に配して、遺構・遺物の有無及びその粗密を追求した。その結果、調査区のほぼ中間部にあたる4～7トレンチ、及び北端の10トレンチで遺物をともなう遺構が存在することが明らかとなった。このうち、遺構の存在が特に顕著な4～7トレンチ地区は、調査対象地の中では現在でも最も標高が高い地点で、遺構面が現地表から非常に浅く、遺構面の削平がある程度進行している状況を呈していた。このように、周辺域よりも高所にあつて、比較的高燥で洪水や滞水の自然災害を被りにくいこの地区が、各時期を通して居住区として利用されている事実が判明した。

(2) 検出された遺構は、その構造や形態などから、住居などの居住に関連する性格をもつ遺構が大半を占める。さらに、遺構に共伴する遺物や包含層出土資料などから、互いに時期的な連続性をもたない3時期に年代を大別することができる。

(3) 第1は、古墳時代前半期(布留式併行期)に造営された遺構群で、その内容は、竪穴式住居跡5、6基・溝6条・土坑数基からなる。その性格は、現状の検出状況から判断すると、竪穴式住居跡数基からなる共同体成員レベルの住人が居住する集落遺構の一部と解釈される。同期の該当遺構は、精華町内では初の検出となる。住居の立地は、南北約150mの範囲に、一部空地はあるものの現象的には南北に列状に連なる配置をみせる。しかし、これは調査範囲が道路の幅員に規制されたもので、さらに東西方向に展開することは十分予想できる。したがって、現時点において集落の性格を論議するのは差し控えたいが、少なくとも以下の諸点は事実として確認できる。

まず、個々の住居跡は、一辺5m前後と当該期における平均的な規模をもち、他の住居跡との差が顕著でないこと。

住居の屋内施設として周壁溝・貯蔵穴様土坑・柱穴などが確認できるが、いずれも浅く断片的で、遺構としての残存状態が悪いこと。

炉を代表する炊事施設(火処)が屋内外を問わず未確認であること。

住居間の重複が少なく、同位置での建て替えが認められないこと。

などが挙げられる。但し、最後の点について若干の解釈を加えると、S H 9516と9518、S H 9522と9524、そして住居としては断定できないがS K 9528と9529は、それぞれ軒を接するように隣接あるいは一部重複して造営されており、出土遺物の上からその先後関係を判断できないが、少なくとも数世代にわたって同一世帯が同じ場所で住居を建て替えた可能性は指摘できる。したがって、集落の営まれた期間は比較的小短かったと推測され、出土遺物の観察から、ほぼ布留式の内で

も最も典型的な布留式とされる中相段階(都出編年「布留式中段階」^(注4)、寺沢編年「布留Ⅰ式」^(注5))に比定されよう。

(4)次に、集落遺構と同時期とみた溝状遺構について若干考察を加える。それらは規模(幅)に大小の差はみられるものの、その流路は直線的であり、断面も溝幅に対して逆台形状に深く掘り込まれているものが多い。規模の大きなS D9510・S D9538に激しい流水による土砂の堆積が認められ、自然の河道の可能性を残すが、これらも含めて人為的に掘開あるいは改修された溝と理解するのが適切である。その場合、これらの溝は、集落を囲む環濠的性格、あるいは集落内を小さく区画する区画溝として機能したものと捉えるのが適当であろう。

(5)次に、先の時期区分から若干はずれるが、古墳時代後半の遺構・遺物が、絶対数は少ないが存在するので補足したい。当該期に確実に属すると考えられる遺構はS K9546のみであり、他の時期の遺構が希薄となる7-Aトレンチに単独で存在する。その性格は、形状から本来は貯蔵穴の可能性があり、それがある程度埋没してその機能を失った時点で、土器・鉄器類が坑内に埋め置かれた廃棄土坑に変化したと理解したい。廃棄土坑に転用された時期は、須恵器杯蓋(T K47前後)から、5世紀後半に比定できる。同時期の居住遺構は調査地内には認められないが、周辺域に存在する可能性がある点で注意を要する。

(6)同時期の遺物として注目すべきものに韓式系土器がある(第38図-20)。布留式併行期に初源が求められるS D9510の上層埋土中から出土した。この種の土器の出土は、これまで南山城地域(木津・宇治川流域)では極めて少ないのが現状である。また、この資料が出土したS D9510は、須恵器をはじめとした布留式以降の土器を含まず、その点で、この資料は布留式併行期までさかのぼる可能性が指摘できる。

(7)遺構の時期区分の第2期に該当するものは、4トレンチから5トレンチにかけて検出された掘立柱建物跡群である。これらの建物跡群の柱掘形は、互いに近似した埋土の状況を示しており、出土遺物は少ないものの、ほぼ同時期に機能していたとみられる。また、先の第1期に含まれる竪穴式住居跡や溝と重複関係をもつものは、いずれも掘立柱遺構が後出しており、より新しい時期に造営されたことが確認できる。その実年代を推測する手懸りは、出土遺物にある。すなわち、複数の柱掘形埋土中から少量小片であるが、土器が出土しており、さらに5トレンチ南半(S D9510以南)から4トレンチ中央付近にかけて、第1期の遺構面の上面を造成土が覆い、この土中からややまとまって遺物(土器)が出土している。これらの土器類は、遺存状態が悪く残存率も低いため、特に土師器については観察対象としては耐えない。そこで、須恵器を中心に観察し、特に編年研究の進んでいる杯などの食膳具をみると、出土資料にそれほど年代幅はなく、単一時期内に納まりそうである。これらを既存の編年案に照らしてみると、生産地編年である陶邑編年(田辺編年)^(注6)では、ほぼT K217の範囲内、消費地編年を代表する飛鳥・藤原京編年では、「飛鳥Ⅱ」期に相当するものとみられる。とくに杯HとGが混在し、蓋につまみを残さなければ身と蓋の区別が困難な資料が多い。また、口径が10cm内外と蓋杯の編年で最小値を示す点などは、これらの資料をこの時期と推定する重要な要素となる。実年代に関しては、小山氏の年代観^(注8)を採用

すれば640～655年(7世紀第2四半期)に求められ、ほぼ孝徳朝期に併行する時期になるとみられる。遺構の性格については、諸々の要素から判断して、検出した掘立柱建物跡は、住居として機能したものであって、これら掘立柱住居数棟で構成される集落の一面を検出したと現時点では解釈しておきたい。主な要素を列挙すると、

建物構造が2間×3間あるいは2間×4間の側柱のみの構造で、床面積をみると13.5～25.2m²(平均約20m²)と竪穴式住居跡とそれほど変わらないこと。

掘形は平均一辺0.6mで、最大1mに近い規模を有するが、柱痕跡が径6～15cmと小規模で、この柱材から推定して上部構造は簡素なものとみられること。

柱間寸法が不等間隔柱間を採るだけでなく、対向する辺の柱列と筋が通らないものが多く、厳密な設計規格が認められないとともに、基準となる造営尺を見出し難い建物跡が多い点。

個々の建物跡の主軸がまちまちで、その配置にも一定の規格性が希薄であること。

幅の狭い調査区に規制されるものの、調査範囲内において他と比べて傑出する内容をもった建物跡がみられず、首長居館内の雑舎あるいは官衙施設の付属建物跡とはみなし難い点。

などがこれらの遺構群を一般集落とみる主な理由である。加えて、この遺跡が所在する南山城地域の他の集落遺構をみると、ほぼ7世紀の中葉段階を画期に、住居構造が竪穴式から掘立柱式に移行する傾向がみられることも、上記の解釈を補強する要素となる。

(8)次に、5トレンチの東壁に沿って南北に主軸をとる溝状遺構(S D9519)について考察を加える。この遺構は、調査区の設定の都合、その西側斜面を検出したにすぎず、東側への展開、すなわち溝と仮定した場合の溝幅などの規模はわからない。もっとも、幅の広いトレンチ南端(検出幅約1.0m)では、溝底の横断線は東方へ向かって立ち上がりを見せないため、溝の幅は、少なくとも1.0mを越えると推定される。この溝の掘られた時期は、例えばS B9511・23・25にみられるように、この溝に重複する掘立柱建物跡の掘形が溝内の堆積土下に埋没して検出されることから、溝の方が7世紀の建物跡遺構より新しい。また、図示していないが伴出遺物の内、最も時期的下限を示すものに8世紀中葉以降の資料が含まれる。これらのことから判断して、先に7世紀の中葉に造営の一点をもつとした掘立柱住居による集落遺構よりも新しく、8世紀後半にかけて機能した遺構と理解してよい。それでは、次にその性格に関して考察を進めたい。今回の調査原因となった道路敷設の計画線は、対象範囲では、既存の南北道路と大半が重複し、これが相楽郡条里の三条稲捌間里いなほちまの坪界線とほぼ一致することを述べた。具体的には、5トレンチ付近では、この道路線は同里内の16坪と17坪の境界にあたる。坪界を標示する施設の具体像に関しては不明な点が多いが、S D9519に、その機能を与えることも可能とみられる。しかし、この解釈には若干の問題がある。それは坪界線が現行南北道のほぼ中軸を通るのに対し、S D9519は、その中軸線から約6m西側に平行している。ところが、この問題点を解決し得る研究が近年提起された。すなわち、この坪界線を通る南北の線を基軸に幹道が通じていたとみる足利健亮氏の説である^(注9)。同氏は、平城京が機能していた時期の山背国における山陰・山陽併用道を考察された。それが従来の歌姫越でなく、松林宮の西を通る「渋谷越」であって、この延長が精華町内では、現行の2

本の畦畔で構成される幅約20mの地条に求められることを指摘された。この古道復原線は、5トレンチ付近では現行南北道から100mほど東に条里線に対して、わずかに斜行する方位で直線的にのびている。氏は、さらにこの古道が「のち条里の侵襲によって道が条里坪界線上にひきとられた」と補足され、そのルートが調査区内を走る南北道に移動したことを推定された。こうした論点にたつて、先のS D9519を再度検討すると、この溝は条里制施行後坪界線に沿って移設された山陰・山陽併用道の西側溝の可能性が浮上してくる。坪界線とS D9519までの間隔が広いことも、溝以東が路面であるとみれば納得できる。

(9)時期区分の第3期は、中世のもので、遺構としては6トレンチで検出された多数の掘立柱柱穴・井戸・素堀り溝などがこれにあたる。前者は、柱の並びから4棟の建物跡として復原したが、建物にまともでない柱穴も多数存在する。これらの柱穴は、直径0.5m以下の円形プランを基本とする点や、石材や木材による礎板を有するものが多々認められる点など、第2期の掘立柱建物跡の柱穴と明瞭に異なる。また、復原した建物跡は、いずれも梁間を1間とする構造を採る特徴をもつ。実年代は、瓦器碗の編年観^(注10)から12世紀中葉～13世紀前半とみられる。遺構の性格は、建物跡の軸線がほぼ一致して、現存する条里地割の方向とも合致する点や、同一敷地内に井戸があることから、生活空間としての機能が想定できる。ただ、検出した建物跡は、非常に小規模で有力農民(名主層)の日常生活する建物とは考え難い。おそらく母屋クラスの建物こそ未検出ながら、そういった施設を有する屋敷地の一面に形成された雑舎群とみられる。また、S B9542のようなやや規模の大きな建物跡などは、名主層に属する小百姓層・所従層・下人層の居住施設としての性格をみることもできる。

(伊賀高弘)

注1 伊賀高弘「北尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注2 たとえば、谷岡武雄『平野の開発』古今書院 1964

注3 調査に参加していただいた方々は以下の通りである(敬称略)。

安部利恵子 有馬美貴子 石井伸卓 五百磐和代 鹿島昌也 木本昌英 久田 亨 日下降春 新谷二三代 田島 肇 筒井由香 寺尾貴美子 中村久登 西川悦子 西根正弘 林 恵子 福永美知子 丸谷はま子 丸山陽子 宮本浩行 芳谷與子

注4 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第25巻第4号 1979

注5 寺沢 薫「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1986

注6 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966

注7 西 弘海「土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II 奈良国立文化財研究所) 1978

注8 小山雅人「飛鳥・白鳳時代の土器編年」(『京都府埋蔵文化財情報』第29号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注9 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985

注10 橋本久和『中世土器研究序論』真陽社 1992

3. 木津地区所在遺跡平成6年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、住宅・都市整備公団の依頼を受け、関西文化学術研究都市の開発区域に所在する遺跡群を対象とした。平成6年度は、京都府相楽郡木津町大字市坂に所在する市坂瓦窯・上人ヶ平3号墳、同町大字梅谷に所在する梅谷瓦窯、同町大字木津に所在する釜ヶ谷遺跡の調査を実施した。

梅谷瓦窯では、平成5年度の試掘調査で7基の瓦窯を確認し、1・2・7号窯の窯体の一部を調査した。本年度は、2号窯の窯体下層と2号窯に隣接した3・4号窯の窯体構造を明らかにし、調査地の南半に広がる灰原の調査を実施した。その結果、2・3号窯では、登り窯から平窯へ移行する過渡期の窯体構造であること、4号窯は登り窯で、燃焼部の窯壁の補修時に興福寺創建の軒平瓦を多量に使用していることが明らかとなった。調査期間は、平成6年4月11日から平成7年1月20日、調査面積は600㎡である。

市坂瓦窯は、平成5年度の試掘調査で8基の瓦窯を確認しており、本年度は遺存状態のよい2・8号窯の窯体構造を明らかにするために発掘調査を実施した。その結果、2・8号窯はロストル構造の平窯で、8号窯では燃焼部の天井部がそのまま残った状態が明らかとなり、平城山丘陵の瓦窯を考える上で良好な資料となった。なお、市坂瓦窯は、現状保存する方向で関係者協議が進められている。調査期間は、平成6年4月11日から同年11月17日、調査面積は200㎡である。

釜ヶ谷遺跡は、昭和61年度の試掘調査(第1次調査)に続き、6・26番地の2地点で試掘調査を実施した。26番地では顕著な遺構・遺物は検出できなかったが、6番地では奈良時代の墨書人面土器などの祭祀的遺物を含んだ河川の一部を検出した。調査期間は、平成7年1月23日から同年2月27日、調査面積は380㎡である。

上人ヶ平(市坂)3号墳は、上人ヶ平遺跡が立地する台地上の西端に位置する。3号墳は、地形の形状を見る限り古墳状の高まりがあるため発掘調査を実施したが、埋葬施設及び外表施設である葺石・埴輪なども検出できなかったため、古墳と断定する積極的な資料は検出できなかった。調査期間は、平成6年6月3日から同年7月14日、調査面積は150㎡である。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同主任調査員石井清司・同調査員森島康雄・有井広幸、調査補佐員橋本 稔が調査及び本報告の執筆を担当した。今回の調査及び報告の作成には多くの調査補助員・整理員の協力^(注1)を得た。また、調査期間中には京都府教育委員会・木津町教育委員会・奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会・興福寺などの関係機関のほか、さまざまな方々から協力及び有益な助言^(注2)をいただいた。なお、本調査に係わる経費は、住宅・都市整備公団(関西文化学術研究都市整備局)が負担した。(石井清司)



第41図 調査地位置図(1/40,000)

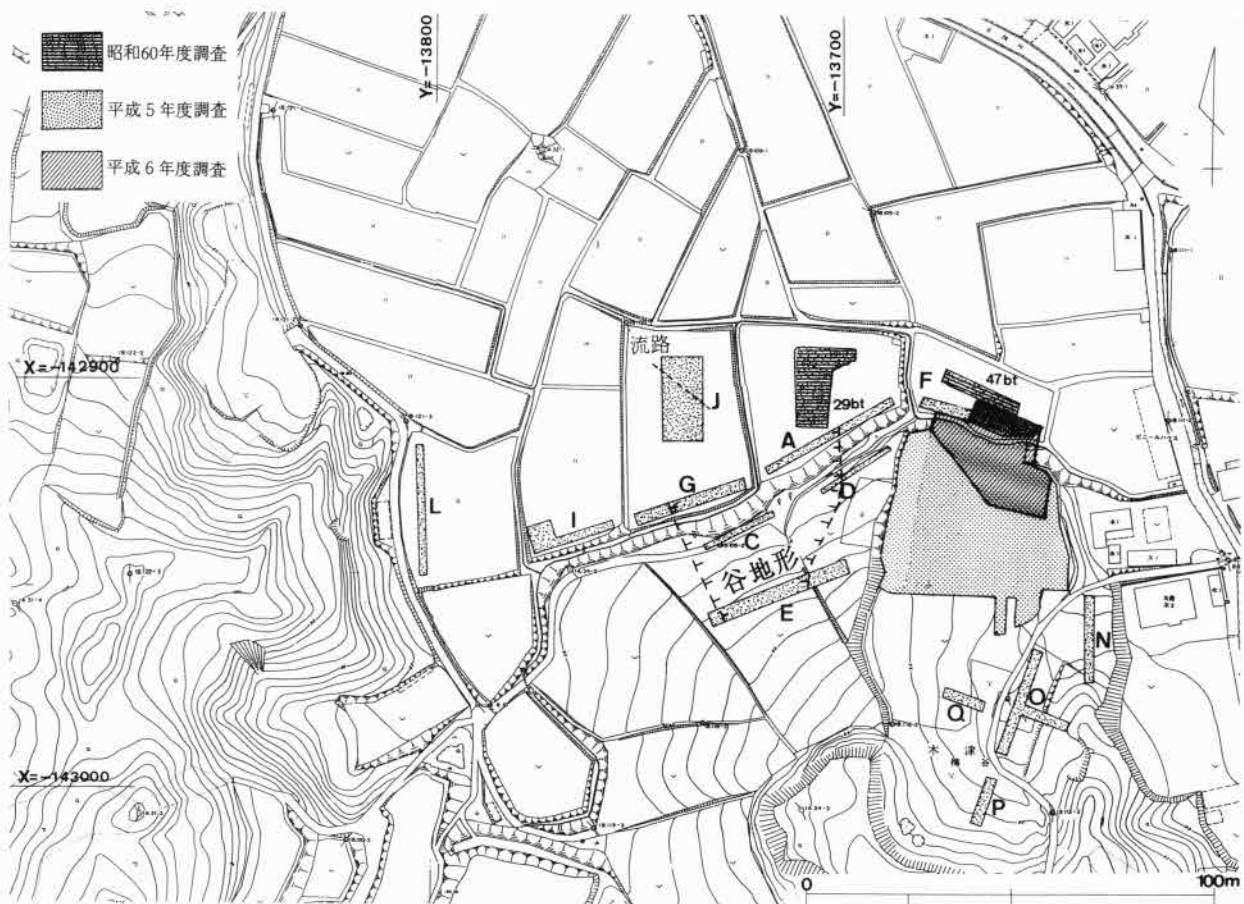
- | | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 西山塚古墳 | 2. 西山遺跡 | 3. 瓦谷遺跡 | 4. 瓦谷古墳群 | 5. 上人ヶ平遺跡 |
| 6. 市坂瓦窯跡 | 7. 瀬後谷遺跡 | 8. 高麗寺跡 | 9. 泉橋寺跡 | 10. 鹿背山城跡 |
| 11. 鹿背山瓦窯跡 | 12. 赤ヶ平遺跡 | 13. 燈籠寺廃寺跡 | 14. 燈籠寺遺跡 | 15. 内田山古墳群 |
| 16. 釜ヶ谷遺跡 | 17. 上津遺跡 | 18. 木津城跡 | 19. 天神山古墳群 | 20. 大谷窯跡 |
| 21. 八後遺跡 | 22. 木津遺跡 | 23. 木津北遺跡 | 24. 吐師七ツ塚古墳群 | 25. 坊谷古墳 |
| 26. 白山古墳 | 27. 樋ノ口遺跡 | 28. 相楽遺跡 | 29. 八ヶ坪遺跡 | 30. 曾根山遺跡 |
| 31. 大仙堂遺跡 | 32. 大島遺跡 | 33. 音如ヶ谷瓦窯跡 | 34. 音乗谷古墳 | 35. 歌姫西瓦窯跡 |
| 36. 幣羅坂古墳 | 37. 歌姫瓦窯跡 | 38. 佐紀陵山古墳 | 39. マエ塚古墳 | 40. ヒシアゲ古墳 |
| 41. コナベ古墳 | 42. ウワナベ古墳 | 43. 平塚1・2号墳 | 44. 不退寺裏山古墳 | 45. 中ノ島遺跡 |
| 46. 梅谷瓦窯跡 | 47. 鶯塚古墳 | | | |

(1) 梅谷瓦窯跡

1. 調査経過(第42・43図)

梅谷瓦窯跡は、木津川の支流である井関川・梅谷川が、京都府と奈良県の境界である平城山丘陵に刻んだ浅い谷を望む、木津町南東部に位置する。梅谷瓦窯跡及び隣接の中ノ島遺跡は、昭和56年度に京都府教育委員会によって行われた分布調査以後、奈良興福寺所用瓦を焼いた窯が付近にあることが推定された。昭和60年度と平成5年度の調査によって、瓦窯跡の位置とその基数及び灰原など関連遺構の確認を行い、興福寺の創建瓦を焼いた7基の瓦窯の位置と3基の窯の構造を確認することができた。^(注3) 昨年度調査した窯は、東から1・2、そして西端の7号窯である。その結果、1・2号窯は、登り窯と平窯の中間の構造をしており、7号窯は、藤原京関連の瓦を焼いた、日高山瓦窯に近い形態の平窯であることが判明した。したがって、同一型式の瓦を、複数の窯構造形態で持ち、ほぼ同時期に操業している窯跡群であることがわかった。

今回は、昨年度、最終窯操業時床面を検出して調査を保留していた、2号窯下層の調査と、3・4号窯の計3基の調査及び斜面の下手に広がる灰原の調査を行った。



第42図 トレンチ配置図

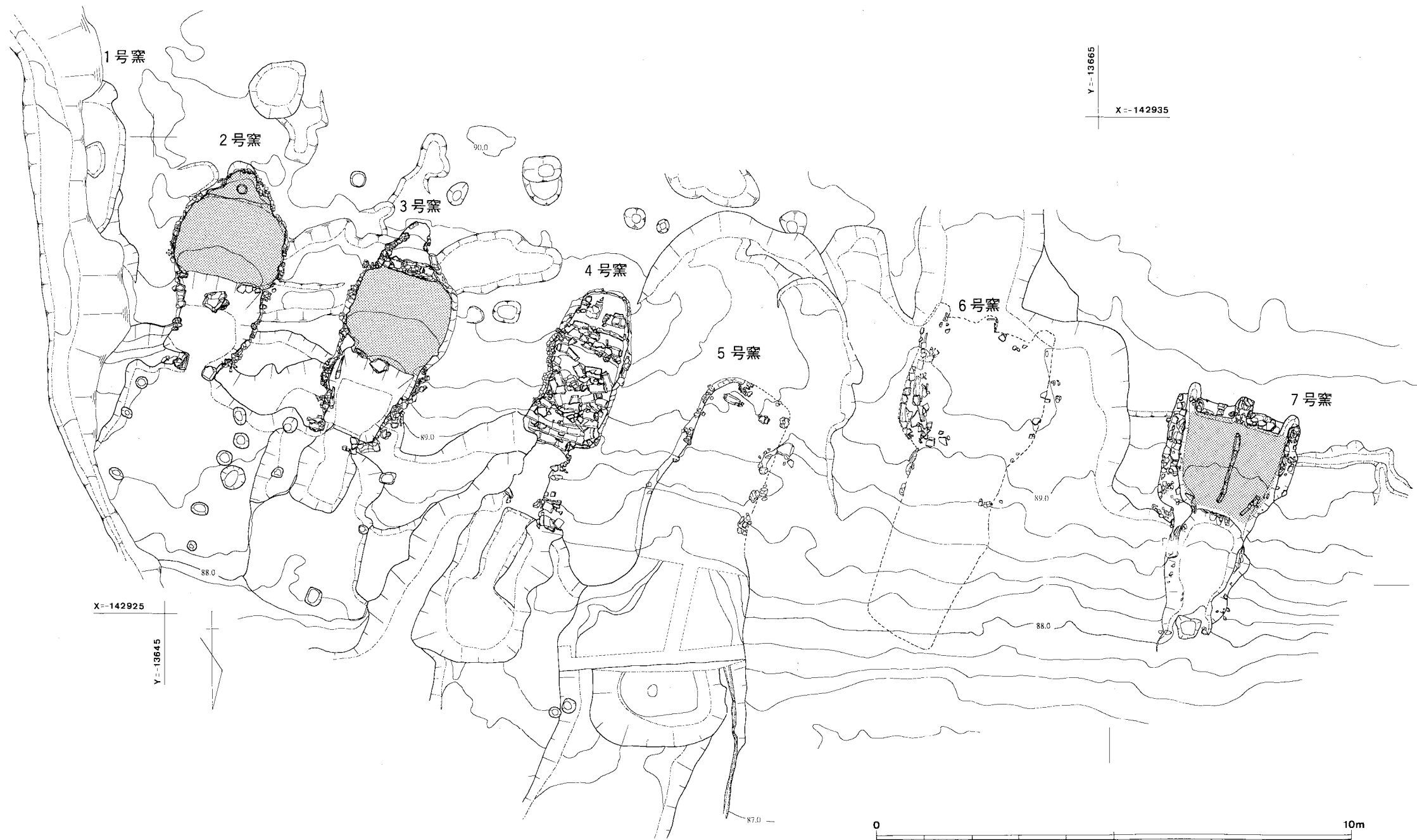
2. 調査概要(第44~49図)

今回は、2・3・4号窯の状況を主に報告する。ただし、前回の報告に間に合わなかった瓦窯実測図を掲載しており、説明内容が一部前回と重複する点もある。

1号窯 窯跡群東端に位置する。調査地東側の宅地により、崖状に削平されており、窯本体は、煙道部の大部分と焼成部の西端が残るのみであった。焼成部は、地山をほぼ水平に切り込んだ状況の床面で、改修した形跡は確認できなかった。焼成部西壁は、やや内傾しながら直線状に立ち上がる。煙道部奥壁は、焼成部床面から垂直に立ち上がった後、若干外傾しており、他の窯のような焼成部と煙道部を区切る構造(障壁)はなかったと考えている。焼成部床面にある溝は、床面



第43図 遺構配置図



第44图 窯跡群配置图

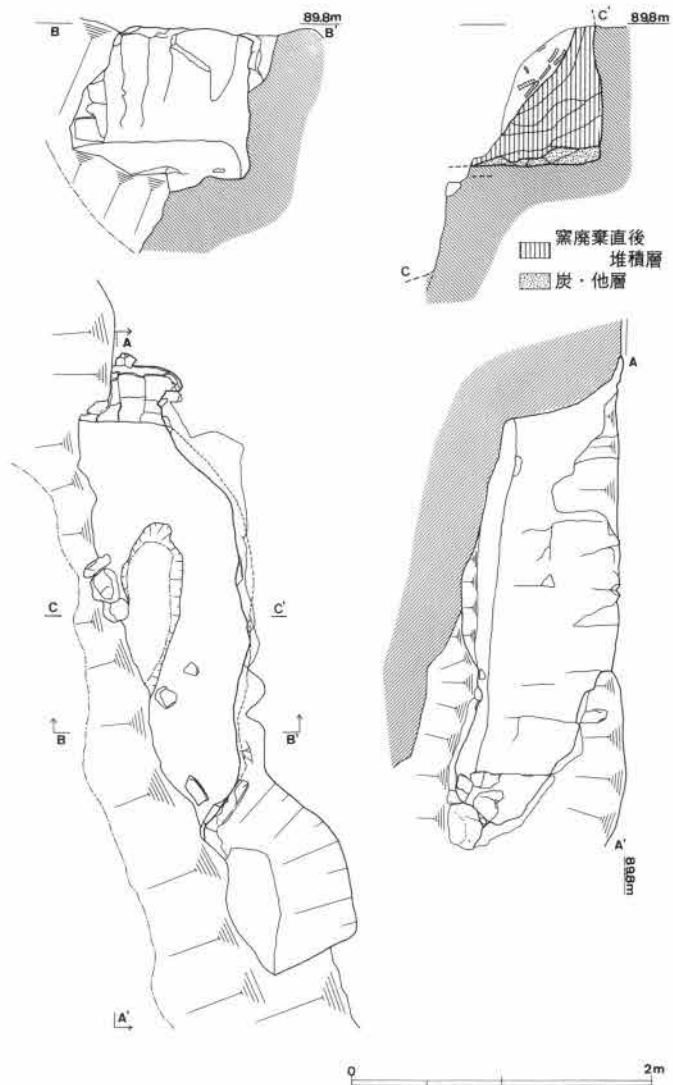
検出時に確認した溝で、焼土とともに炭の細片が詰まっていた。排水関連の溝と考えている。燃焼部の形態は不明である。焼成部の形態は、平窯の状況に近いが、後述する2・3号窯に近い構造の窯であったと考えている。

2号窯 窯の全長約4.2m・最大幅2.3mで、煙道部(直径0.9m)・焼成部(長さ1.75m)・燃焼部(長さ1.55m)からなり、丘陵斜面を一部掘り込んだ半地下式の窯である。

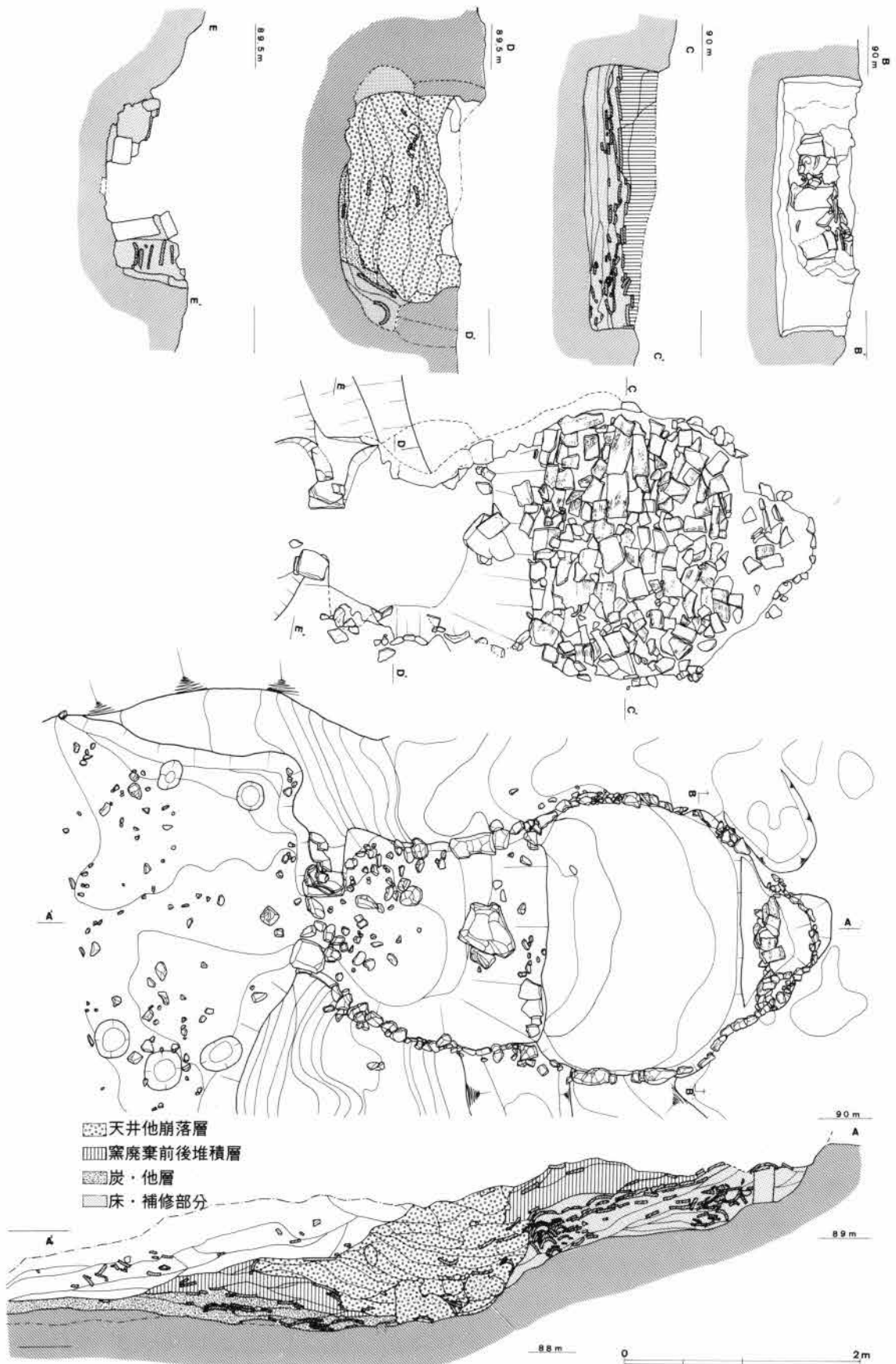
焼成部は、3面の床を確認した。第1床面(最終操業面)は、傾斜角約8°で、窯の長軸(主軸)に直交するように平瓦を斜めに重ね合わせて積み上げ、燃焼部との段差付近には丸瓦を繋いで3~4段積み重ねていた。この積み重ねた平瓦の下に、瓦の破片を粘土で固定し、第1床面と同様の傾斜を持つ、第2床面があった。この面で使用さ

れた瓦片は、細片がほとんどで、第1床面使用の瓦が半截程度の大きさのものを使用していたのとは状況異なる。第1・2床面の下層には、瓦と土を使った裏込めがあり、当初の煙道部を埋めて傾斜を造っていた。焼成部と燃焼部の境付近に詰まった丸瓦は、第2床面が造られた時に積み始められたようで、この部分から裏込めが始まっている。煙道部付近の段差部分では、瓦片を特に多用していた。第3床面(創業時面)は、ほぼ水平な隅丸長方形に、地山を削って成形していた。壁面は、地山が焼けたもので、スサ入り粘土などによる補修は確認していない。

燃焼部は、東壁側の天井部分が一部アーチ状に残っていた。両側壁の下部は、地山が砂礫部分にあたるため崩れやすかったらしく、瓦とスサ入り粘土を使って補強していた。床面は隅丸方形で、ほぼ平らであるが、焼成部付近で急角度に立ち上がり、段となる。段中央部には、大ぶりの自然石が、段表面とともにスサ入り粘土で貼られていた。この自然石を基礎にして、燃焼部床面直上で出土した、スサ入り粘土が付着した完形の平瓦・丸瓦、人頭大よりやや大きい自然石が上に積まれて天井部分の支柱となり、分焰柱の機能も兼ねていたと考えている。床面には粘土を貼



第45図 1号窯実測図



第46図 2号窯実測図

っておらず、礫層の地山直上で薄い炭層を検出した。

焚き口は、東西の基底部に花崗岩を置き、東側はその上に粘土と平瓦や丸瓦を交互に積んで、窯の軸に直交する形で燃烧部の壁と繋がる。西側は、花崗岩の切り石の上に磚と粘土を使って造り上げている。窯の内壁はスサ入り粘土を貼って仕上げている。焚き口付近では、完形の平・丸瓦が多く出土し、焚き口の閉塞に利用された可能性がある。

煙道部は、検出時では直径0.9mの半円状の平面形が残る程度で、立ち上がりの形状や高さは明らかでない。第3床面で瓦を焼いていた頃には、土管状瓦質土製品を煙道部中央に立て、両側壁に、瓦当面向上にして軒平瓦を立て、その上部に平瓦を橋架けにして2穴の煙道口をもつ障壁を造っていた。このため、煙道部は焼成部と明確に分けられ、煙室構造となっていたと考えている。なお、両側壁に立てられていた軒平瓦は、東側が6671A、西側が6671Kを利用していた。

2号窯は、当初平窯として築造され、後に登り窯に近い構造に改修した例といえよう。

3号窯 窯の全長約4.9m・最大幅2.1mで、煙道部(直径1.1m)・焼成部(長さ1.8m)・燃烧部(長さ1.7m)からなり、丘陵斜面を一部掘り込んだ半地下式の窯である。

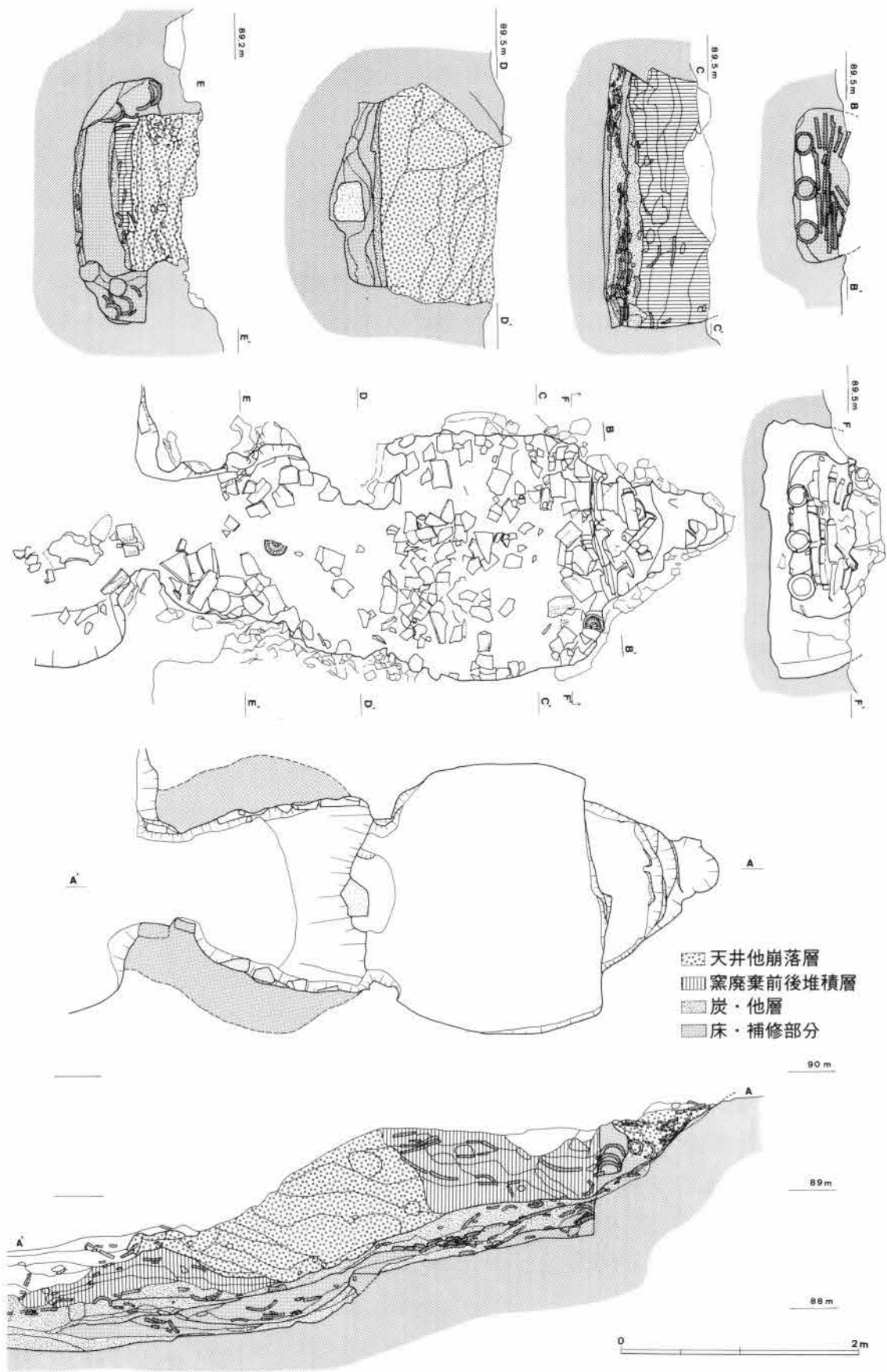
焼成部の第1床面は、2号窯の第2床面と同様に、瓦片を粘土で固定していた。さらに、下層から、地山を平らに削った第2床面を検出した。この窯は、平面形は2号窯と似ているが異なる構造もいくつか認められる。

まず、第1床面(最終操業時)には焼成部と燃烧部の間に2号窯のような明瞭な段差がなく、床面の傾斜角度がわずかに変化する程度であった。第2床面では焼成部と燃烧部間に支柱があったようで、2号窯同様に中央床面に自然石が粘土で固定してあった。この石の上部には最終操業時の瓦片などがのっていた。なお、付近に2号窯の燃烧部にあったような支柱の一部と考えられるものが出土しなかったことから、一度造った支柱を、第1床面操業時には撤去していたと考えている。また、燃烧部と焼成部の間には明瞭な段差が設けられていた。燃烧部の側壁は、下部の崩れやすい砂礫の地山部分を、人頭大より小ぶりの自然石と完形の丸瓦を多用して補強しているのが特徴である。表面は、スサ入り粘土で仕上げている。床面も一度スサ入り粘土で改修し、全体にかさ上げを行っている。このため、焼成部と燃烧部の段差が小さくなっていた。

燃烧部の断面上部には、地山が焼け締まった状態で厚く堆積しており、地山を掘り残した天井が窯の廃棄後に崩れたようすが観察できた。焼成部の断面ではこうした状況が観察できず、完形の平瓦が多く出土したことから、人為的に造っていたと判断している。

煙道部は、障壁を設け、煙室構造にしていた。障壁は、土管状瓦質土製品を3本使い、窯の主軸方向に等間隔に横たえて粘土で固定し、その上に丸瓦とスサ入り粘土を垂直に積み上げる。煙が抜けていたのは、3本の土管状瓦土製品の隙間にあたる2か所で、土管内部は赤橙色に焼け固まった粘土が詰まっていた。障壁と窯壁との接合部分は、スサ入り粘土で固定していた。

焚き口の造りは2号窯の状況とよく似ていた。磚を左右に立て、燃烧部の側壁までの間にスサ入り粘土と平瓦を積み重ねる。基底部を含めて、石は使用していなかった。ただ、東側の磚は調査時にははずれており、焚き口付近の前庭部で検出した。



第47図 3号窯実測図

また、焼成部は、後から側壁を左右に拡張し、床面を水平に掘り下げた可能性があり、当初の窯の形は、4号窯のような登り窯であった可能性もある。つまり、4号窯は、登り窯から平窯に、再び登り窯に近い形へと変わった窯と考えている。

遺物は、焼成部及び燃焼部で、軒丸瓦(6301A)、軒平瓦(6671A)片が出土している。

4号窯 窯の全長約5.3m・最大幅1.5mで、煙道部(直径0.5m)・焼成部(長さ3.5m)・燃焼部(長さ1.3m)からなる地下式登り窯である。

焼成部は、主に床に丸瓦を使って9段の階段状施設をもっていた。この丸瓦は、わずかな粘土で固定されており、瓦をはずした面は滑らかであった。焼成部中央付近の丸瓦列の乱れは、窯の廃棄後、天井部が落ちた影響か、雨水の流入によると考えている。焼成部と燃焼部の床上面には、焼土を含んだ粗砂層が天井部分の崩落層との間に堆積しており、窯廃棄後、かなりの期間天井がそのまま残っていた可能性がある。焼成部と燃焼部の間には、軒平瓦4枚の瓦当面向き口に向けて並べた上に、平瓦・丸瓦を積み重ねてスサ入り粘土で固定した明瞭な段差を設けている。

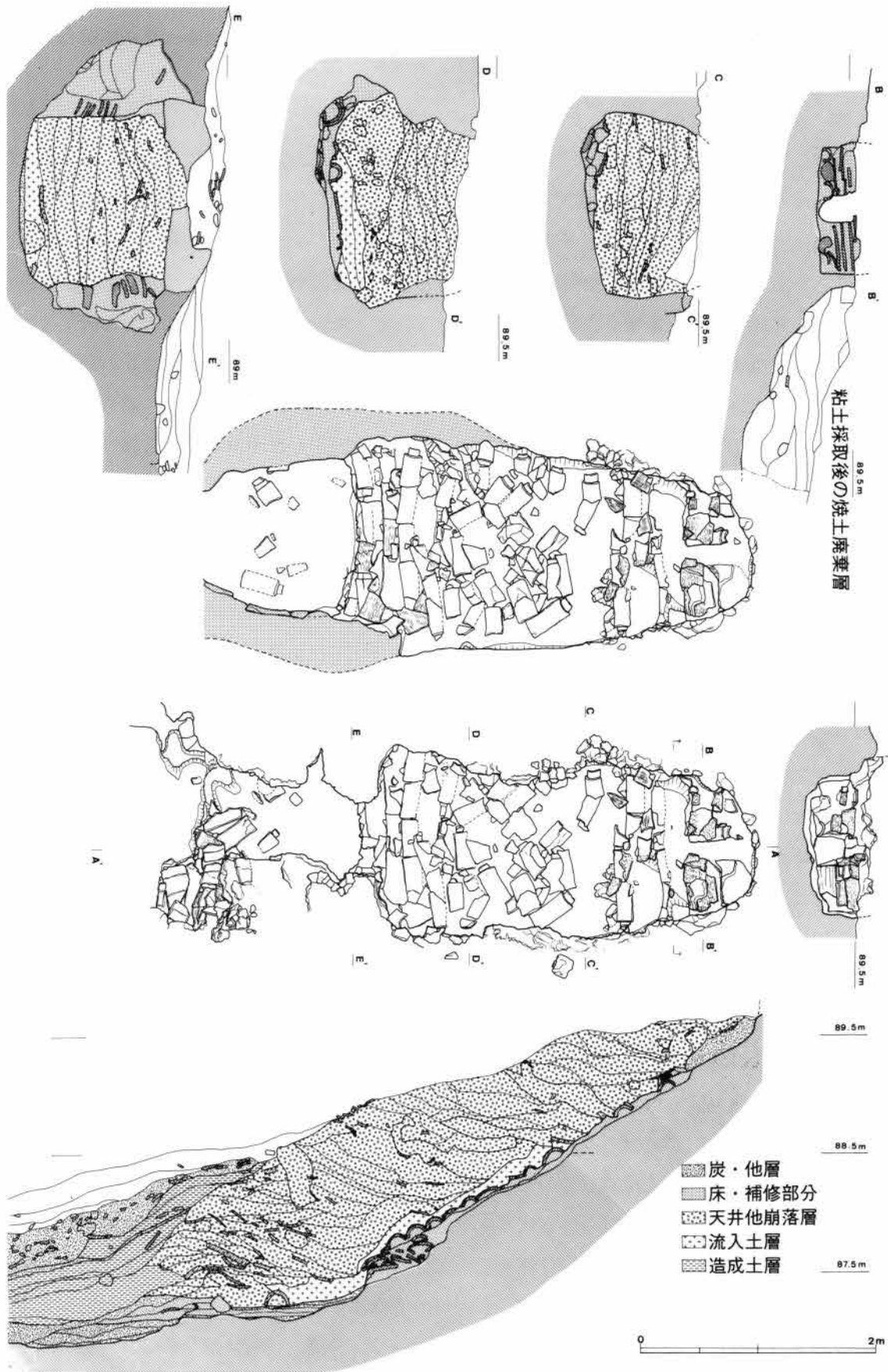
燃焼部の側壁は、軒平瓦を大量に積み重ねていた。この部分は、地山が砂礫のため崩れやすく、かなりの補強が必要であったと考えている。特に、西壁では、軒平瓦の瓦当面向き口方向に向けて、床面から6段ほど垂直に積み重ねて、さらにその上は、燃焼部の屋根を造るために、軒平瓦の瓦当面向き口を窯の内側に向け、上に行くに連れて内側へせりだすように持ち送っていた。その背後は、スサ入り粘土と瓦片で裏込めしていた。また、燃焼部の瓦積みの部分の表面は、スサ入り粘土で覆っていた。使用していた軒平瓦の破片は、接合すると完形に近くなるものが多く、製品に近いものを使ってこの場で造りあげたと考えている。使用した軒平瓦は6671Aがほとんどである。燃焼部の床面は、スサ入り粘土を使って1回以上補修していた。

煙道部は、粘土と半截した平瓦を主軸に直交するように積み上げて障壁を造り、中央部に1か所通煙口を空けていた。この障壁付近の観察から、窯が造られた当初は障壁はなく、瓦を何回か焼くうちに、3か所の通煙口を設け、最終的に1か所にしたものと判断している。

焚き口は残りが悪く、床面近くが若干観察できた程度である。明黄褐色粗砂の地山上に、基底部として地山に含まれている拳大の河原石を数個置く。その上をスサ入り粘土と瓦で固めて燃焼部の壁からゆるやかに幅を狭めていた。

前庭部は、3段掘りの溝状になっており、北端は大きな窪みとなる。この窯の前庭部は、窯の廃棄後、明黄褐色粘質土の地山土(3号窯の造成土?)によって窪みをゆるやかに整地されている。さらに、整地土の上に他の窯によると考えている灰原層(3号窯?)が堆積していた。このため、この窯が周囲の窯より早く操業していた可能性がある。

5号窯 全体に表面検出に留め、前庭部を一部掘り下げた。検出状況では、窯壁の残りはよくない。これは、窯の周辺部が馬蹄形に落ち込んでいる影響である。この部分は、4・5号窯間を一部断ち割った観察によれば、窯廃棄後に砂礫層の上面まで粘土を採掘しており、さらに瓦や窯体の廃棄場所となったためと判断した。特に、西壁側は、確実な壁面は部分的にしか確認できなかった。残存長約4.1m・検出幅約1.8mを測る。煙道部付近で、床面または障壁の一部と考えら



第48図 4号窯実測図

れる丸瓦列を1列検出した。全体の形状から、4号窯と同型体の地下式登り窯と考えている。

一部を掘り下げた前庭部には、炭と瓦が約1.5mと厚く堆積している。形状は4号窯に似ており、北側が大きな窪み状になる。この部分の埋土は大きく3層に分けられ、下層の炭層の上には、粘質の地山土を使った整地層がある。整地層内には、窯側から排水用と考えている瓦質の土管が、北向きに若干傾斜して据えてあった。調査の都合で窯付近の埋納状況は確認できていない。整地層の上層には、さらに炭瓦の互層が厚く重なっていた(図版第36(1))。

前庭部から多数の丸・平瓦とともに、興福寺創建瓦系の軒丸・軒平瓦が出土している。

6号窯 5号窯と同様に表面検出にとどめた。煙道部は3か所に分かれており、焼成部の壁は7号窯と同じく瓦とスサ入り粘土を積み上げている。こうした点から7号窯と同じ形態の平窯と考えている。試掘時に焼成部にあたる部分から、軒丸瓦(6301A)が出土している。

7号窯 7号窯は、窯の全長約4.35m・最大幅2.2m、焼成部の長さ約2.6m・焼成部の長さ約1.15mを測る平窯である。この平窯は、燃焼部と焼成部の境に高低差0.5mの段差がある。この段部分に丸瓦などを縦に並べて、粘土で固定して壁面を強化している。

焼成部床面はほぼ水平で、厚さ約0.15mの瓦の破片を全面に敷きつめている。瓦片は、かなり締まって堅くなっていたが、粘土で固定したようすはない。瓦片の下は砂礫の地山となるが、この面で瓦を焼いた形跡は確認できなかつた。また、地山面上では、中央部に地山に埋まった状態で、主軸方向に丸瓦を5枚連結した、排水用と考えている施設がある。奥壁及び両側壁は、スサ入り粘土で表面を覆っていたようであるが、部分的に剥落して壁体内の瓦が見えている。

煙道部は、直線的にのびる奥壁の両端と中央の3か所にある。地山をトンネル状に切り抜いたと考えているが、奥壁に取り付く部分は瓦とスサ入り粘土で固めていた。焼成部内の開口位置は、床面に敷きつめられた瓦で、半ば埋もれるほど低い。

燃焼部は、周囲が砂礫の地山にあたるため、瓦とスサ入り粘土を使って両側壁を造る。壁体内の瓦は、焼成部では水平に重ねていたが、燃焼部では東壁に見えるように垂直に立てて利用している。床面は、スサ入り粘土で塗り固めている。床面の改修は確認できていない。

焚き口の構造は、後世の削平のため、判然としない。位置は、北端の中央にあるピットよりも北側の燃焼部がくびれる部分にあったと考えており、この付近から粘土の貼り床が行われている。なお、このピット内には炭と焼土が堆積しており、窯関連の施設と考えている。

7号窯の窯体構造とよく似た瓦窯には、焼成部の壁面を日干し煉瓦で造っている点異なるが、奈良県橿原市日高山瓦窯がある。日高山瓦窯は、その製品を藤原京へ供給しており、7号窯に関連して、構造の類似とともに、藤原京期に繋がる興福寺創建瓦の系譜も関連が注目できる。

灰原 1号窯から5号窯の下方にかけて、多量の瓦とともに炭の厚い堆積の広がりを確認した。しかし、焼成回数や、灰原と各窯とを直接結びつけることは、一部を除いて不明である。各窯の焚き口付近には前庭部があり、特に4号窯と5号窯の前庭部は、周囲より一段と深く掘り下げられており、溝状の灰原が下方へと伸びていた。また、2・3号窯の前庭部では、平坦面に不揃いながら幾つかのピットがあり、雨よけ程度の掘立柱建物があったと考えている。灰原の下端は、丘陵



第49図 7号窯実測図

の裾よりさらに下がり、現在の水田面からさらに約2m下まで確認した。灰原は、さらに調査地の北及び東方向に向けて広がっており、調査地東側の水田部分でも炭が出土している。

6号・7号窯の灰原は、良好な状態では確認できなかった。その原因としては、後世の竹林などの耕作による削平が著しかったと思われること(斜面に造られていた整地土中に炭混じりの層が幾層も見られた)と、窯の下側に谷状の窪みがあり、土砂の流出の可能性が考えられる。

また、4・5号窯の前庭部より下手の部分で、小さな谷地形を検出した。谷の埋土は、明黄褐色粘質土で、窯本体が造られている付近の地山に似ており、炭片が若干混入し遺物はほとんど出土しない。このことから、おそらく4・5号窯を造ったときに出た廃土で谷を埋め、現状のようなテラス地形になったようである。

3. 出土遺物(第50～53図、図版第37・38)

今回出土した遺物のほとんどは瓦類である。出土量が大量のため、なお洗浄作業中であるが、目立った遺物を前回調査の出土品も含めて報告しておく。

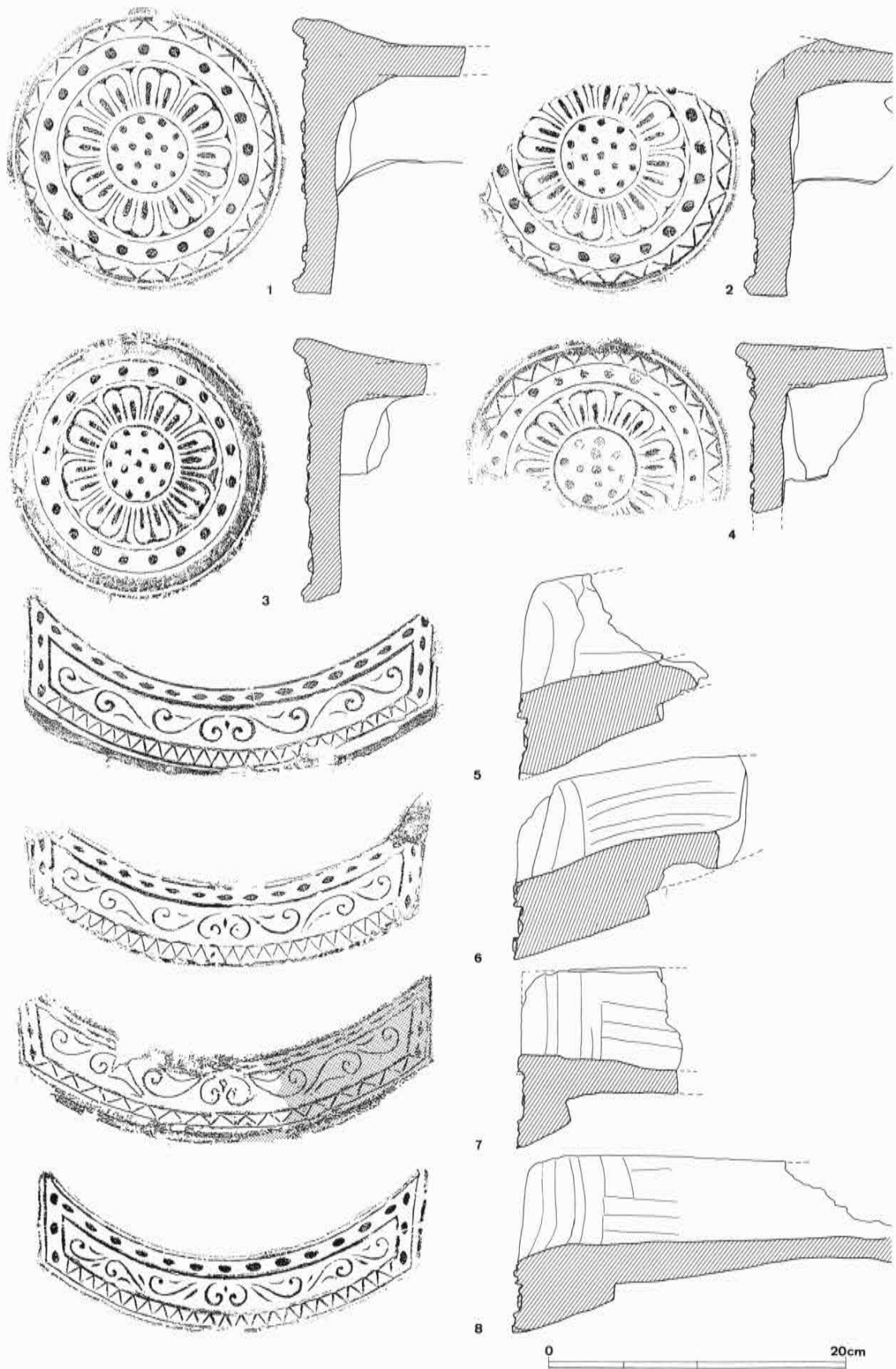
1～3は、複弁8葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1+5+10を数える。いわゆる興福寺式の軒丸瓦(6301A型式)である。1は、淡灰色を呈し、焼成は良好、瓦当背面には布目圧痕及び指頭痕が残る。5号窯の前庭部で出土した。2は、淡灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。3号窯の焼成部床面に使われていたもので、2次焼成を受けている。3は、淡灰色を呈し、焼成はやや軟質、瓦当背面は指ナデを多用する。7号窯下手の斜面から出土している。

4は、複弁8葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1+4+8を数え、6301D型式と考えている。灰原の下手斜面から出土している。

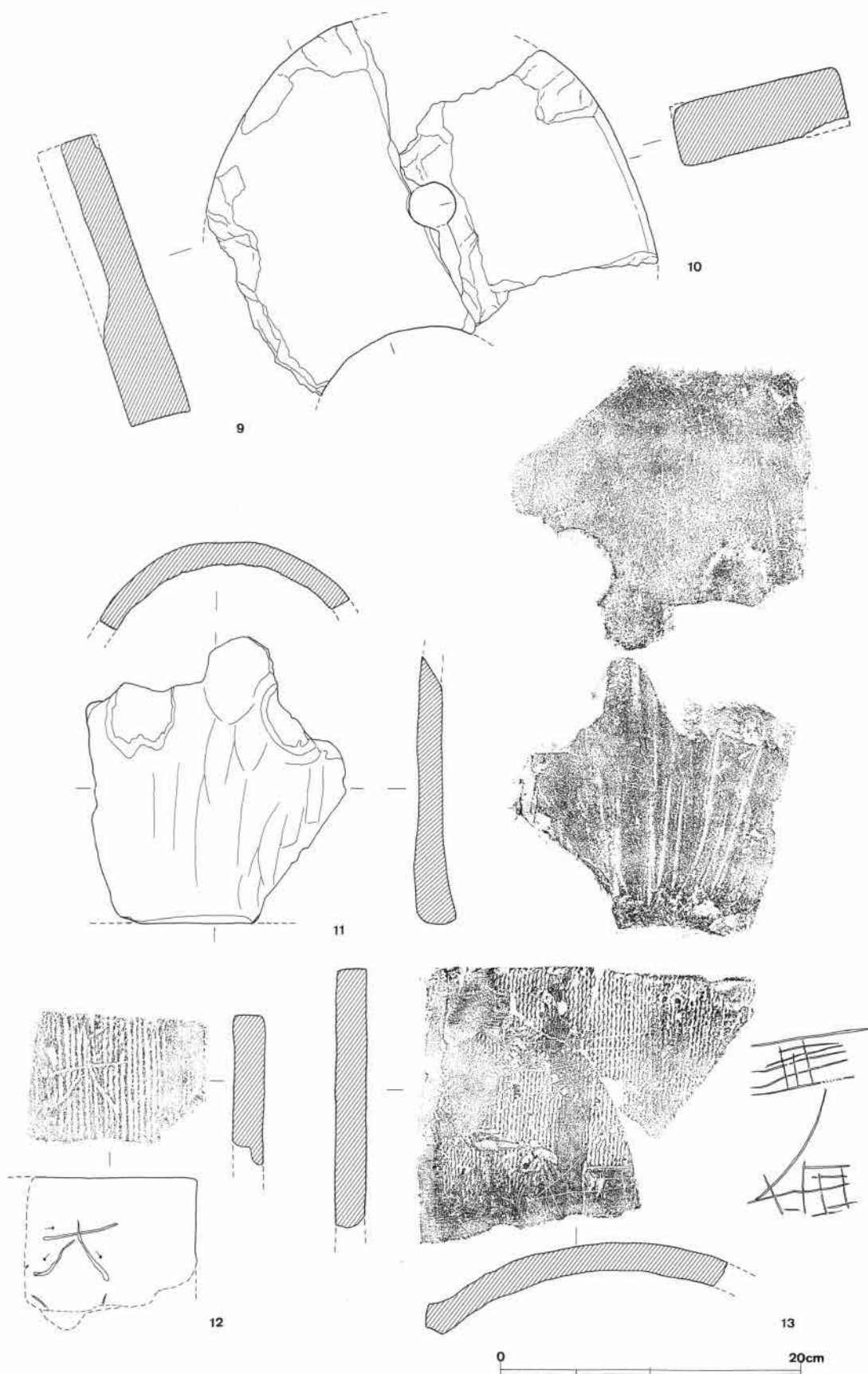
5～8は、均整唐草文軒平瓦である。5・6は、いわゆる興福寺創建軒平瓦(6671A型式)である。5は、黒灰色を呈し、焼成は良好である。2号窯の焼成部床面の裏込めに使用されていた。6は、淡灰白色を呈し、焼成は良好である。斜面西側の礫層から出土している。7は、5・6の例に比べ、均整唐草文のうち子葉が長く、上外区の楕円形珠文が少なく、下外区の線鋸歯文の間隔が広いのが特徴である。また、段顎の幅が比較的短い点も異なっている。瓦当面で、半分程度の残りであるが、6671E型式に分類できる例と考えている。焼成は良好、色調は淡褐灰色である。灰原西側から出土した。8は、5・6に比べ、均整唐草文の子葉が2葉になり、脇区の楕円形珠文が3に減り、上外区の楕円形珠文が13、下外区線鋸歯文の配置が変わるのが特徴である。また、段顎の幅は、5・6と7の中間ぐらいの長さである。6671K型式にあたる例と考えている。焼成は良好で淡黄灰白色を呈する。2号窯の煙道部西壁に立てかけられ、障壁の一部に使われていた。

9・10は、別個体であるが、同一型式の鬼瓦片と考えて並べて配置した。厚さはほぼ均質で、表面はいずれも平滑に仕上がっており、焼成はともにやや軟質である。色調は、9が暗灰色、10が黒色である。9は試掘調査時に包含層から、10は斜面下手の灰原から出土している。

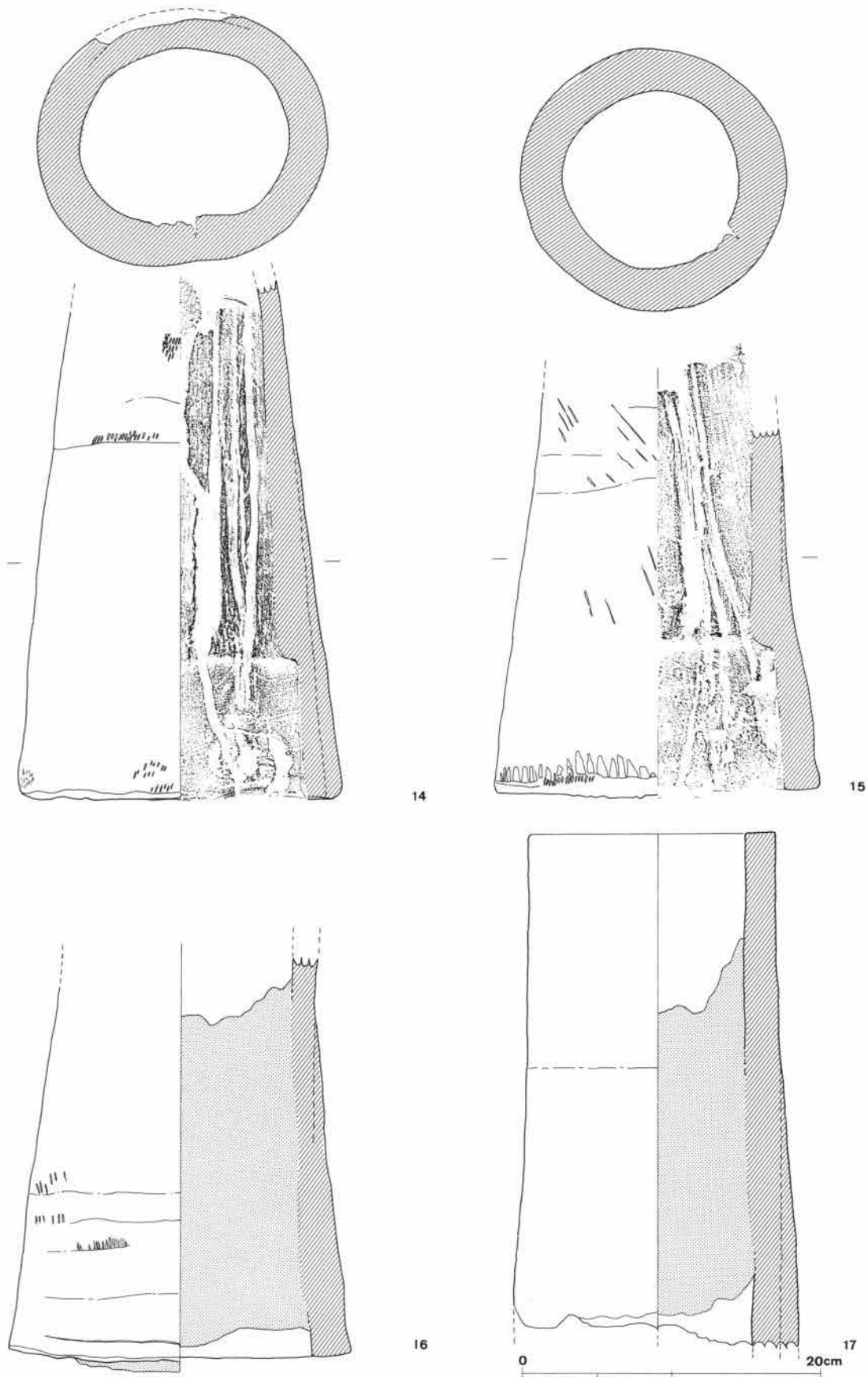
11も道具瓦の一部であるが、種類は不明である。凸面に2か所円形に近い剥離痕がある。断面は、端部がやや厚く、焼成はやや軟質である。凸面は黒灰色を呈し、表面をヘラケズリしている。



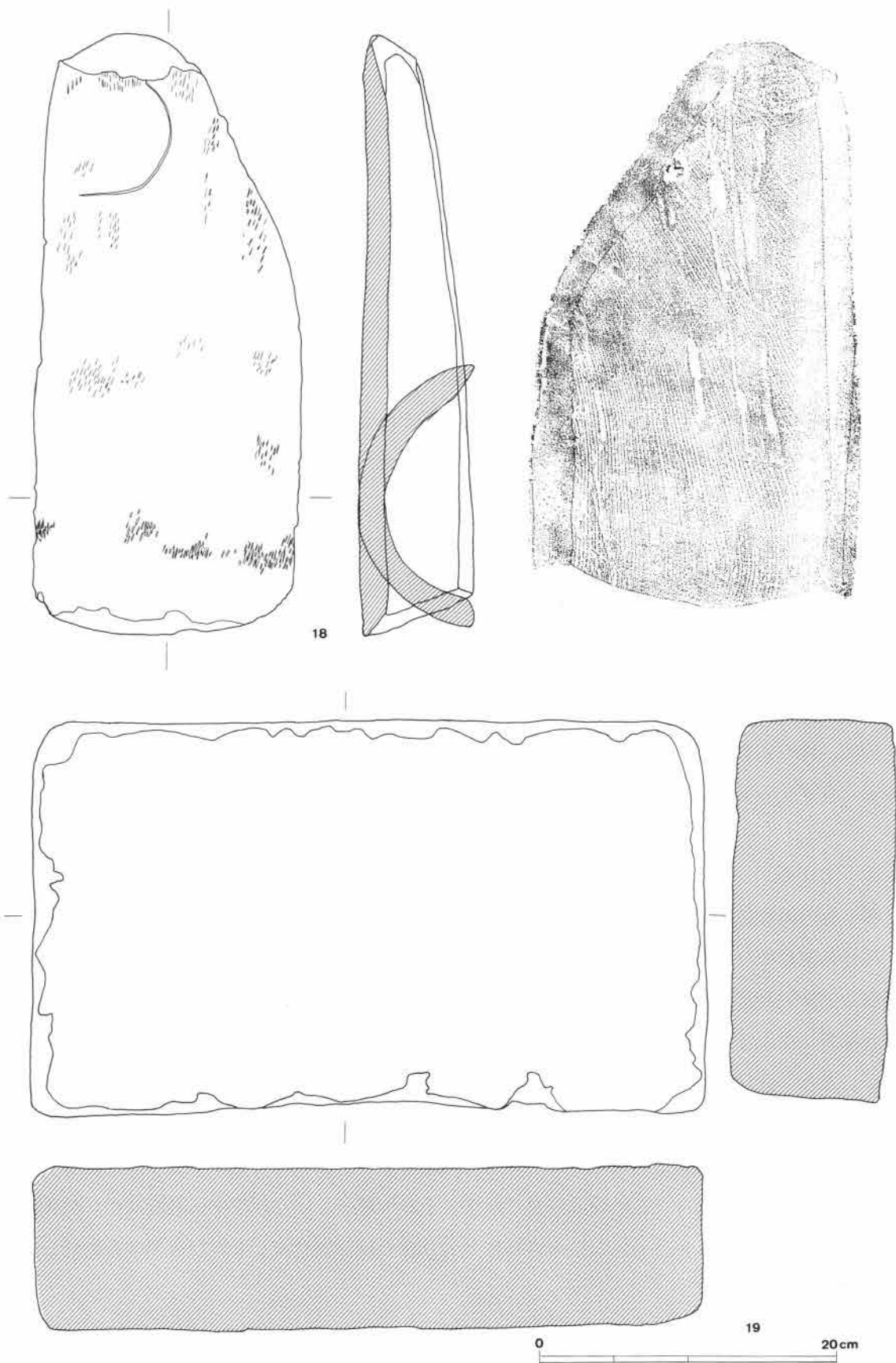
第50図 出土遺物実測図(1)



第51図 出土遺物実測図(2)



第52図 出土遺物実測図(3)



第53図 出土遺物実測図(4)

凹面は、淡褐灰色を呈し、布を絞った痕跡があり、端部を横ナデしている。斜面下手の灰原から出土した。

12は、平瓦に文字をヘラ書きした例である。縄目タタキを施した凸面に、何文字か書いてあるようであるが、「大」以外は確認できない。灰原から出土した。

13は、平瓦の凸面端部付近に建物状の絵をヘラ書きした例である。瓦がまだ柔らかいうちに触ったらしく、手で瓦を握った跡がくっきり残っている。2か所ある図のうち下の方は、屋根のよう見え、床張りした建物のように見えている。上方の図は、屋根状の表現がなく、柵を表しているのか、建物なのか不明である。焼成は良好で、暗灰色を呈する。この瓦は、試掘調査の際に、窯群南側にあたる高台部分の北東端の瓦溜まりから出土した。

14～17は、2・3号窯の障壁に用いられた土管状製品である。いずれも、表面はタタキの跡をナデ消している。14～16には一部そのタタキが残る。内面には、布目痕が全面に残り、一部に布の重ね合わせ部分が残る。当初、この製品は、丸瓦を作る前段階の筒状のものに粘土を貼り足していると考えていた。しかし、内面観察のため、一部の製品の内面に充填してあった焼土を除くと、太部側内面に段差が観察でき、独自の形に製作したことがわかった。細い部分を太い部分に差し込むことが可能であり、瓦窯用に特別に作ったものと考えよりも、土管としてほかに使用目的のあったものを転用したと考えている。灰原内からも同様の破片が若干出土しており、他にも何点か製作していたことがうかがえる。

18は、隅瓦の完形品である。外面側にヘラによる半円形の記号状の刻線がある。焼成は良好で、黒灰色を呈する。7号窯から出土した。

19は、塼の完形品である。3号窯の焼き口部分西壁の材料に使われていた。色調は、淡茶褐色、焼成は良好である。2次焼成を受けており、周囲の各辺は欠落している。

4. まとめ

昨年度の調査結果を含めて今回の調査を以下のようにまとめておきたい。

梅谷瓦窯跡は、5基の登り窯と2基の平窯の合計7基からなり、登り窯の内1～3号窯は、登り窯に平窯的要素がうかがえ、登り窯から平窯への過渡的な窯といえよう。また、同タイプの窯が2基ずつ並んでいる傾向があるので、1号窯の東側にもう1基窯があった可能性も考えておきたい。また、並行する7基の窯は、その窯の配列から、近接した時期に操業された窯で、異なった窯構造のものが併存している。このことは、各窯から出土している軒平瓦・軒丸瓦の種類が興福寺の創建瓦にほぼ限定されていることから確認できる。そして、登り窯群は、それぞれかなりの改修が行われており、瓦の焼成が登り窯から平窯へ移っていく技術的に過渡期の、試行錯誤のようすが観察できるとともに、平窯の技術と登り窯の技術が交流していた可能性を指摘しておきたい。

(有井広幸)

(2) 市坂瓦窯跡

1. 調査経過

市坂瓦窯跡は、奈良時代の大規模な瓦工房が確認された上人ヶ平遺跡の南西側の小さな谷に所在する。周辺は戦後、筍栽培用の竹林として開墾されたために、谷には多数の瓦片が散布しており、付近に瓦窯が存在することは早くから知られていた。『京都府遺跡地図』では、6基以上の瓦窯が存在するとされているが、平成5年度の試掘調査によって、谷の北東側斜面に5基、南西側斜面に3基、合計8基の平窯が確認された(第55図)。今回は、そのうち2基の窯跡の発掘調査を行った。

2. 調査概要

(1) 2号窯の調査(第56図)

2号窯は、北東側斜面に築かれた半地下式平窯である。焚き口から奥壁までの全長は3.6mを測る。2号窯は、当初構築された窯の一部が崩落した後に大規模な改修を受けているが、遺跡が保存される方向が固まったために、原則的に改修後の段階までの調査にとどめている。したがって、以下は、改修後についての記述である。

① 2号窯の構造

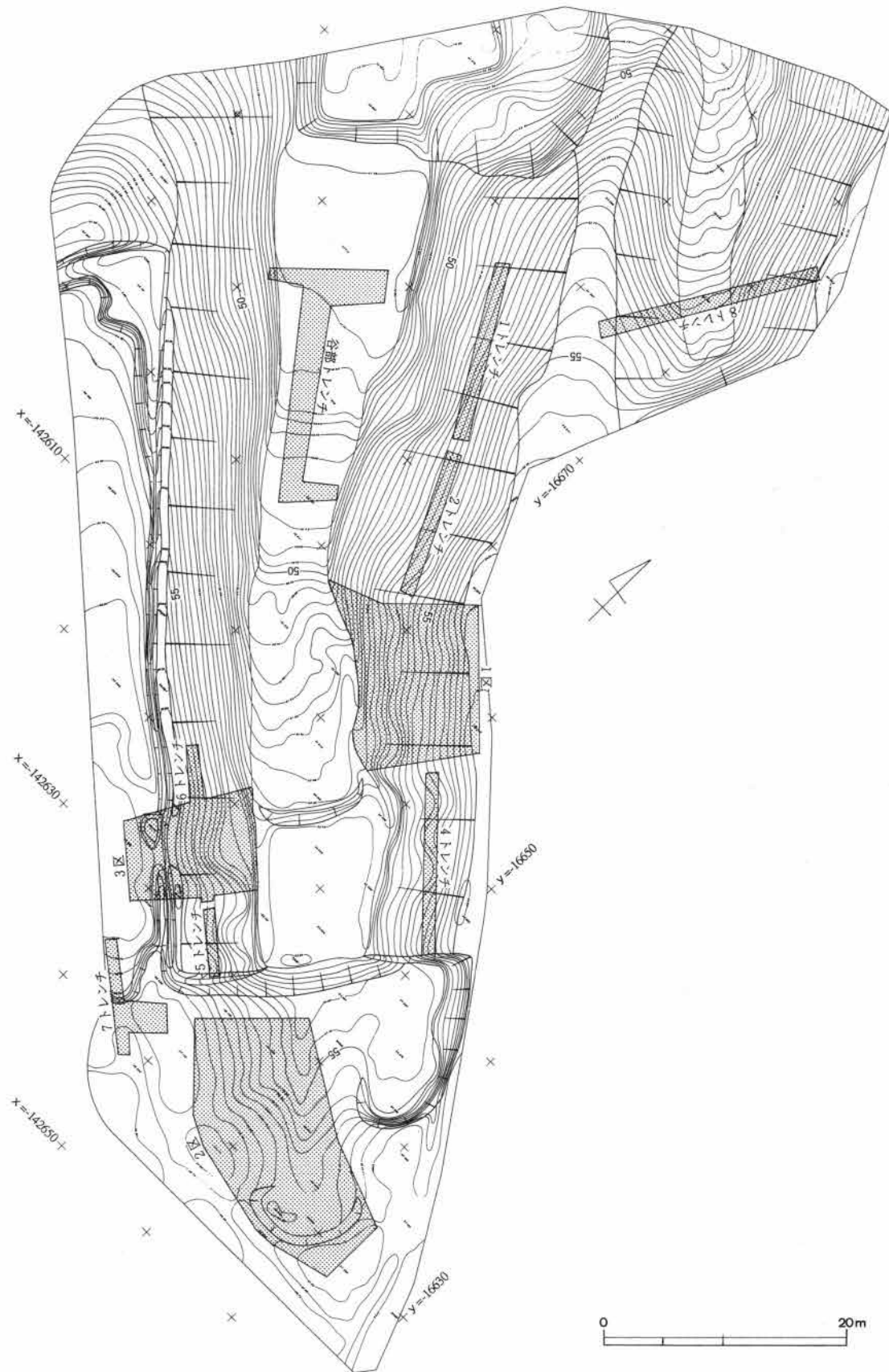
焼成室 焼成室床面は、幅2.0m・奥行1.4mの長方形を呈する。後述する8号窯よりやや小さいが、これは改修を受けているためと考えられる。焼成室側壁は内傾し、側壁がよく残っている部分では検出面での焼成室の幅は1.3mであった。これに対して、焼成室奥壁は床面から垂直に立ち上がっている。奥壁と奥壁に向かって左側の側壁は、構築当初の窯壁が崩落しており、奥壁には平瓦や塼を、側壁には丸瓦や平瓦を粘土で塗り込めて改修した痕跡が認められた。

床面には、高さ0.25m・幅0.2m前後の火床が7条設けられている。7条の火床は3本の分焰柱と、4つの分焰孔にそれぞれ1条が対応している。火床は、いずれも奥壁に密着しており、分焰柱に対応するものは、前面も分焰柱に密着している。火床は、平瓦を半截したものと、平瓦の厚さ程度のスサ入り粘土を交互に積み上げ、それら全体をスサ入り粘土でおおっている。この上には半截された平瓦がさらに1・2枚重ねられている。この1・2枚の瓦は、スサ入り粘土でおおわれた火床に製品が窯着することを防ぐ、焼台のような機能を持つものと考えられる。

奥壁に向かって左から3列目の火床の前面には、軒丸瓦が瓦当面を燃焼室側に向けて用いられている。この火床は、分焰孔に対応するものであることから、燃焼室から分焰孔を通して入ってくる焰を直接受ける部分を瓦で補強したものと考えられる。

煙道は認められなかった。

隔壁 焼成室と燃焼室を隔てる隔壁はほとんど残っていなかった。分焰柱は、中央の火床と、



第54図 地形測量図及びトレンチ配置図(1/500)



第55図 市坂瓦窯跡平面図(1/250)

両側壁から2列目の火床の前面に、合計3本設けられていたようで、奥壁に向かって右側の分焰柱だけが残っていた。この分焰柱は、地山を掘り残して造られた構築当初の分焰柱の基部を利用しており、平瓦と軒平瓦を筒状に組み合わせた中にスサ入り粘土を充填し、外側を粘土で覆っていた。

燃烧室 燃烧室は隅丸三角形を呈し、最大幅2.4m・奥行1.7mを測る。燃烧室床面はほとんど水平で、烧成室床面との比高差は1.1mを測る。焰は約75°の急角度で燃烧室へ駆け上がることになる。焚き口周辺から奥壁に向かって右側の窯壁は、改修後の窯壁が比較的好く残っており、これが剥離した部分では構築当初の窯壁が露出していた。これに対して、奥壁に向かって左側の窯壁は、構築当初のものも崩落し、残っていなかった。

焚き口 焚き口は花崗岩を鳥居形に組み、内法で、幅0.6m・高さ0.35mを測る。焚き口の上部は瓦をスサ入り粘土で塗り固めた窯壁が約0.5m垂直に立ち上がった後、内傾して燃烧室の天井に続いていたようである。

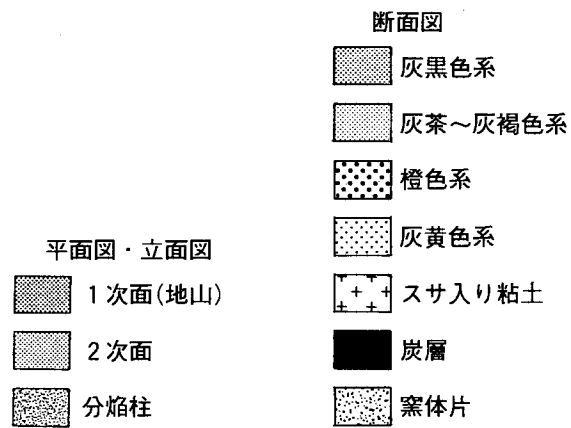
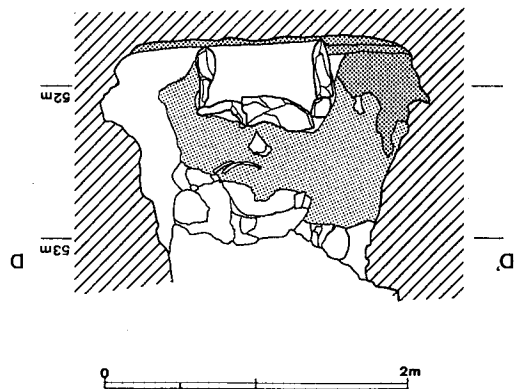
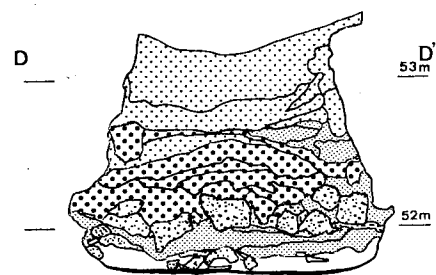
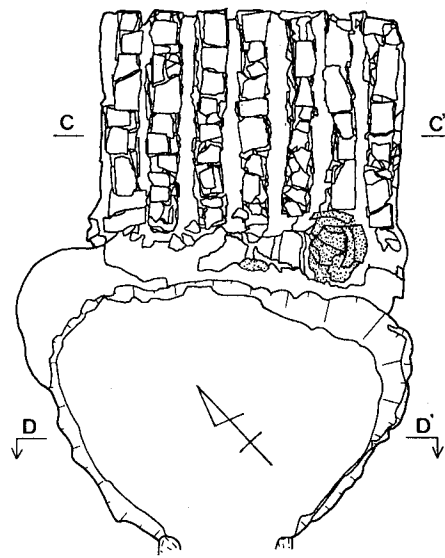
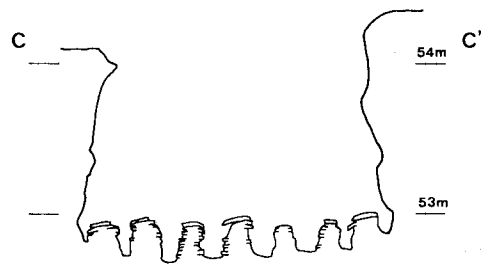
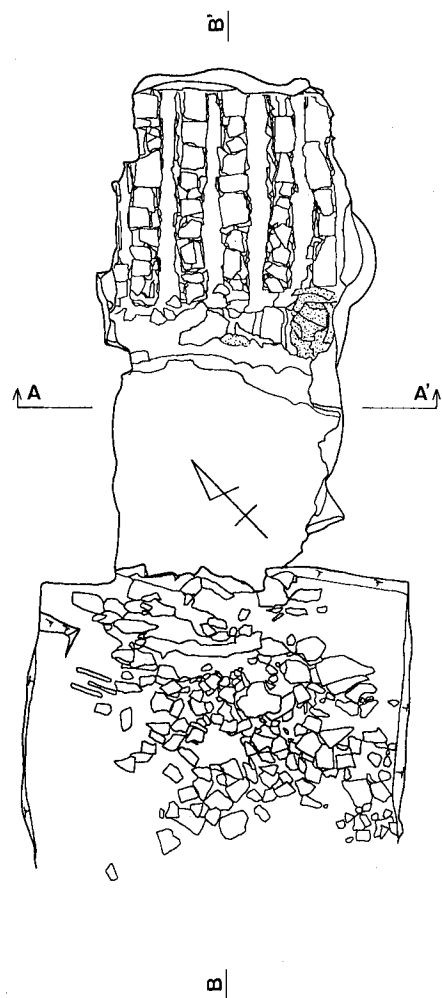
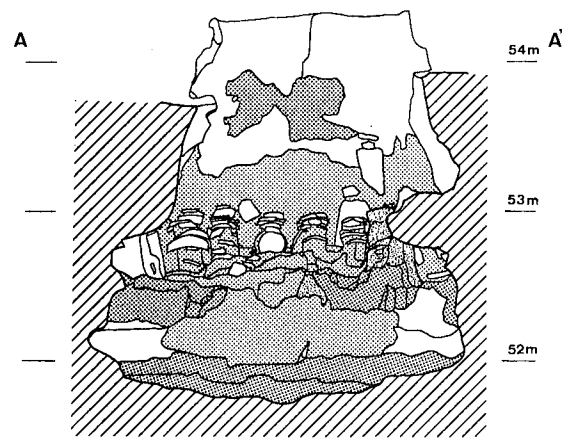
前庭部 前庭部は、焚き口付近の調査しか行わなかったが、1・3号窯が近接しており、後述する8号窯のように独立した前庭部を設ける余地はない。焚き口の上部では垂直に立てられた瓦や、並べて置かれた窯体片などが検出され、最終操業時に焚き口が閉塞された状態を残している可能性があると思われた。しかし、その後、焚き口との位置関係などを検討した結果、これらの窯体片や瓦などは、燃烧室の改修時に窯壁の一部として使用された可能性が高いことが判明した。

②窯体内の堆積状況

燃烧室では、床面全体に堆積した、厚さ3cm程度の炭層の直上に、分焰柱が崩落したと思われるスサ入り粘土と瓦の層が堆積し、その上には天井が崩落したと思われる茶褐色土と多量の窯体片が堆積している。その上に堆積している橙色系の均質な粘質土は、天井上部で間接的に被熱した土層であると考えられる。燃烧室内の奥壁に向かって左の分焰柱が崩落したと思われる位置からは、スサ入り粘土が付着した軒平瓦(12)が出土し、中央の分焰柱が崩落したと思われる位置からは、スサ入り粘土の詰まった丸瓦が出土しており、それぞれ、改修後の分焰柱に用いられていたと推定できる。

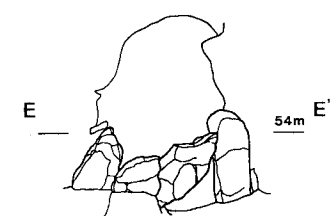
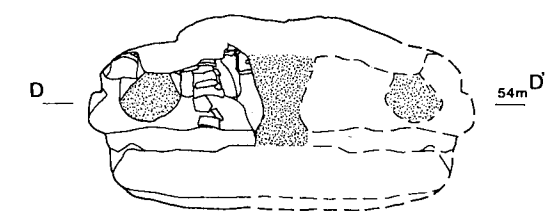
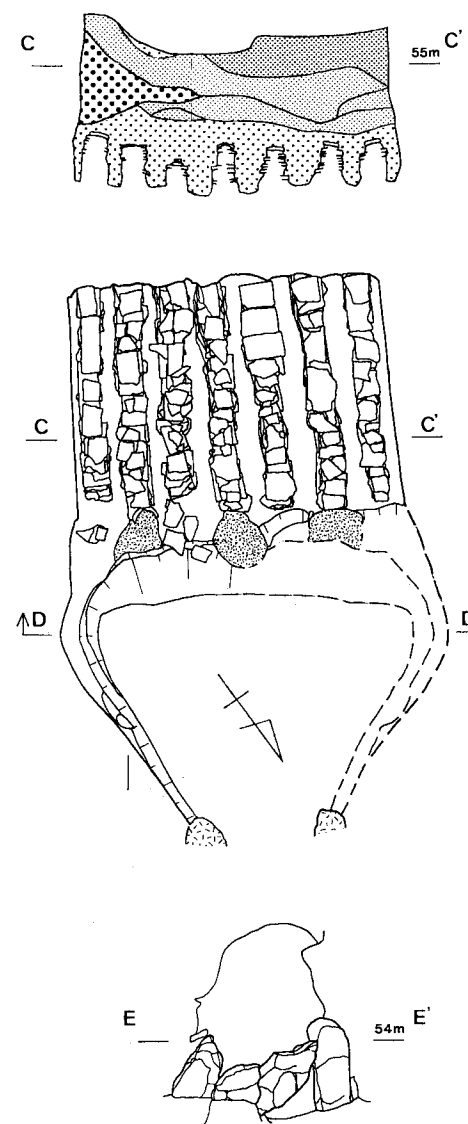
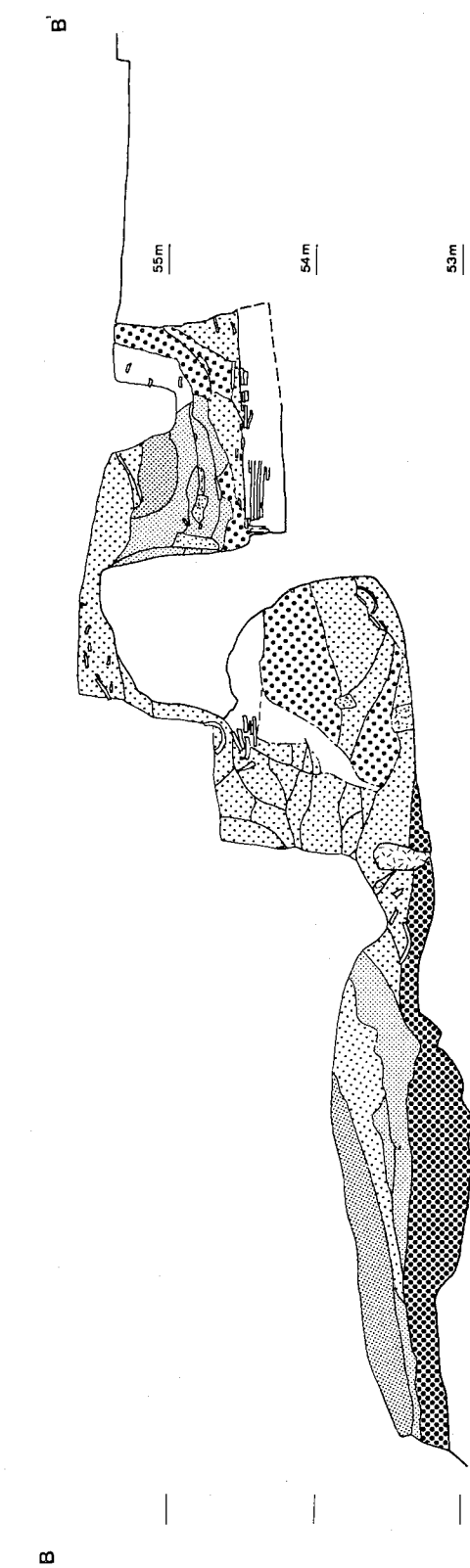
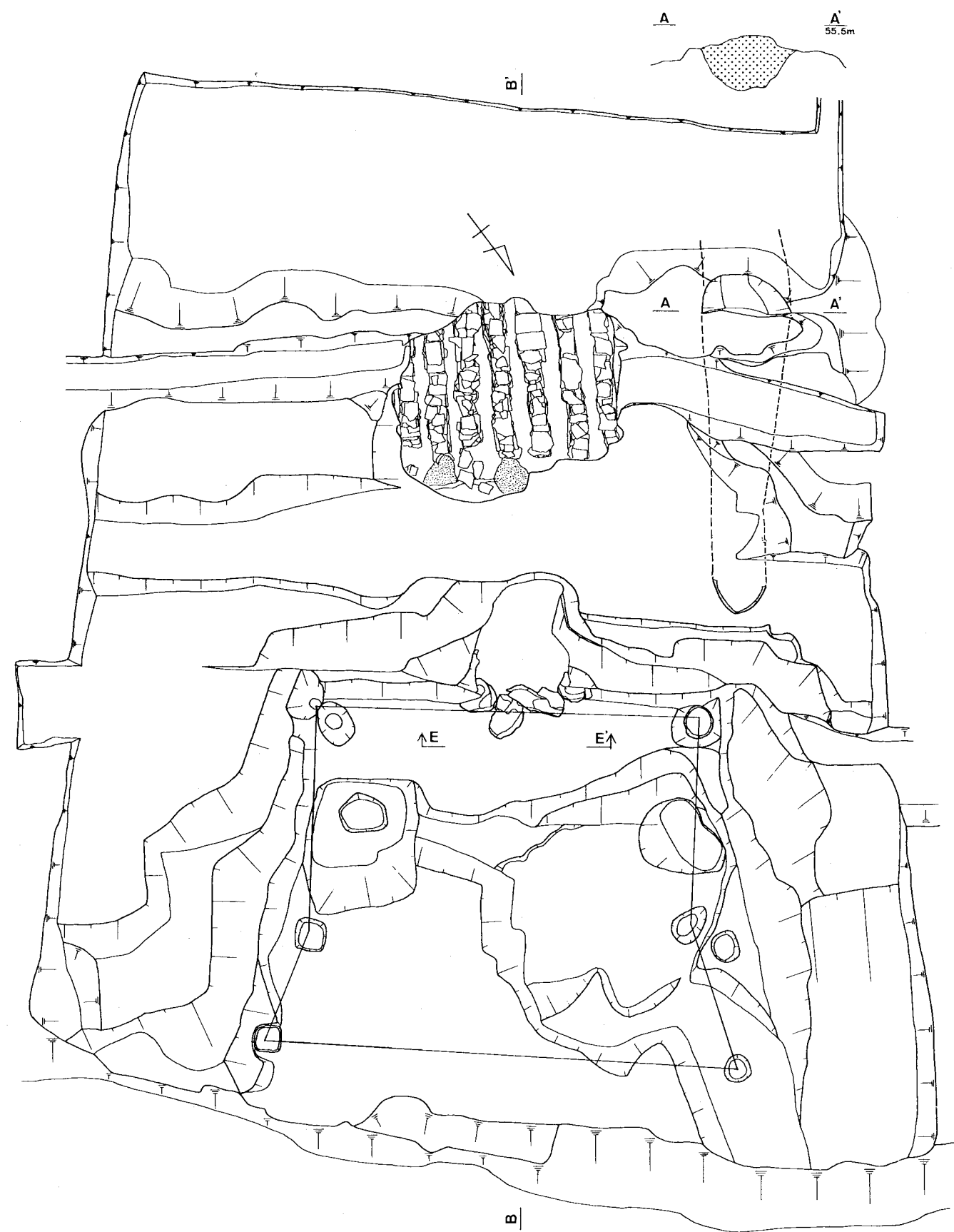
したがって、この窯は操業中に分焰柱の崩落をきっかけとして燃烧室天井が陥没したと考えられる。これによって、燃烧室の上部にできた窪みに堆積した灰黄色系の粘質土が窯体主軸に沿った土層断面図(B-B')にも明瞭に表れている。さらに、この窪みを埋めるように、二次的に崩落した窯体片などを含む橙色系の土が堆積している。

烧成室では、火床上面より20cm程度上まで流入土が堆積している。製品と考えられる瓦が残っていないことも考えると、烧成の最終段階で燃烧室天井が崩落した後に、烧成室から製品を取り出し、これを最後に2号窯は、烧成室が開口したままの状態に放棄されたと思われる。奥壁付近には、窯体片を多量に含むやや紫がかかった茶褐色系の粘質土が堆積している。この中からは磚(18・19)が出土しており、奥壁の改修時に用いられていたものが倒れ込んだと考えられる。その上層は、灰黄色系の流入土が窯全体に堆積しているが、最上層には多量の瓦と灰や炭を含んだ灰黒色土が堆積している。

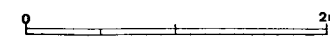


第56図 2号窯実測図(1/50)

0 2m



- 分焰柱
- 灰黑色系
- 灰茶色系
- 橙色系
- 灰黄色系
- 炭層
- 窯体片



第57图 8号窑实测图(1/50)

(2) 8号窯の調査(第57図)

8号窯は、南西側斜面に築かれた半地下式平窯である。焼成室天井が残存するなど、構築当初の窯の状態をよく残している。しかし、分焰柱に亀裂が入っているなど、崩落の危険性が高く、また、遺跡が保存される方向が固まったこともあって、焼成室内は南東側半分のみを掘削するにとどめた。焚き口から奥壁までの全長は3.9mを測る。

① 8号窯の構造

焼成室 焼成室床面は、幅2.1m・奥行1.6mと、2号窯よりも一回り大きい。火床は、2号窯と同様に7条であるために火床の間隔はやや広がっている。火床が奥壁に密着し、分焰柱に対応するものは前面が分焰柱に密着していることも2号窯と同じである。側壁が垂直に立ち上がり、奥壁が前方に傾斜することは2号窯と対照的である。煙道は認められなかった。

隔壁 隔壁の焼成室側の壁面は垂直に立ち上がっている。隔壁には4つの分焰孔が開けられ、地山を掘り残した部分が3本の分焰柱となっている。分焰柱及び分焰孔の位置が火床の位置に対応していることは2号窯と同じである。奥壁に向かって左端の分焰孔は完全に原形をとどめており、断面形は方形を呈する。

燃烧室 燃烧室は、窯壁の一部が剥落しているものの、天井を含めてよく残っていた。天井の高さは最も高いところで1.0mを測る。天井は、窯体主軸と直交する方向に軸を持ったアーチを描く。燃烧室の側辺はほぼ直線であり、平面形はほぼ正三角形を呈すると思われる。窯体主軸に直交する断面図(D-D')で見ると、側壁は床面から比較的滑らかなカーブを描きながら約50cm立ち上がった後、幅約10cmのテラスを持って幅を広げ、天井に続く。これは、両端の分焰孔に火がまわりやすくするための工夫とみられる。窯体主軸に沿った断面図(B-B')を見ると、床面は焚き口から奥に向かってゆるやかに高くなり、約0.15mの低い段を持って焼成室床面に続く。この段の上面は、前述の側壁のテラスと同じレベルとなっている。

焚き口 焚き口は2号窯と同様に花崗岩を鳥居形に組んで造っていたが、水平に架けた石は折れて落下していた。落下した石は、ひとつの面が強い火を受けて赤く焼けている。

前庭部 前庭部は、斜面を大きく切り開いて平坦面を造り出している。南東半分には平坦面が形成されているが、北西半分には北側の谷に向かう溝状の掘り込みがあり、灰を谷部に掻き出した痕跡であろうと思われる。前庭部にはピットが検出され、上屋が掛けられていたことが判明した。

排水溝 排水溝は、ほとんど削平されていたが、窯体の西側で一部がかろうじて残っていた。7号窯との間の攪乱の壁面にも排水溝らしき痕跡を認めることができたので、8号窯の背後を「コ」の字にめぐっていたと推定できる。

② 窯体内の堆積状況

窯体内の埋土は、大きくは黄灰色系の流入土、橙色系の均質な粘質土、焼土片を含む灰茶色系の粘質土に分けられる。焼成室は、2号窯と同様に、窯が放棄された後、開口したまま放置されていたようで、黄灰色系の土が奥壁付近から燃烧室にかけて流れ込んでいる。また、燃烧室の隔壁寄りではこれより先に焼成室から崩れ落ちてきた瓦の堆積がみられる。

焼成室奥壁側に堆積している橙色系の均質な粘質土は、奥壁上部が崩れ落ちたものと考えられる。また、焼成室の隔壁寄りから燃焼室にかけても橙色系の砂質土が多量に堆積しており、これも焼成室の天井の窯壁など、窯体の一部が崩れたものと考えられる。燃焼室の上部約20cmは、空洞が残っていた。焼成室では、これらの上に、隔壁側を中心に焼土片を多量に含んだ灰茶色系の粘質土が堆積しており、隔壁の一部が崩落したものと考えられる。

これよりも上層は、焼土をほとんど含まない黄灰色土によって埋没しているが、この黄灰色土を切り込むように多量の瓦と灰や炭を含んだ灰黒色土が堆積している。

③前庭部の堆積状況

前庭部の下層には、瓦・炭・灰を含む黒色の灰原層の上に茶灰色～茶褐色土と灰黄色土が堆積し、最上層には多量の瓦と灰や炭を含む灰黒色土が堆積している。

3. 出土遺物

(1) 軒丸瓦

1～3は、軒丸瓦6133Aである。1の丸瓦部凸面にはタテ方向の縄タタキが施されている。丸瓦部凹面には布目圧痕が認められるが、瓦当側半分には瓦当部と丸瓦部とを接合するために充填した粘土をタテ方向にヘラケズリした痕跡が認められる。しかし、充填粘土はそれほど多くない。丸瓦部には成形時のヨコ方向の粘土継目が観察される。2の丸瓦部凸面にはタテ方向のヘラミガキが施される。1は8号窯焼成室から、2は8号窯付近の表土から、3は2号窯付近の表土から出土した。

4～6は、軒丸瓦6133Bである。4・5と6では、瓦当面に対する丸瓦の接合位置が約180°反転している。いずれも丸瓦部凸面にはタテ方向のヘラミガキ、凹面には充填粘土をタテ方向にヘラケズリした痕跡が認められる。4の丸瓦部凸面には、成形時の粘土継目が観察される。4は2号窯焼成室から、5は2号窯灰原から、6は8号窯焼成室から出土した。

7は、軒丸瓦6133Cである。丸瓦部が剥離した部分の充填粘土に、丸瓦凹面の布目圧痕が転写されている。8号窯西側の表土から出土した。

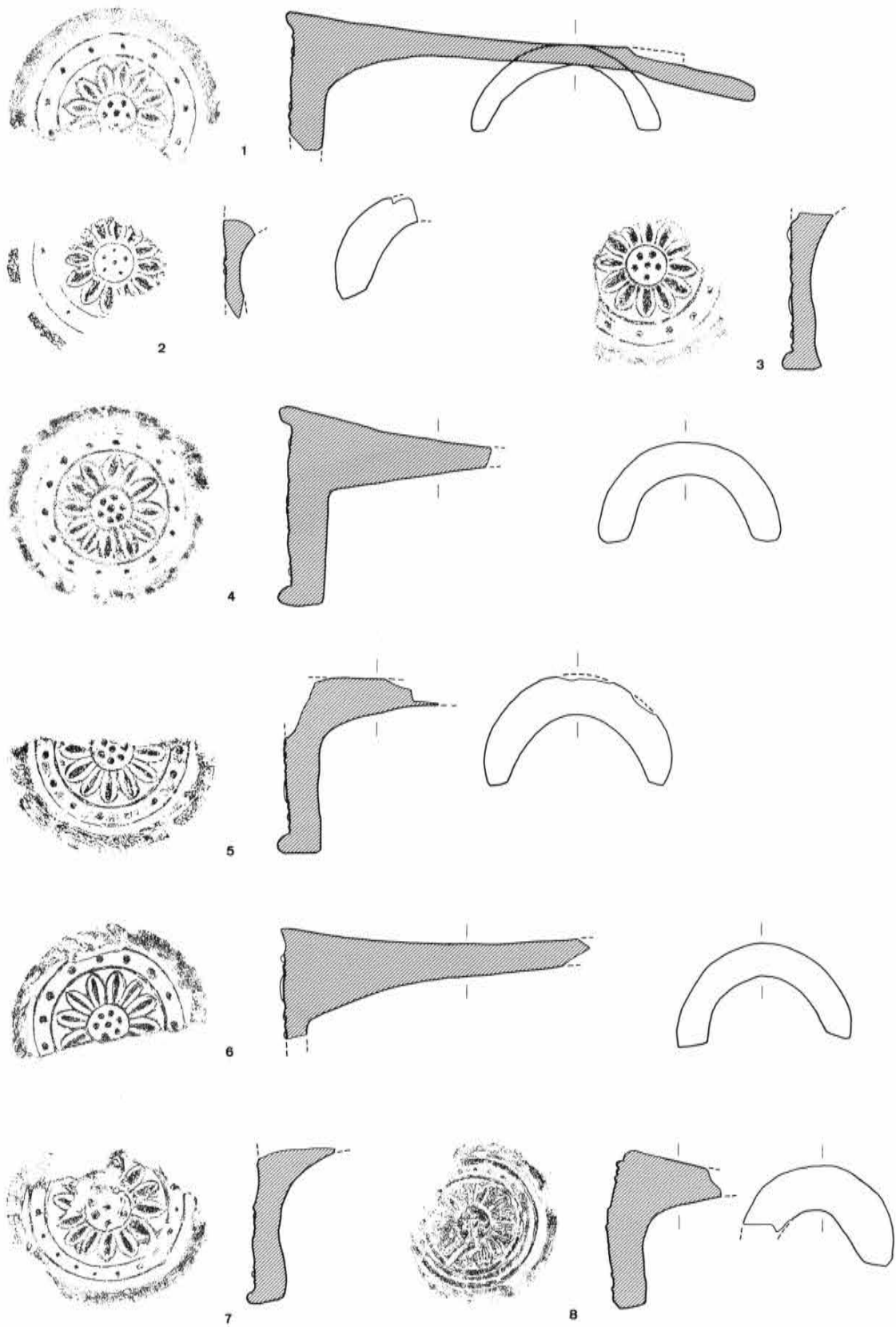
8は、軒丸瓦6130Bである。

(2) 軒平瓦

9～14は、軒平瓦6732Cである。いずれも、平瓦部凹面にはコビキ痕跡と布目圧痕が認められるが、平瓦部凸面の調整方法によって4種類に分類できる。

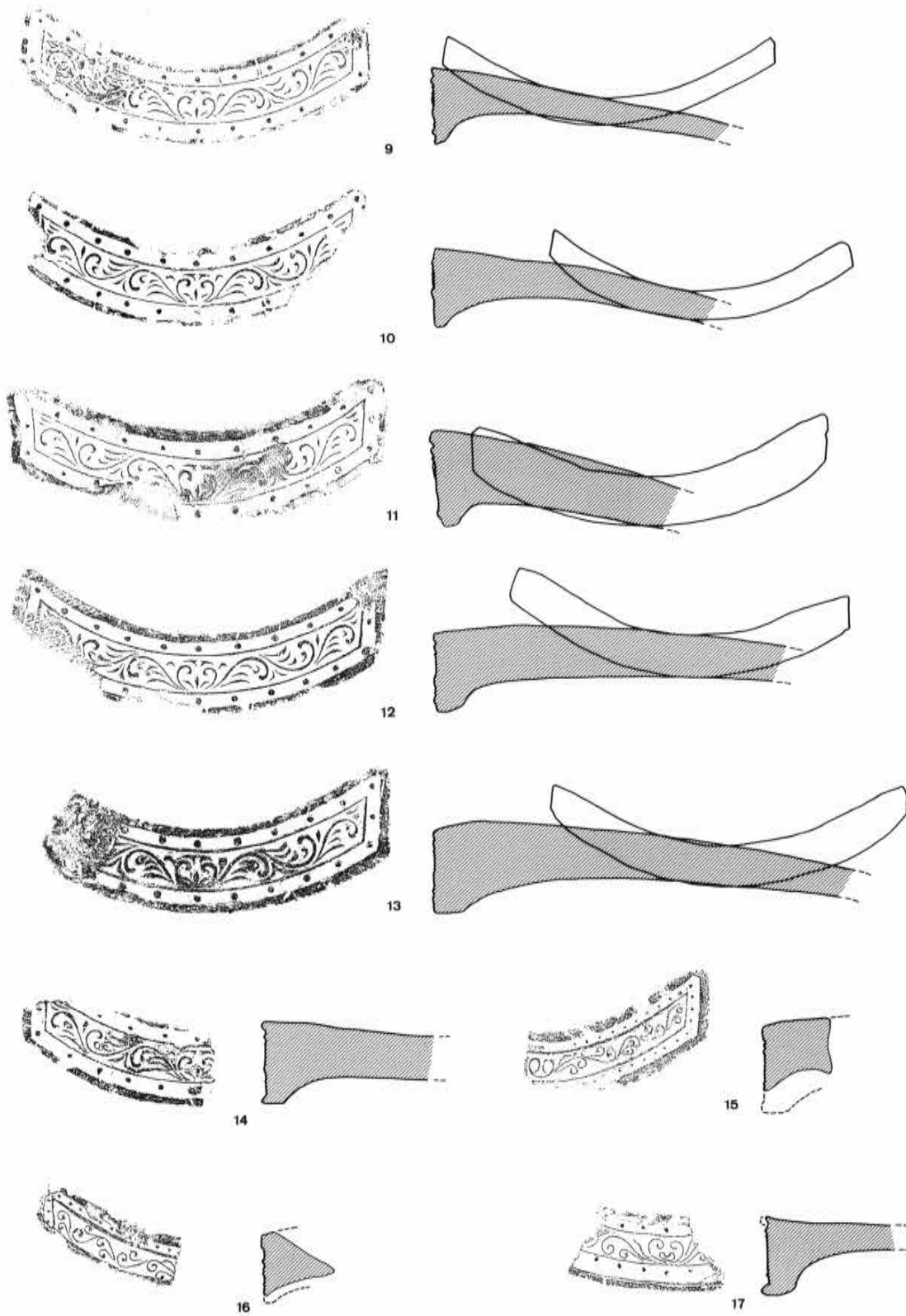
9・10は、平瓦部凸面にヨコ方向の縄タタキ+タテ方向の縄タタキ+タテ方向のヘラケズリの調整を行う。ヘラケズリは狭端部に向かって施されている。このタイプは顎の下端部の幅が狭く、平瓦部の厚さも他に比べて薄い。9は8号窯の灰原から、10は3号窯焚き口付近の表土から出土した。

11・12は、平瓦部凸面にヨコ方向の縄タタキ+タテ方向の縄タタキの調整を行う。全体に厚手



0 20cm

第58図 出土遺物実測図(1) 軒丸瓦



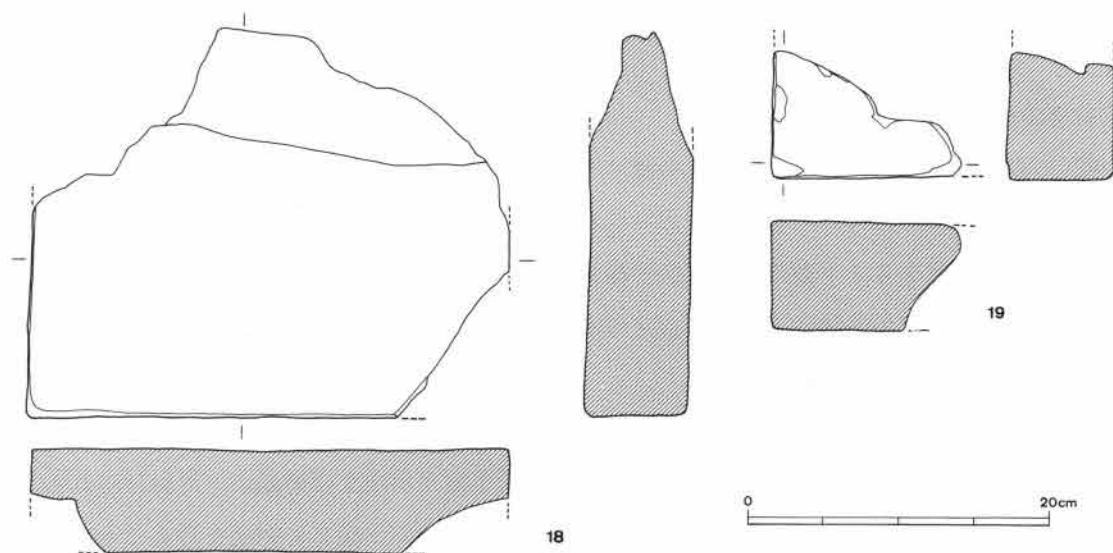
0 20cm

第59図 出土遺物実測図(2) 軒平瓦

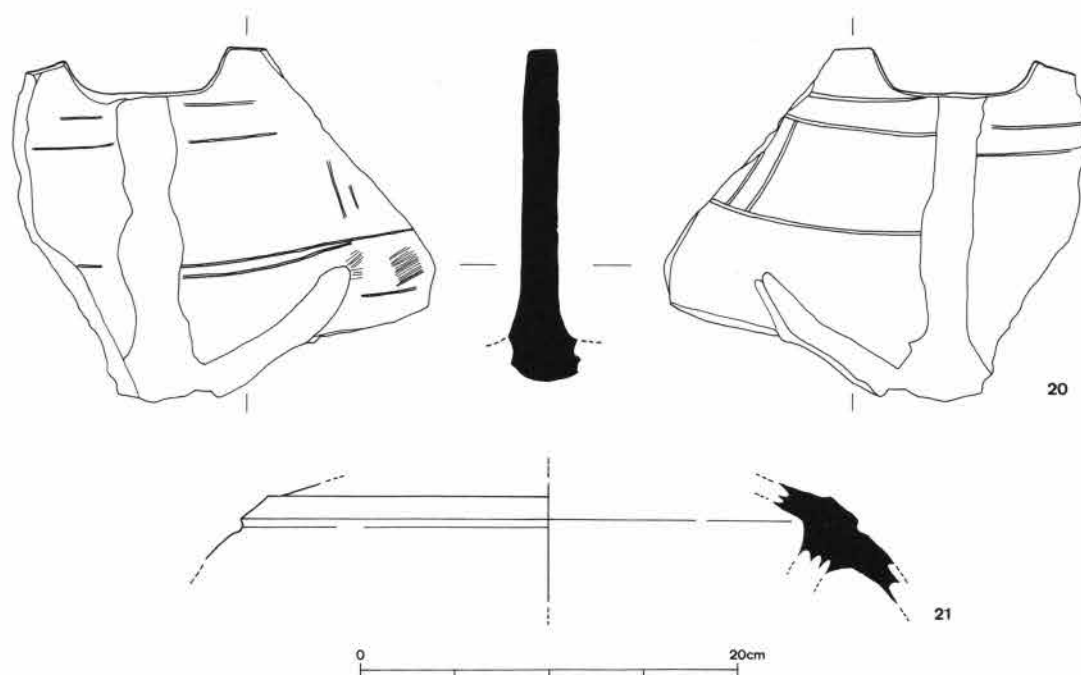
の作りである。11は、瓦当面に布目の圧痕が付いて変形している。2号窯焼成室の火床直上から出土しており、火床に使用されていた瓦の可能性が高い。12は、平瓦部凹面にスサ入り粘土が付着している。2号窯燃焼室の奥壁に向かって左側のスサ入り粘土層から出土しているので、分焰柱に使用されていたものと考えられる。

13は、平瓦部凸面にヨコ方向の縄タタキ+タテ方向のヘラケズリの調整を行い、顎下部にヨコ方向のヘラケズリを施す。タテ方向のヘラケズリは非常に強く施され、狭端部側半分では縄タタキが消されている。8号窯の灰原から出土した。

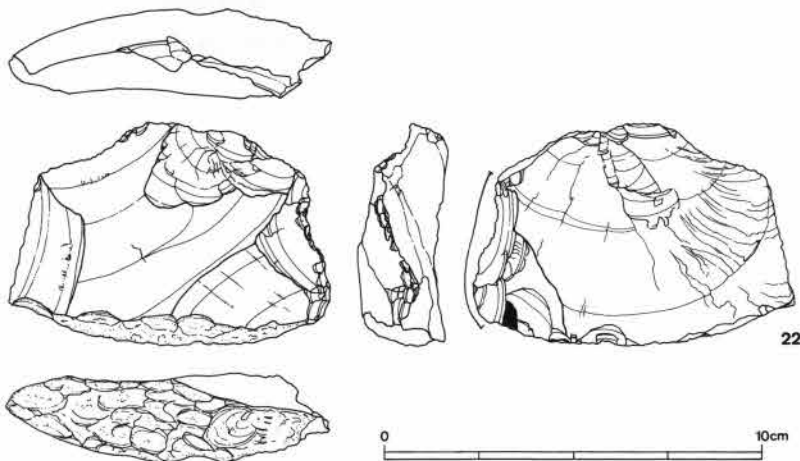
14は、平瓦部凸面にタテ方向の縄タタキを行う。8号窯の灰原から出土した。



第60図 出土遺物実測図(3) 埴



第61図 出土遺物実測図(4) 埴輪



第62図 出土遺物実測図(5) 石器

(3) その他の遺物

1区の表土掘削中に、蓋形埴輪の立ち飾りの基部(20)と笠部(21)の破片が出土した。丘陵上の上人ヶ平古墳群から転落したものと考えられる。

また、谷部でサヌカイト製の削器(22)を採集した。重さは95.2gである。縄文時代のもと思われるが、縄文時代の遺物は上人ヶ平遺跡の調査を含めて他にまったく出土していない。

4. まとめ

市坂瓦窯跡は、瓦窯において定型化したロストル式平窯が出現する時期に位置付けられるものである。今回の調査では、この時期の瓦窯の構造について多くの新しい知見を得ることができた。また、2基の窯は類似点が多いにもかかわらず、側壁が内傾する2号窯と、奥壁が内傾する8号窯、平坦な燃焼室床面から高い段を持って焼成室に続く2号窯と、ゆるやかに傾斜した燃焼室床面から低い段を持って焼成室に続く8号窯というように、相異点も認められた。試掘調査で判明した北東側斜面と南西側斜面の窯の間隔の違いが、独立した前庭部の有無に起因すると見られることも考えると、谷の両斜面で窯を築いた工人集団が異なっていた可能性を指摘することができる。このように、市坂瓦窯跡の調査は窯構造ばかりではなく、一連の瓦工房跡である上人ヶ平遺跡の調査成果と合わせてこの時期の瓦生産の実態を解明するためにも貴重な資料を提供するものと思われる。

(森島康雄)

15・16は、軒平瓦6718 Aである。平瓦部の調整が観察できる15では、ヨコ方向の縄タタキ+タテ方向の縄タタキの調整を行う。15は8号窯の焼成室、16は8号窯の燃焼室から出土した。

17は、軒平瓦6768 Eである。8号窯西側の表土中から出土した。

(3) 釜ヶ谷遺跡

1. 調査経過

釜ヶ谷遺跡は、木津町東部の丘陵地帯を幅約100m・長さ約900mにわたって南北に細長くのびた谷部にある遺跡であり、西側の丘陵上には弥生時代の竪穴式住居跡(燈籠寺遺跡)や古墳時代中～後期の古墳群(内田山古墳群)が、東側の丘陵上には土師器・須恵器などが散布する赤ヶ平遺跡がある。

釜ヶ谷遺跡の調査は第2次目を数える。昭和59年度の第1次調査では、5番地・45番地・114番地の各水田面で試掘調査を実施し、奈良時代～中・近世の遺物を含む包含層を検出している。今回の第2次調査は、第1次調査の試掘調査を踏まえ、釜ヶ谷遺跡の範囲をより限定するために5番地に隣接した6番地と26番地の2か所にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。

2. 調査概要

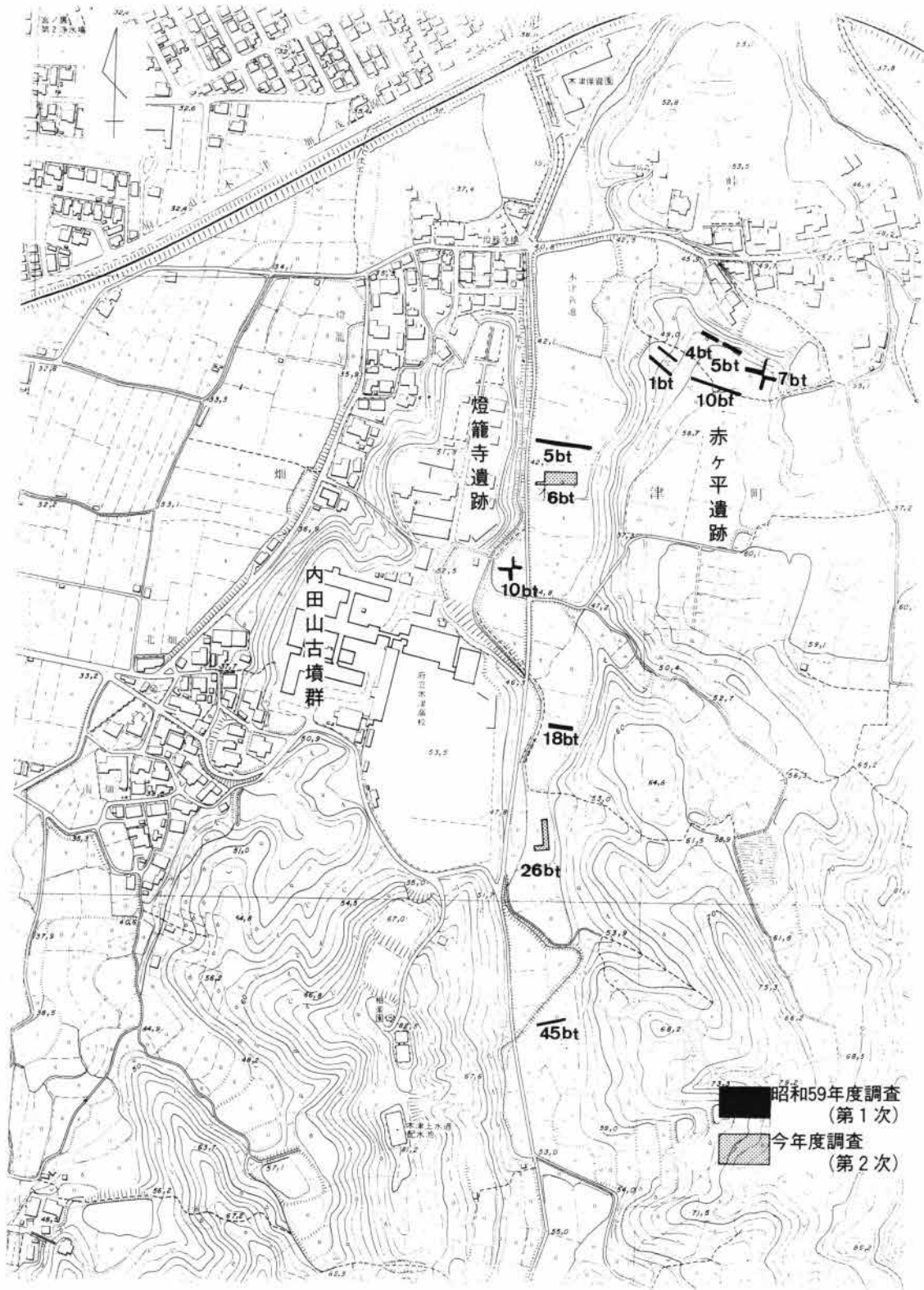
(1) 基本層序

6・26番地とも耕作土を除去したのち掘削を開始した。6番地の基本層序は、耕作土直下に黄色粘質土(厚さ約10～40cm)、淡黄色粘質土(厚さ約20～40cm)、明緑灰粘質土(厚さ約10～40cm)、灰白色砂質土(厚さ約10～40cm)、明黄褐色粘質土(厚さ約5～10cm)、灰白色砂質土(厚さ約5～10cm)が堆積している。各層の大半は無遺物であるが、わずかに近・現代の陶磁器を含む程度であった。その下層である褐灰色粘質土(厚さ約5～15cm)に瓦器碗や土師器皿の小片を含む包含層がある。この中世の包含層を除去すると、奈良時代の遺物を含む小ピットや不明土坑のほか、旧河川を検出した。奈良時代と思われる各遺構の埋土はオリーブ灰色粘性砂質土で、ベースとなる地山土は黄橙色砂礫土や灰色砂質土が厚さ1mにわたって堆積していた。

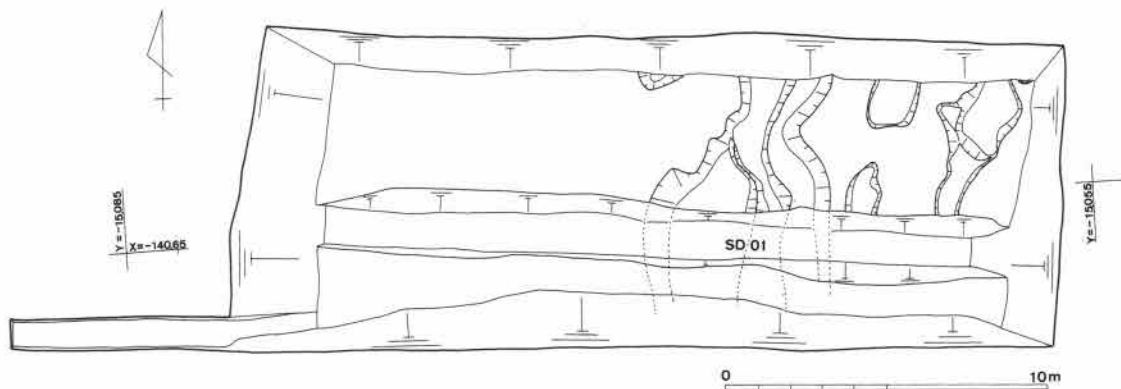
26番地では耕作土・床面の直下で黄色粘質土(厚さ約25cm)、淡黄色粘質土(厚さ約10～40cm)、灰白色細砂を含む黄色粘質土(厚さ約15～30cm)、灰白色粘質土(厚さ約20～40cm)、灰白色砂質土(厚さ約25cm)がほぼ水平堆積していた。その下層である明褐灰色粘質土内に、瓦器や土師器の細片を含んでいたが、その下層は無遺物層であった。

(2) 検出遺構

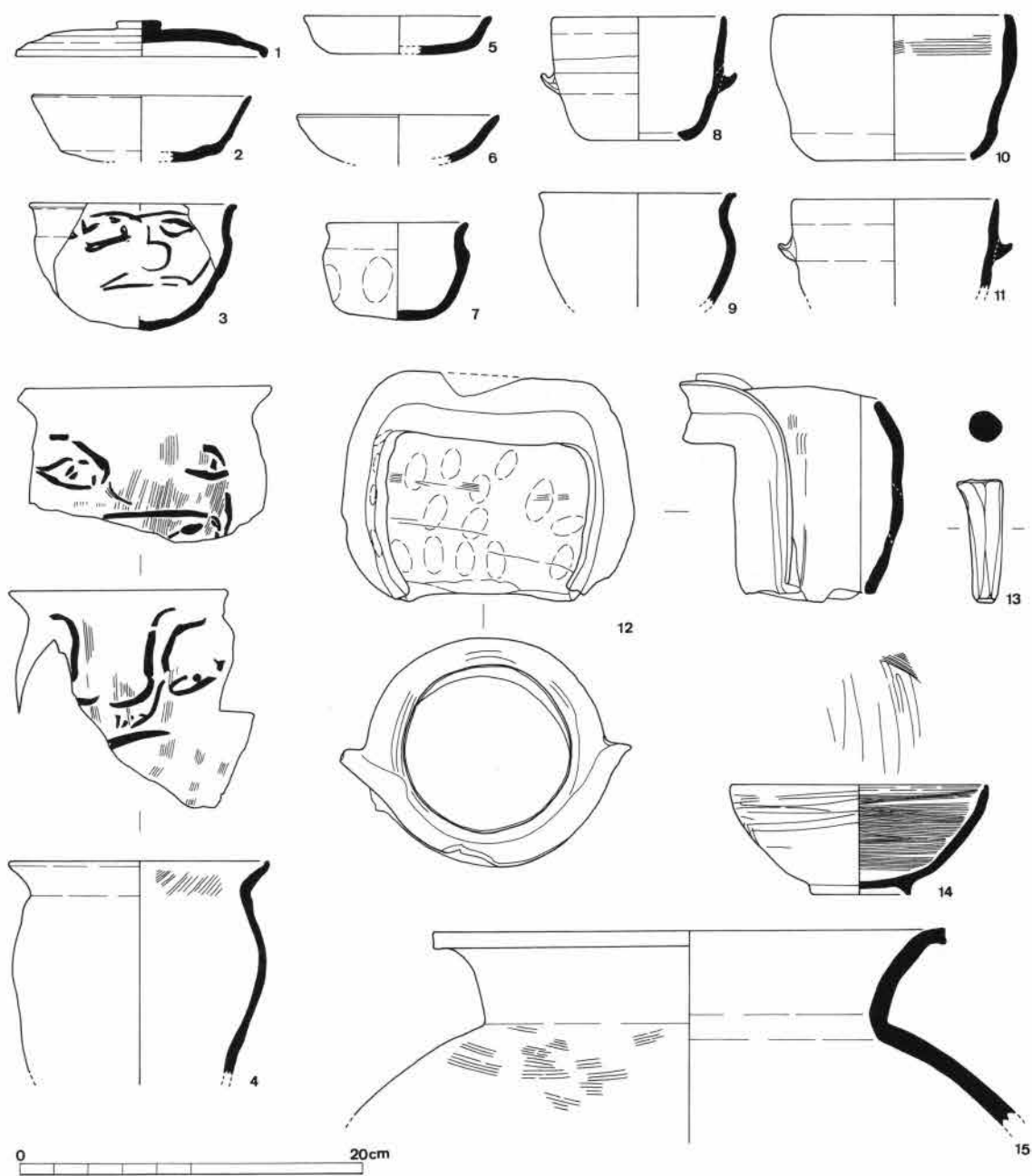
26番地では、前述のように中世包含層を除去した段階で小ピットを数か所検出したが、ピットの埋土内からは遺物が出土しておらず、時期などは不明である。6番地でもトレンチの東半部で土坑あるいは溝状遺構を検出したが、その大半は遺物を含まず時期を決定する資料にかける。そのなかでも、トレンチ東端から西へ約9mの位置で検出したS D01の上面で、土器が比較的まとまって出土した。S D01は、上面幅約2.4m・深さ0.4mで、オリーブ灰色粘質土を埋土とする南



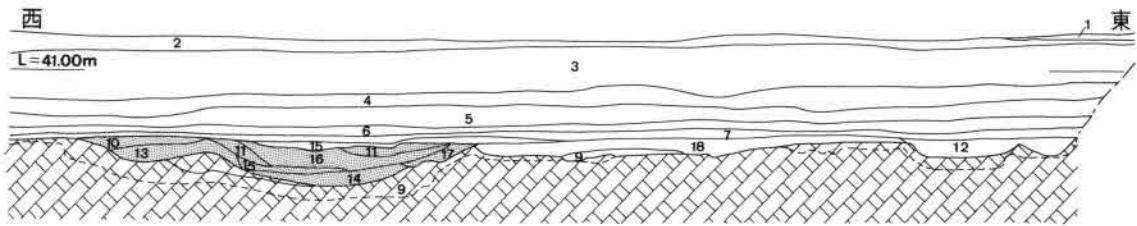
第63図 調査トレンチ配置図(1/5,000)



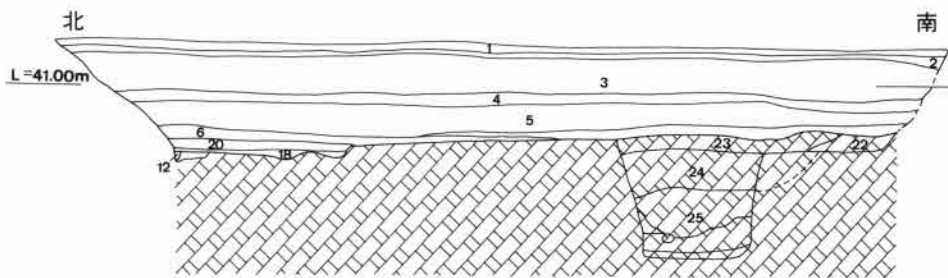
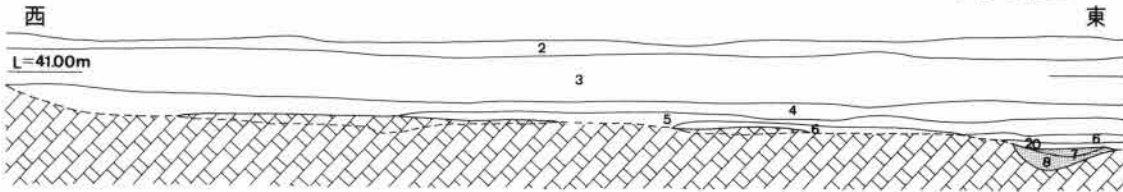
第64図 釜ヶ谷遺跡6番地遺構図



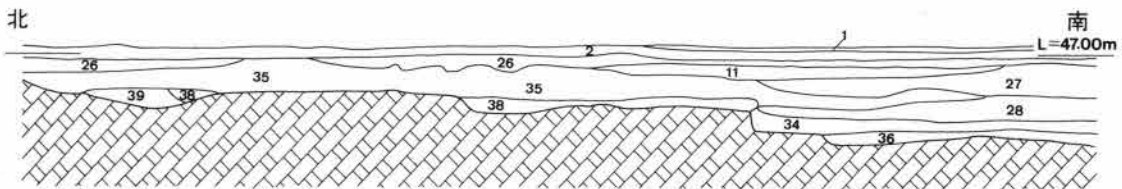
第65図 釜ヶ谷遺跡出土遺物実測図



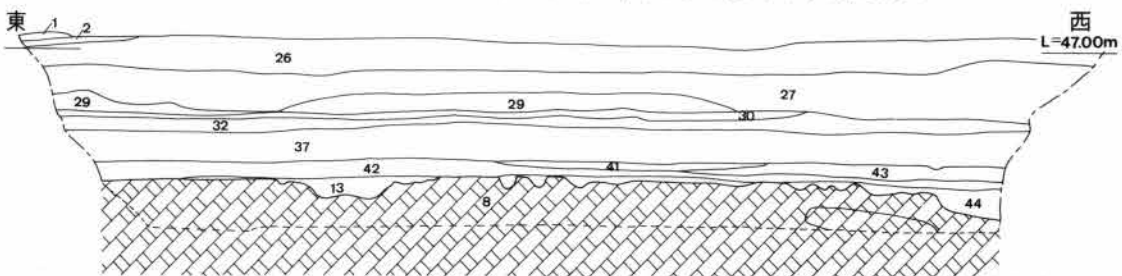
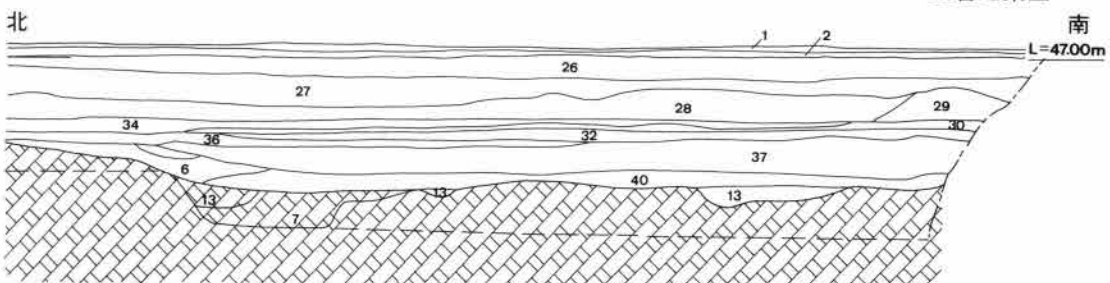
6番地北壁



6番地東壁



26番地東壁



26番地南壁



第66図 土層断面図

1. 耕作土
2. 床土10Y R黄橙(7/8)色土
3. 10Y R灰白(7/1)色粘質土
4. 10Y R褐灰(7/1)色粘質土
5. 10Y R灰黄褐(5/2)色粘質土
6. 10Y R褐灰(5/1)色粘質土
7. 10Y R褐灰(4/1)色粘土
8. 10G Y暗緑灰(4/1)色粘土
9. 7・5G Y明緑灰(8/1)色砂質土(地山)
10. 7・5G Y明緑灰(7/1)色砂質土
11. 5G Yオリーブ灰(5/1)色粘性砂質土
12. 5Y灰(4/1)色砂質土
13. 10Y R褐灰(6/1)色砂質土
14. 2・5G Y灰白(8/1)色砂礫
15. 2・5G Yオリーブ灰(5/1)色粘土
16. 2・5G Yオリーブ灰(6/1)色粘土(砂を多く含む)
17. 2・5G Y明オリーブ灰(7/1)色砂
18. 2・5G Y灰白(8/1)色砂
19. 7・5Y灰(5/1)色粘質土
20. 10Y R黒褐(3/1)色粘質土
21. 10Y R褐灰(5/1)色砂礫土
22. 10Y R黄橙(8/8)色砂礫
23. 5G明緑灰(7/1)色細砂
24. 10Y R黄橙(8/8)色砂礫
25. 5B G青灰(6/1)色砂礫
26. 2・5Y黄(8/8)色粘質土
27. 2・5Y淡黄(8/4)色粘質土
28. 2・5Y黄(8/8)色粘質土に7・5Y灰白(8/2)色細砂の混じった土
29. 7・5Y灰白(8/2)色細砂
30. 5G Y灰白(8/1)色粘質土
32. 7・5G Y明緑灰(8/1)色砂質土
34. 7・5Y灰白(8/1)色粘質土
35. 5Y淡黄(8/3)色粘土
36. 5G Y灰白(8/1)色粘質土
37. 5Y灰白(8/1)色砂質土
38. 7・5Y R灰褐(6/2)色土
39. 10Y Rにぶい黄橙(7/2)色砂礫
40. 10Y R灰白(7/1)色砂質土
41. 10G明緑灰(7/1)色粘質土
42. 10Y R灰白(7/1)色砂質土
43. 10Y R明黄褐(7/6)色粘質土
44. 10Y R黒(2/1)色粘質土
45. 10G Y明緑灰(8/1)色砂質土

北方向にのびる溝状遺構で、第1次調査の5番地の第11層(紫灰褐色粘質土)に相当するものと思われる。S D01上面で出土した土器には、須恵器甕・蓋のほか、墨書人面土器・ミニチュアカマドなどがあり、祭祀的な遺物が多い。

3. 出土遺物

6番地S D01からは須恵器杯A(2)、杯蓋(1)、甕(15)、土師器皿(5・6)、墨書人面土器(3・4)、ミニチュアカマド(12)とコシキ(8・10・11)・カマコ(7・9)・土製支脚(13)がある。須恵器杯蓋(1)は、水平ぎみの天井部に扁平な宝珠形つまみがつく。端部は丸みをもって内側に折り返している。杯Aは、やや丸底ぎみの底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続く。甕(15)は、斜め上方に立ち上がる口縁部から口縁端部を下方にわずかに肥厚させている。体部外面はタキの後一部すり消している。土師器皿(5・6)は、平底あるいは丸底ぎみの底部から斜め上方にやや外反しながら立ち上がる口縁部へ続く。口縁部のみヨコナデ調整を施す。墨書人面土器(3・4)は、球形あるいは丸底ぎみの底部で扁球形の体部へ続き、口縁部はわずかに外反する。3・4の外面には墨書で人の顔が描かれている。3は一面描き、4は二面描きである。ミニチュアカマド(12)は、器高約13cm・口径約9.5cmで大きく開く焚き口をもち、付け廂である。カマコ(7・9)は、扁球形の体部で口縁部がわずかに外反する。コシキは、深い椀状を呈し、底部が焼成前に穿孔されている。肩部には一対の把手を付けている。瓦器椀(14)は、6番地明褐色粘質土の包含層から出土したもので、内・外面に暗文が施されている。

4. まとめ

釜ヶ谷遺跡は、昭和59年度の第1次調査で遺跡の存在を確認していたが、試掘調査であったため遺跡の範囲やその性格について十分には明らかにしえなかった。今回の第2次調査は、遺跡の範囲をより限定し、その性格を明らかにするために2か所のトレンチを設定して試掘調査を行った。その結果、釜ヶ谷遺跡は、遺跡の南端は26番地までは広がらなかったことが明らかになり、6番地では奈良時代の遺物を含む流路を検出した。この流路から出土した遺物には墨書人面土器やミニチュアカマドとカマコ・コシキなど祭祀的色彩を帯びたものがあり、この流路を利用して何らかの祭祀を行ったことが考えられる。なお、釜ヶ谷遺跡は次年度以降、第1次・第2次の試掘調査を踏まえて面的調査が予定されている。

(石井清司)

(4) 上人ヶ平3号墳

1. 調査経過

調査地は、相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平に所在する。上人ヶ平遺跡を含む丘陵の北西端部に位置し、西側の平野部を眼下に望む斜面地に立地する。これまで、『京都府遺跡地図』には市坂3号墳として掲載されていたが、詳細は不明であった^(注4)。また、調査地の東側をJR関西本線が南北に通っており、その鉄道建設の開削によって地形の東半分が削平を受けている。そのため、全体の地形が把握できない状況であった。

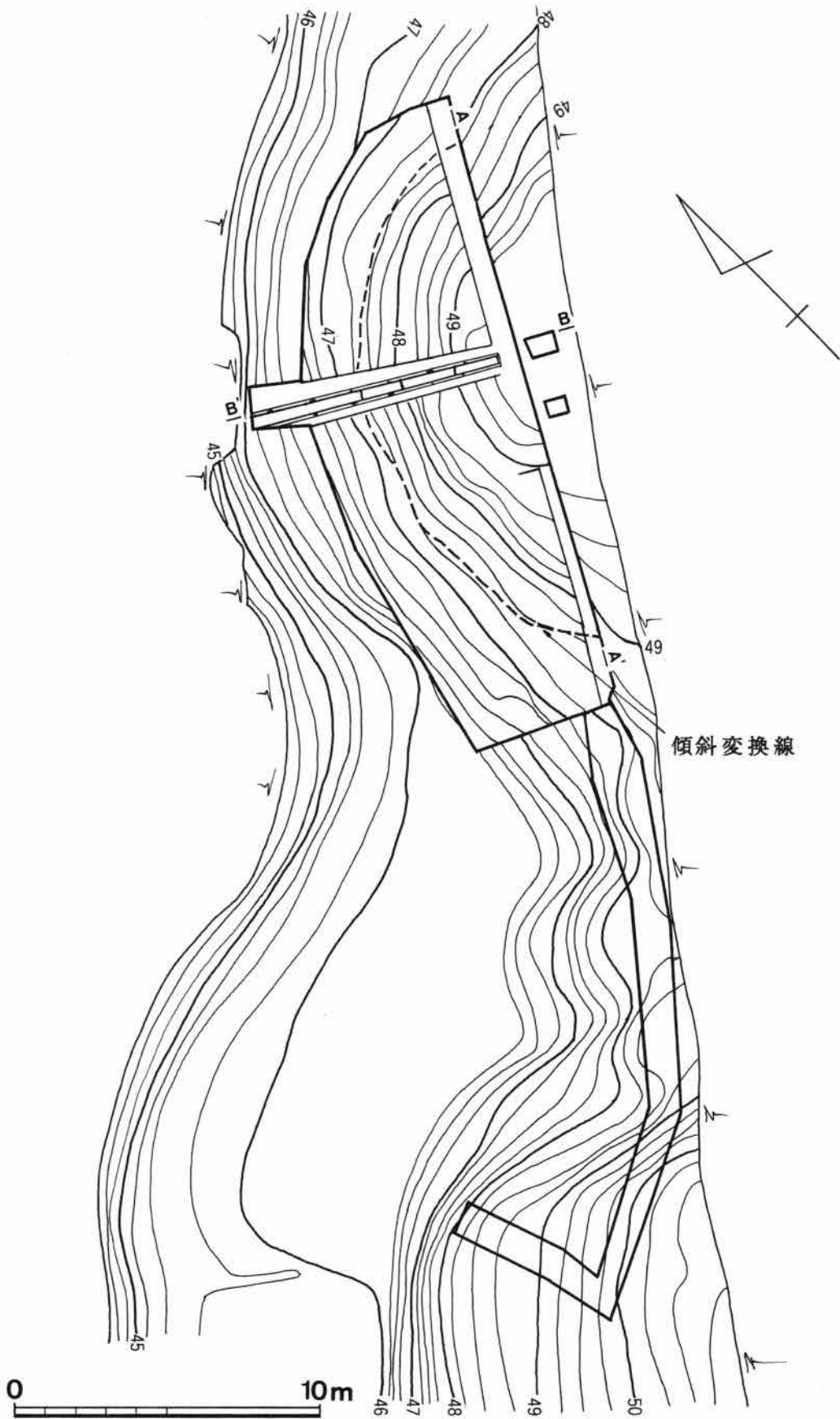
2. 調査概要

調査は、埋葬施設の規模、墳丘盛り土の有無や、古墳の規模・形状の確認を目的として実施した。まず、地形頂部の平坦面を通るように、西・南北方向の斜面に東西・南北方向の幅1m規模のトレンチを設定することからはじめた。

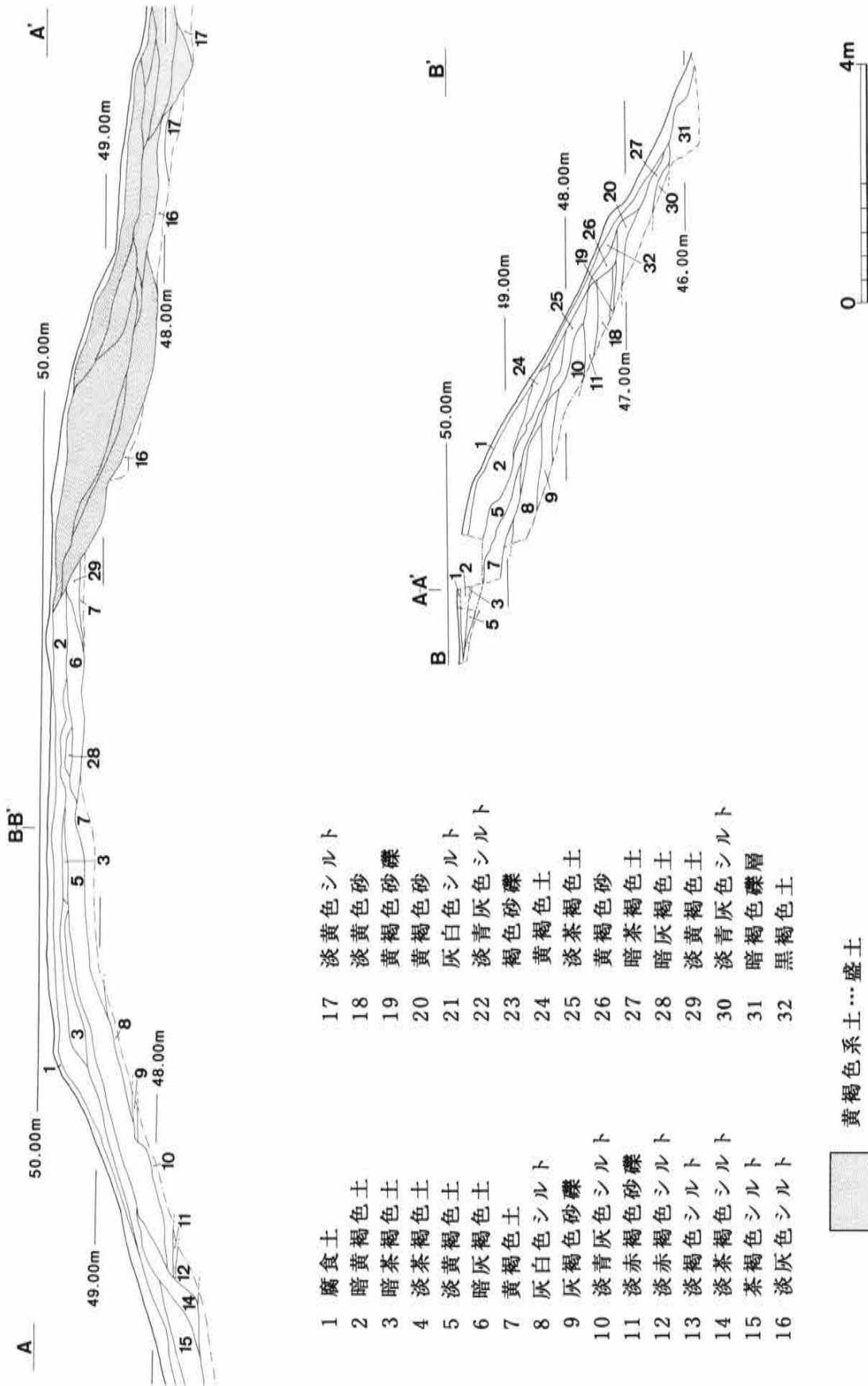
その結果、地形頂部の平坦面では表土層直下に地山層が認められた。地山面では、墓塚などの埋葬施設は検出できなかった。斜面部では、墳丘盛り土はなく、北・西側で表土下に厚さ20～80cmの上部からの流入土がある。その下層では、厚さ20～40cmのシルト層が薄い砂礫層を間層として水平に堆積していた。これらのシルト層は、上人ヶ平遺跡



第67図 調査地位置図



第68図 地形測量図及びトレンチ配置図



第69図 土層断面図

の位置する丘陵の基盤層の洪積層にあたると思われる。また、南側では鉄道開削時に排出された土が厚く堆積し、その下層は北・西側と同じ様相を呈する。

北・西・南側のトレンチでは、地形頂部の平坦面から約2 m下で傾斜が変化する点が地山面上で3か所認められた。そのため、それらを結ぶ傾斜変換線から地形頂部までを地山面まで掘り下げた。その結果、いずれも流入土中から葺石・列石などの古墳の外部施設や古墳時代の遺物は1点も確認できず、古墳であること自体に疑問がもたれた。ただし、古墳時代以外の遺物として、平坦面から斜面にかけての流入土から弥生土器の細片を採取した。

また、南側斜面では鉄道開削時の排土と思われる盛り土層があり、この盛り土層が古墳状の外見を示す大きな要因であった。調査地のすぐ南に上人ヶ平2号墳が位置し、可能な限りトレンチを延長したが、表土直下で地山層となり、顕著な遺構・遺物などは検出できなかった。

3. まとめ

鉄道開削のために半分以上を削られた地形での限られた範囲の調査であったため、埋葬施設などは検出できなかった。また、墳丘想定部分にも墳丘盛り土はなく、葺石・列石などもなかった。地形頂部より比高2 m下で、地山面上の傾斜変換線が円弧状を描くが、調査範囲内には古墳時代の遺物は出土しなかった。また、今までの上人ヶ平古墳群の調査の結果、台地縁辺部の斜面に立地する古墳はなく、検出した古墳の埋葬施設以外からも須恵器、土師器、埴輪などの遺物が出土していることから考えると、上人ヶ平3号墳は古墳ではない可能性もある。

(橋本 稔)

注1 阿倍利恵子・石井伸卓・石橋明子・五百磐和代・五百磐明・井ノ口雄三・鹿島昌也・勝見直子・木本昌英・久田 亨・日下隆春・工藤伸治・田島 肇・筒井由香・中野行真・西根正弘・永尾幸江・羽生夕紀子・有馬三喜子・木下町子・新谷二三代・辻 道子・中西 修・林 恵子・林 益美・菱田直実・福永美千代・古川良子・吉永清美・芳谷とも子

注2 西村 康・山崎信二・上原真人・森 郁夫・松本秀人・中井 公・中島和彦・宮崎正裕・菱田哲郎・藪中五百樹・山本清一(敬称略・順不同)

注3 松井忠春・長谷川達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』 京都府教育委員会) 1982

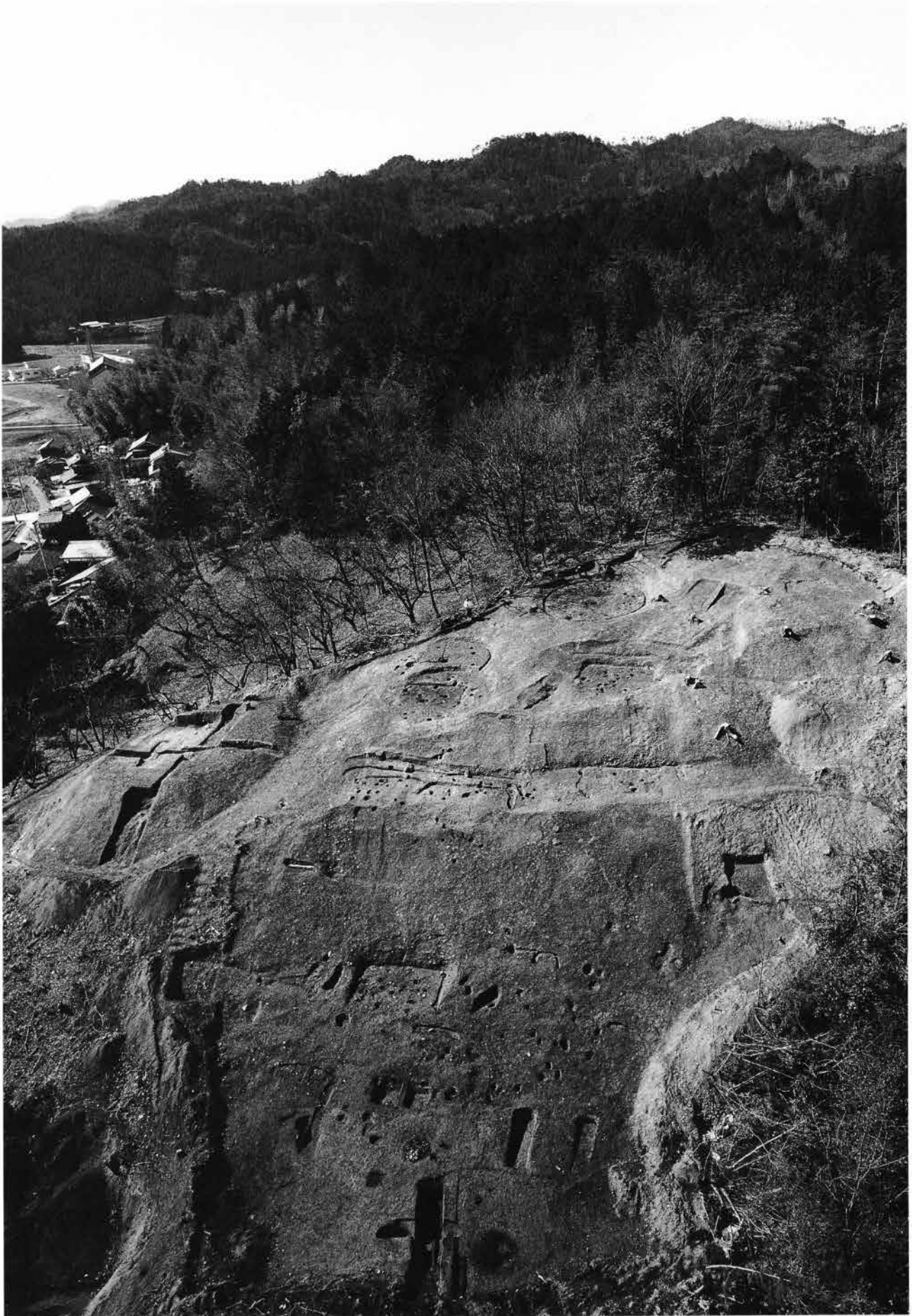
小山雅人・戸原和人・松井忠春「3. 木津地区所在遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

辻本和美・石井清司・有井広幸「3. 木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注4 市坂3号墳については、表題のとおり上人ヶ平3号墳と呼称する。

圖

版



今林2号墳・今林遺跡調査地全景（東から）



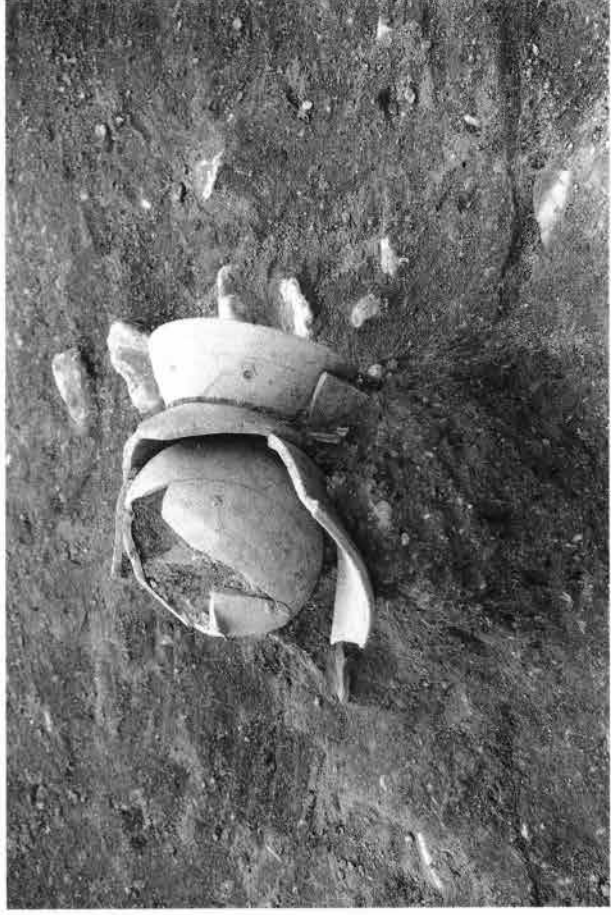
(1) 今林2号墳・今林遺跡調査地遠景（西から）



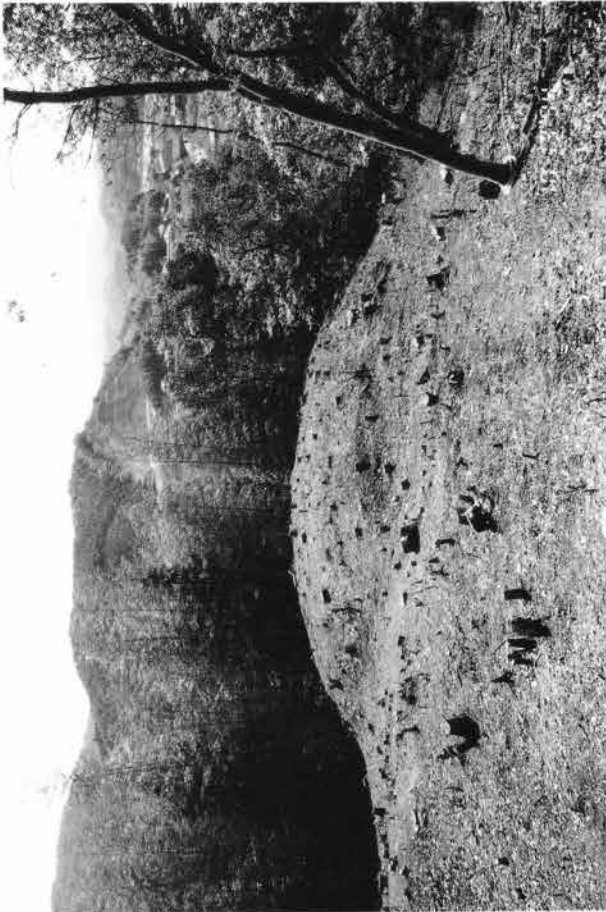
(2) 今林遺跡調査地全景（北東から）



(3) 第1主体部上面遺物出土状況(東から)



(4) 第1主体部上面須恵器出土状況(北から)



(1) 今林2号墳調査前全景(北から)



(2) 今林2号墳土層断面図(北東から)



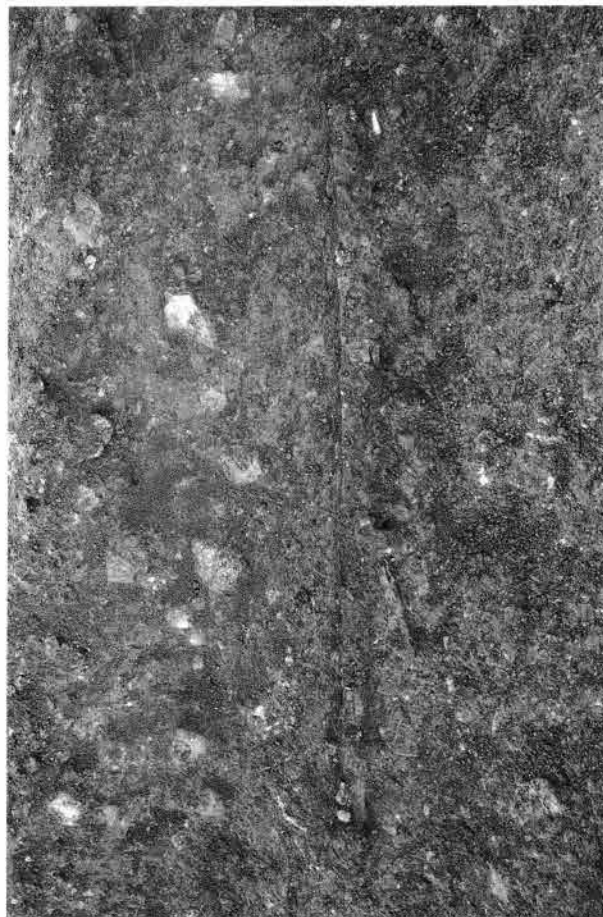
(1) 第1主体部全景 (東から)



(3) 第1主体部鉄器出土状況 (東から)



(2) 第1主体部遺物出土状況 (東から)



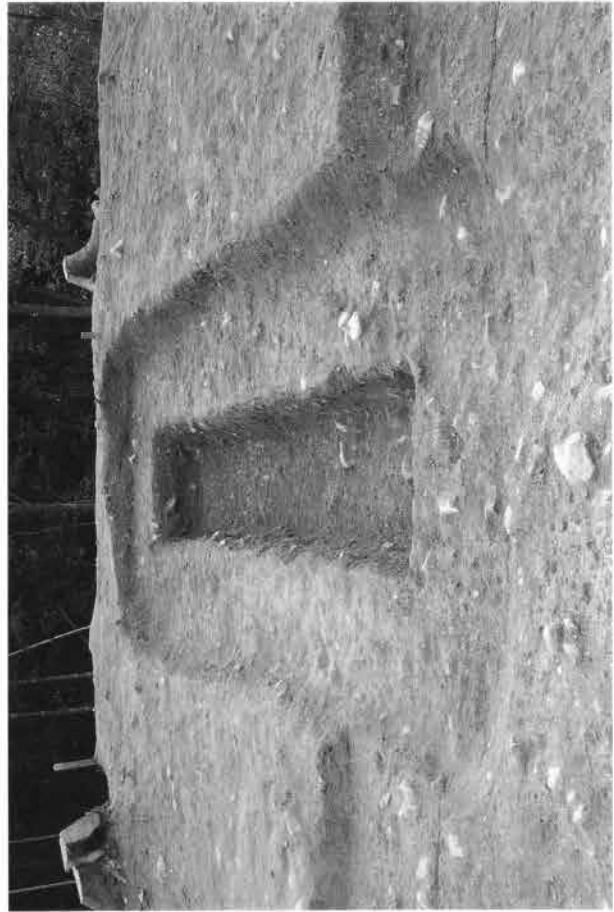
(4) 第1主体部鉄刀出土状況



(1) 第1主体部鉄鍔・漆製品出土状況 (真上から)



(3) 第3主体部全景 (東から)



(2) 第2主体部全景



(4) 第3主体部遺物出土状況 (真上から)



(1) 第3主体部西側小口粘土 (北から)



(2) 第3主体部東側小口粘土 (南から)



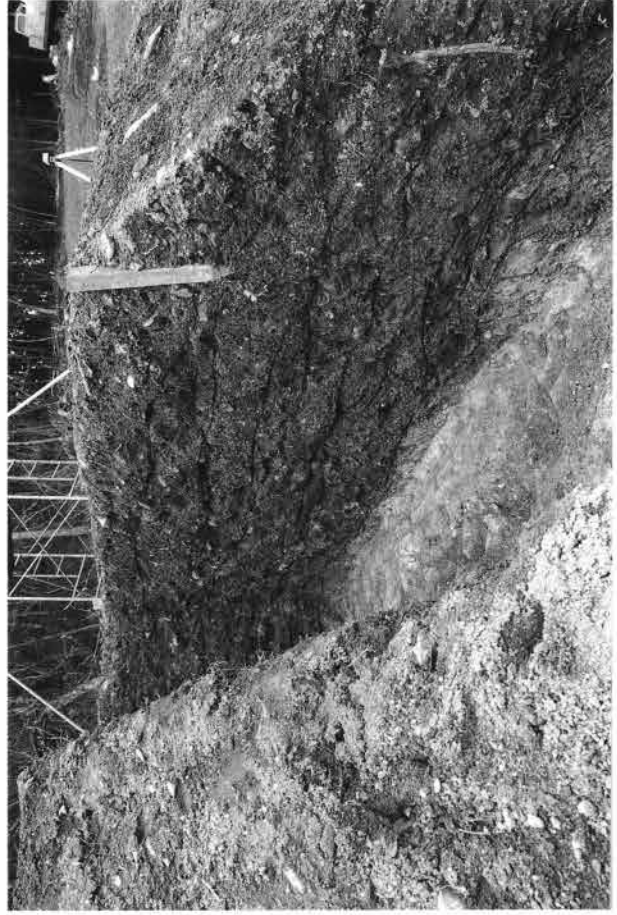
(3) 第4主体部全景 (東から)



(4) 第4主体部遺物出土状況 (南から)



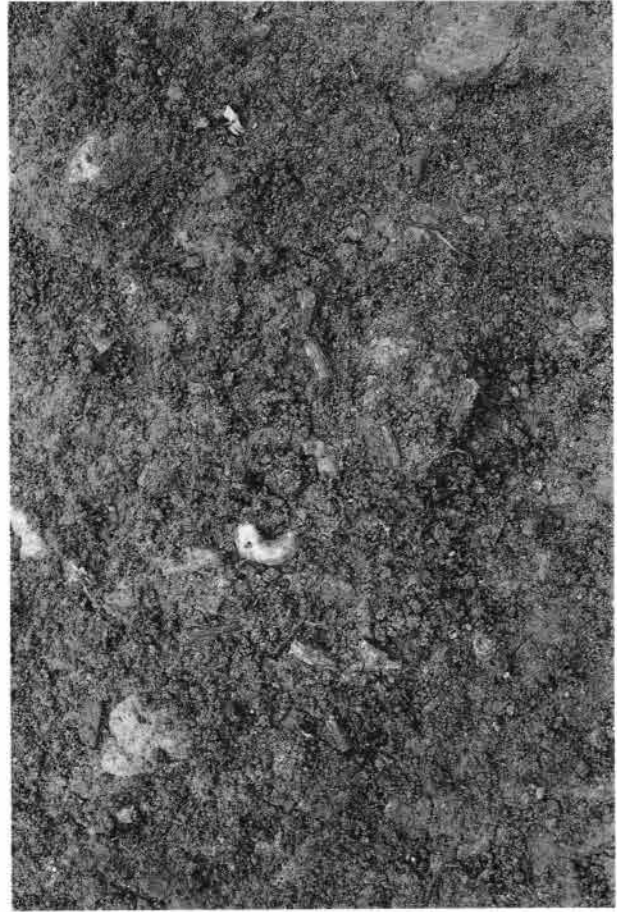
(3) 墳丘南側土層断面 (東から)



(4) 墳丘東側土層断面 (南東から)



(1) 第4主体部鉄鏃出土状況 (真上から)



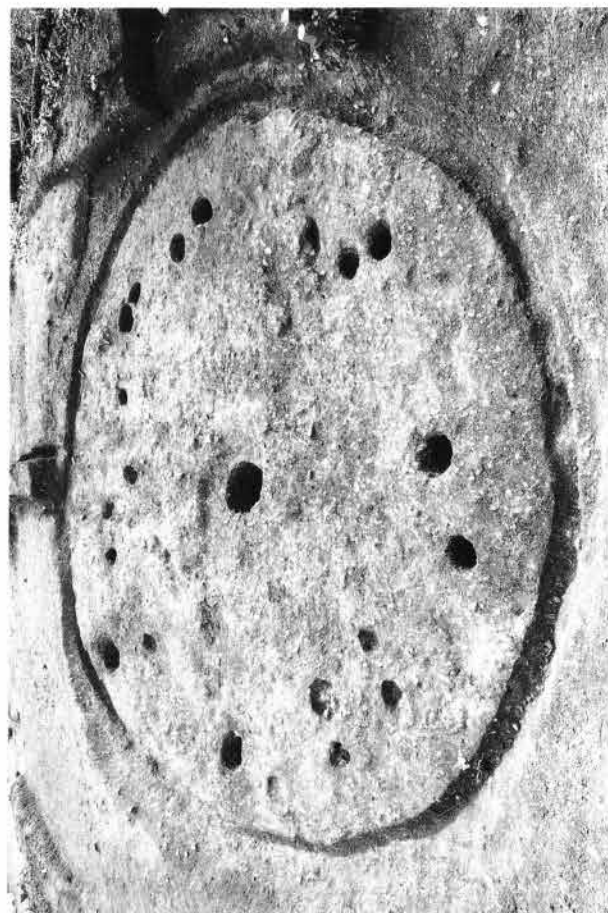
(2) 第4主体部玉類出土状況 (真上から)



(1) SH01検出状況 (南東から)



(3) SH01周壁溝遺物出土状況 (西から)



(2) SH01全景 (北から)



(4) SH02・SH03・SH08全景 (南から)



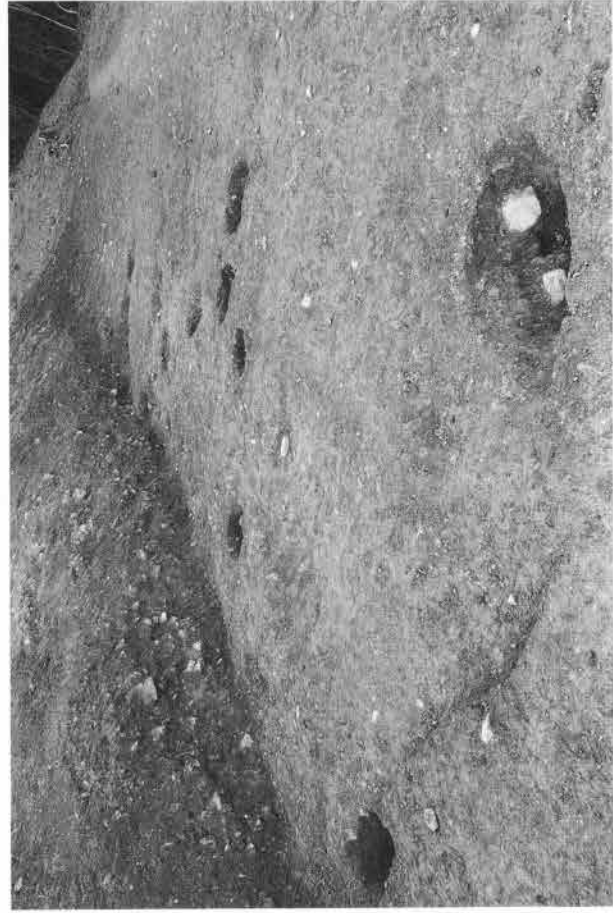
(3) SH09全景 (南西から)



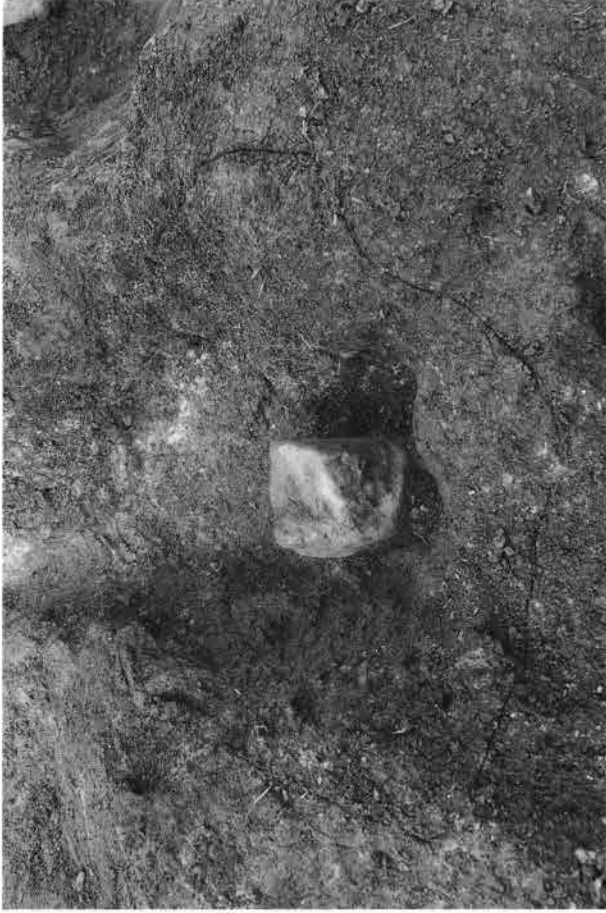
(4) SH09ピット内遺物出土状況 (東から)



(1) SH08全景 (南から)



(2) SH18全景 (南東から)



(3) SH07竈検出状況 (西から)



(4) SH07竈完掘状況 (西から)



(1) SH07全景 (西から)



(2) SH07集石検出状況 (南から)



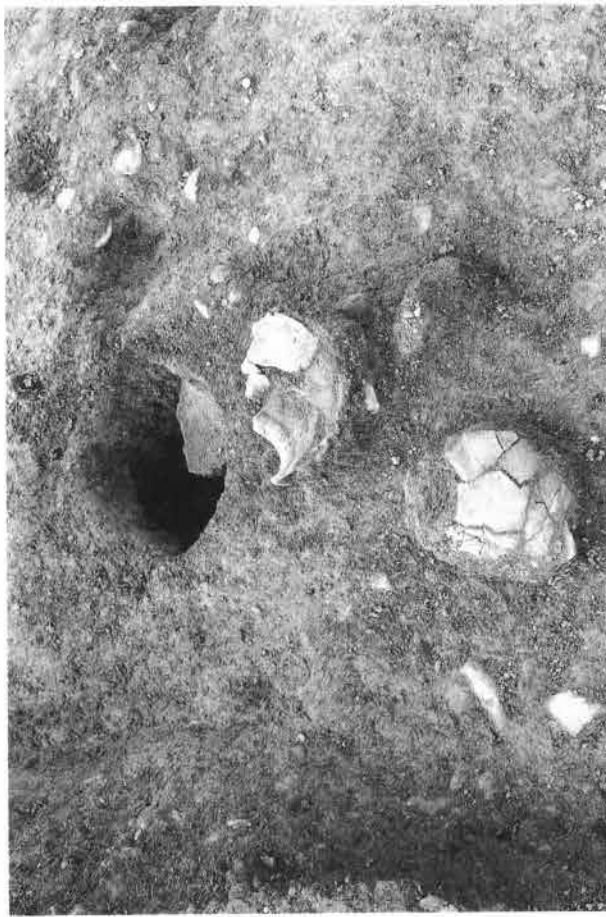
(3) SX22検出状況 (西から)



(4) SK23検出状況 (北から)



(1) SH11全景 (北東から)



(2) SH11遺物出土状況 (東から)



(3) SX20検出状況 (東から)



(4) SK29完掘状況 (東から)



(1) SD14~17全景 (南東から)



(2) SD16土層断面図 (南から)







16



17



18



19



20



21



22



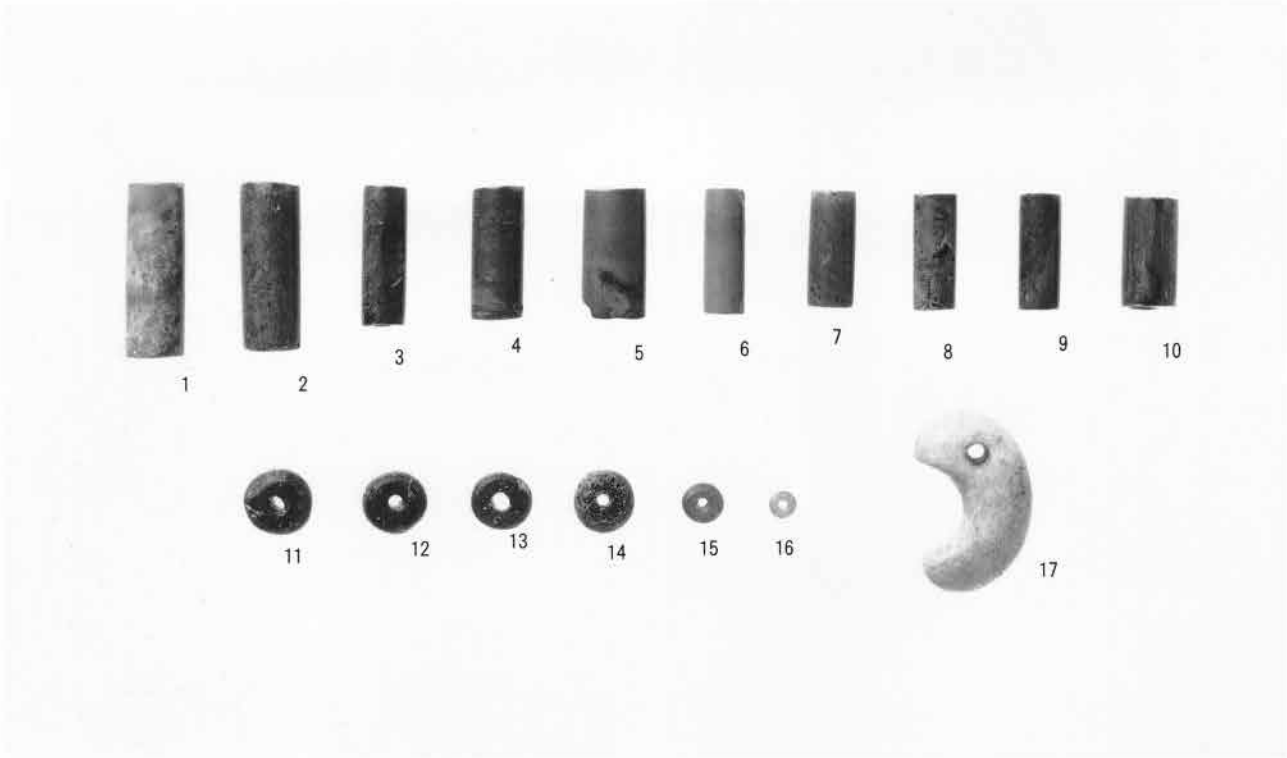
23



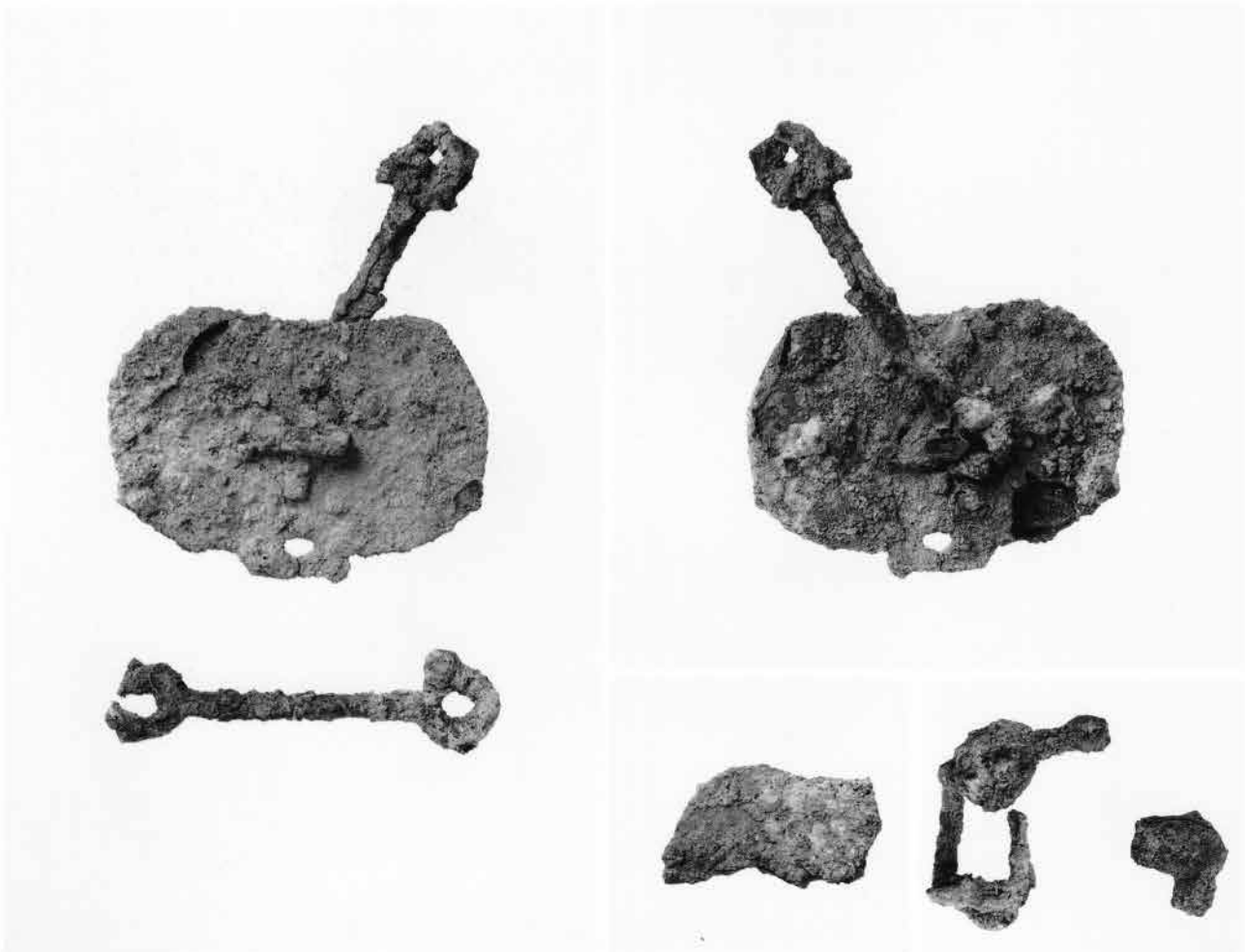
24



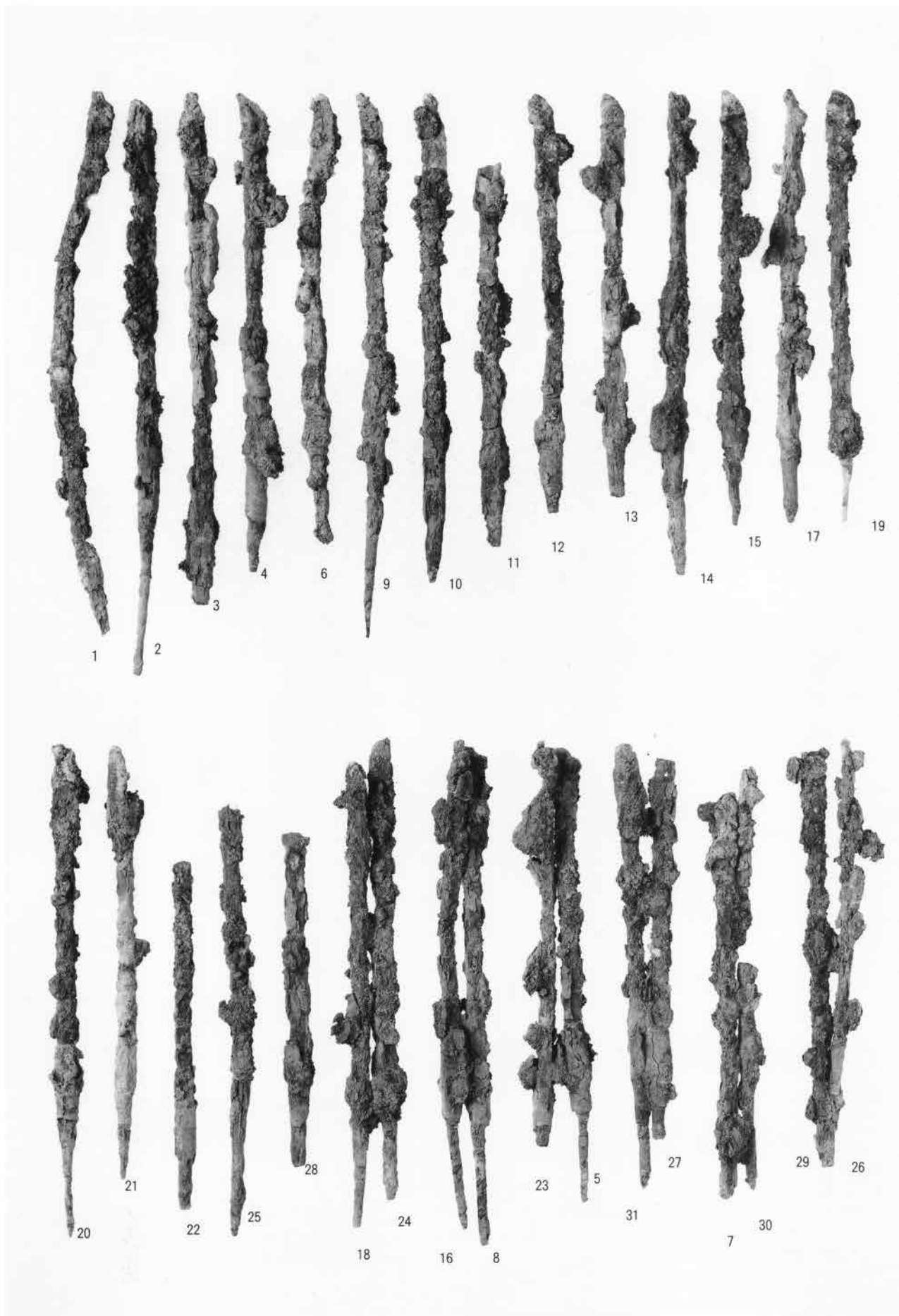
13



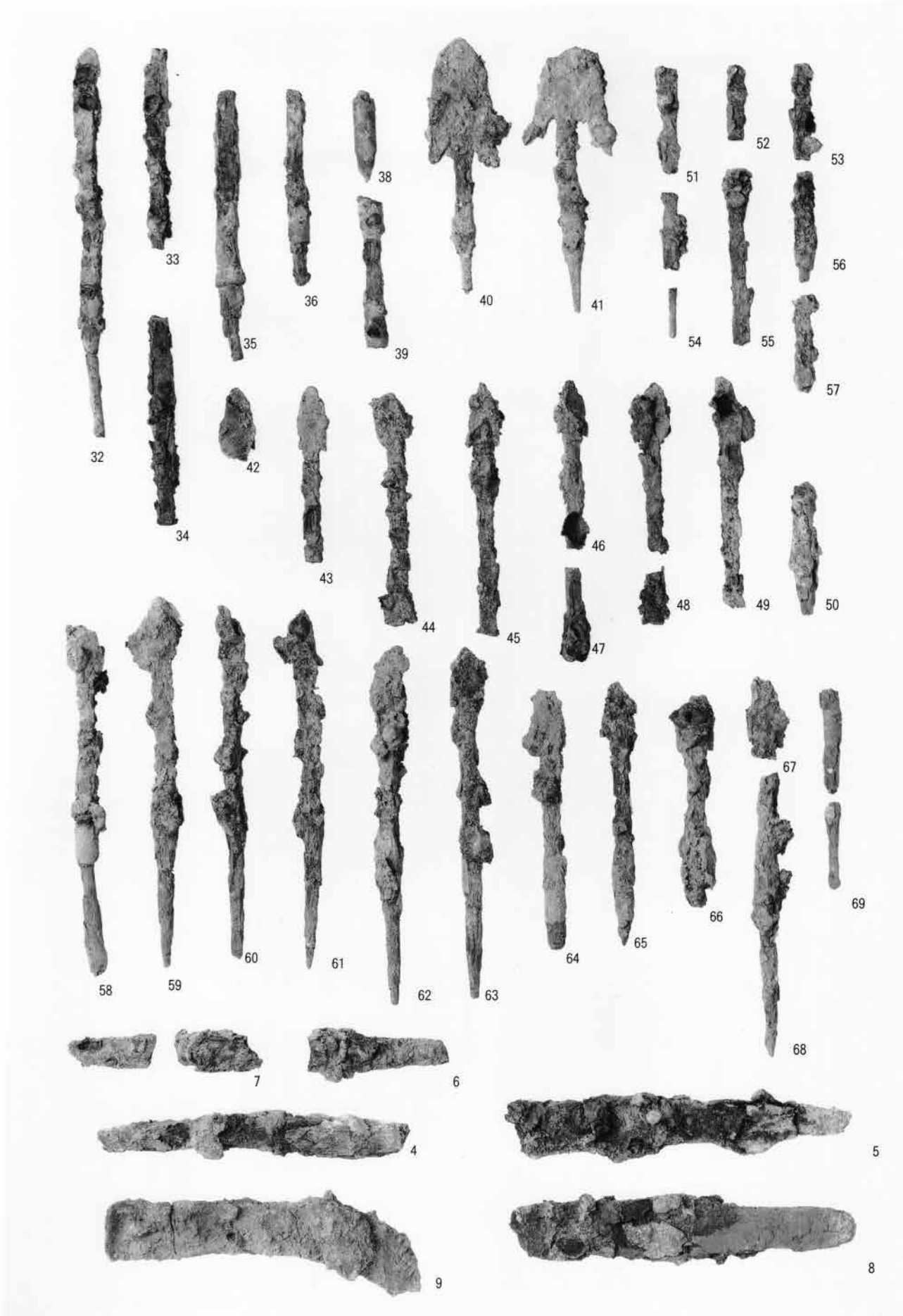
(1) 今林2号墳出土玉類



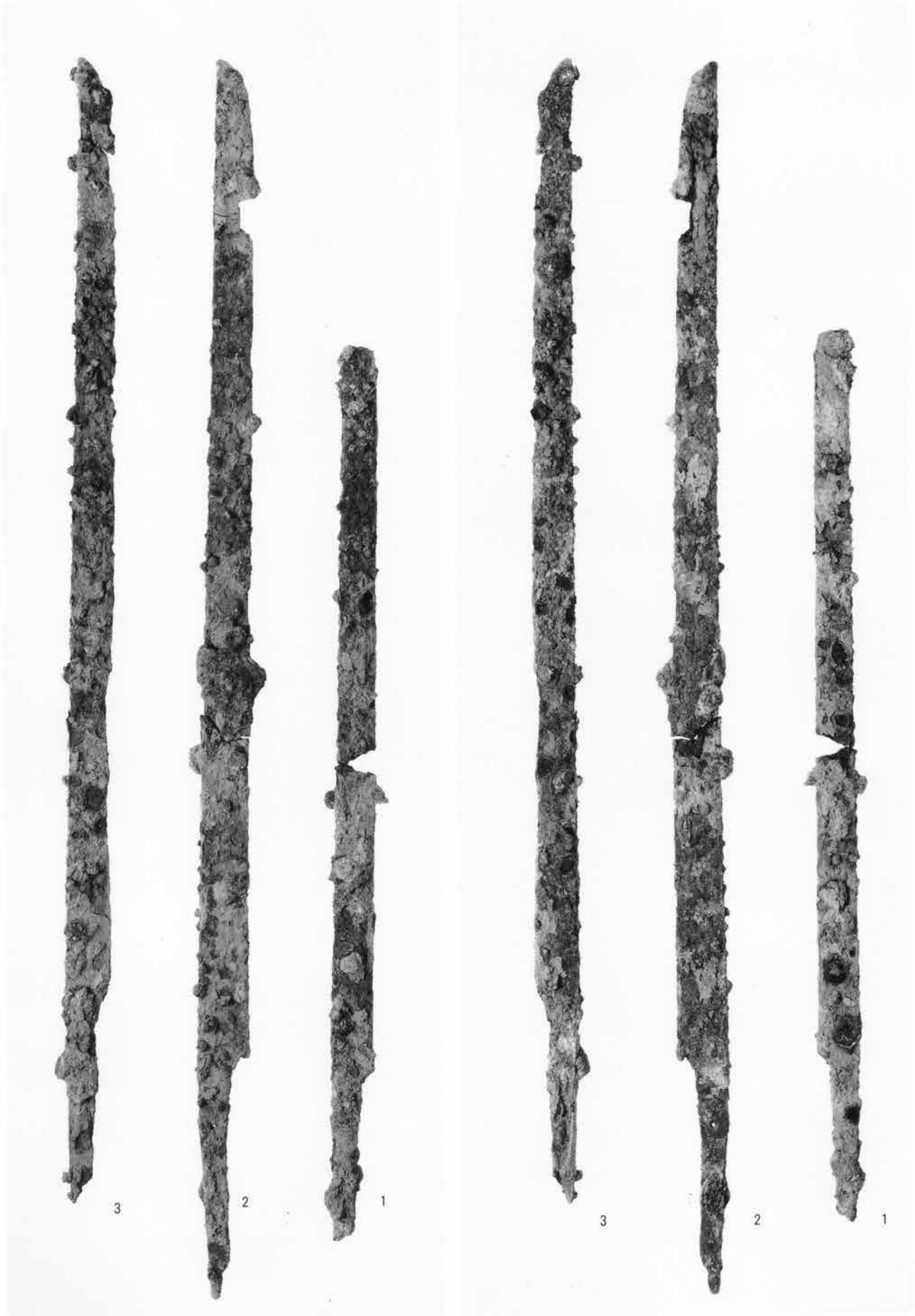
(2) 今林2号墳出土鉄器(1)



今林2号墳出土鉄器(2)



今林2号墳出土鉄器(3)



今林2号墳出土鉄器(4)



30



33



34



35



36



39



40



51



46



94



111



203



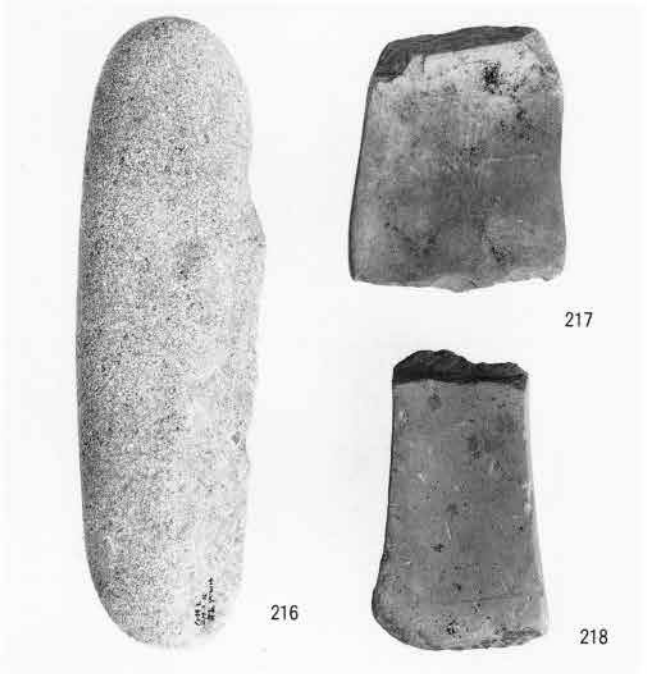
165

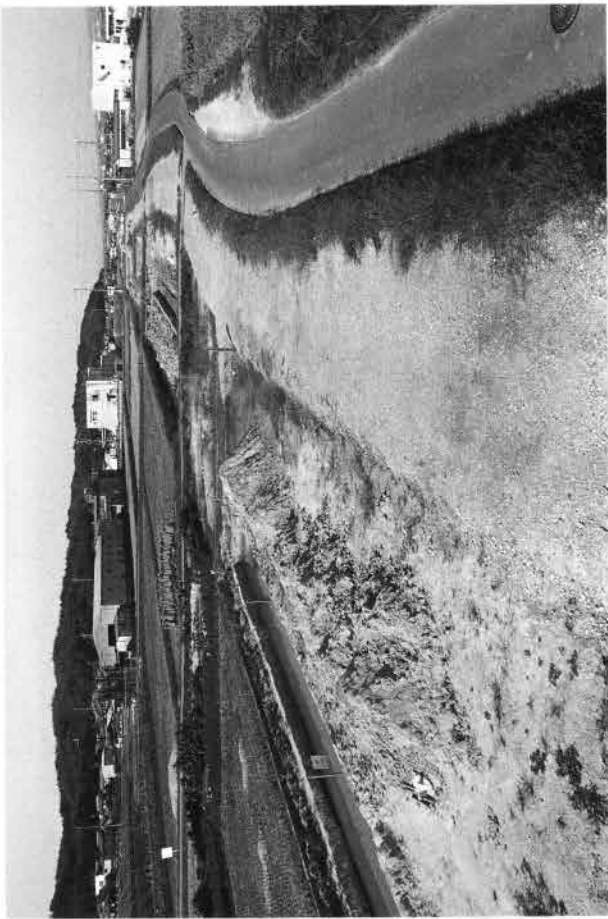


207

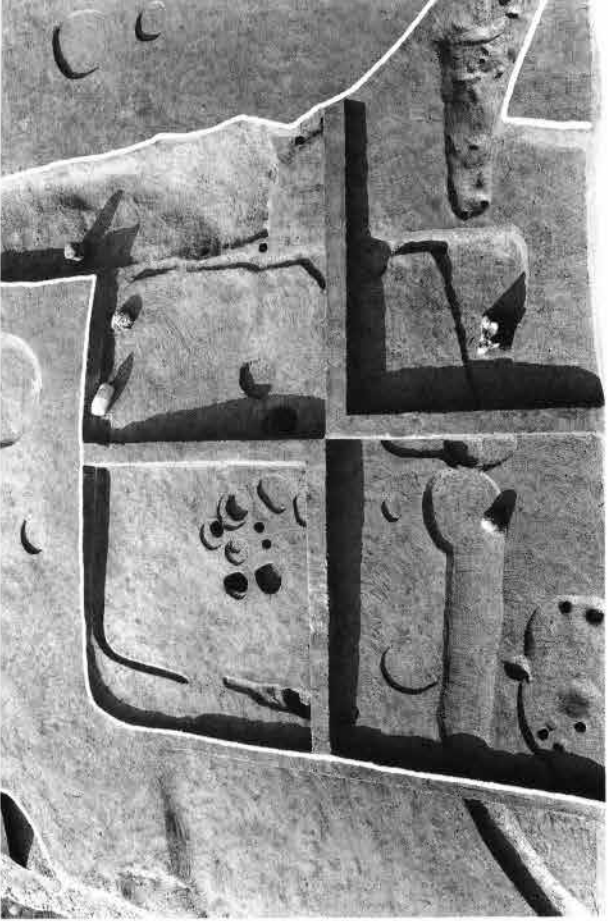


182

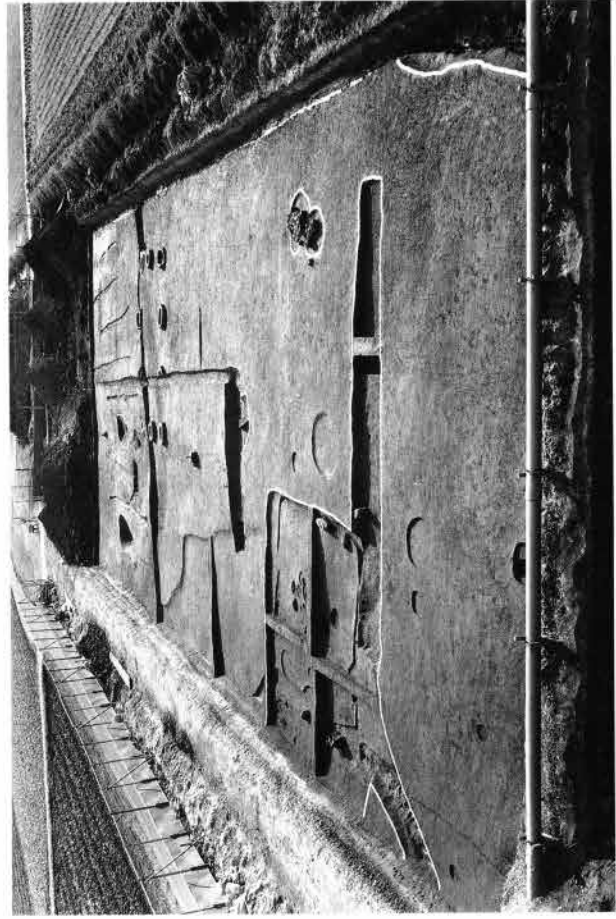




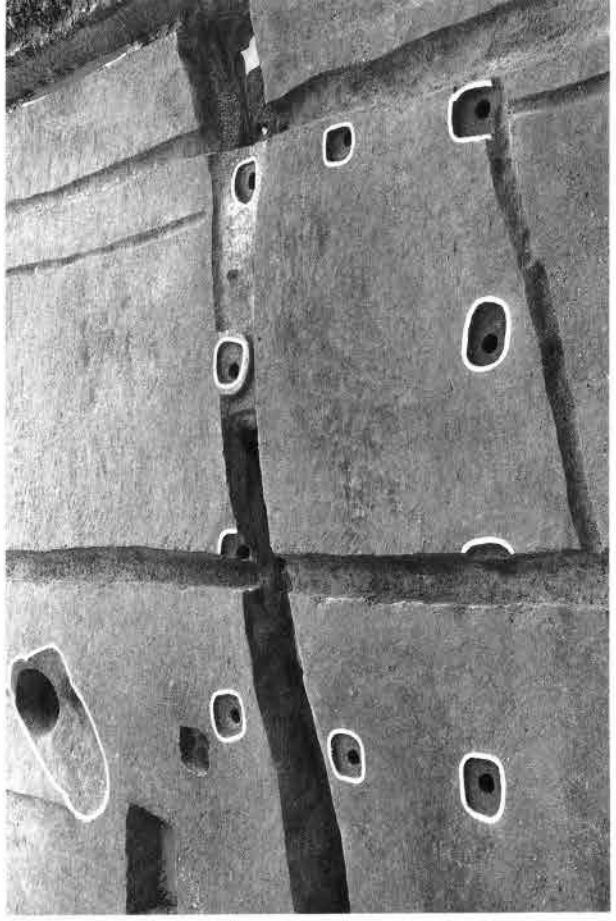
(1) 調査区全景 (3トレンチ東横から北方を望む)



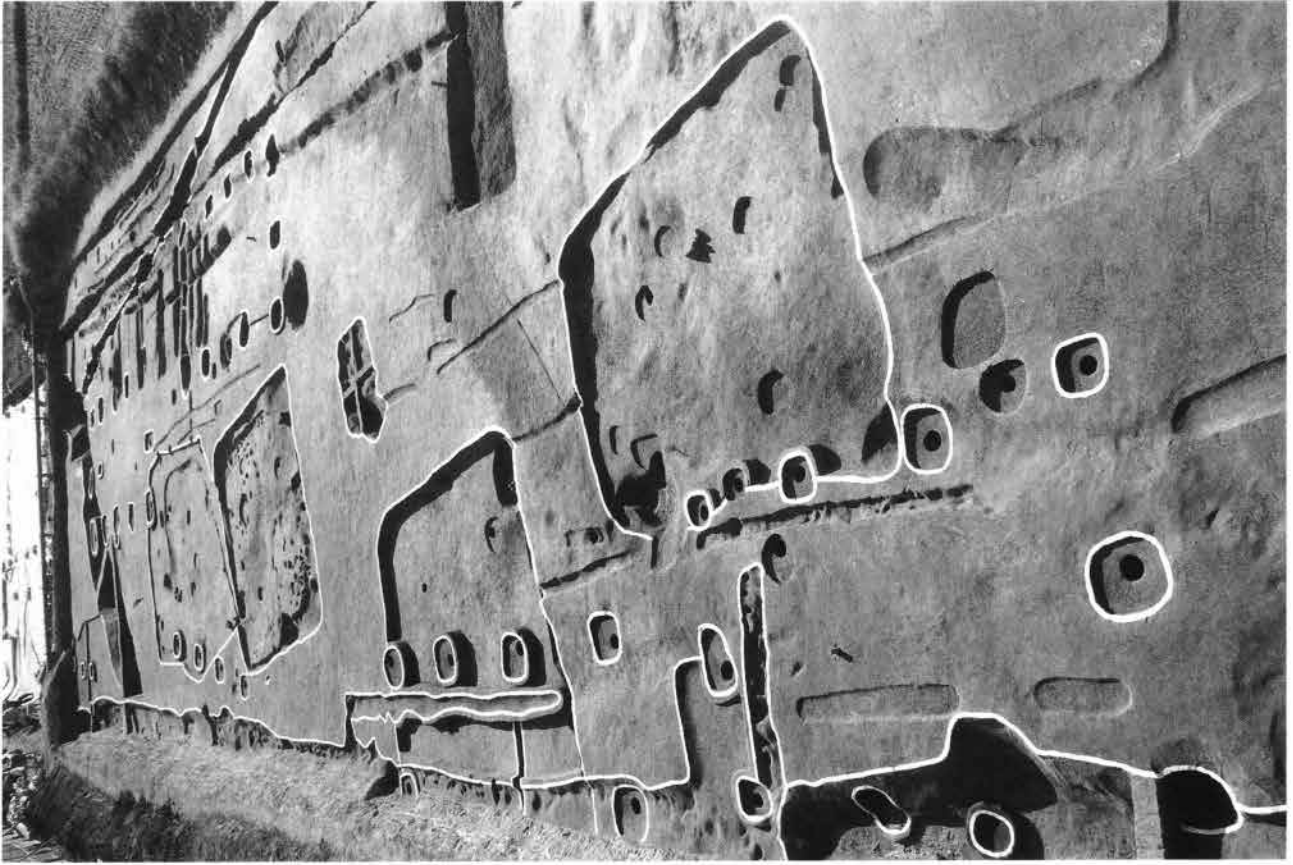
(3) 4トレンチSH9506・SD9507・SD9508 (東から)



(2) 4トレンチ全景 (下層検出面、北から)



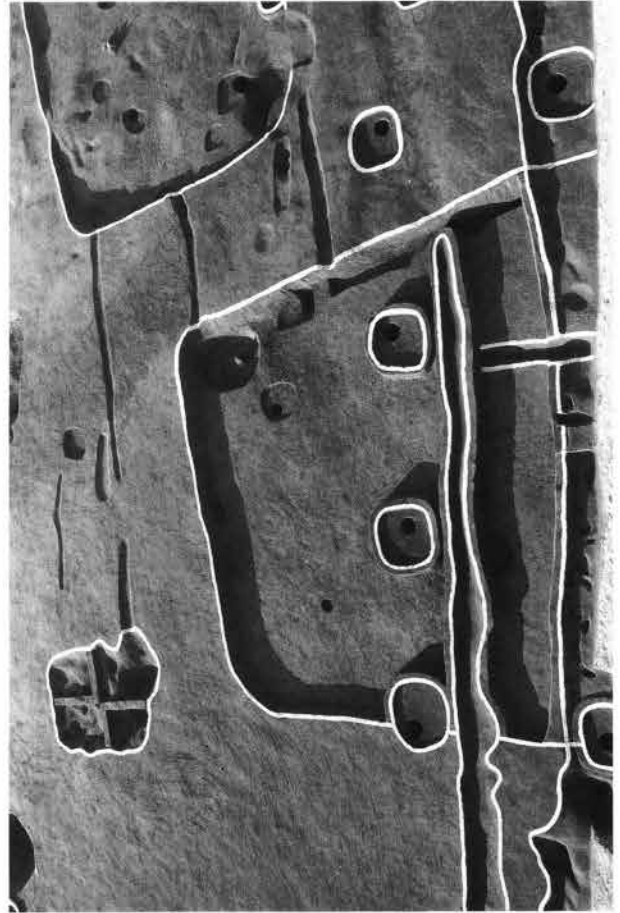
(4) 4トレンチSK9501・SB9503・SB9504 (上層検出面、北から)



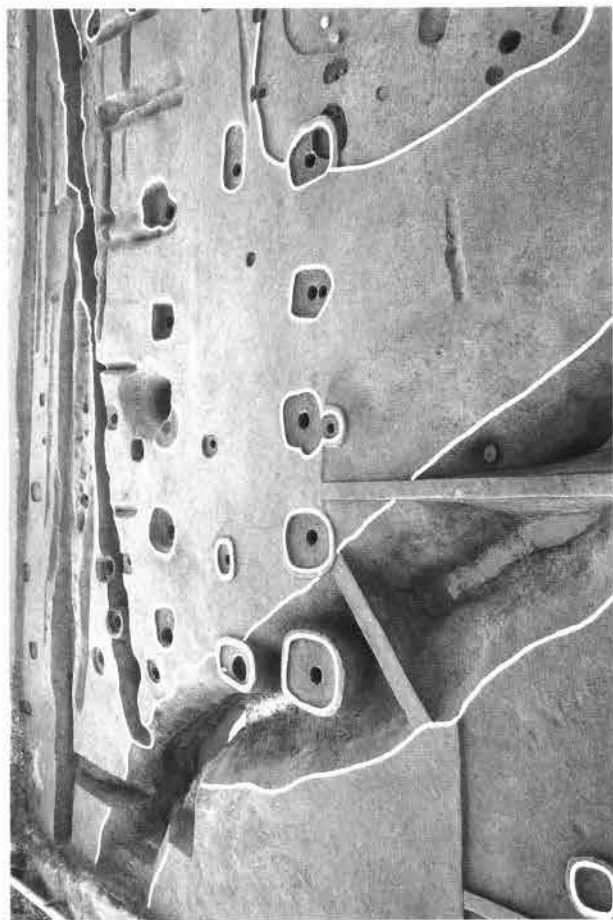
(1) 5トレンチ全景 (北北東から)



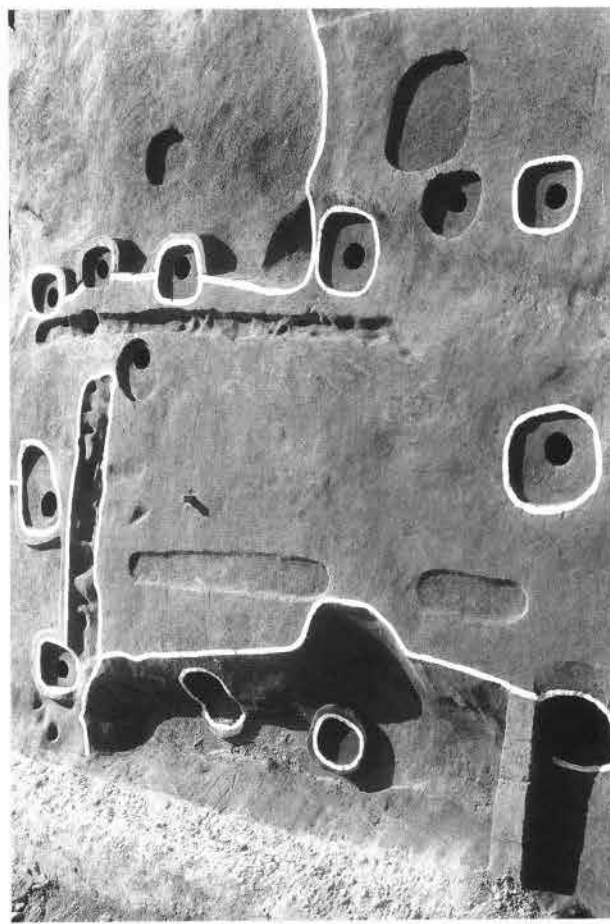
(2) 5トレンチSD9519・SH9524・SB9525 (東から)



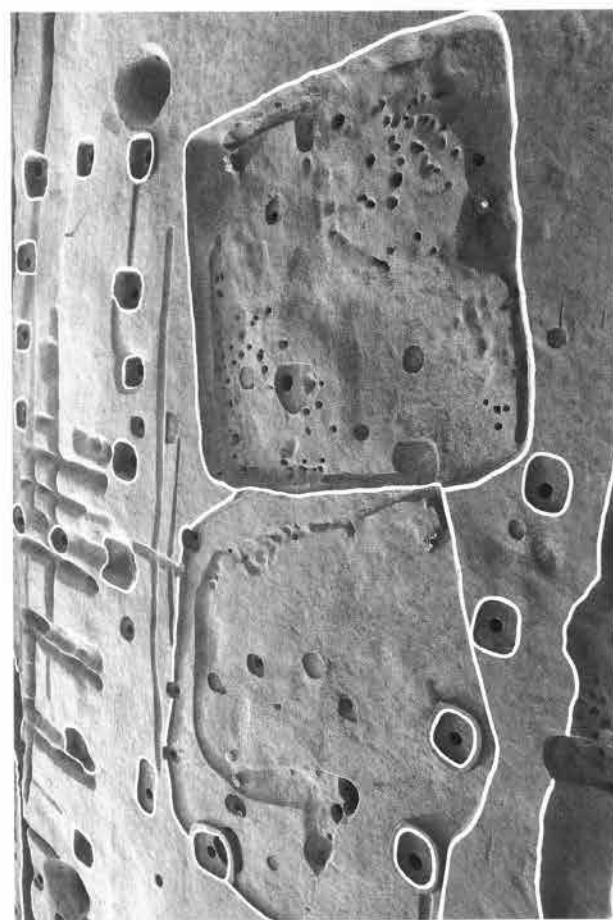
(3) 5トレンチSK9521・SH9522・SB9523 (東から)



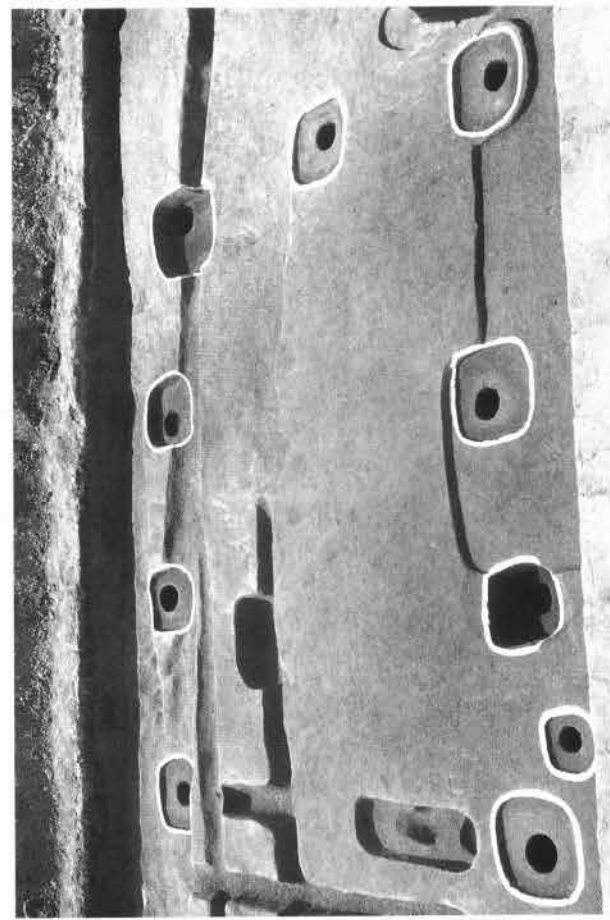
(3) 5 トレンチSD 9510・SB9512・SD 9514 (東から)



(4) 5 トレンチSD 9519・SH 9524・SB9525 (北から)



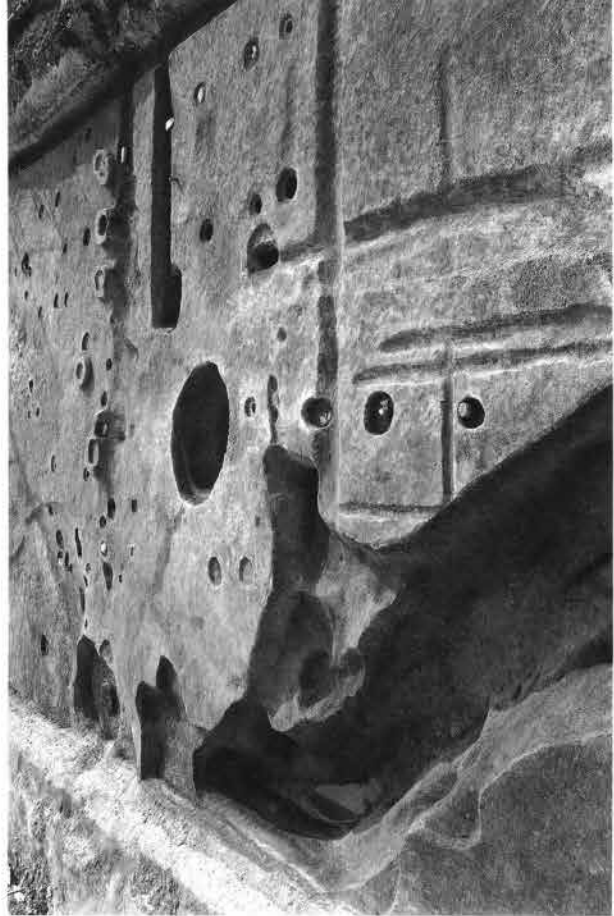
(1) 5 トレンチSB9515・SH 9516・SA 9517・SH 9518 (東から)



(2) 5 トレンチSB9515 (東から)



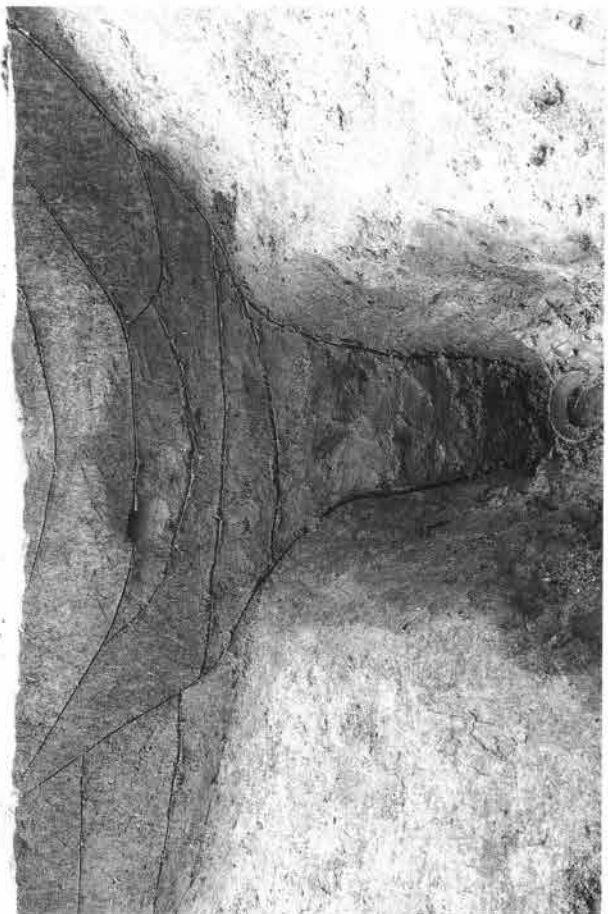
(3) 6トレンチ全景（上層検出面、北から）



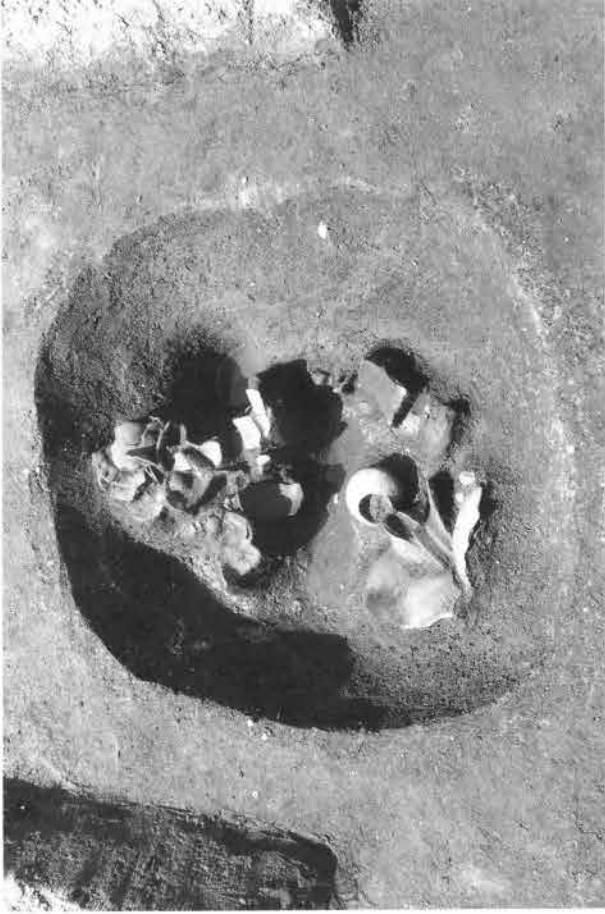
(4) 6トレンチ南半部全景（下層検出面、北から）



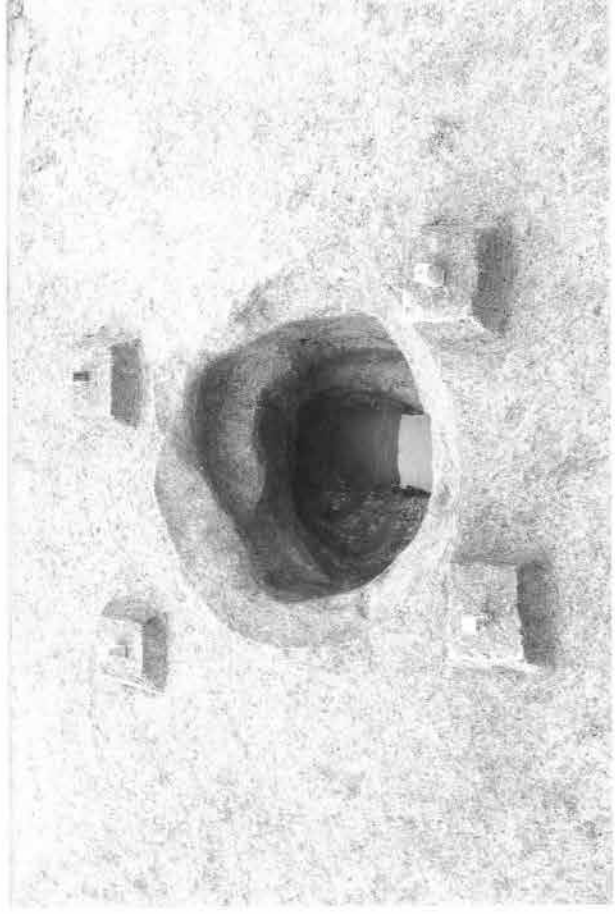
(1) 5トレンチSD9514全景（南南東から）



(2) 5トレンチSD9514横断面（北東から）



(3) 7-AトレンチS K9546遺物出土状況 (東から)



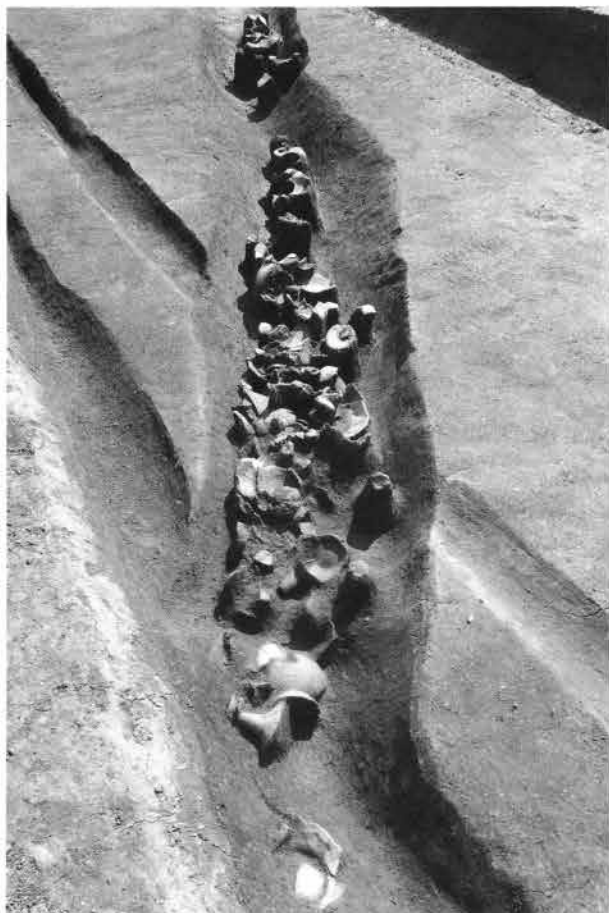
(4) 7-AトレンチS K9546完掘状況 (東から)



(1) 6トレンチSE9530全景 (西から)



(2) 6トレンチSE9530井戸側 (曲物) 積み重ね状況 (西から)



(3) 7-BトレンチSD9549遺物出土状況(全景、北北東から)



(4) 10トレンチ全景(南から)



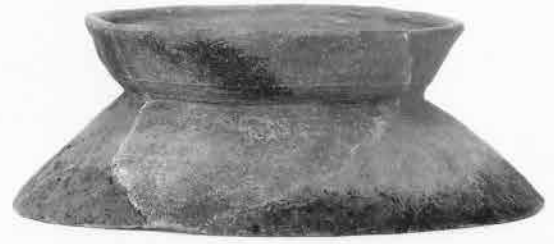
(1) 7-BトレンチSD9549・SD9550(試掘段階、北から)



(2) 7-BトレンチSD9549遺物出土状況(近景、南東から)



3



17



2



14



5



10



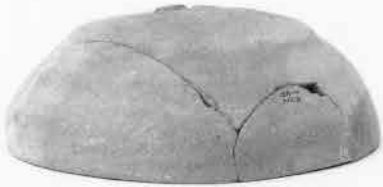
7



12



23



24



25



26



34



48



53



50



52



64



63



(1) 調査地遠景（北東から）



(2) 調査地全景（垂直、下が北方向）



(1) 瓦窯跡群・灰原全景（北から）



(2) 2号窯完掘状況（北から）



(1) 3号窯第1床面検出状況(北から)



(2) 3号窯第2床面検出状況(北から)



(3) 3号窯障壁部分(北から)



(1) 4号窯全景（北から）



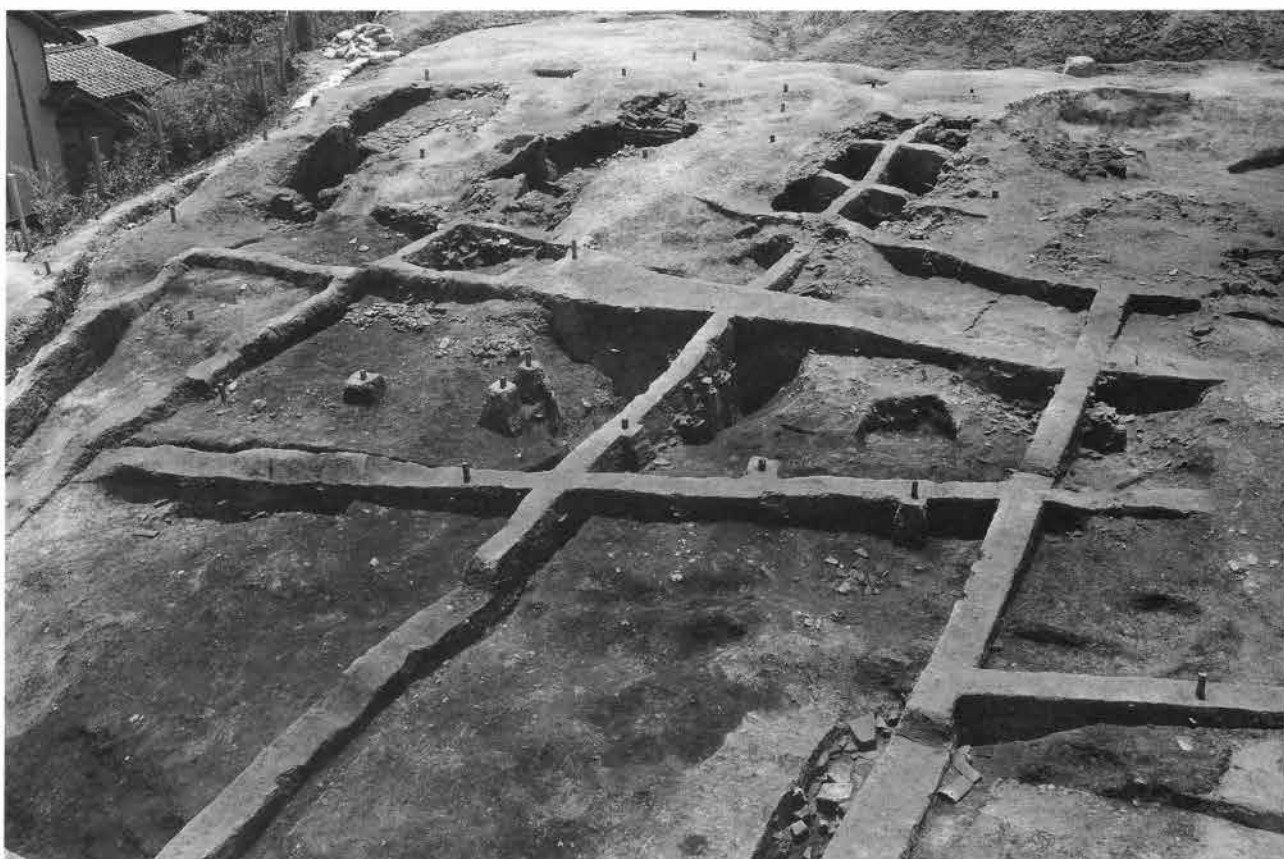
(2) 4号窯燃焼部西壁断面状況（北から）



4号窯床面状況（北から）



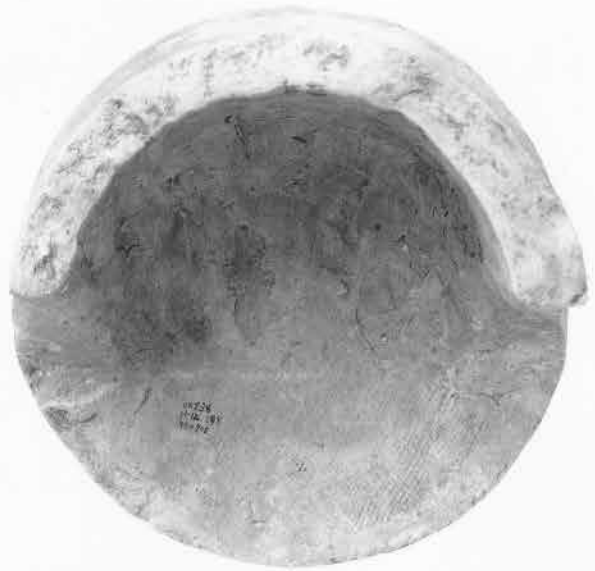
(1) 5号窯前庭部断面状況（北から）



(2) 1～5号窯灰原検出状況（北西から）



1



3



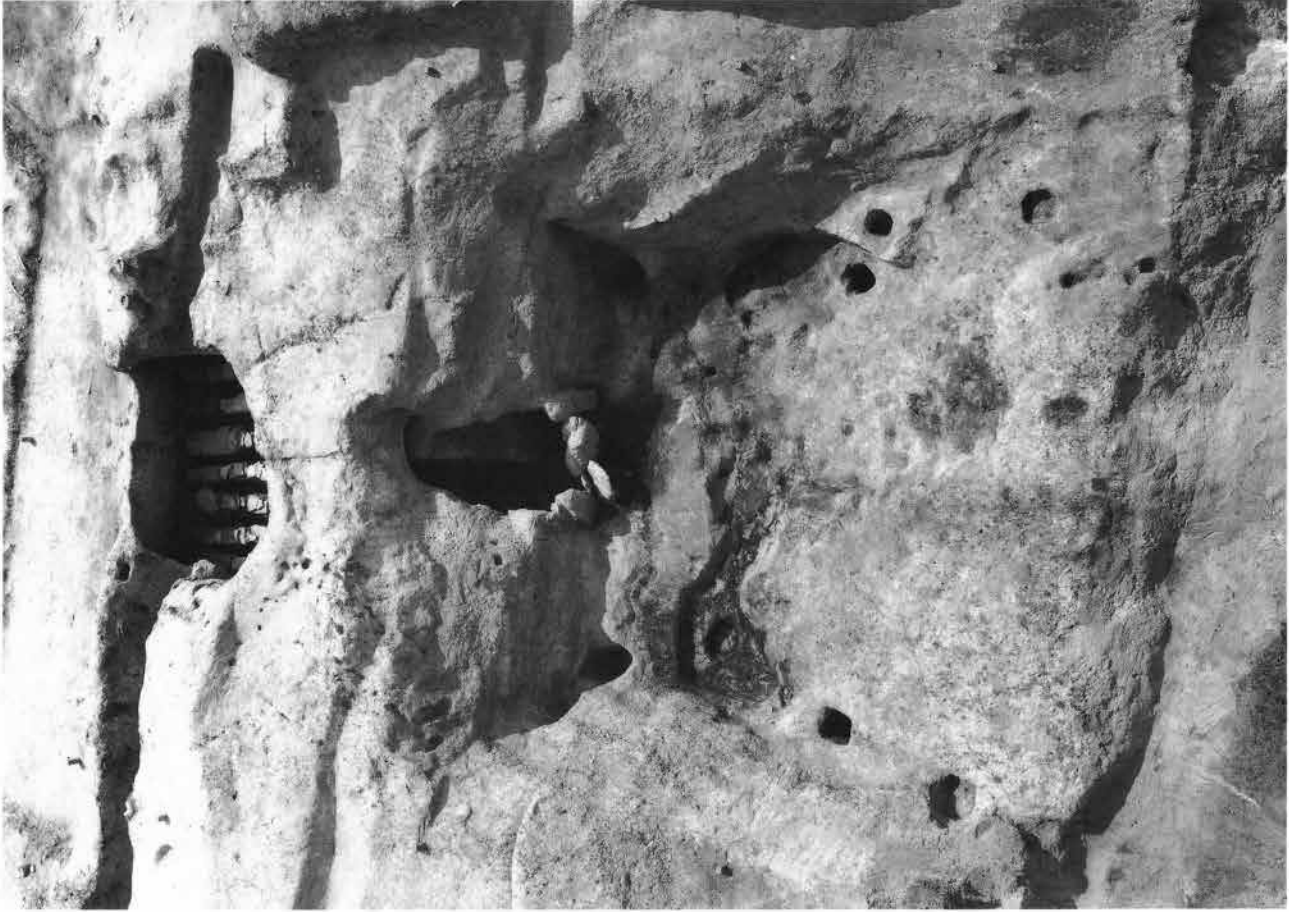




(1) 上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡（上が北）



(2) 1～3号窯全景（南西から）



(2) 8号窯全景 (北東から)



(1) 2号窯全景 (南西から)



(1) 2号窯焼成室（南西から）



(2) 2号窯焼成室・火床・側壁（南西から）



(1) 2号窯分焰柱・分焰口（南西から）



(2) 2号窯燃焼室・焚き口（北東から）



(1) 2号窯前庭部 (南西から)



(2) 2号窯前庭部 (上が北東)



(1) 8号窯焼成室・奥壁（北東から）



(2) 8号窯焼成室・隔壁（南西から）



(1) 8号窯燃焼室（北東から）



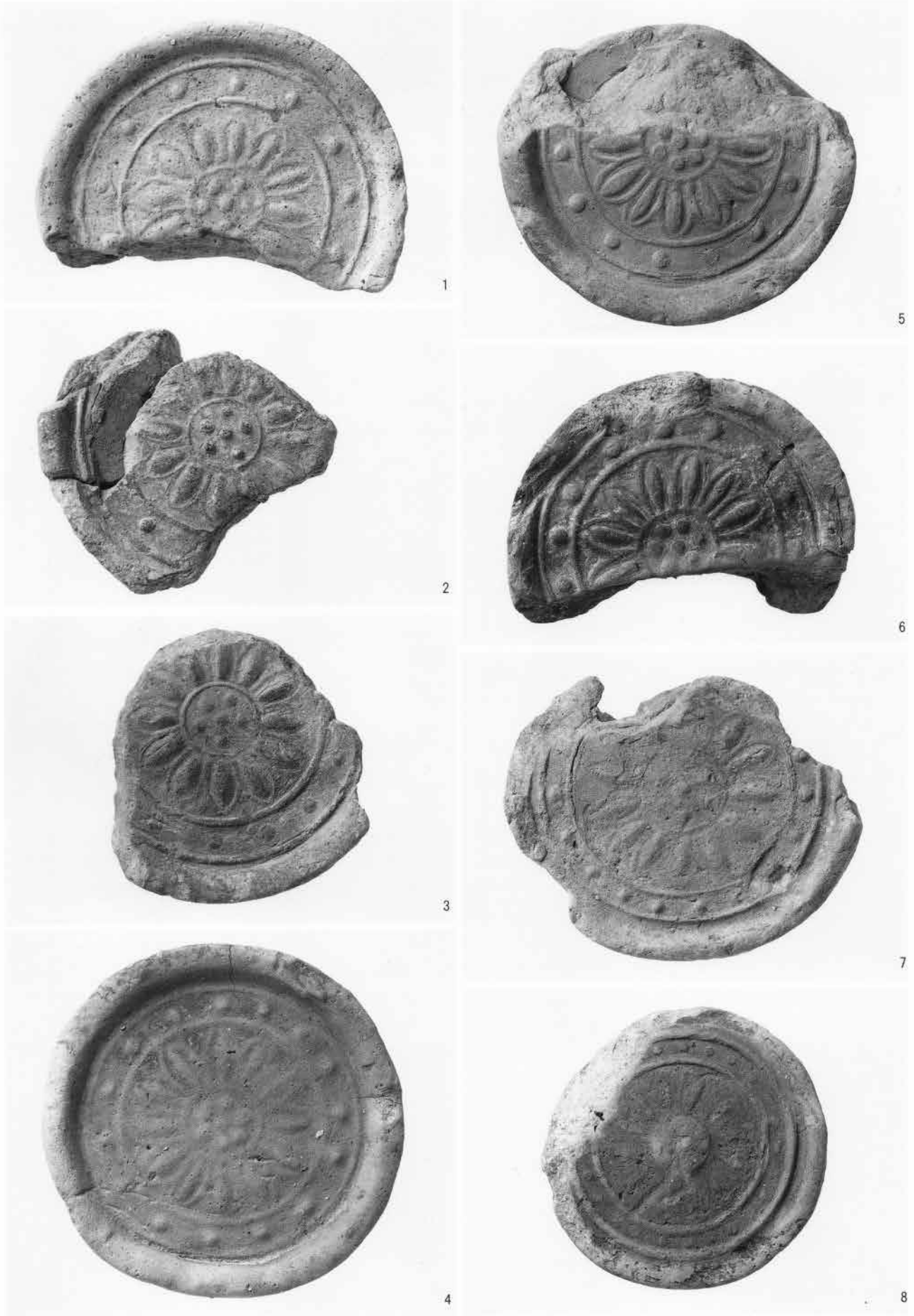
(2) 8号窯分焰口



(1) 8号窯焚き口（北東から）



(2) 8号窯排水溝（南西から）



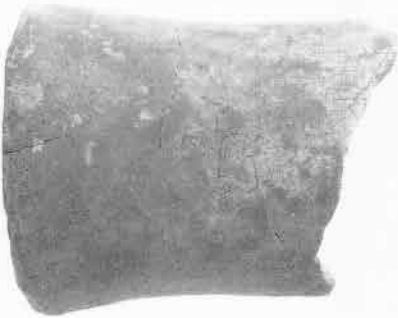
出土遺物(1)



1



8



4



6





9



10



11



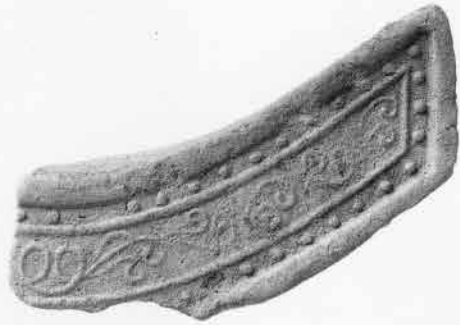
12



13



14



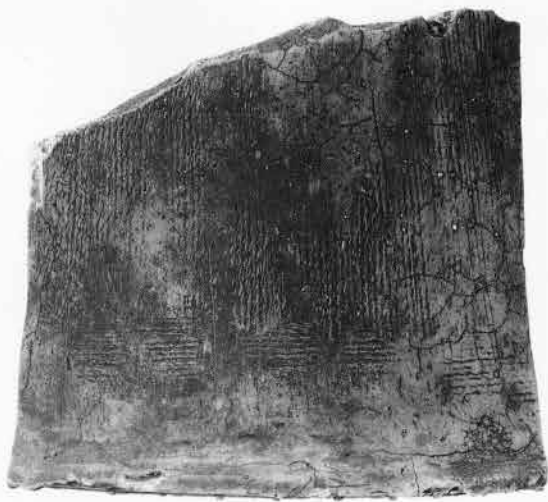
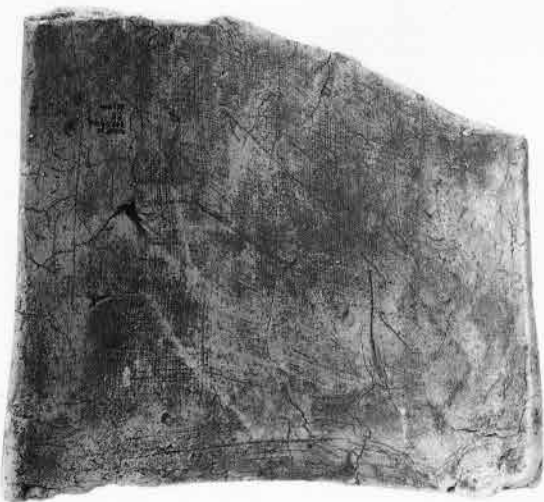
15



16



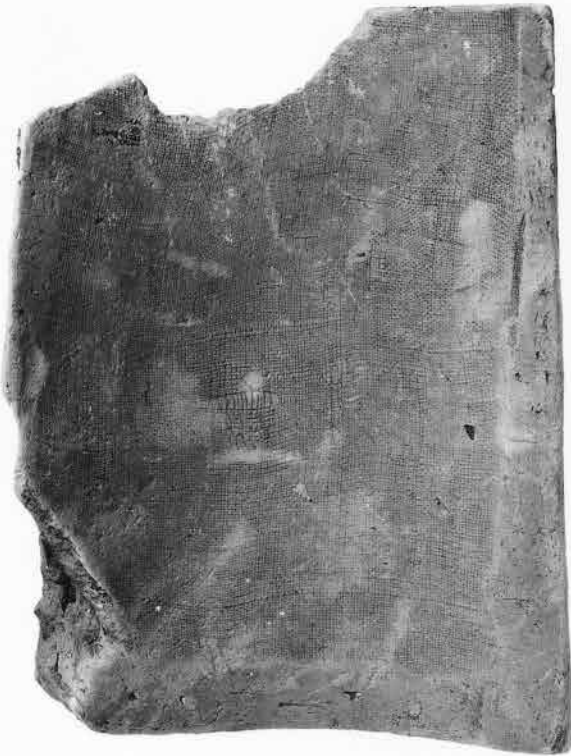
17



9



11



13





18



19



20



21



22



22'



(1) 調査前全景（西から）



(2) 6番地トレンチ完掘状態（西から）



(1) SD01遺物出土状態（北から）



(2) SD01遺物出土状態（西から）



(1) 26番地トレンチ完掘状態（南から）



(2) 26番地トレンチ完掘状態（東から）



5



6



3



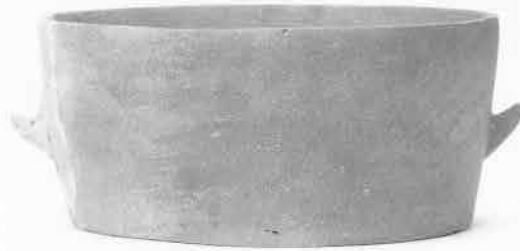
4



7



9



11



10



12



(1) 調査前風景 (西から)



(2) 調査地遠景 (北から)



(1) 完掘状況（西から）



(2) A-A'土層断面（西から）

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第68冊							
編著者名	野々口陽子・野島 永・野尻和真・河野一隆・伊賀高弘・石井清司・有井広幸・森島康雄・橋本 稔							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			TEL 075(933)3877				
発行年月日	西暦 1996 年 2 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまばやし2 ごうふん 今林2号墳	ふないぐんそのべ ちょううちばやし いまばやし 船井郡園部町内林 今林	401	71	35° 34' 7"	134° 55' 24"	19940907 ～ 19950303	500	道路建設
いまばやしい せき 今林遺跡	ふないぐんそのべ ちょううちばやし いまばやし 船井郡園部町内林 今林	401		35° 34' 8"	134° 55' 24"	19940907 ～ 19950303	1,000	道路建設
きたいな・か きそえいせき 北稲・柿添遺 跡	そうらくぐんせい かちょうきたいな はちまなかがいと 相楽郡精華町北稲 八間中垣内	366	28	34° 54' 15"	135° 47' 25"	19940720 ～ 19950227	2,800	道路建設
うめたにがよ うあと 梅谷瓦窯跡	そうらくぐんきづ ちょううめたにな かのしま 相楽郡木津町梅谷 中ノ島	362	25	34° 42' 41"	135° 51' 3"	19940411 ～ 19950120	600	宅地造成
いちさかがよ うあと 市坂瓦窯跡	そうらくぐんきづ ちょういちさか しょうにんがひら 相楽郡木津町市坂 上人ヶ平	362	11	34° 42' 50"	135° 49' 5"	19940411 ～ 19941117	200	宅地造成
かまがたにい せき 釜ヶ谷遺跡	そうらくぐんきづ ちょうきづかまが たに 相楽郡木津町木津 釜ヶ谷	362		34° 43' 53"	135° 50' 7"	19950123 ～ 19950227	380	宅地造成
しょうにんが ひら3ごうふ ん 上人ヶ平3号 墳	そうらくぐんきづ ちょういちさか しょうにんがひら 相楽郡木津町市坂 上人ヶ平	362	9	34° 42' 57"	135° 49' 5"	19940603 ～ 19940714	150	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今林2号墳	古墳	古墳	木棺墓	須恵器、鉄器、玉	円墳
今林遺跡	集落	弥生、古墳	竪穴住居、土坑、溝	弥生土器、土師器	
北稻・柿添遺跡	集落跡・屋敷跡	古墳・奈良・中世	竪穴住居、溝、土坑、掘立柱建物、井戸	土師器、須恵器、韓式系土器、瓦器、銭貨、石鍋	
梅谷瓦窯跡	窯跡	奈良	瓦窯、甕窯、平窯、灰原	瓦類	興福寺創建瓦窯
市坂瓦窯跡	窯跡	奈良	瓦窯	瓦類	
釜ヶ谷遺跡	集落	奈良	河川跡	墨書人面土器、須恵器、ミニチュア竈	
上人ヶ平3号墳				弥生土器片	自然地形

京都府遺跡調査概報 第68冊

平成8年2月29日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)